THE CENTRAL REVIEW

中央公論

十月一日着

十月號

第三十年第十一號　第三百廿三號



成功の手は健腦の人に下る!!

一刻の猶豫もあるべからず!!

腦神經衰弱患者諸君!! 今直に



健腦丸

服用あれ

主効

■腦充血 ■耳鳴
■腦膜炎 ■頭痛
■神經痛 ■眩暈
■逆上症 ■健忘
■卒中 ■便秘
■中風 ■癲癇

特長

少量宛持藥とせば逆上を引下げ便通をよくし恐るべき腦充血を治し中風卒中を未發に防ぎ氣憶力を增し常に爽快なり。

本舗 東京、大阪 丹平商會藥房

全國到る處の藥店に取次販賣す

藥價

五週分貳圓■三週分一圓廿五錢■二週分八十五錢■一週分四十五錢■三日分廿錢

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

露國、メレジュコーフスキー著
文學士 森田草平、文學士 安倍能成共譯

再版 盡きんとす

人及藝術家としてのトルストイ 並にドストイエフスキー

「◎人としての部―森田 ◎藝術家としての部―安倍」

橋本邦助氏裝幀 四六版上製美本
肖像三枚
入全一冊
正價壹圓十錢
五小包料内地十二錢

文豪の書いた文豪の評傳

此書は**文明批評家**として**當今世界第一人者**の稱あるメレジュコーフスキーが**靈肉一致**を唱導する象徵主義の立場からトルストイとドストイエフスキーを**評傳**したる者である、即ち文豪の書いた文豪の評傳である。一度此書を繙かば**其人**の**人生觀**なり**藝術觀**なりを**一變**せずには**止**まない。**譯者**は**始終興奮**を**以て此書**を**譯了**したとの事である。**小説**よりも**面白**い論文である。

再版

中村不折
小鹿青雲 共著

支那繪畫史

寫眞版廿九葉
及人名索引附

▼不折書旧裝釘意匠
▼菊判上製美本全一冊
▼正價壹圓五十錢
▼小包料内地十二錢

◎時事新報評は「吾人は**本書**を目して**本邦唯一の支那繪畫史**として深く**推賞**する者也」

東京市本郷區西片町十番地
玄黄社
電話下谷一三九番
振替東京七九九五番

信用なき店舗及び卑猥なる實品の廣告掲載は謝絶す

田中王堂氏著

改造の試み

■最近の評論集■

特製美本
定價壹圓
送料八錢

田中王堂先生は帝國唯一の眞哲學者たり、我國唯一の文明批評家たり、我國唯一の新文明指導者たり。我等新生活を翹望し、新人生の創造に努力せんとするの徒が、就いて聽く可き先覺の人、知らず先生を措いて、他に何人のあるありや。先生が深邃の學問と高邁の識見とによりて生産せられたる浪漫的功利主義の新哲學に至りては、おそらく我が明治大正前後を通じて我が民族が得たる思想界の産物の中、最も**光輝あり内容ある**ものならずんばあらず。今先生が最近の論集成る。收むる所「功利の貯藏としてのロオマンス」以下十餘篇、何れも堂々の大文字たり。殊に直ちにとつて、我等が現在の生活に資す可き活文字なるに於て、本書は必ず讀まざる可からざるのみならず、亦一刻も早く讀まざる可からざるの書なる事を、特に書して大方の諸君に告ぐ。

東京市牛込區矢來町中の丸
新潮社
電話番町二二二三番
振替東京一七四二番

岩野泡鳴著

男女と貞操問題

僕の別居事實と無責任な諸家の論議

特製美本 ▲定價七拾錢 ▲送料八錢

新刊出來

最も勇敢にして大膽なる新道德の提唱！

岩野泡鳴氏、**夫人清子と別居し、**情人と共に新たなる相愛の生活に入る。號して是れ我が平常の持說の顯現也と。夫人清子氏その非理を鳴らし、世亦これに應じて是非の聲こゝに紛々たり。これ誠に新舊思想、新舊道德の過渡期たる**現代日本を代表すべき一大問題、**にして、此の問題の解決如何は、以て我が精神文明進展の前途をトするに足る可きもの也。今、泡鳴氏、筆を執つて仔細にその**別居の顚末を叙し、**その態度と、それを裏附く可き自家の哲學と主張とを述べ、更に世の非難者に痛烈なる逆擊を加へ、其間おのづから氏の懷抱せる男女觀。貞操觀を披瀝し盡す。堂々三百頁實に近時快心の一大論著たり

諸君は常に公正なる判官たらざる可からず公正なる判官は先づ被告の言に傾聽せざる可からず。請ふ、先づ本書に就け！

東京市牛込區矢來町中の丸 新潮社 電話番町二二二三番 振替東京一七四二番

山路愛山著（再版出來）

徳川家康

菊版總クロース製　紙數七百五十余頁
定價金二圓三十錢　郵税金十二錢

著者久しく時代を以て英雄を論じ、英雄を以て時代を語る史傳を作らんと志したり。此書は即ち其一卷たるに過ぎず。著者竊に信ず、史家若し英雄の眞に觸れて之を人間に紹介するを得ば其の世に在る徒爾ならずと。我讀書界の嚴正なる批判を求む。（著者）

發行所　獨立評論社　東京中澁谷九〇二（振替東京二三六〇九）

發賣所　東京堂　東京神田表神保町（振替東京二七〇）

●小山内薫作

△定價　壹圓
△送料　八錢
△中版函入

愈出でたり

盲目

「大川端」以來の傑作長篇小説

新しき女の生れる前の少女とロマンチズムの夢のまだ醒めない學生との純潔な戀の告白である。著者が小學校時代、中學校時代、高等學校時代の學生少女間の内部生活！　その時分の學生は未だ「純潔」を夢み、神の前の火のやうに常に胸の火を汚されまいとして居た。そこには矛盾があり煩悶があつた。回顧廿年茲にその一切を披瀝し當時の苦しい秘密を物語る。小山内氏得意の舞臺は開かれた！

■發行所　東京神田區旅籠町　振替東京九五五六　四方官　全國各地書店販賣

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

坪內逍遙博士鑑選

繪入文庫

會員募集 ● 見本進呈

上品にて面白き家庭の讀物

「繪入文庫」は優美穩健なる家庭の好讀本なり通俗史傳たり歷史小說たり歷史趣味の養成に適し青年子女の訓誡に資すべし「繪入文庫」は最も緻密なる浮世繪の畫集にして近代風俗の硏究に適し兼て美術的鑑賞の用に供すべし文化文政の通俗文學に精通せらるゝ坪內博士の指導に依りて

高井蘭山　山東京傳　曲亭馬琴　式亭三馬　柳亭種彥
櫟亭琴魚　松亭金水　秋里籬島　振鷺亭　好華堂野亭
栗杖亭鬼卵　稗海亭柳浪　十返舍一九　等の名作と
北尾重政　柳川重信　柳齋重春　北川春政　西村中和
葛飾北齋　蹄齋北馬　蘭齋北高　松川半山　淺山蘆洲
歌川豐廣　歌川國豐　歌川國貞　歌川國直　曉鐘成
石田玉山　喜多武淸　速水春曉齋　等の挿畫の

逸品を網羅す挿畫は一も省畧せず悉く精巧に複製す裝幀亦優雅永久の裝飾に適す

全部二十四册　滿二年完成　每月一回發行

四六判五百頁　入會金壹圓　會費每月一回

本文庫は非賣品也入會の機を逸すれば購讀の便なし

入會申込＝十月十五日限

申込所　東京市京橋區新榮町五の三　圖書刊行會　電話京橋二一九九　振替東京一四七三

（前付の六）

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

秋宵青燈の絶好讀物

榎本秋村先生譯

中版三百五十頁美本全一冊 價壹圓廿錢 來十一月三十日限 特價壹圓 送料八錢

ルッソオ 瞑想錄

最新刊

天才の行く處魔神も之を遮るを得ず。不出世の偉大なる天才ジャン、ジャック、ルッソオが暗室漏屋より齎らせる不磨の眞理は悉く收めて之の一卷に有り、不安と動搖に無適從なる人生の底深く沈淪せる疲勞者に對し彼は墳墓の中より猶其聲を大にして「自然に歸れ」と絶叫しつゝ有るに非ずや毀譽褒貶に苦しみ靈肉の葛藤に煩ふ者に速かに超人が忌憚なく其内面を告白せる此大教訓を讀め、必ずやそこに崇高なる信條を求め春風駘蕩天來の靈光に浴するの感有るべし。

□内容要目□

第一 孤立の地位。夢の様な既往。慘酷なる迫害者。想像の不幸。運命の服從。心の靜平。浮世の毀譽。自己の研究。懺悔錄と對話錄。

第二 想像力と衰凋。鎮魂の歡喜。モニル、モンタンの逍遙。植物の採取。意外の災難。蘇生の感、妻の驚愕。悲しい憶測。某夫人の來訪。謝絶の書翰。逝去の噂。原稿の豫約出版。解脫の泉源。

第三 老の研究、幼年時代の回顧。青年時代の希望。虚飾物の排斥。心身の改革。哲學者との爭論。困惑の迷宮。確乎不拔な主義。迫害者の道德。晩年の事業。

第四 プルタークの愛讀。少年時代の虚言。虚言の研究。眞實の解釋。虚誠の種類。モンテスキウの小說。

第五 實な人。若い娘の間。二十年以上隱した秘密、非行と德行。學問には年齡がない。風光明媚なサン、ピエル島。最も幸福な生活。樂しい草花の採取。快心な午後の運動。兎の飼養。湖水に浮べた小舟。瞑想の快樂、羽化登仙の思。心の避難所。

第六 跛足の少年。慈善の快樂。束縛の鎖。慈善の研究。多感多恨の性質。時代の變化。艱難の偉力。運命の穽。宇宙一ぱいの生活。ジゼエの指輪。人間の自由。

第七 老後の偉大な覺悟、不思議な一事。瞑想と反省。人間第一の幸福者。自然の三調和。美しき自然植物と藥。鑛物界と植物界。趣味裕かな研究。學者の功名爭ひ。瑞西の山野。グルノブルの冒險。

發行所 東京市本郷一丁目大通 電話下谷四三六二 振替東京一二五五八 日東堂

（前付の八）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

古河家經營

一 當會社の保險料は低廉にして且つ利益金の百分の五十以上を五箇年目毎に契約者に分配す

一 當會社の保險料拂込方法は保險證券訂正の煩を要せず其變更契約者の隨意とす

一 當會社は拂濟保險の便法を設けあり

博愛生命

社長 男爵 中島久萬吉
專務取締役 小原元美
專務取締役 鈴木市之助
常任監查役 安達仁造

本店 東京市日本橋區本町四丁目十五、十六番地
電長本局一八五六、五一五〇、一二八七番
振替貯金口座東京一一七一七番
支店 大阪市東區本町一ノ一三(電長本局二三一一番)

一 當會社は低利なる金融機關の設あり

一 當會社は被保險者の年齡範圍最も廣く滿九年七箇月以上滿六十年六箇月迄契約す

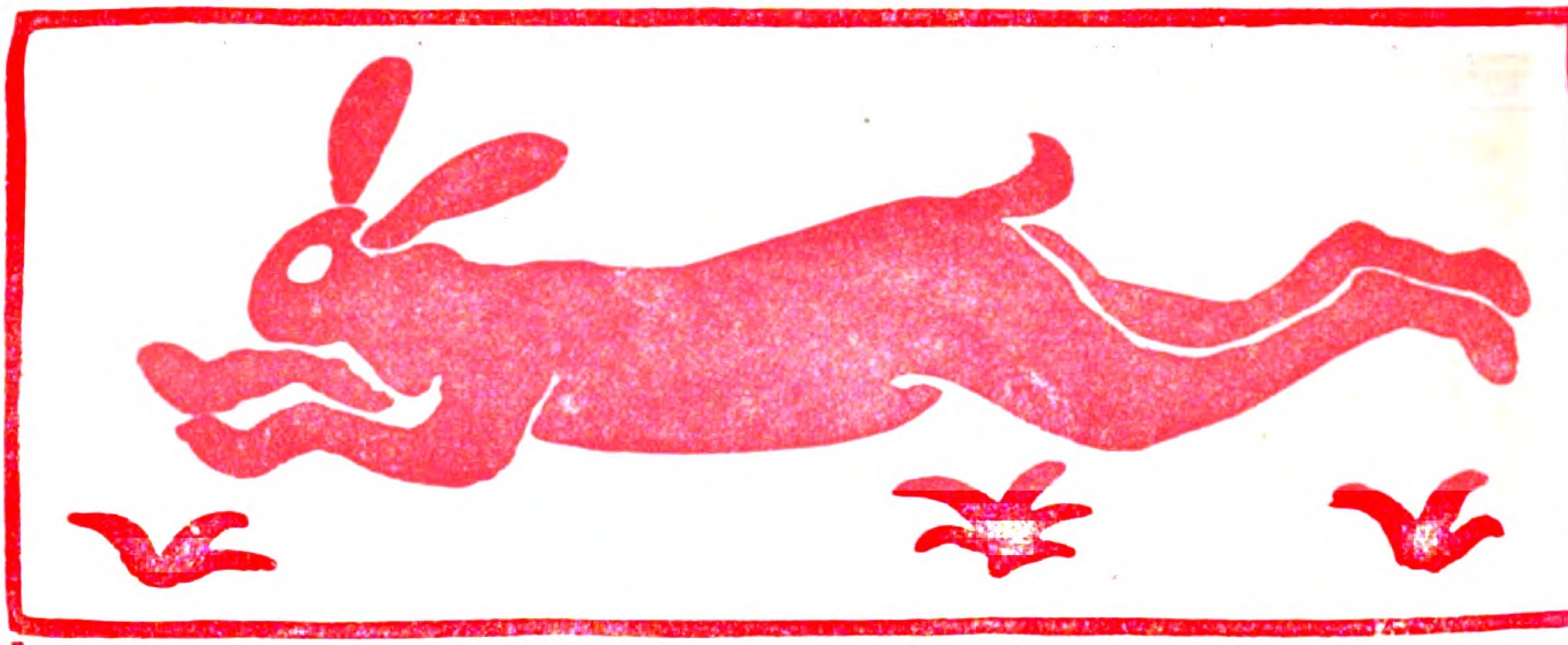
一 當會社の保險金支拂は最も迅速なり是れ保險契約の目的を遂行せんが爲なり

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絕す



中央公論第卅年十月號目次

▲公論



此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

W. LEE HANKEY



The Knitting Lesson

中央公論



第三十年第十一號
十月號
第三百二十三號

獨逸の軍國主義を論ず

（一）軍國主義の面目躍如たり

過去一年間の獨逸の活動及成功は兎に角之を世界の偉觀と云ふを妨げず、獨帝が始めに期待せりと云ふ如く一擧にして巴里を屠り一轉して露軍を粉碎し而して悠然列强に向つて平和條件を命令すと云ふまでには至らざりしも、白耳義を蹂躙し佛英白の聯合軍をして一歩も國境内に侵入せしめず、又た墺國ガリシャより露軍を一掃し波蘭を攻略し露軍をして第三防禦線に據るの止むを得ざるに至らしめし耳ならず、海軍に於ても絕對優勢の英國海軍に封鎖されながら尙且つ潛航艇の大膽不敵なる攻擊に由り世界の

航運業者を戰慄せしめたるが如き其發行最も惡むべしと雖も尙ほ壯烈感歎すべきものなしとせず、加ふるに獨逸國內官民上下一心同體の如くなりて軍國の要務に當り組織整然として百般の手段方法を盡し殆んど遺憾なきが如き亦蓋し感歎に値す。

然りと雖も英、佛、露、伊は包圍攻擊は流石の獨逸に取り多大の苦痛たらざるを得ず、其戰時總動員數八百萬人中二百萬人は既に死傷捕虜として損失に歸し四百萬人は東西兩戰線に立ち他の二百萬人は後方勤務に當るとすれば今後兵員補給の途蓋し殆んど盡果てたりと云ふべく、又た英佛海軍の間斷なき監視は北海方面に於てもアドリアチック、イヂャン各方面に於ても殆んど密輸入を根絕し是より獨逸は漸く綿花、銅、鐵、鉛、硝石に窮し又は食糧にも或は缺亡の憂なきこと能はざらんとす、故にワルサウの陷落するや直に丁抹王を介して露に單獨講和の提議を爲して聽かれざるや、更に羅馬法王を煩はして平和克復の運動を開始せしめ且つ米國の歡心を繫ぐの必要より潛航艇の旅客船に對する無警告攻擊を中止すべく聲言しルシタニヤ、アラビック擊沈に對する賠償に任すべしと云ふに至る、視るべし流石に剛愎の獨帝も戰局の前途に向ひ方に大に不安の念あらんとするを、之に反し聯合各國側を見れば近來に至り漸く從來の手落ちを自覺し來り兵器彈藥を充足して以て大に獨軍に拮抗せんとするに至れり、潛航艇に關しても近來漸く獨艇に劣らざるものを製造し得たるもの丶如く、毒瓦斯、巨砲の類亦た將に設備を完成せんとするに似たり、獨逸が平和を希望し弱音を吐く割合に英、佛、露、伊は元氣橫溢の概ありて其團結亦た益々堅固なり、元來軍國主義を國是とせざりし英、佛が開戰の初め獨逸に立後れの氣味ありし

は止を得ず、宛もナポレオンの大亂に際し英國を初め列國悉く立後れの觀ありて當初聯合諸國は幾度戰ふも勝つこと能はず、英の大宰相ピットはアウステリッツの大敗戰の後ち人心恟々として愁雲深く英國の天地を鎖ざせし中に病歿せし(一八〇六年)程なりしが、列國の軍人等も終にナポレオンの兵法に通曉し却て帝が作戰の裏を掻くに至り、ライプチヒにウォトルルーに佛軍を粉碎するを得たりき、先んずれは人を制すとは獨逸の金科玉條とする處なるも、後るるも尙ほ堅忍恢復を圖らば最後の勝利終に得て期す可らざるに非ずとは蓋し英佛露の確信する處なり、戰局の前途に就ては何人も豫言を敢せさるべきも借すに歲月を以てすれば最終の勝利蓋し必ず聯合軍側に在らん、然れども獨軍の過去一年間に於ける勇戰奮鬪は軍國主義の面目を發揮して遺憾なく自ら全世界をして畏敬せしむるものなくんはあらず。

(二) 軍國主義の歷史

軍國主義は普魯西の傳統的政策なり、普魯西素とブランデンブルクと稱す三十年戰爭の末期に際し國家疲弊を極めたるに關はらず當時の賢君フリトリッヒ、ウイルレムは列國に先んじて常備軍の必要を認めて小規模の軍隊を組織せしが、十八世紀の初に當り普魯西は王國の格に昇進し軍備擴張殊に身長聯隊を有するを以て知られたりしが、フリドリッヒ大王に至り其先代の遺せし陸軍を使用して大に國威を張れり、大王の七年戰爭に於ける力戰奮鬪は近世史の最も燦爛たる一頁を成すものなり、但し彼が小國の普魯西を率ゐ佛、墺、露諸大國の聯合軍に對抗し竟に互角引合けの名譽を荷ふて局を結ぶを得たる所以

のものは偶然にも露の女皇エリザベッツ沒して大王の崇拜者たるパウロ帝位に即きしに因れり、若しも此偶然の出來事なかりせば流石の大王も遂に力盡きて列國の前に屈服し領土の一半を割讓せしめらるるに終りしや想像に餘あり、今次の歐洲戰爭に於けるカイゼルの地位は七年戰爭に於けるフリドリッツヒ大王に酷似するものあり、露國內の親獨分子を大に利用せんとするが如き亦た祖先の筆法に學べるものなり、然れども英佛は云ふに及ばず露國亦た大に民主的覺醒を來たせる今日なれば聯合諸國は孰れも軍國主義の破滅を以て目的となし、未だ其の目的を達せざるに獨帝の術策に乘ぜらるゝ如きことなきは明なり、且夫れ今日の獨逸が列國に及ぼさんとする危害の程度は前年の普魯西の威迫と比較すべきに非ずして、危害の大なるだけに一擧に之を芟除せんとする列國の決心も亦從つて斷乎たるものありと謂はざる可らず、何れの方面より觀るも獨帝の希望する如き條件に由り急に姑息の講和を締結すること無かるべきは吾人の疑ふ能はざる所なり、卻說フリトリッツヒ大王の沒後に至り軍國主義は佛蘭西に移りナポレオンに依り絕大の光輝を發ちしが、ヴィエナ會議（一八一五年）以後は各國民權論の流行となれり、即ち英國に於ては選擧權擴張の大運動あり、穀稅廢止運動あり、佛國に於ては七月王政（一八三〇年―一八四八年）に次ぐに共和政の創立あり、獨逸にては人心一般にメッテルニッヒの反動政策に厭果て、到る處憲法運動あり、遂に佛國共和政創立に勵まされて獨逸全體の國會を基礎として聯邦組織を改造せんとし、甚だしきは共和政體を採用すべしと說くものありて、フランクフォルト市に私立國會の招集あり、ヴィエナ、伯林に小革命の暴動あり、列國の形勢既に斯の如くなるに際し普魯西軍國主義の基礎の上に

獨逸帝國の建立を企てしものをビスマークとす、比公か巴里駐在大使在職中擢んでられて普國首相兼外相の任に就きしは一八六二年十月八日に在り、是より先き普國にも憲政を施き普王維廉は陸軍の擴張を企て鋭意功を急ぎしも、議會は徒らに内治問題に沒頭して國家の長計大策に耳を假さず、自由黨内閣去り保守黨内閣來るも陸軍問題は依然として解決せられず、此時に普國王が不羈豪磊の比公を拔擢せしは一種の冒險にして王は彼の巨腕に信頼して萬一を僥倖せんと欲せしなり、比公首相の印綬を受くるや幾許もなく下院の豫算委員會に臨み軍備の必要を說て曰く

普魯西は國家發展の好時機に對して其兵力を充實し置かざる可らず、好時機は過去に於て幾度か來りしも捕へられずして失はれたり、現在の普魯西の國境は國家が健全なる發達を爲すに適せず、今眼前に橫はれる各種の大問題を解決せんことは議會多數の演說、決議に因るも其効なきは一八四八、九年に於ける失敗に顧みば明なり、是れ唯だ血と鐵を以てし成遂げ得べき耳と、

比公が後に鐵血宰相の名を得しは此演說に基けり、而かも議會の多數は遂に遠謀大計に耳を傾けず依然として陸軍案に反對したるを以て、比公は止むを得ず上下兩院異見を持するに際し（上院は陸軍案に贊成せり）之を協停すべき方法を設けざるを以て普魯西憲法の不備となし之を理由として斷然行政處分に依り增稅を決行せり、玆に於て一八六四年墺國と聯合して丁抹を討ちてシユレスウイキ・ホルスタイン兩公國を奪還したるが、戰後口實を設けて墺を蹴飛ばして兩公國を普國の直轄に編入せり、更に一八六六年には墺國と戰端を開きコエニグラッの一戰大に墺を破りて、墺をして獨逸聯邦を脫し東方に擴大の途

を求むるの方針を取るの止むを得ざるに至らしめたり、而して一八七〇年には佛と開戰して城下の盟を強ゐ、アルサス・ロルレーンを割き二十億圓の償金を取り、遂に普王統率の下に獨逸帝國建立の業を成せり。

斯くて世界第一の陸軍國は歐洲の中原に現出せり、之を獨逸側より觀れば民族的國家の統一茲に成就して中世期以來の宿望を遂したることなれば、元氣國内に横溢し歡聲天地を振動せしも、露佛英墺の列國に取りて此大軍國の出現は自ら一大恐惶の因たらざるを得ず、茲に於て形勢の測定には何時も寸毫の誤算なかりし比公は早くも佛露を終天の仇とせざる可からざることを看取し墺伊を味方として三國同盟を結びて自衞の策を立つべく企劃せり、之に反して露は伯林會議の結果に因て一層不快の念を增したれば露佛相依りて獨逸と對峙するの形勢益々明白となれり、三國同盟は一八八二年に成立し露佛の軍事同盟は一八九二年に發表せられたり、此間比公は最も深く英國の去就に注意し一方に英國の歡心を繫ぐと同時に英と露佛とを離間し葛藤を繁生するに腐心せり、蓋し若しも英國にして露佛と結托することあらば獨逸は之に對し均勢を維持せんこと頗る困難ならんも、英國が超然として所謂光榮ある孤立に誇れる間は、獨は枕を高ふして安眠することを得べければなり、然るに此均勢の保持に晩年の心血を絞りし比公は一八九〇年を以て其職を辭し一代の俊豪を以て自負する現皇帝政を親くし、歐洲平和の支持者たりし露帝歷山三世亦た一八九四年を以て沒して、善意餘ありて識見英斷を缺けりと思はれしニコラス帝其後を承け、茲に國際間の晴雨計は頓に不安の狀態を示したり、果然一八九三年には獨帝は海軍案を提出し

て海軍大擴張の端を開き陸海並行して軍國主義の實を擧げんとするの慨を示せり、日清戰爭の終結に際し獨帝は露佛の中間に割込みて日本に對し三國干涉を試み(一八九五年)、一方英國を益々歐洲協商の外に驅逐し他方に支那に殖民的根據地を得るの素地を作らんとせり、果せる哉一八九七年帝は二宣敎師の殺害を口實として膠州灣を占領し翌年三月同地域の租借を得、同時に露國亦た旅順大連の租借を得たり、之に次ぎて佛英も亦た均霑の意味より一は廣州灣を得、他は香港の對岸一圓の地域と威海衞の租借を得たりしが、此頃より獨露の關係は支那問題に對し特に接近の趣あり宛も此と前後して佛國にドレイフユ事件發生して政界の紛擾を極め露國も佛に對し稍々賴み甲斐なきの感を爲せるに際し獨帝は益々妖言巧辭を以て露の極東發展を奬誘し、露遂に滿洲經營に沒頭し暫らく近東に向つて手を緩ふするや獨逸の土耳其經營は着々として進行せり、獨帝がパレスタイン巡禮旅行を爲し歸途君府に到り土帝と殷懃を交換し其間バグダット鐵道契約の基礎を置きしは實に此間に在り、是より獨帝は露帝の無二の親友となりすまし露國が遂に日本を挑發して兩國開戰に至れる道行に付てはカイゼルの指し金與りて力ありとは故なき想像にあらず、而かも露國が引續きて戰敗に惱むや獨逸は露獨通商條約の改訂を迫りて多大の利を占め、更に戰後大に大國としての聲望を落すや獨は墺を誘ふて巴爾幹に跋扈し(一九〇七年ボスニヤ・ヘルゼコビナを合併す)又佛を威脅して之に經濟同盟を迫り遂に摩洛哥問題の大紛擾を惹記するに至れり、之より先き英國は南阿戰爭に從事し頗る利あらざるや歐洲の輿論は一般に拍手して英の衰亡を笑ひしが、此間反英感情の音頭取とも見るべきは獨逸皇帝其人なりき、彼は開戰の始めにトランスワール大統

領クリユゲルに挑發的親電を送りて大に英人の憤怒を買ふを辭せざりしなり、南阿鎮定(一九〇二年)の後に至り英國人民は始めて孤立の危險を覺知せるもの丶如く一九〇三年日本と同盟を結びて露國の雄張に備へ翌年には佛國と多年の葛藤を解決して兩國接近の素地を作り、一九〇七年には亞弗肝、波斯に對する問題を露國と協約して英露多年の葛藤を一掃せり、此間獨逸軍國主義の危害を最も明かに看破したるものは英の先帝エドワード七世にして、英國が佛露と接近するに至れるは帝の個人的斡旋の功に歸すべきもの甚た多きが如し、斯くて一たびは解體に瀕すと思惟されし、大英帝國は其孤立政策を放棄して以來内に各殖民地との團結を堅固にする耳ならず國際的にも其偉大なる勢力を恢復し隱然英露の介添たるの觀あり、同時に獨逸は動もすれば孤立に陷るの恐なきに非ず、是れ獨帝の最も意外とし不快とせし處にして、爾來獨逸の國際政策は英を露佛と離間し、露國が戰後の回復を全ふせざるに先だち佛を恐嚇威壓して獨り覇を中原に稱せんとするに在り、故に英佛協約の結果兩國が摩洛哥問題を勝手に處分せんとするを見るや遊船にて廻航中の獨帝は一日飄然として摩國タンヂールに現はれ玆に摩王と會見せり、其會見の席上王に告げて曰く摩國が對外關係上困難に遭遇する場合獨逸は其掩護者たるを辭せずと、同時に佛英諸國は獨逸の通牒に接し列國會議を西班牙アルゼシラスに開くに至れり(一九〇六年)、然るに會議の結果は列國多く佛に同情し獨逸に利あらず、後ち獨は佛との單獨協議に因り佛の摩國に於ける政治上優越を承認し僅かに純粹なる經濟問題に關し獨佛共同事業を起すべしとの一條を留めて一先づ協商を終了せり(一九〇九年)、斯くて表面佛の勝に歸せしが如くなるも其實獨逸は他日問題の再開を期し巧

妙に一の手懸りを存置せしものなり、他なし摩國の如き未開國に於ては政治經濟の區別分明ならず、獨逸もし一の經濟事業に關し佛と協力するあらんか自然政治範圍にも喰込むに至るべきは見易きの道理なればなり、初めこの巧計に氣付かざりし佛國も獨の幾多の協同事件に關する交渉に接し政治關係の生ずるを恐れて容易に之に應ぜざりし折柄、摩國首府に反亂ありて佛國出兵して頓に勢力を加へんとするに對し不平滿々の獨逸は空しく指を啣へて止むべきに非ず、一九一一年七月一日獨逸砲艦パンテル摩國南方の未開港アガヂルに現はるとの警報は各國の外務省を驚倒せり、獨逸が此非常の手段を取りし理由は國人を保護せんとすと云ふに在れども、當時南摩には一人の獨人在留者も居らざりしなり、實の目的は無理無態に摩洛哥問題を再開するに在り、談判再始と共に獨は恐嚇威迫至らざるなく南摩一帶を勢力圈に加ふることと及び佛領カメルーン大半の割讓を要求し爲めに國際問重大なる危局を現出せり、茲に於て英國遂に傍觀せず最も强硬の態度を取り議會に於ける首相アスクイス氏及前首相バルフアル氏の演說に次ぐにギルドホールに於ける藏相ロイド・ヂョーヂ氏の演說を以てし國力を擧げて佛國を援助するの威を示し、加ふるに英佛資本家は獨逸に對し資本の回收を斷行せしかば竟に伯林に於て株式の大暴落あり地方に於て銀行の取付あり、流石の獨帝も大に退讓を必要とし、僅かにカメルーンの一部を得るを以て局を結ぶに至りしが(十月)、一轉して獨人の怨恨憤怒は一齊に英國に注集せられ、獨英關係は乍ち容易ならざる緊張を來たし兩國の海軍競爭は一層の猛烈を加ふるに至れり、而かも双方の溫和論者は頗る此の形勢の緩和に努め、海軍問題を主題として一九一二年の初に於て英獨妥協を企てたり、協議は遂に

成立するに至らざりしも、是より兩國の感情多少融和の傾ありしに似たり、而して其年十月には巴爾幹戰爭勃發したるを以て英獨は列國中最も公平なる立場に在りと云ふの故を以て主として各方面に對し意思の疏通を謀りて戰爭を局限し遂に平和克復を見るを得たり(一九一三年八月)、然るに巴爾幹戰爭の結果如何と云ふに土耳其は益々其歐洲に於ける聲望を失墜し各スラヴ民族は新に勢力を加へたるを以て從來の獨帝の政策は爲めに一大頓挫を來し、從つて墺國亦サロニカ港に出でんとする宿志を阻止され頗る不安の情なき能はず、同時に列國の國情を觀れば英佛露はバルカン戰爭の結果に對し頗る得々たる耳ならず、英國は前年來獨國が時に或は妥協的態度を示せしは一に英國を佛露より遠ざけ、來るべき大戰爭に際し中立の立場を守らしめんとするに在ることを愈明白に看破して却て佛露に接近の度を加へ、佛國亦た摩洛哥問題開始以來の獨の横暴に覺醒せられて頓に國情を一變し愛國の熱情勃々として國内に充滿せんとす、而して露國も亦た漸く敗餘の陸軍を整理し復た侮り易からず、是れ蓋し獨逸が一日も猶豫ならずとして陸軍の大擴張を斷行せし所以なり、果然戰機は日ならずして動けり、一九一四年六月二十八日墺國皇太子及妃はボスニヤ首府サラエボに於てスラブ派刺客の手に係りて慘死せり、墺國は此事變を利用し塞維國を兼併し以て巴爾幹戰爭に由り失墜せる勢力を挽回すべく起てり、獨逸亦た墺の介添人、寧ろ後見役の格にて露佛と干戈を交ゆべく起てり、是れ實に獨逸軍國主義最後の大飛躍、乾坤一擲の大博奕なり、カイゼル半生の經綸、努力必竟此日あるを期せしなり、然れども彼れは伊太利が同盟の誼に由り獨墺と共に起つべく强ゐん爲め開戰の責を露國に歸せんと努めたり、又彼れは佛本國を分割せざる

べしと云ふを條件として英國を中立たらしめんと試みたり、而して我日本の如き多年學術の研究上獨逸に負ふ處多きを以て寧ろ彼に味方して露國の背後を衝くべしと豫期したるに似たり、憶ふに獨帝はクリユゲルに親電を送りし以來海軍競爭の最後に至るまで如何に英人の感情を害せしかを忘れたり、又我邦に對しては三國干渉より膠洲灣占領に至り更に黃禍の首唱に至る迄常に我國家發展の前途を遮らんとするの態度を取りしことを忘れたり。蓋し皇帝思へらく獨逸は兵力に於て、學術に於て、工商業に於て、國民の元氣に於て世界第一の强大國なり、强大は即ち正義なり、我若し戈を取り立たば必ずや世界大小の各國皆な我前に震慴せんと。

(三) 軍國主義の失敗

爾來今日に至るまで獨逸は其唯一の味方たる墺と共に英、佛、白、露、伊、日を敵とし戰ひ容易に屈するの色なし、其全力を傾けて西に向へば英佛軍屈し、一轉して東方に向へば露軍大敗せざるを得ずと雖も、果して同時に双方に向ひ雄張し以て全戰局を制するの實力ありやと云ふに、之を爲すには其兵數不足なるを免れず又今後兵力の補給に關し聯合諸國の尙ほ綽々餘裕あるに對し遙かに及ばざるが如し、是れ今日迄大に勝てる獨逸の前途に對する第一弱點なり、又た食糧物資の供給に於て既に驚くべき餘裕を示し來れるも英、佛、伊、海軍の封鎖益々嚴密ならんとするに對し果して今後缺亡を告げざるを得るか、是れ第二の弱點なり、是の二弱點あり露國と單獨講和を爲すか左もなくも大讓步をなして聯合諸國

と講和するを得策とすれども、英佛露の意氣却て益々旺盛ならんとするに於ては已に今日まで多く勝ち又今後と雖も幾多の部分的奇勝を收めて聯合軍の膽を寒からしむるとあるべき獨逸も終には大に窮せざるを得ざるべし、畢竟するに獨帝の大遺算は英國を敵方に廻はせしに在り、陸上に於ても海上に於ても同時に覇を稱せんことは從來歐洲形勢の許さゞる處にして、路易十四世、ナポレオン共に同一の遺算に由りて最後の敗を取れり、陸に於て露佛を壓倒し海上に於て英國を凌駕せんと試みしカイゼルの末路略ぼ察すべく、吾人は轉た比公が國力を陸軍に傾倒し海上は英の縱横に放任して衝突を避けたる智慮を稱せんと欲す、然れども軍國主義を樹立し、商工業を奬勵したる比公亦た責任なきこと能はず、何となれば國力已に充溢すれば外に其發展の途を求めざる可らずして海軍擴張も殖民策の發展も到底制止し得べきに非ず、即ち英國との衝突は必ず何の日にか來るべき數理に屬す、但だ若しも今日まで比公をして獨逸を指導せしめば輕擧盲動、不信暴戾以て世界を敵とするが如きことなかるべしと云ふべき耳、元來軍國主義は力の福音にして、優越なる武力に依りて自己の意思、場合によりては無理非道をも敢行せんと欲するものなり、秦の始皇が兵力と術數を以て六國を亡ぼしたるが如きは最も露骨に此主義の應用を示したるものなり、故に橫暴嵩じて最も甚だしきに至れば外、列國の聯合反對を受くべく、若しも列强の反對すべきもののなき時には內、國民の反對を受けざるを得ざるべし、世人往々軍國主義の組織完全し秩序整然たるに惑はされて其必ず永久持續すべきを思ふ、何ぞ知らん其完全なる組織その整然たる秩序、宛も石造の大厦高樓の如きも、其立つ處は地下幾百尺を開掘して建造せる基礎に非ずして普通一般の泥

土の地のみ、之に反し個人の權利幸福を土臺として築造せる國家は偶々兵亂に遭遇せば比較的に見榮せず、往々敗軍の不幸を見ることありとするも、其根柢堅牢にして恢復の餘裕綽々たり、故に今次の歐洲大戰爭に於て軍國主義の獨逸勝つか民主主義の英佛勝つかと云ふは單に關係各國の問題に非ずして人道文明の問題なり、英佛の輿論が能く此高處見を誤らず獨帝の軍國主義を絶滅し歐洲を獨逸化せんとする彼をして野心を抛擲せしむるに非ざれば決して講和せずと高調するもの誠に故なきに非ず、一派の論者が佛國政府の獨軍の蠻行を調査發表したるを怯者の泣言と冷嘲し、英國が白耳義中立の犯侵を名として開戰せしを一場の口實に過ぎずと評言するが如き其淺見笑ふに堪へたり、我日本が今次の戰爭に參加せる理由を説いて日英同盟の誼に因れりと云ひ又は三國干渉に對する復讎なりとも云ふ、蓋し之あらん、然れども更に重大なる理由自ら他になからずや、即ち人道文明の爲めに獨逸の軍國主義を撲滅せんとすと云ふことなり、吾人は我邦が此高遠なる見識に依り戰局を終始せんことを希望するものなり、若夫れ凡庸政治家の高處大處を見ず徒らに黨弊に因はれ着々施設を誤り機宜を失するに對しては吾人實に浩歎に堪へざるも今は之を略して論ぜず。

袁氏と帝位

米國博士グウトノウ氏が帝政論を唱へ支那の國情は共和政體に適せずして立憲帝政に適するを説きし

より、袁世凱氏一族と密接の關係ある某々等籌安會なるものを起し支那政體の得失を學理的に研究すると稱しながら盛んに帝政復活を煽動するに至れり、斯くて端なく日支交渉以來數月小康を保ちし支那政界に一大紛議を喚起したり、吾人はグウトノウ博士が如何なる動機より今の時に政體問題を提起せしを知らず、博士は米國知名の學者にして其人格は汎く世人の尊敬する處たり、吾人亦た博士に敬意を拂ひ一部の觀察者と共に博士が袁氏に迎合せんとして其議論を發表せりと猜するを欲せず、但だ其立憲帝政を可とする所以に至りては吾人は頗る之を解するに苦まずんばあらず、想ふに若しも支那の國情にして立憲共和に適せずとせば同じく立憲帝政にも適せずと云はざる可らずして、唯た獨裁政治のみ可なりと爲すを至當とせん、何となれば戶籍法なく、選擧取締法なく、警察制度なく、裁判所なき現在の支那社會狀態は到底公平なる議員選擧に堪へざるや明白なればなり、然れども一方に立憲帝政を適當なりとする以上何故に立憲共和は不適當なりや、大總統の屢々交迭あるを避けんと欲せば在職期を永久にし又は終身にするも可なり、血統に依る世襲元首の經驗なき米國人としてグウドノウ博士は古來支那に於て不肖者の繼承により如何に多くの騷亂が惹起されしかを忘却せるに似たり、批評は別として博士の立憲帝政論は大に袁氏一族一派の希望に叶ひ、譬へば一斛の石油を將に點火せんとする積薪に注ぐが如く、乍ち帝政復活の大運動を炎上したり、回顧すれば今より四年以前一九一一年十月武昌に革命の起りてより越へて翌月袁世凱氏は北京朝廷の懇命に接し時艱を濟ふべく河南の草廬を出て威風堂々として北京に入れり、彼は直に內閣總理大臣に任ぜられ、攝政王に代りて國政を執れり、同時に袁氏は征討總帥として籌

策を運らせしが漢口漢陽は官軍の有に歸し、南京亦た陷落したるも、上海を初め各省多く獨立を宣言し、海軍多く革命に與みし、排滿の論滔々として天下に汎濫たり、茲に於て袁氏は其腹心唐紹怡等をして革命黨首領黄と妥協を講ぜしめ、彼自らは朝廷の一部と謀りて淸帝退位、共和創立の廟議を決定するに至れり(一九一三年一月)、淸帝の上諭に曰く人心の向ふ所天命知る可し、茲に皇帝統治權を公衆に與へ全國を定め共和立憲政體となし袁世凱全權を以て臨時共和政府を組織し人民の安堵海内の泰平を期せよと、是より先南京に假國會開催されありて、孫逸仙氏擧げられて假大總統たりしが、淸帝退位の上諭出づると共に孫氏辭し袁氏選擧に依り之に代はれり、爾來第二の革命起りて失敗に歸し革命各派の首領多く國外に逐はれて袁氏の地位却て鞏固なるに至りしが、更に昨秋以來の我が對支交渉多くは道を失し靑島を獨逸より奪ふて支那に還附するの恩惠を施さんとするに關はらず支那は我を毫も徳とせざる耳ならず却て袁總統の强硬能く支那の面目を維持し得たりと稱し袁氏の聲望益々隆々たり、茲に於て袁氏の家人郎黨、袁家の幸運を信ずること益々厚く、芽出度九五の位を贏ち得て袁家萬歳を祝せんとするに至る、蓋し支那人の心裡として當に有得べきことと謂ふべきか。

惟ふに斯の如き支那人の心理は傳統的にして、古來の事例は皆な之を證明せざるはなし、魏の曹操は亂世の姦雄と云はれし程ありて支那史上稀有の人傑なり、彼れ暗弱なる後漢献帝の下に亟相となる時已に簒奪の意圖ありしや疑を容れず、然れども初めに魏公に封ぜられ次に魏王に上り天子の車服を用ひ出入警蹕を許されしも終に九五の位を踏まずして沒し、嗣子丕に至りて始めて漢帝より禪を受けて帝位に

即けり、司馬懿仲達は九錫を加へらるゝも辭して受けず其長子師僅かに亜相と爲りて沒し次子昭晋公に封ぜられ九錫を加へられたるも終世帝位に登らず、昭が子炎(即ち懿の孫)に至りて始めて晋帝と稱せり、獨り一代にして而かも短兵急に天下を取り復た速かに之を失せしを王莽となす、莽は一たび安漢公に封ぜらるゝや其より三年にして九錫を加へられ又三年にして假皇帝の位に即き、更に又三年にして眞皇帝と爲り新と號せり、而して此より十四年にして光武漢家を復す、最も露骨なりし王莽は最惡名を帶び最も愼重なりし司馬氏は最も長く天下を有てり、袁氏に忠ならんとするもの宜しく先例に鑑むべからずや、

吾人は或る意味に於て袁世凱氏を王莽、曹操、司馬仲達に比せんとするも、是れ決して惡逆無道の意味に於て比するに非ず、元來支那の國體は根本的に我邦と相異す、支那の王室又は帝室は我皇統の源を天孫に發して萬世に及び窮らざると全く其性質を同ふせず、支那歷代の皇室は寧ろ我邦歷代の閥族及び幕府に似たり、秦周を亡ぼし漢秦に代り、魏晋隋唐宋元明清相續て起るは藤原、平、源、北條、足利、織田、豐臣、德川諸氏の相續て起り以て國柄を執りしと擇ぶ所あらず、故に政權爭奪に際し多少の罪惡行はるゝも大逆無道を以て之を論ずべからず、袁氏もし愛親覺羅氏に代り皇帝たらば是れ足利氏の北條氏に代りしと云ふと異なる處あらず、故に我日本人として支那政體の變化に對しては主義として極めて淡泊ならんことを要す、然れども政變の結果にして若しも紛擾を醸もし内亂を勃發するが如きことあらんには利害の及ぶ所遂に冷淡なること能はず、殊に袁世凱氏權柄を執りし以來僅かに四年、革命の亂既

に止むも革命の志士は未だ現狀に滿足するに至らず、寧ろ袁氏に對し深怨を懷き亂を思ふの徒各地に伏在するに似たり、主義として之を觀れば共和可なり、帝政可なり、一代總統制可なり、然れど政變より內亂を生ずるが如きは最も愼まざる可らず、吾人は此意味よりして政體問題の今の時に提起せられしを遺憾なりとす、袁總統及び北京要路の前途には幾多の大問題橫はり居れり、警察改良、幣制改革、財政整理、法律の改定等即是なり、是等は寧ろ焦眉の急務にして政體問題は他日に讓るも可なり、急務を後廻はしにして不急の問題を先決せんとす、吾人は其可なる所以を知らざるなり。

井上侯を弔す

井上馨侯の薨去に由り國家は最も特色に富める明治の一元勳を失へり、彼は新日本建設者中最有力者の一人なるに相違なきも、幾多の建設事業中一として彼の功として錄せらるるものあらず、然れども其殆んど孰れにも彼は關係して忘る可らざる印象を遺し、或る心理的瞬間に於ける彼の突進努力を無視しては事の成功解し得られざるものあり、彼は山縣の組織的才能と徐ろに成を待つの隱忍とを欠けり、彼は伊藤の大觀遠識と平調穩健を欠けり、彼の特長は其精悍にして直覺的なるに在り、彼れ事に當り庻く見ず而かも其見る處最も鮮明なるが故に其一たび奮起するや萬夫の闔も之を突破せずんば止まず、然れども餘りに其力を局部に集注するが故に往々拔差ならぬ嵌めに陷り、遂に自ら失敗を自覺して脫然世を

離ることありき、井上侯が世外又は三猿を號とせしは皆な斯る隱遁發作の記念なり、然れでも彼が隱遁は眞の解脱に非ず、餘りに一事に凝りて雄味を生じたるの結果に外ならざれば、復た何時の間にか還俗して或は國事に或は富豪の世話に熱中せり、宛も大酒豪が時々酒に飽き禁酒を宣告するも幾許もなく復た大杯を手にするに至ると同じ、直覺、精悍、猛進、熱中は侯の本性なり、侯は何事も不承不承に爲すを得ず、苟も事を爲す以上は渾身の力を致さゞる能はず、渾身の力を致して行詰れば頓に退却し冷淡水の如き人となれり。

明治年間の國家の重大事件にして井上侯が關係して一種の忘る可らざる印象を殘こせしは、討幕廟議の決定、廢藩置縣の斷行、各藩金札の整理、新貨幣制度及金融機關の設立、條約改正、朝鮮指導を主とす、殊に條約改正に付ては歐化主義を鼓吹し法制の改革を促進し大に物議を喚起するに止まりしが如きも其功亦た沒す可らざるものあり、朝鮮指導の如き亦た失敗に終りしも、侯が渾身の誠意を傾けて隣邦の改新を謀りしは後の伊藤公の統監指導と相待つて功の忘る可らざるものなくんばあらず、斯の如く侯は一も大功勳の稱すべき無きに似たる耳ならず、又身一たびも總理大臣となりしとなきに關はらず最後に至るまで元勳元老として上下に敬重せられ、殊に最近に至り權勢朝野を壓するが如くなりしは亦た偉ならずや、思ふに是れ侯が至認忠忱その身を君國に致し、又其俠氣好んで身を難局に投じ成敗を意とせざりしに由らん、侯の行動往々極端に大膽なりしかば其心事を疑はれしことなきに非ざりしも、齡八旬を超へ一代の豪俠を擅にして終る、侯亦た地下に瞑すべきなり。

公論

全歐戰爭と有產者及無產者

法學博士　戸田海市

一

今次の歐洲大戰爭に付ては何人も先づ其原因を考へざるを得ない。是に付て或は獨帝露帝の如き主權者を擧げて此責任者とするの說もあるが、今回の戰爭が帝王戰爭でなくて國民的戰爭であることは、尙ほ其政治が國民的政治であると同じであり、特定の主權者や政治家を以て根本的責任者とするを得ない。固より政治の民衆化せる歐洲諸國に於ても、外交や兵事に付ては特定の君主や宰相の個人的勢力に由て影響を蒙むるの少なからざるは拒まれないが、戰爭の眞因は更に深く交戰國民の內に醱酵しつゝあつたのである。或は特定の個人を責任者とするを得ないとしても、特定の國民に罪を歸することは不當でないと云ふ考へも起る。現に交戰國の政治家の互に主張する所を見るに、聯合側は獨逸國民を以て戰爭の原因者なりと主張し、同盟側は其罪英露に在りと主張する者が多い。併し乍ら歐洲諸國は多年軍備競爭に民力を傾倒するの狀を呈して居たのであつて、此競爭の眞相を研究すれば必しも特定の一二國が主動者となり、他の諸國は自衛の必要に迫まれて之に倣ふたに止まり、主動者たるの責任を有しないと云ふを得ない。一國の政治外交が特定の政治家に由て影響せらるゝ如く、國際の軍備競爭に付ても一

二の競爭國の態度が其の他の國にも影響することは無論あるが、併し各國は大體互に働受働の關係に立て競爭し來つたので、何れの一國をも只一の又は根本の責任者とするを得ない。

此の如く公平に見て今回の戰爭を特定の個人又は國民の責任に歸するを得ない。其眞因は歐洲各國をして多年軍備に付き經濟に付き激烈の競爭を爲さしめた所の帝國主義である。然るに或主義が國民を支配すると云ふのも、國民各階級が悉く同じ主義を同じ程度に主張するのではなく、大體社會運營の實權を掌握せる階級の主義が其社會の主義となつて實行せらるゝのである。此事は階級的組織と其鬪爭の顯著なる歐洲諸國に於て特に適切に感ぜらるる。而して現代の開明國は有產者階級の支配に屬し、所謂資本主義全盛の時代であつて今次の戰爭を惹起した帝國主義も其實は有產者階級の主張である。帝國主義は資本主義の別名に外ならぬ。從つて戰爭の責任も國民の多數を占むる無產者ではなくて少數の有產者階級であると云ふ說がある。

此說は戰爭の責任を特定の個人や國民に嫁するの說に比すれば頗ぶる眞相に近いやうである。外交や植民政策や貿易政策に付て資本家は常に帝國主義的なるに反し、大體社會主義に傾ける一般無產者階級は之に反對の態度を採つて居たのである。只だ今回の戰爭の勃發すると同時に社會黨も一般勞働者も平素の主張に反し、擧國一致の態度で戰場に急いだのは事實であるが、此事實に由て直ちに彼等を有產者階級と等しく戰爭の責任者とするのは酷に過ぐるの感が無いではない。戰爭は彼等の本位ではなくとも、一旦戰爭が事實となつて國民全體を生か死かの境地に陷れた以上は、彼等も擧國一致で戰場に突進するのは人情の自然であつて、之が爲め直ちに彼等の矛盾を咎めることは出來ぬやうにも見える。併し乍ら更に一步を進めて考れば此說も全部眞理とは云へない。資本家階級と云へるが如き、特定の階級を指して之を戰爭の只一の責任者とするの非なるは、尙ほ特定の個人や國民に戰爭の責を歸せんとするの非なると多く選ばない。從つて又反面より論

じて社會運營の實權が無產者の手に歸し、又は社會主義が實行せらるゝに至れば、軍備の競爭や實際の戰爭**が世に跡を絕つであらうと斷定することも出來ない。**

二

物質的文明の時代と呼ばるゝ現代に於て、開明國民の慾望の中心は物質生活の向上に在るが如き觀を呈するとは云へ、人は麵麭のみを以て生くるを得ずと云ふことは今も昔と異らない。併し現代國民は主に經濟上の利害に由て左右せらるるものと假定しても、帝國主義の手段と認めらるゝ種々の對外政策は盡く資本家の利とする所であると同時に盡く勞働者の不利とする所であると云ふは甚しき誤解である。例へば植民地を獲得し利權を擴張することは、資本家に對して一面には有利なる海外投資起業の途を開き、他面には彼等の國內に經營せる產業に向つて低廉なる原料を輸入し、又其生產物の有利なる販路を海外に擴張することゝなるのであるが、併し乍ら斯くして國內の產業が發達すればこそ勞働者の勞銀も增加して日に月に其生活程度を向上し得るのである。最も資本家が其資本を國內の產業に投じて多々益々勞働の需用を增加し、從つて又勞**銀を益々騰貴せしむる代りに、資本の一部を海外に投**下せんとし、此投下を有利安固ならしむるが爲めに大膽な植民政策や利權獲得を主張することは、一見大に勞働者の利益と衝突するやうである。現に此の如き意見も幾分か原因となつて先進國は近來資本の海外輸出を制限せんとするの傾向を示すに至つた。併し乍ら歐洲先進國の資本家が盛んに其資本を輸出して海外の新富源を開いたことは後進國の經濟を進歩せしめたと同時に、先進國自身の工商業を今日の如く隆盛ならしめ、從つて又其勞働者の地位を向上せしめた大原因となつて居る。各國資本家が競ふて海外に投資し起業したことは先進國民と共に後進國民を利し、白人國と共に有色人國を利し、其結果より見れば世界主義的人道的の行動であつたとも云へるのであるが、更に先進國勞働者の直接の利害關係より見ても、彼等の生活上最も重要の地位を占むる食物が、其人口の增加に伴ふて大に

缺乏の騰貴する筈であるに、事實は工業原料と共に多々益々豐富低廉となつて居るのは、主として資本家の海外投資に由て未開の富源を開發利用した爲めである。

植民地獲得や利權擴張に由て海外投資を爲し、以て世界の富源を開發したことが勞働者に取つても必要であつたことは爭はれないが、併し先進國民が其豐富な資本と優秀な技能とを利用して世界の富源を開發するが爲めには、必しも今日の如く列國の間に激烈なる、特に武力的なる競爭を起すことを要しない。利己的獨占的な今日の國家組織を解體して文明國民が共同一致に由り世界の富源を開發することゝすれば、今日の如く軍備の競爭も戰爭も起らないやうにも考へられる。此考は從來屢社會黨や勞働黨の間に主張せられたのであるが、併し乍ら文明國民の互に對等の地位に立ち相提携して世界の富源を開發することは、其實決して先進國の民衆の眞に希望する所ではないのである。例へば英國は他の諸國に先んじて世界の富源の主なる部分を占領利用した爲め、今日は殆んど坐ながらにして年々莫大の利益が國內に流入し、直接には資本家の所得となるのであるが、之が爲め勞働に對する需用を高めて勞銀の騰貴を生じ、間接に勞働者も歐洲第一の生活程度を維持するに至つた。若し今日英國が其占領せる世界の富源を他の諸國に平等に分配することゝなれば獨り資本家が損失を蒙むるのみならず、勞働者の所得も減少して大に其生活程度を下さゞるを得ない結果となるが、此の如き結果を生ずることは勞働者の絕對に反對する所である。勞働者も國民の一員として享受することの出來る自國の富源や利權に付ては、寸毫も之を他の後進國や劣等國に讓ることを欲しない。現に今次の戰爭も英國の世界的富源の獨占に對して獨逸國民が其公平なる分配を要求する爲めに起つたと云はれて居る。英本國の人民は比較的寛大な點もないではないが、其植民地の人民に至つては甚だ排外獨占的であつて、近き將來に開發し得る見込なき莫大な富源が空しく橫つて居ても、他國人就中異人種が入り來つて自他の利益の爲め之を開發することを許さない。此の點に

付ては常に世界主義や人道を口にする所の米國も同樣である。此等の事は吾々日本人が到る處に排日政策と云ふ不公平な待遇を受けて痛切に實驗しつゝある所である。尙ほ帝國主義の重要手段たる關稅政策に付て見ても、排外的な保護稅を主張する者は必しも資本家のみではない。勞働者は穀物に對する保護稅に付ては一般に反對するが、國內工業の維持發達の爲め必要な保護稅に付ては反對しない。此の如き保護稅は彼等自身の存在にも必要と認めて外品排斥に贊成するのである。

此の如く勞働者も種々の點に於て帝國主義的政策に贊成するとは云へ、之に由て最も多く利する者は資本家である。從つて勞働者は强て之に反對はしないが積極的に之を主張することはない、從つて彼等を指して帝國主義の主動者とすることは出來ないやうに見える。併し乍ら帝國主義と云へば外部に對して膨脹發展する積極的の態度を名けたやうに聞へるが、是は對外膨脹の能力の既に出來上つた國民が行ふ所の帝國主義である。未開の富源を擁して之が開發に急はしく、未だ對外發展の餘力を生ずるに至らざる新開國又は後進國に在ては消極的に外部よりの侵入を防禦することに全力を注ぐのが其帝國主義であつて、多くの國の帝國主義は積極消極の兩方面を有する。其消極的方面に於て利害の關係上資本家が保護關稅の設定に由り外國品の競爭を排斥するの主動者となるが如く、人口少なくして移住民の多く入り來る新開國に於ては、利害の關係上勞働者が中心となつて移民の排斥を企てる。資本家は低廉の勞働を得んとして移住民を歡迎しても勞働者が承知しない。彼等は此排斥を實行するが爲めには外國と紛擾を生ずることを厭はない。軍備を擴張してまで排斥を實行せんとするのである。尙ほ勞働者は獨り異人種異國人を排斥して自國の勞働市場を獨占せんとするのみならず、國內勞働者相互の間に於ても、上等職工は强固な組合を組織して上等の仕事を獨占せんとし、同盟罷業の如き强制手段に訴へて組合外の者が其仕事に干與することを防ぐと同時に、成るべく組合員

の數をも制限せんとする場合が少なくないのである。

三

資本家は國家主義なるに反し勞働者は世界主義であると一概に論ずるの不當なるは以上に由て見ても略ぼ明かであらう。元來純粹に勞働と資本とを比較して何れが世界的又は郷土的であるかと云へば、資本は大に世界的である。資本は僅かな利益の差に由て世界の一端から他端にまで移動する。資本には國境も國語もなく寒帶も熱帶もないと云へる。佛國の資本は獨逸に入つて其國防的設備に關係する事業をも助け、又獨逸のバルカン半島經營の事業をも助けて居る。現代資本主義の權化と稱せらるゝ猶太人を見るに、利害の在る所が其卿土である。然るに下層民即ち勞働者は利益の多少に因て容易に其卿土を見捨てない。是は彼等の異國異郷に關する智識や其處に移住する財力の缺乏せるが爲めのみではない。彼等は自己の人種や國語や風俗慣習に對して強き執着心を有し、利益の多少に因て容易に之を見捨てない。前にも述べし如く米國濠洲其他の新開國に於て資本家が生活程度低くして勞銀の安き異人種異民族の來住を歡迎するに反し、勞働者は獨り勞銀の競爭を防ぐ爲め之に反對するのみならず、人種や國語や文化の純粹を保存するの必要を感じ、異人種異民族の侵入混淆に因て其國粹の破壞せらるることを防がざるべからずと主張する。此主張を見て單に彼等の階級的利益を擁護する爲めの口實に過ぎないと云ふのは穩當でない。彼等は強烈なる本能的の種族保存性を備へて居るのである。

曾て本誌に於て論じた如く社會は進歩するに從つて民衆化するものであるが、此民衆化の進行に伴ふて國民性や民族性が社會運營の上に強く現はれて來る。君主や貴族の小數者專制時代には其小數者の一身上の都合に由て國が分裂したり併合したり、國境の變更が自由に行はれた場合も少なくない。歐洲に於ては此の如き時代には未だ各國語の獨立もなく、一切の文書は羅甸語より成つて居た。然るに各國が進歩して貴族に對し平民の勢力が加はるに從ひ、羅甸語に對して平民的

な國語が獨立し、思想界や政治界が民族的國民的の色彩を帶びて來た事は、恰ヶ我國に於て公卿專制の王朝時代に支那の制度を模倣し漢語を使用したるに反し、一層民衆化した武家時代に入つて固有の制度が起り國民文學が盛になつたと同樣である。左れば今後も現代的貴族といふべき有產者に對して無產者が勢力を增進し、又男子に對して婦人の地位が向上するに從ひ、國民や民族の自主的生活の要求は益鞏固となるの傾向がある。固より斯く云ふも社會の民衆化するに從つて益々盲目的な排外熱や孤立主義が跋扈し、戰爭の危險も增加すると云ふのではない。將來各國の關係は有形無形に益々密接するのは明かであるが、之を以て直ちに現國家組織の解體や世界主義の實現を豫想するの當を得ないことを云ふのである。各國民が他國の文化を攝取利用することは益々增加するが、之と同時に各國の國民我の要求は消滅するのではなくて益々强固となるのである。

四

以上に由て見れば資本家と勞働者とは、世人の往々云ふが如く國家主義者と世界主義者との別ではない。此兩階級は其階級的利害の關係より或は世界主義の實行者ともなれば國家主義の主張者ともなるやうな場合はあるが、而も兩階級は共に國民的民族的生活の鞏固な要求を有し、此要求に於て兩者の何れが一層强固なるやは斷定するを得ない。今日の濠洲を見るに政治上の實權は半ば以上勞働黨の手に存し、其政治は日に益々社會主義の實現に近づくの觀を呈しつゝあるが、之と同時に異人種に對する人種的獨立の要求も益々激烈となるのみならず、其母國に對しても國家的獨立を要求することが益々强くなり、之に伴ふて軍備も益々充實し獨立しつゝある。此一例に照して考へても今次の戰爭の責任が一に有產者階級に在りと云ふの不當なるが如く、今後若し無產者階級が實權を握るに至れば、各國が軍備を解いて戰爭の危險も止み、或は久しからずして國家組織も解體するであらうと云ふのも不當である。只併し無產者が社會運營の實權を握り、社會主

義が實現せらるゝに至れば、假令へ之が爲め國家や民族の別が消滅するとはなくても、軍備の競爭や戰爭の危險が大に減ずるであらうと云ふことには一應の理由がないではない。

現代の資本主義は舊時の安分知足の退嬰主義に反し、多々益々發展して飽く事を知らざる主義であり、各國民の元氣の旺盛なる現代を指導し代表するものと見做さるゝに反し、社會主義は生產の進步に比して分配の平等に重きを置くことを主義とするのみならず、之を實行すれば事實上生產の進步は停止せざるを得ない。多數の社會主義者は此の如き結果の生ずることを拒まんとするが、一部の者は敢て之を拒まざるも、一面に物質的進步の努力を減ずることは即ち精神的進步の努力を增加する爲めに必要であるとし、現代の物質的文明の方向を轉じて精神的文明に赴かしむる爲めに社會主義を實行すべしと主張するのである。之を實行することが果して精神的文明時代を作り出すの結果となるべきや、特に昔日物質的に繁榮せし西班牙葡萄牙や和蘭が物質的に衰退すると同時に精神的に進步せしや、又現に物質的進步に付て速度の減ぜんとしつゝある佛英に於て同時に精神的進步の速度が高まりつゝありと斷定し得るやは暫く論ぜず、兎も角社會主義を實行すれば今日まで進步し來つた物質的生活は保守退嬰の時代に入ることゝなり、從つて政治上經濟上の對外的發展の氣勢も挫けて自然に軍備の競爭も衰へ戰爭の危險も減ずることゝなるであらう。只だ今日の開明國民が凡て一樣に物質生活に付き進步の苦痛を厭ふて安靜の快樂を貪らんとするの時期に到達し居るや否やは問題である。世人は往々佛國や英國の如く老熟した開明國は最早や此の如き退嬰の年齡に達して社會主義の實行が益々歡迎せらるゝに至つたのであると主張する。此說の當否は別とし、假りに二三の老熟せる文明國が此の如く退嬰的となれば、新進氣銳にして物質的勢力にも充實せる他の強國に征服せられるの外はない。有形無形に世界的交通の發達せる今日に在ては諸國民諸民族の發達も平等となる形勢があるとは云へ、

世界の諸國民諸民族の元氣の盛衰も時期を同ふして起るとは云へない。一方に衰弱する老年國民があれば他方に發育する少壯國民がある。故に老熟せる文明國の狀態を研究して直ちに戰爭や征服が世界に跡を絶ち、永遠の平和が地球を支配するに至るべしと結論することは出來ない。（完）

結婚の進化

野上臼川

性（セツクス）の問題が近代に及んで非常に重く見られるやうになつて來たのは進化論のおかげに相違ありません。既に我々の生存が、種族の保存及び改善といふ大なる目的の上に企てられてあることを承認する以上、兩性問題が有らゆる人生の進歩發達に對する出發點となり得べきことを拒むことは出來ないわけであります。

問題としての兩性關係は二つの形式を取つて我々の頭（あたま）に這入つて來ます。即ち戀愛と結婚。但し何より恐る可き誤謬は此の二つを同一視し混同することから生じます。云ふまでもなく戀愛と結婚は全く別物であります。勿論、戀愛の結果としての結婚はあります。結婚の結果としての戀愛は、併し、殆どあり得ません。若しあるが如く見えるとすれば、それは多くの場合妥協かごまかしであることが發見されるでありませう。私は讀者に問ひます。諸君は日本の普通の形式に依つて或る婦人を今現に諸君の夫人としてゐると假定します。平和も整頓も諸君の家庭にあるでせう。けれども果して戀愛がありますか。妥協でない調停でない見せかけでない、眞の自由な純なる戀愛が諸君と諸君の夫人との間にあると公言し得ますか。人類の歷史に昔から戀

愛と結婚が別々に離れ〳〵の道を取つて進んで來た事實を示してゐます。效果の上から云へば、戀愛は個人の幸福のために、結婚は種族の保存のために存在してゐました。戀愛は一種の宗教であるに對して、結婚は何處までも制度に過ぎないのであります。そして時が制度の周りに夥しい因襲を附き纒はして了ひました。それが爲め個人の幸福が犧牲にされた事が幾らあるか知れません。それは義務の觀念が社會に對して個人の無條件的犧牲を要求するが故に外なりません。そこで、我々の問題は、

一、我々の現行の結婚制度は、果して我々に幸福を附與すべき最善の屬性を具備してゐるか。

といふことに歸着します。そして此の考察から生ずべき必然的結果として、

二、個人の幸福が種族改善の大目的と調和する爲には如何なる方法が發見さるべきか。

といふ事が考へられねばならぬと思ひます。同時に、此の問題は一面から見るとまた婦人問題の根本を取り扱ふことになるだらうと思ひます。

我々の考へ得る結婚の種類は四通りあります。一、一夫一婦。これは云ふまでもなく一人の男に對して一人の女を配する制度。二、多妻。これは一人の男が同時に二人以上の女を妻とするもの。三、多夫これは二人以上の男に共通する妻として女の數が一人なる場合四、多夫多妻。これは二人以上或る與へられたる人數の男に對して、二人以上或る與へられたる人數の女を假定する場合。但し此の第四の場合は亂婚の一種とも見るべきものであつて、嚴密な意味に於て結婚と呼びにくいものでありますから、之を除いて、我々は結婚を三種類として考へて見た方が適當だと思ひます。

多妻の記錄を辿ると非常に古くまで遡ります。そして今日にまで及んで居ります。その行はれてゐる範圍も廣く諸地方に亘つて居ります。『創世記』の傳說に據ると、ヤコブの兄エサウはアダ、アホリバマ及びバスマテの三人の妻と婚し、またヤコブはレア、ラケルの

姉妹を妻とした上に、レアの侍女及びラケルの侍女までも妻として居ました。『列王紀略』の記す所に據るとソロモンは七百人の妻と三百人の妾を有つて居りました。之は例外としても、その子レハボアムは十七人の妻と六十人の妾を有つて居ました。實に當時のヘブリウ民族に於て多妻は當然の制度であつて、『タルマッド法典』さへ之を許してありました。併し正妻の數は四人と制限されてありました。中世に於ても猶太人（歐洲の）は尙ほ多妻を實行して居ました。回教國の猶太人は今日に至るまで之を實行してゐます。『コーラン』の制定する所に依ると、正妻は四人、妾の數は無制限となつて居ます。但し奴隷は同時に二妻以上を有つことを禁ぜられて居ます。古代の埃及人は妻の數について制限される所がなかつたやうであります。下つて波斯も多妻の國でありました。印度の法典にも昔から妻妾の數は制限されてありません。支那と日本も妻妾の國として歷史上著しい部類に屬します。歐洲では、ホメロス時代の希臘に於て屢々妾が妻と同一家屋に棲んだ記錄があります。尤も此處に於ては妻と妾との差別がそれほど著しくなかつたけれど、羅馬に於ては此の差別が明瞭に立てられてありました。チュートン種族の歷史は其の初期に於て多妻の記錄を有つて居ります、殊に北方の諸國に於て。基督教の世界となつても多妻を公認した事實を我々は發見することが出來ます。近世の歐洲は王室に於て尙ほ此の習慣を永く維持してゐるとスペンサーが云つて居ります。聖アウグスチヌスも必ずしも多妻を排斥しない意味を公言して居り、ルッテルも基督は多妻に關し何事も云つてないから余は一人以上の妻を有つことを禁じ得ずと云つて、ヘッセン王フィリップ・ル・アルチが政治上の意味から二人の皇后を有つことを是認して居ります。更にモルモン宗に至つては多妻を以つて神聖なものと信じて居ります。其他未開人の間には此の制度が非常に廣く行はれて居ります。二三の例を擧げれば、フィジーの酋長は皆二十人乃至百人の妻を持ち、北米の未開人中に於ては六人乃至十四人の妻を持つ酋長は普通であり、ロアンゴー

の王は七千人の妻を持つてゐるとさへ稱されて居ります。

此の如く多妻は今尙ほ習慣或は法律に依つて諸地方に行はれてゐることは事實でありますが、更に精密なる考究は我々に次の事實を敎へます。それは多妻が決して一般的に行はれてゐるものでなく、殆ど何處に於ても民族の小部分に限られてゐる、といふことであります。即ち、民族の大部分は皆一妻の制度に依つて支配されてゐることが發見されます。例へば波斯に於ては僅かに人口の百分の二だけが多妻であり、回敎徒（亞細亞、歐羅巴及び阿弗利加の）に於ても百分の九十五以上は確信に依り或は必要上より、一妻であります。暹羅、印度、交趾支那等に於て多妻は公認されてゐるけれども、原則としては皆一妻であり、未開國の或る部分に於ては多妻は唯尊長にのみ實行されて居る所もあります。多くの學者の說の一致する所に依れば、多妻制の中心とも云ふべき阿弗利加に於てすら多妻は寧ろ例外となつて居ります。更に、信用すべき文獻は古代に於ても多妻が例外として行はれてゐたことを我々に推論させるやうに出來てゐると、セッピヒ博士が斷定して居ります、

我々の學び得る所に依ると、多妻は一般に一妻に變化して行く傾向を有つて居ります。その原因としては一、夫が妻の中の或一人（普通初妻）に他より高き地位を與へること、二、夫が交接上より自分を最も多く喜ばせる妻を偏愛すること、此二つを擧げることが出來ます。初妻即正妻と解されてゐる地方は、グリーンランド、スリンケット、北米の未開人種の或る部分、西ヴィクトリア、アオリ、タヒティ、印度群島、支那等、多妻の行はれてゐる土地の大部分などが然うであります。此等の地方に於ては、多妻と云つても其中の一人（初妻）を正妻とすれば他は寧ろ妾と云ふ方が適當かも知れません。例へば支那に就て見るに、支那の多妻は法律の承認する立派な蓄妾であります。法律は初妻の生存中、他の女を妻とすることを禁じてゐます。そして妻は妾に對して或る大なる權力を有つてゐるけれども

妾は許なく妻と同席することさへ出來ません。妻は其の配偶者を呼ぶに郎君と云ふ意味の言葉を用ひるに對し、妾は主人と云ふ言葉を用ひなければなりません。子供の正嫡なるや否やは妻の出であると妾の出であるとに依らず、之を其家に入れる否やに依つて極まります。此點に於ては差別が少ないやうでありますが、妾を上して妻とする時は夫は杖九十を科せられ、反對に妻を下して妾とする時は杖一百を科せられると云ふやうな差別が別に立てられてあります。

ダーウィンに據れば、智利の土人の酋長は其の數妻の一人と一週間づゝ順次に生活する習慣があり、カフヤヤ人中の多妻者は其の妻の一人に對し三日三夜づゝを割きて巡廻し、回敎徒は其の四人の正妻を順次に廻るべき義務があると云ふことであります。又サモアでは一人數妻と婚する場合には、各妻をして三日間づゝの規定で主宰權を交替せしめるさうであります。

此の如く數妻に對して順番に同居同衾する夫の義務は、習慣に依つて一定してゐる所もあれば法律に依つて規定された所もあります。けれども此の制度が果して實際に於て數字的に正格に行はるべきか否かは勿論疑問であります。或る學者の報告に依ると、多妻を實行してゐる印度人の妻の中には數年間交接の機を失つた者さへ少くないとあります。夫に顧られずして終身處女で暮した妻もあると云はれて居ります。アパッチ人の酋長の如きは自分の欲するだけ多くの妻を有ち得るけれども、寵を受くる者は常に必ず一人にきまつてゐると云ひます。レーンと云ふ人が近代の埃及人に關して記したものに依ると、妻の中では最も美なる奴隷が初めは愛されるけれども、多くの場合永く愛されるのは必ずしも最も美なる者でない、と云ひます。また時として最も能く子供を産む者が最も多く愛される例もあります。又亞剌比亞の或る地方に於ては最初の妻が老いて後第二の妻と婚し、第二の妻が無能となりて後更に第三を娶ると云ふが如き習慣もあります。

多妻制度について我々の知り得る今一つの事實は妻の數が二人であることが其の最も普通な場合であると

いふことであります。大抵の地方に於て其以上の多數は富豪若くは權勢者の贅澤であつて、例へばエスキモー人の如きは二妻以上を有つ者は殆どなく、グリーンランド人の如きは著しい多妻制度の民族なるにも拘らず三人以上の妻を有つ事は非難さるゝ習慣があり、又濠洲に於ては同情を以つて友人の妻又は父の妻を保護し、或は相續權に依つて兄弟の寡婦を妻とする場合を除いて二妻以上を有つ者はなく、多妻の傳說を多く殘してゐるヘブリユウ人さへ大概は兩妻であつたといふ說もあります。

　次に反對に多夫に就て調べて見ると、之は多妻より遙かに稀な例を示してゐます。注意すべきは、此の制度に於て夫は大概兄弟同士である場合が多いことであります。統計は亞米利加、阿弗利加及び太洋洲諸島に於て多夫が最も多く行はれてゐることを示して居ます。二三の例を引けば、カナリー島に於ては三人の夫と婚する女は珍しくありません。アレウト群島の一に於て旅行者は時として一人の女が二人以上の男に共有されてゐるのを見る事があるといふ報告もあります。イロコイ人の間では、二人以上の配偶者を有つことが男に許されずして女に許されてあります。之等は女の權利が男のそれより强大なことを實證して居ます。一八六〇年代にサー・ヘンリー・ウォードに依つて禁ぜられるまでは錫蘭島に於て一人の女が三四人乃至六七人の夫を同時に用つことは一般の風俗であつたと云ひます。此等の場合も夫は殆ど皆兄弟でありました。最も奇なる多夫の實例はショート博士に依つて與へられてあります。それはレージー人の間に行はれてゐる奇習で、十六歲乃至二十歲の女が五六歲或は更に幼少なる男兒と結婚し、結婚後或る他の男(母方の近親、多くは伯父時として其の男兒の父)と同棲して其間に生れた子供を彼女の夫(即ち男兒)の子とするのであります。そして其の夫が成人した頃には妻はすでに老境に達して恐らくは子供を産む能力を失つてゐるでありませう。そこで成長した夫は他の幼兒の妻と同棲して其間に出來た子供を其の幼兒の子とするのであります。此の奇異

なる多妻制度の類似は農奴開放以前の露西亜の農民間にも行はれてゐました。即ち父は其の子の幼少なる間その子の妻と同衾する習慣を有つてゐました。我々は尙ほ之と類似の制度を二三の他の未開人種の間に發見することが出來ます。古代の例としてはシーザーは古のブレトン人が十人十二人にて殊に父子兄弟にて一人の女を共有したことを書いてゐます。スカンディナヴィアの神話に於て、フリッガは希臘の神話に於けるヂユーノーの如き地位を有つた女神でありますが、彼女は夫オーディンの留守中、夫の二人の弟ヴィレ及びヴェーと婚して居ります。『リグーヴェダ』の讃美歌の中にも多夫の徵が表はされてあるそうです。『マハバラータ』の中にも五人の王子の中で長兄が弓術に優れてゐた爲めドラウバジを得たところが、此女は兄弟五人の妻になつたといふことが書いてあるそうです。けれどもドラウバジの父は娘の『吠陀』に背く不法行爲に反對したと傳へられてあります。『ラマヤーナ』の中にも於てもラマとタシユマナの兄弟がシタアを共有の妻としてゐたことに對して巨人ビラータの怒を受けてゐます。西藏は恐らくは多夫の最も多く行はれてゐる地方でありませう。けれども多夫は決して唯一の結婚制度になつてゐません。その他前に擧げた亞米利加、阿弗利加、太洋洲及び印度、中央亞細亞到る所に就て調べたものを見ても多夫が(多妻と同じやうに)唯一の制度になつてゐる國はありません。そして多夫も亦多妻と同樣に一夫一婦に赴くべき方向を取つて變化しつゝあります。

多妻の家族に於て初妻が正妻となることが普通である如く、多夫の家族に於ても初夫が正夫となる例が多くあります。カニヤグムト人の中では次夫は夫(正夫)の留守中之に代るけれども、夫の歸宅と同時に奴僕に變化する習慣があります。ラダクに於ても數人の兄弟は一婦を共有するけれども兄に對して弟は常に奴僕の役目を持つと云はれてゐます。亞剌比亞の或る多夫種族中には長兄が家の主宰者であつて、共有の妻は夜は必ず長兄と同臥する習慣があると或る書物に記してあります。西藏に於ても妻の選擇權は長兄に限られ、長

兄のみが子供から父と呼ばれ其の他の弟は叔父と呼ばれることになつて居ります。要するに多夫は、多くの場合に於て數人の兄弟が一人の女を所有するのを通則としますが、習慣はその中の一人(大概は長兄)が本統の意味で夫となり、他は次夫若くは助夫とも云ふべき役目をするやうに變化して行く傾向を示してゐます。

我々は上に述べた所から推論して、多妻は現今多くの地方に於て行はれ、多夫も行はれる範圍は狹いが今尙ほ或る未開種族中に之を發見する事を得るけれども、人類の最も普通なる結婚制度は一夫一婦であつて、多妻も多夫も次第に之に向つて變化を受けつゝある著しい傾向を承認することが出來ます。

而して一夫一婦は人類の最初の時代から我々の最も普通の制度であつた事が歴史と進化論に依つて推定されます。同時に多妻と多夫は古代に於ても常に例外であつたことが推定されます。そこで問題は、何故に此の如き雜多な樣式と變化とが生じるのであるか、といふことに移ります。云ひ換へれば、何故に古代から一夫一婦のみが行はれないで多妻或は多夫制度が行はれたりしてゐるのであるか。又、何故に多妻或は多夫は次第に一夫一婦に變化すべき傾向を示してゐるのであるか。此の事が考へられなければなりません。

外面的より觀察すれば、此の問題はおもに人口問題に依つて解釋されます。極めて大ざつぱな云ひ方をすれば、男女の數が相等しき時は一夫一婦となり、婦人の數が男子の數より多い時は多妻を生じ、之と反對の場合には多夫を生ず、といふことが出來ます。少くとも此は文明の影響を餘り多く受けない民族の間に於て十分に實證されて居ります。(何故に文明國に於ては之が實證されないかといふに、文明は之を妨ぐ可き多くの條件を具備してゐるからであります。その事は後で述べます。)

一夫一婦の自然的根據は、決して多妻或は多夫を傳習的に不德とするからではなく、男と女とが同數に生れたといふ强固なる事實からであることは進化論的見地から容易に承認することが出來ます。だから此の見

方に從へば、結婚制度の日本は倫理問題ではなく、男女人口の比例に依つて生ずべき必然問題であると云ふことが出來ます。併しセルバンの調査に據れば、多夫は主として男子の超過に原因するけれども、多妻は必ずしも人口問題に關係しない。即ち婦人超過にのみ原因しないと云ふ結論を示して居ります。

男子が多妻を欲する理由の一は、一夫一婦の場合には男子は一定の期間に性慾を殺さねばならぬ必要に迫られます。即ち毎月若干の日數間と妻の姙娠中及び分娩後の若干月間の交接中止であります。未開人の間に於ては之が宗教的の意味を附せられて禁止されてゐる處もあり、法律を以つて禁止されてゐる處さへあります。例へばフィージー人中に於ては分娩後三年以内に第二の妊娠を生ずる場合は妻の親戚は夫の行爲を罪惡として責むる習慣があります。多くの人類學者の證明する處に依れば、男子は妻の妊娠中及び哺乳中之と交接する事を避けやうとする本能を有つて居ます。之が未開人の間に於ては常に迷信の形を取つて居ます。

多妻を生ずべき第二の理由は婦人の若さと美しさが常に男子の心に大なる喜悦を與ふる事であります。結婚後若干の年月を經れば婦人の容色は生理的に衰頽に向つて急ぐのに反し、男子は尙ほより長く生活の盛事を續けることが出來ます。支那、朝鮮の如き早婚(且つ妻の方が常に年長者)の國に於ては此の對照が殊に著しく現はれます。勞働といふことも婦人の美を早く奪ひます。從つて未開國の婦人が開化國の婦人に比して早く老衰に見舞はれるのは免れ難き運命であらねばなりません。我々は阿弗利加婦人の愛すべきは十四歳より十八歳までであり、阿刺比亞婦人は十六歳にて既に新鮮を失ふことを告げられて居ります。

人間の變化を求むる好奇心も多妻の他の原因を成して居ります。アンゴラの黑人は斷えず妻を交換してゐます。それに對して或る開化人が責めた時、彼等の答は、人間はいつも同じおかづばかし食べてはゐられないと云ふのでありました。之に關しては、男子が先天

的に放射的であり、婦人が受働的である爲に、結果の豫想に於ても男子に責任の輕微を思はせる點も原因をなして居なければなりません。

種族保存の概念は、男子に二人以上の配偶者を求めしめる有力なる他の根據を與へます。即ち初妻に子供の無い場合を之は意味します。グリーンラントに於て最初の妻が男子に子供を與へない時は彼は當然第二の妻を追加し得る權利を有つてゐる例もあります。印度支那の或地方及びエスキモー種族の或る部落に於ては最初の妻が子供を産み得る時男子は多妻を禁じられてゐます。子供なき妻が自ら夫の爲に第二の妻を擇ぶべき義務を負はされてゐる種族もあります。日本の或る地方に於ても我々は之と類似の習慣を見ることがあります。例へば妻に子供が出來ない爲に妻は他の女(妾)を自分の家に同居させることを寧ろ義務として夫に勸めることがあります。之は種族保存の意味から出たものに相違ありません。未開國の或る民族間では男の子が生れるまで夫は當然の權利として妻の數を幾人でも增し得る習慣もあります。種族保存といふことが極端に强められた一例として我々は斯ういふ話を聞いて居ります。或る尊貴なる家族に於て長子出產の際鉗子を持つた產科醫が萬一の場合には胎兒を安全に出す爲めに母體を殺しても仕方がないといふ秘密なる命令を受けて控へるゐる習慣があるといふことであります。此の場合に於て產婦は一個の道具以上に認められてゐないのであります。

次に生計上の必要より及び權勢上の野心より多妻を實行してゐる種族もあります。前者は多くの妻を勞役者とする場合後者は多くの妻に依つて多くの子供を得る場合、中央阿弗利加の東部に於ては百人の妻を有つても困難せず、否、却つて富を增すと云はれてゐます。それは百人の忠實なる勞働者を養ふことになるからであります。又印度の或る地方に於ては、若し四五人の妻を買ふことが出來たら夫は狩獵を止めて妻を野に働かせた方が却つて以前より安樂に生活することが出來ると云ひます。モドック人は家政の爲に一人の妻、獵

の爲に一人の妻、耕作の爲に一人の妻、と此の如く分業的に多くの妻を所有してゐます。多妻の結果として生ずる多子が未開國に於て重要視されるのは、家族の大といふことが誇であり力であるからであります。フィダの黒人の酋長は二千人の家族を以つて强敵の撃襲を退けたことを名譽としてゐます。北米の印度人の中には最も多くの子供を有つことを選擧の標準にしてゐる部落もあります。

實に男子は有ち得るだけ多くの妻を娶るといふのは人類學の我々に敎へる原則であります。併し此の原則を實現させない多くの障碍物があります。農産の貧弱と漁獵の缺乏とは男子に多くの富を與へないから、隨つて多妻の實行を許しません。例へばパタゴニアに於て二妻以上を有つ者は必ず富裕なる男子に限られてあります。又婦人の勞役が高く値する地方に於て貧民は妻の買入金を拂ひ得ざる爲め一妻に甘んぜねばならぬといふ場合もあります。例へば、ズウル人の中に於て多妻は禁ぜられてはゐないけれども妻を得る爲には多くの動産が支拂はれねばならぬから人は一妻に安んじてゐる、とアイルスは報告してゐます。婦人賣買の最も盛んなのは阿弗利加でありますが、阿弗利加に於て最も多く多妻を妨ぐるものは、妻の父に對して一定の年數間或る勞役に服すべき義務の存在であります。妻の父と同居して其の生活を保證すべき義務は男子をして更により多く多妻を避易させます。

選擇權が婦人に許さるゝ場合に於ては、婦人は自分をよりよく養ひ得る者の配偶者となることを欲する傾があります。AとBの二人の男子が、その他の點に於ては同じ狀態にあるが、富と權力に於てAの方が遙にBに優つてゐる時は、婦人はAを選ぶのが自然であります。此選擇の擴大された結果は、族長が百人乃至數百人の妻を有するに對して賤民は一妻をも得る能はざる如き極端な例を生じます。我々は生活に於て無能なる男子が屢々其の妻に逃げられる事實を告げられます。此の實例は我々自身の社會にも發見することが出來ます。旅行者はアイヌの漁夫の家庭にも見ると云ひ

ます。概して最も多數の妻を所有する者は最も重要な人物であります。少くとも之は未開國の多くに於て事實であります。スペンサーの推論に依れば、多妻は偉大といふことゝ聯想され、其の結果一夫一婦は貧困及び卑賤と聯想され、如何なる地方に於ても多妻は多少階級の優越を表現するものとして受け取られるやうになつて居ます。

多妻を妨ぐる最大の理由は結婚に於ける婦人の地位の向上であります。云ひ換へれば、男子が婦人に對する尊敬の念の多少が間接に結婚の制度を決する原因となることが認められます。婦人は男子より劣等なものであり妻は一種の奴僕であるといふ概念が無くなつて行くに隨つて、多妻制度も消滅して行くべきわけであります。但し、多妻が婦人に利益を與ふる場合に於て婦人は寧ろ多妻主義者となることがあります。例へばフィリッピン群島のバコボ人の間に於ては、又回敎を信ずる東洋の或る地方に於ては、妻の數が多くなるに隨つて一人前の勞役の負擔が少くなるといふ理由と舊婦の地位が重きを加へるといふ理由に依つて、諸妻は新婦を歡迎します。又埃及在住の亞刺比亞人の間に於て妻の役を勤める多くの奴隷女の外に妻専屬の一人の奴隷女(勞役用)を備ふといふ條件で求婚に應ずる婦人が多いといふ事實も同一の傾向を證明して居ります。その他、多妻は久しき以前よりの習慣であるといふ諦らめに依つて、或は之に反抗する時夫に科せらるべき懲戒の恐ろしさに強迫されて多妻を承認する婦人も少くないだらうと推定されます。けれども若しそれ等の條件を除去して考ふれば婦人は多妻を喜ばないのが自然であらねばなりません。何となれば我々は婦人に於て嫉妬を無視することは出來ませんから。丁度、多夫の場合に於て男子の嫉妬が恐ろしく作用すると同じやうに。或るグリーンランドの多妻制度に關する書物の中に我々は婦人は嫉妬の念が強いけれど夫を恐るゝとが甚しい爲め唯だ之を心に思ふだけが彼女等の特權であるといふ意味の記述を見たことがあります。グリーンランドには、女が嫉妬を起すと鯨や馴鹿が國を去ると

いふ諺があります。ダコタに關する或る書物でも、婦人は大概多妻を喜ばないけれど男子に威壓されて我慢してゐる、婦人の或る者は嫉妬の爲め自殺する者があるといふ記事を讀んだことがあります。ウィリャムスといふ宣教師の細君が、太洋洲の或る島で鼻の無い澤山なフィジー婦人を發見して其の中の一人にわけを聞くと、婦人同士の嫉妬の爲め弱い婦人は强い婦人に鼻を削がれ又は嚙み切られるのだと答へたそうであります。又新婦に對する嫉妬から縊死した西印度婦人もあれば自分の子供を抱へてミシシッピィ河へ投身した婦人もあります。其他多くの地誌及び旅行記に依て我々は此種の事實を限りなく知ることが出來ます。ホーバ語に於て「多妻」といふ言葉は「敵(ラフィー)」といふ語源を有つてゐるそうであります。

文明の生んだ道德は男子をして自分より弱い者の感情を重んぜしめます。此の同情が多妻を妨ぐることは少くありません。だから一夫一婦は婦人を重んずることの結果と見ることも出來れば、原因と見ることも出來ます。これは場合に依つて恐らくどちらも眞實であり得ると思ひます。

最後に、戀愛の見地から見て、我々には唯一人を愛する天性のあることを見逃してはなりません。之は多くの心理學者の實證してゐる所であつて、實に之が本能的の多妻主義を一夫一婦化しようと助くる有力なる一原因に相違ありません。そして私の此の小論文の結論を豫知させる點であることを附記して置きます。ダーウィンはその飼養してゐた或る哺乳動物に唯だ一つの配偶者を專愛する事實を發見しました。愛鳥(ラヴバード)(小鸚鵡の一種)は其の連れあひに死に別れると、たとひ新たなる配偶者を與へても必ず後を追うて死んで了ふそうであります。又或る記録に依れば、巴里植物園の有線猴は妻の死が原因して憂鬱病に陥り遂に其屍體を抱いたまゝ絶息したと云ふことであります。南オレゴンの印度人の中では情夫の死に失望した少女が自殺するといふことは稀でなく、バヴァリヤの若き男女の間では煩悶なしには一時間さへ別れてゐられないといふ强

い浪漫的の愛情が屢々示され、タヒティに於ては求婚して斥けられる時は自殺することが珍しくないそうであります。上述の僅かな例に依つても知り得る如く、此の感情は決して開化した民族に限られたものではありません。未開人にも動物にも之を發見することが出來ます。たゞ開化した社會に之がより多く見出されるのは道徳が之を是認奬勵するからであります。

次に我々は多夫について一瞥しなければなりません。ウェスタルマルク教授は多夫の發生も多妻の場合と同じ樣に男子の意志（婦人のでなく）に依るものだと說いて居ります。婦人が多夫を望む事情は元より在り得るけれども、男子の嫉妬の强烈と腕力及び權威の優越は決して婦人をして之を實現させません。多夫の行はれてゐる地方について調べて見ると、殆どすべてそれは男子のみの都合で行はれてゐることを發見するそうであります。

二人以上の男子（多くは兄弟）が一人の妻を共有する場合の一は、家產保存又は分配が理由になつてゐる時であります。戰爭その他の用事で遠征する時に、多夫は兄弟の手に妻を殘すことになるから妻に危難の起る心配が少ないといふ便宜があります。又貧困も男子を驅つて多夫を實行すべく餘儀なくせしめる場合があります。即ち或る種族に於ては妻を養ふべき費用なき爲め、また他の或る種族に於ては妻を買ふべき金の得られざる爲め、次夫若くば助夫として（即ち半ば勞働者として）正夫の家に起臥するの便宜を與へて貰ふ者が少くないと云はれてゐます。けれども前に述べた如く多夫制度を生ずべき直接の原因としては人口問題が影響してゐることは注意すべき現象であります。

我々の記述が此處まで進んで來た序に、私は數字の上で諸國の人口を一瞥して置きたいと思ひます。オットー・ヒュブナー氏の一九〇九年に於ける統計に依ると、全世界人口の總數は十五億六千〇四十四萬人、最近のホヰットカーの年曆表（一九一五年）に依ると、十六億二千〇三百萬人といふ數字を示してゐます。但し阿弗

利加、太洋洲及び兩極地方及び亞細亞の或る地方に於て正確な數字の得られないのは止むを得ざる事であります。一八八〇年と一八九〇年の間に於て五大陸諸國の確實なる材料の存在せる地方のみに就てビュッヘル氏の調査した所に依ると、

總數 793,668,722人
內 399,301,857....男
　 394,366,865....女

之を換算すると男子一〇〇〇人に對する女子九八八人といふことになります。又一九〇〇年獨逸帝國統計局の調査した所に依ると、

總數 838,414,840人
內 420,949,352....男
　 417,465,498....女

即ち男子一〇〇〇人に對する九九二人の女子といふ比例を示してゐます。

更に最近の他の統計に依つて此の男女の差異を五大陸に就て調べたものを千分率に換算すると、次の如き割合を示します。

	男子一〇〇〇人に對する女子の數
歐羅巴	一〇二四
亞米利加	九七三
阿弗利加	九六八
亞細亞	九五八
太洋洲	八五二
(平均)	九八八

之に依つて我々は世界の人口は總計の上に於て男子の分が多く、各大陸に就て見るも歐洲を除く外は皆男子の超過してゐることを知り得ます。次に女子超過の歐洲に就て、二回の統計に依つて男子一人に對する女子の超過數を調べて見ます。

	(一九〇〇年)	(一九一一年)
葡萄牙	一・〇九〇人	一・一〇七人
英吉利	一・〇六三	一・〇六一
西班牙	一・〇六二	
露西亞	一・〇四二	
瑞西	一・〇三五	

墺太利	一・〇三五	一・〇三五
獨逸	一・〇三二	一・〇二六
佛蘭西	一・〇二二	一・〇三三
白耳義	一・〇一三	一・〇一六
匈牙利	一・〇〇九	一・〇一八

但、伊太利、希臘、ルーマニア、ブルガリア及びセルヴキ等は男子超過。

又一九一一年(明治四十四年)に於ける日本の男女別を見るに、

總數　51,646,273人
内　26,076,975....男
　　25,549,311....女

即ち日本は男子一人に對する女子〇・九七一の割に於て男子超過の國であります。

其他出生男女率、死亡男女率を對照して、何れの國に於ても出生に於ては常に男子超過であるが、幼時に於ける死亡率の關係に依つて人口の異動を生じ、或は女子超過國となる事實を知り得ます。此の原因として社會學は種々の事變、例へば戰爭冒險、旅行等に依つて男子の數の減少すること、女兒殺戮の習慣(未開國に於て)に依つて男子超過を生ずること等の徑路を説明してゐます。又生理學及び人類學は出産數の差異(男子超過)を種々の假説の下に説明せんと努めてゐます。例へば多妻が女兒出産の比例を大ならしむと云ふが如き説。或は人種混合が女兒出産數を大ならしむといふが如き説。或は近親相婚が男兒出産數を大ならしむといふが如き説。或は高地に於て男兒出生數が常に女兒出生のそれに超過するといふが如き説。但し此等が特別に專門的研究を要するは云ふまでもありません。

けれども、要するに我々の最も信頼し得るはデューシング博士の人口に適用したる自然淘汰説であらねばなりません。その説に依れば有機體はすべて甚だよく生活狀態に順應(アダプト)し得るやうに出來てゐるから、性(セックス)を造るにも最も必要ある方の性(セックス)を多く造る、といふのであります。即ち氣候がよく産物が豊かな土地では人口が殖えても差支へないから比較的生殖者(即ち女子)の

數が多くなり、反對の狀境に於ては男兒出生數が多くなる、といふわけになります。チューシング博士の例證の中には、或る革商の話として、豐饒の土地には牝皮が多く不毛の土地には牡皮が多いといふことが擧げられてあります。又食物不良の田舍には男兒の出生多く、反對に都會の出生數は比較的女子の多數を示すといふことも確固たる事實として語られてあります。チューシング博士の此の說には尙ほ幾多人種學上の證明もあるけれど結局假說以上のものとして受け取れないものかも知れません。けれども我々は、多夫の行はれてゐる地方が概して皆貧弱な狀態に在るといふ事實の一致を以つて此の說を一層鞏固になし得ます。何となれば前段に於て述べた如く多夫の國は殆ど皆婦人の乏しい國でありますから。

けれども大局の上から見て、我々は世界の男女平均數が一〇〇〇人の男子に對する九八八人の女子といふ手ごろな差異を保つてゐる事實に據つて、一夫一婦が我々の結婚の最も自然的(ナチユラル)な制度であることを安心して信じ得ると思ひます。

私は結婚進化の徑路を今一度內面的に見直す必要を感じます。內面的に結婚を見るといふ意味は、結婚が今日まで如何に理解されて來たかを見ることであります。若し婦人に對する男子の態度といふ言葉を用ふるとすれば、それは結婚に於ける婦人の地位といふのと同義(シノニマス)になります。隨つて私が冒頭に於て、我々の敍述は婦人問題の根柢に觸れるだらうと云ふた意味が同時に明かにされるわけであります。

歷史は古代に於て奪掠婚の存在したことを我々に告げます。之を是認すべき一理由として人類には先天的に近親相婚を喜ばざる傾向があります。他の種族を侵して其の婦女子を奪掠することが極端になつた例としては、古のスカンディナヴィア人の如きは處女を强姦し或は奪掠することのみを目的として絕えず戰爭をしてゐたとオラウス・マグヌスが論證してゐます。希臘に於ては妻を奪掠することは一般に行はれてゐた形迹が殘

つてゐます。之は地方に依つて今日も尙ほ行はれてゐると云ひます。プルタークはスパルタ人が奪掠の儀式を結婚式の主要なる部分に留めてゐたことを我々に告げてゐます。羅馬に於ても有史以前奪掠婚は殆ど一般的であつたらしい遺風を後代まで有つてゐました。例へば花嫁が母の膝掛に縋り付くのを花婿及び其友人等が暴力を以つて捕へ行くといふ風習がそれであります。スラブ人の間にもチュートンの人間にも可なり近代まで掠奪婚の行はれてゐた痕迹があります。未開人種の間には云ふまでもなく盛んに行はれてゐました。今日尙ほ行はれてゐる地方もあれば、過去の遺物としてたゞ儀式に殘つてゐる地方もあります。例へばアラウカニヤ人は見せかけの暴力を以つて花嫁を連れ去る遺風があります。花嫁は實際は夫の意志に從ふことを欲してゐても表面は抵抗を示して力爭するのが名譽とされてゐます。ラプランド、芬蘭（フィンランド）、新（ニユー）ギニア等に於ても此と類似の風俗があります。其の他奪掠婚の形迹は世界中殆ど到る所に認められます。奪掠婚の行はれた今一つの原因としては、女の父に對する賠償を平和的になす可き手段のないことであります。之には又奪掠に伴ふ勇氣の誇りも考へられねばなりません。

花嫁の賠償が平和的になされる場合に我々は交易婚或は賣買婚の成立を見ます。大洋洲の或る種族の中では、兄弟（既婚者）が死亡してその妻（一人或は數人）を得る時、自分の姉妹と交換するのが通則になつてゐます。そして或る時期を經れば自分の妻をもまた他人の妻と交換することがあります。阿弗利加、亞細亞及び印度諸群島の未開人中では妻を貰ふ代償として勞力を妻の父に拂ふ習慣が廣く行はれてゐます。金品を妻の代償として其の女の所有者に支拂ふ時は、地方に依つて價格に色々の相違があります。英領コロンビヤ及び晩香坡に於ては二十磅乃至四十磅を以つて花嫁を買ふことが出來ます。オレゴンの印度人は馬、毛布等を代償として妻を求めます。カリフォルニアのシャスチカ人の間では最も美しき少女に對する價格は十頭乃至十二頭の小馬ときまつてゐます。同州のカロク人の間で

は普通の少女ならば角貝半本を以つて、又美しくしてパンを製し、籠を造り得る少女に對しては二本を拂はねば手に入れることが出來ないとされてゐます。阿弗利加に於ての相場は、例へばウガンダに於ては牡牛三四頭或は縫針六本或は雷管の小箱一個を以つて妻を求められます。或る英國の宣教師(?)は一枚の上衣或は一足の靴で少女を買つて呉れと土人に申込まれたことを記してゐます。バシュキル人の貧なる者は時として材木一車又は枯草一山を以つて妻を買ふことさへあると云ひます。古代に於てはアリストテレエスが希臘に妻の賣買の習慣のあつたことを我々に告げてゐます。妻の賣買はホメロス時代の希臘に於ても行はれてゐた實證があります。トラキア人が賣買に依つて妻と婚したことはヘロドッスが語つてゐます。古代のスカンディナヴィア人は神さへ妻を買つたと信じてゐました。聖書の中にも我々は妻が金で買はれたことを發見し得ます。(『路得記』『何西阿書』)チュートン人の祖先も皆妻を買つてゐました。此の風俗は古代の東洋に於ても存在してゐた形迹があります。そして奪掠婚より遙かに一般的であつたことが認められます。

たゞ我々の注意を要するは、奪掠婚と云ひ、交易婚或は賣買婚と云ひ、古代に於て(稀に現代に於ても)廣く行はれた(又行はれつゝある)とは云へ、各人種が皆今日の結婚制度に到達するまでに必ず經驗した階段であつたと云ふ證據は無いのであります。我々は今日諸國の多くの結婚の契約方法及び儀式に於て尚ほ此の野蠻なる遺風を見ることが出來ます。例へば我々の社會に行はれる結納なるものは古代の賣買婚の形式の保存であり、又之と類似のものを諸外國に認めることも出來ます。

考へて見ると人類の歴史は男子の暴虐史でありました。長い間の——誠に長い間の男子の壓抑暴威は、女子の卑小微弱といふ概念を我々に與へるやうな習慣を造つて居ります。此の習慣は、婦人が男子の所有物であり又一種の奴隷であることを、男子に敎へました。そして婦人自身にも承認させました。自然は不道徳な

ものだと云ひますが、我々の文明の立場から見れば或る部分に對してそれは云ひ得ることに相違ありません。

メーリー・ウォルストンクラフトが『女權擁護論』を書いて、婦人は男子の所有物でないと叫んでから、もう百二十七年になります。イプセンが『人形の家』を發表したのは三十七年前であります。けれどもモーゼの第十戒は尚ほ到る處の教會の壁に貼られてあります。之には妻が奴僕牛馬及び其他の動産と同等に見られてゐます。(『出埃及記』第二十章)。ショオは英國の結婚の眞の根柢を爲すものは今以つて此のモーゼの第十戒であると云つて居ります。而して他日婦人が、自分達をその動産の一つと認めてゐる男子の家に入ることを拒む時が來なければ、此の訓戒は教會の壁から取り除かれることにならないだらうと云つて居ります。

婦人が、自分等の地位の不當に取り扱はれてゐることに氣付いたのは、彼等が知識を得た結果であります。幾多の小ウォルストンクラフト女史は男子に向つて宣戰を布告しました。そして因襲の殼を破るべく有らゆる力を振り絞りました。目的は凡ての點に於て男子と同等になりたいといふ欲求でありました。斯くして婦人解放は世界の輿論となりました。今日に於て婦人が男子と同等であるべきものだといふことを、理論として認め得ないものはあるまいと思はれます。けれども事實は必ずしも理論と一致するものでありません。結婚に於て、家庭に於て、(社會に於ては云ふまでもなく)、婦人は尚ほ小さく見られてゐます。一面から見れば之は因襲的思想が男子の頭を去らないことにも依るのでありませうが、一面に於ては婦人自ら其の責任を負ふべき理由もあると思ひます。

バーナード・ショオは例の面白い云ひ方で次のやうなことを云つて居ります。性（セックス）といふ點から見れば、「婦人」は自分の最高の効績(即ち人間製造)を永續させる爲に「自然」に依つて發明されたものであり、その「自然」の命令を最も經濟的な方法で「婦人」に遂行させる爲に造られたのが「男子」であります。併し「婦人」を妊

娠させるだけが唯一の役目であるやうな人間(即ち「男子」)を發明したといふことは、考へて見ると、婦人にとつて何といふ無謀な危險な企であつたでせう。「婦人」が妊娠と分娩といふ精根の盡きる仕事を「男子」に免じてやつた爲に、「男子」の精力は頭腦と筋肉に入つて了ひました。其結果、知識と腕力を得たのであります。いつの間にか「婦人」は「男子」の敵でなくなつて了つたのであります。「男子」は「婦人」に相談なく文明を造つて了つたのであります。之がショオの言葉であります。

そして近代の婦人問題は男子の造つた此の文明に對する反抗に外なりません。婦人は聲を限りに解放を叫びました。その解放に依つて婦人は何物を得たでありませうか。結果はたゞ僅かの選擧權を得たのみであると露西亞生れの或る米國の有名な婦人運動者が絶望的に云つて居ります。(尤も之は米國の狀態について云つたのであります。其他の國については此れ丈けの効果をさへ得られません。)

そこで聰明な婦人たち(エレン・ケイも其の一人)は、徒らに外面的に爭ふことを中止して、靜かに內面の省察に耽りました。これは誠に賢明な努力と云はねばなりません。そして彼等は廣大無邊なる自由の世界を其處に發見しました。つい先刻(さつき)までは忘られてゐた道に依つて、自由の世界に到達すべきことに氣付きました。道といふのは即ち戀愛であります。戀愛に依つて先づ結婚が改められねばならぬ。結婚から、性的奴隷制度の遺物を悉く拭ひ去つて、其處に美しき自由を來らせるといふのであります。云ひ換へれば、結婚は愛に依つてのみ存在價値を有ち得べきだといふのであります。エレン・ケイは彼女の『戀愛と結婚』に於て、一方では種族の改善に對する要求を認めると同時に、他の一方では愛の生活に依つて幸福を得んとする個人の欲求の增加を認め、此の兩者を對立せしめて其間に適當な平衡を發見しやうと努めて居ります。そして此の新しき平衡から出發する性(セックス)の道德が、即ち眞實にして且つ唯一なるが我々の道德であらねばならぬ、と斷定して居

ります。個人と種族が此の影響を受ける時に人生は向上改善されるのであると彼女は解釋して居ります。――そして少くとも此の斷定が我々の進路を敎へる一の指示標であることは拒むことを得ません。此の瑞典のブルウ・ストッキングか戀愛を以つて人生の宗敎と名づけたのは意味深いことだと思ひます。

けれどもエレン・ケイの議論はどこまでも婦人としての彼女の立場に於てのみ是認さる可き論理を中心にしてゐます。即ち長く虐げられたる性（セックス）の一員として、彼女の味方の爲めに最善の道を發見したものであつて對象は人類の全體の爲と云ふことになつてはゐるけれども、其實、女性全體の爲に云つて居るのであります。何となれば男子には戀愛と同等に必要なる他の仕事（例へば文明建設）がある筈であるにも拘らず、それは實際に於て閑却されてゐるからであります。併しながら私が此の文章の冒頭に於て述べた戀愛と結婚と全く別々の二つのものを結合して我々の幸福を增進しやうと企てた見識と努力に對しては感謝しなければなりません。

我々が戀愛に立脚した結婚を重大視するやうになれば、云ふまでもなく一夫一婦以外の他の制度は存在の價値を失つて來るわけであります。けれども戀愛には期間の限られる場合が多いことを豫想しなければなりません。戀愛の止まつた場合は結婚は如何になるべきか、といふ問題が生じます。云ふまでもなく其の時は結婚は中止されなければなりません。更に適切に云へば、結婚の契約は解除されなければなりません。それは配合者の一方のみに依つて申し出されても解除さるべきものであるだらうか、といふ問題が同時に起ります。勿論解除されなければなりません。此の點から見る時今日の離婚法は決して完全と云ふことは出來ないと思ひます。（尚ほ之に附隨する諸問題――例へば子供の處分法の如き――は此の問題の解決に依つて容易に定めらるべきものと思はれます。）

私は非常に不完全ながら私の述べやうとする意見の輪廓だけは述べ得たつもりであります。今、振り返つ

て我々の社會に行はれてゐる結婚を見ます。我々の多くは一夫一婦といふ最も便宜な最も自然な形式を取つてゐるにも拘らず、其の内容に於て果して自由があり戀愛があるでせうか。そして相互の理解と認容があるでせうか。少くとも私の考へでは、それはまだ遙かに遠い境地であることを思ひです。個人の幸福と種族の改善に向つて自由な高尚な戀愛的生活を行き亘らせるまでには、我々の社會は尚ほ幾多の經驗と努力を要することだらうと思はれます。

支那近時の帝政論

京都法科大學助教授　矢野仁一

一

近頃支那に於て現在の民主國體を變更して君主國體を樹立し、國是の根本を鞏固にし、國家永遠の治安を籌るべしと云ふ議論が唱道され一時支那の政界に非常な反響を生じ民心も少からず攪亂された樣である、それにつけて一番迷惑を被つたものは日本で、外國人や支那人の中に若しさう云ふ議論が實行されて、大總統が皇帝になると云ふことになれば、必ず一騒動は免れない、今日歐羅巴の大亂で、世界各國は他を顧みる暇が無い時に乘じて、日本獨り其野心を逞うするを得ることゝなり、危險千萬であると云ふことを、本當に信じたのか、爲めにする所あつたのか、何れかは分らぬが、議論するものがあつたのである、支那の民心動搖は支那自ら作つた原因から、支那自ら招いだ結果で、誰を怨み樣もないが、何も關係のない日本までが引合に出されて、野心呼ばはりをさるゝのは、近頃以て迷

惑の至りと云はなければならぬ。

何時でも支那に一問題が起る毎に、日本の野心と云ふことは、外國人並に支那人の猜疑を惹起す樣な傾きがある、日本は支那に對して果してどう云ふ野心を抱き、支那の騷亂に乘じて何事をなさんとするものであるか此機會に於て第一に考へて見る必要がある。

一體日本が支那の騷亂を利用するとか、支那の革命に乘じて野心を逞うするとか云ふことは、どう云ふ意味であるか、と云ふに、支那の騷亂に乘じて、露西亞が義和團の亂に乘じて滿洲を占領した樣に、事實上或地方を占領するとか、或特殊の利益を獲得するとか、或は騷亂中特に日本の利益となる支那人を助けて、それをして特殊の利益權利を讓與せしむるとか云ふことより外には考へられない、然しさう云ふことは、どれ程日本の利益であらうか、日本國民の永遠の利益は、どこ迄も支那全國を日本の經濟上の活動範圍とすると云ふことに依て求めなければならぬ、日本に必要な農業品工業の原料品を自由に支那全體から買入れ、工業品を自由に支那全體に賣込むことの出來る樣な地位を確保するにある、滿洲とか蒙古とか云ふ一地方を限て、其處へ特殊の地位を作ると云ふことは、決して日本の進で已まざる經濟の發達と一致する政策ではない、尤も今日の樣に各國が支那の各地方に於て、鐵道政策を實行し、勢力範圍を維持して居る以上は、日本も滿洲なり東蒙古なりに、それ相當な特殊の利益を獲得し、之を維持すると云ふことも、已むを得ないことであるが、然しかう云ふ經濟上の分割の形勢を此上に進めると云ふことは、日本から進ではしたくないのである、先頃の日支交涉に就ても、日本の成功とか失敗とか、區々の議論はあつたが、それは滿洲に於ける日本の地位を鞏固にしたと云ふことに就ては疑がない、然しそれだから成功とは云はれない、それが爲めに支那全國を日本の經濟上の活動の範圍とすると云ふ高遠な政略を犧牲にした點はないか、外國をして日本の滿洲に於ける特殊の地位を承認せしむる爲めに、他の地方に於ける外國の特殊の地位を、代りに承認して、經濟上支

那に於ける日本の活動の範圍を自ら制限した樣な事實はないか、對支外交の成敗は此點より批評しなければならないのである、何も滿洲や蒙古に特殊の利益を得たと云て、經濟上他の地方を日本の活動に閉鎖する樣なことでは、外交の成功と云ふことは出來ない、日本の支那に對する方針はどうしてゝ支那全體の政治上の保全は固より、經濟上の保全と云ふことを眼目としなければならぬ、經濟上支那に於ける各國分割の勢を此上促進する樣な機會を作る政略を、日本自ら執ると云ふことは、決して日本の利益でない、日本の利益は支那の保全と平和と繁榮との中に於て、之を求むべきであつて、支那の騷亂を利用し、支那人の感情を害し、各國の嫉妬を顧みず、一時の利益を圖る樣な短見陰險な政略は、眞に日本の利益となるものではない、多數の日本人の中には支那の騷亂を以て日本の利益である如く誤解し、之を喜び若くは之を煽動する樣なものが、たまにはあるかも知れない、それ等が原因となつて、外國人並に支那人をして、日本の野心を疑はしむる樣なことになるとすれば、これはどうしてもさう云ふ日本人の誤解を解き、そんな詰らない考を止めさせる樣にして、支那の平和、保全、繁榮は日本の利益である、日本は支那の平和を希望こそすれ、騷亂を希ふものでないと云ふことを支那人並に外國人に徹底せしむる樣にすると云ふことは、必要な事であつて、これは宜しく外務省の務むべき所で、何もかう云ふ方針までゝ秘密にする必要はないのである。

二

列國對峙の今日に於ては何を差措ても、一國の平和を圖らなければならぬ、平和であつて始めて國が秩序ある進步發達を期し、列國と競爭も出來る譯である、支那の平和は支那の最要務で、支那が自ら之を圖るに於て、日本は之を妨げざるのみならず進で之を助くべきである。

所で今日の樣な民主政治で果して支那の永遠の平和を望むことが出來るであらうか、清朝の遺臣勞乃宣が共和續解と云ふ文を作て袁世凱の反省を促したことが

あるが、其中に民主政治は中國數千年相傳の國粹、立國の大本たる綱常名教を無視するものである、軍隊は當軸の爲す所を見て、其尤に効ふことになるであらう、人々皆上を犯し亂を作すの想を抱く樣になれば、六朝五代の時よりも甚しき亂世となり、百餘年や數十年ではなかなか平和を見ることが出來ないであらうと云て居る、民主政治では果して勞乃宣の云ふ樣に到底支那の平和を望むことが出來ないものであらうか、民主政治を變更して君主政治にすれば果して籌安會の考へて居る樣に國家永遠の治安を望むことが出來るであらうか、これは餘程重大な問題で、籌安會の計畫は一時頓挫しても、此問題は今後の問題として殘り、必ず將來も屢々支那の政界を攪亂することであらう、一體支那の古代に於て民意天命の思想があつたことは明かなことであるが、然しそれは西洋の民權自由の思想とは全く違て、人民自ら政權を要求する思想ではない、だから此思想は君主政治を、民意に反すると云て推翻し破壞する勢力にはなつたが、民主共和の政治を建設する勢力とはならなかつたのである、支那には遂りに民意に名を托する專制君主政治の興亡を見たが、決して共和政治は起らなかつたのである、かう云ふ歷史は支那に於て如何なる政體が要求せらるゝかと云ふことを決する何よりの根據である、如何なる時代にも不平家若くは理想家と云ふものがある、さう云ふ不平家は、さう云ふ不平家の殘して置いた物を、本の上で研究して、民主は支那の國民思想であるなどゝ云ても、それは何等の權威もないのである、だから支那に於て最も適當した政體は何であるかと云はゞ、それは民意に依るか、民意に名を托する所の專制君主政體であると云ふことは、歷史の證據に依て斷言することが出來るものである、然しかう云ふ政體は何時でも實力若くは實力より生ずる所の威嚴に依り、又常に民意に反すると云ふ名義を、天下の變を思ふ所謂梟雄跋扈の人に藉さゞる樣な仁政を布き詰めに布て、之を維持しなければならないのであるが、さう云ふことは餘程六かしい、淸朝初代の君主は隨分之が爲めに苦心して、實力を養ひ、威

嚴を維持し、仁政を布く爲めに比較的よい方法を立てたが、矢張り長續きはしない、何時でも仁政を布かなければならないと云ふことになると、偶々仁政を布かないと、不平が起る、淸末六七十年以來、淸朝の實力を代表する滿洲人の無力が漸く暴露せらるゝ様になると、漢人を滿洲人と區別し之に對して滿洲人の威嚴を維持し様とした政略は漢人に不平の口實を與へると云ふことになり、それが又民意を失ふの本になつたのである、淸末になり民心を回復するが爲めに立憲政治を約束したのはよいが、立憲の準備と稱して、九年を充てた様なことは、隨分愚な話で、九年の間に毎年辦理することゝ定めた所謂準備事項と云ふものは、立憲準備の事項と云ふよりは、寧ろ立憲政治の目的或は結果と云ふべきもので、かう云ふ事項を辦理し善政を期するが爲めにこそ、立憲政治が必要な譯で、それが立憲政治を實行しない前に一切辦理されて仕舞ふ様なことであれば、何も立憲政治の必要がないと云てもよい位のものである、立憲政治を約束した以上は、直に之を實行して、天下の耳目を一新し、滿漢權衡の政綱を改紘も張して、天下の機を思ふ輩をして乘ずべき機會を失はしむべきが當然であるのに、立憲を約束しながら、實行を九年の後に延期したから、政府は實際に立憲を實行する考はない、人民を瞞着するに過ぎないと云ふ様な不平の聲を天下に漲らしむる原因となつた、さう云ふ譯で、淸朝は滅びたのである、だから淸朝の滅びたのは民意を失た爲めもあるが、民意を失た様な觀を天下に示し、革命黨に乘ずる機會を與へたと云ふ點も一つはあるのである。

然しそれは淸朝の滅びた原因で、民主共和政治の起つた原因ではない、支那に於て歷史に前例の無い民主共和政治の起つたと云ふことは、實に不思議な現象で、歷史家の説の分るゝ所であるが、之を古來民主共和の思想が支那にあつたから起つた、詰り支那の國民思想に基くものゝ様に解釋するのは、正當の解釋ではない、淸朝の君主政治は民意を失ひ、若くは民意を失た様に見えた爲め、革命黨に口實を與へた、然し革命黨には

之に代り、民意に依り、若くは民意に托して、權力を行はんとする所の偉大なる中心人物がなかつたから、革命は起して見ても、清朝を力の上で滅ぼすことが出來なかつた、外國の干渉を恐るゝと云ふ考もあつたが、終に妥協しなければならぬことゝなつた、其妥協の形式が即ち共和で、何も共和民主の政治が、深く國民の民主思想に根柢を持て、其要求に基いて起つたものでも何でもないのである、元々滿洲政府を排斥しようと云ふ革命黨が、中途から自分の力の弱い事を知り、說を變じて五族共和と云ふことで、妥協した結果が共和であるから、共和は民主共和の共和でなく、五族共和の共和で、適々世界に例ある民主共和の政治を藉て之に符合したまでである、だから此共和政治と云ふものは、妥協の結果、仕樣ことなしに落着いた政治の形式で、其内部に力も何もない、云はゞ骨無しが立つて居る樣なものである。歷史の眼から見ると、これは當分民意に依つて實權を行ふ專制君主の出現を待つ迄の間の、一時過渡の變態政治であると云てよいのである。

三

抑も民主共和の政治は主權者の選擧を要素とするものである、此主權者の選擧が平和の間に行はるゝと云ふことは、民主共和の政治が其國に適するか、適せぬかと云ふことを決する一番大切な點で、これが行はれなければ、其國は民主政治に適しない國であると云て差支ないのである、これが餘程六かしい所であつて、人民に民主政治を希望する熱心なる要求があり、又多數の人民の希望であれば、自分は反對でも、之に服從すると云ふ卓越したる政治上の道德心がなければ、到底行はるべきものではない、支那の樣な國民の平和な政治生活と云ふものが未だ成立つて居らず、從て高遠開明の理想に依て、之を指導すべき卓越した政治家も見はれて居らず、徒に無主義無節操な軍警界の威脅、或は黑幕より之を操縦する權謀家の跋扈跳梁に任せて居る樣な今日の政治狀態に於て、果してこれが行はるべきか否かと云ふことは殆ど答へるまでもない事である、これが支那に於て到底共和政治と云ふものは不適

當であると云ふ何よりい根據である、中華民國の危機は梁啓超も言て居る通り今の大總統の一代ではなく、第二期大總統の選擧の時である、今の民主政治は前にも述べた樣に、元々國民の要求に出でたものでゎなく、國民の自覺に基いて居るものでもなく、全く內部の力を持て居ない敗絮同樣のものであるから、之を此儘に放任すると、次の大總統の選擧の時になつて、此共和政治は一溜りもなく一掃せられ、清朝末の革命の時とは違て、妥協にも妥協の仕樣がない樣な、天下の大騷亂となることは何人にも想像されることで、從來の歷史によると、此中から英雄が崛起し、群雄を剿滅し、こゝに始めて力ある所の君主政治を建設すると云ふ順序であるが、それが一二三年で濟めばよいけれども、一旦鼎沸糜亂の有樣に陷ると、中々さう容易に事が運ぶものではない、其中に外國の干涉を惹起さぬと限らない、これは實に支那存亡の關する大事件である、かう云ふ民主政治の前途に横はる危險を豫想し、之を未然に防ぎ、支那の永遠の平和を維持するには、今の中に民主政治を改めて、君主政治とするより外にないと云ふことを創唱したグットナウ博士の意見は此點に於て支那人よりも支那の事に就て深く憂慮したものと云はなければならぬ、グッドナウ博士の創唱し、籌安會の主張した國體變更論が、非常な反響を生じ、天下を動かす樣になつたのは、支那人が獨逸の軍國主義にかぶれて、君主政治に依て、軍國主義を實行すれば、國が直に富强になると云ふ樣な謬想を抱き、之に雷同した結果であると云ふことであるが、グッドナウ博士の君主政治を創唱した考は、そんな輕薄な考によるものではない、君主政治に非んば民主政治の前途に横はる危險を防ぎ、國家永遠の平和繁榮を望むことが出來ないと云ふ非常に深い眞面目な考に出でたものであることは明かである、支那の今日はそんな軍國主義などを夢みて居るべき時ではない。

そこで民主政治を變じて君主政治とするに非ざれば、支那永遠の治安を望むことが出來ない、國力の平和な進步發達を圖るべき根本も立たないことは明かで

あるが、然し民主政治を變じて君主政治にすると云ふことは果してグッドナウ博士の期待し、籌安會の考へる樣に、さう容易に衽席の間に決すべきことであるかと云ふに、それは中々困難である、姚啓超が共和の勢ひ亡國ならざる能はざるを知て、籌安會の主張に反對したのも此點からの樣である、

今日支那に於て大總統を取卷いて居る人々は何と考へて居るものか、たゞ中央集權主義の憲法を修飾し、大總統の權力を强くするを以て能事として居る樣であるが、これは既に民主政治の精神と背馳するもので、成程今の大總統の一代は之に依て平和統一を維持することが出來るかも知れぬが、それだけ次の大總統の無事に選擧せらるゝことを困難ならしめ、民主政治の危險を大ならしむるものである、彼等は或は大總統の權力を强くし、漸を以て君主政治に移すの準備をなしつゝある者であるかも知れぬが、若しさうであるとすれば、是亦彼等の見當違で、憲法上の權力、紙の上の權力は決して君主政治を打建て之を擁護する實力とはならないのである。

然し支那の歷史は司馬昭をも容認し、曹操をも容認して居るから、大總統を取卷いて居る人々にして、取るべき道を誤らなかつたならば、必ずしも平和の方法に依り民主政治を變じて君主政治となすことが絕對に出來ないと云ふことはない、それは外でもない、憲法論に重きを置かず、實政を務めて、平和の功業を完成せしむるにある、吏治を嚴肅にし、稅制を改良し、警察裁判の制度を改正し、農業林業を盛にする樣な、支那の歷代棄てゝ顧みず、若くは企てゝ成らなかつた樣な事業を成功せしめ、官吏の中絕捂克の弊を除き、人民の生命財產の安固を保障し、赫々たる平和の功德を天下に示すにある、大總統を取卷いて居る人々の當に勤むべき所であらう。

長田幹彦著

自殺者の手記

（定價六拾錢　郵税六錢）

本篇は著者が自殺せる一青年より送られたる手記を基礎とし想を構へしものにて最近文壇評壇に於てその細緻辛辣なる敍路と恐怖悲哀に充てる人生觀を以てかばかり多大の注意と同情とを惹起せるものなしと云ふも敢て過言ならず。死に就かんとする者の悲壯なる心境、救はれざる靈魂の絕叫、歔欷字句の間に躍動し自殺せんと欲するものは之に依りて慰藉を求め人生の歸趣に對する暗示を享くべく、又思想家、經世家、敎育家は之に依りて青年の心理の趣く處を洞察闡明し速に解決救濟の道を講ず可く本篇の價値は諸種の立脚點より最も高く評價せらる可きものなりとす。卷末に『自殺せる青年』と『蕩兒』の二篇を添ふ。

蘆花　德富健次郎著

黑い目と茶色の目

第十七版

（定價壹圓廿錢　郵税拾貳錢）

十九の夏から二十の冬まで著者青春の生活を如實に現出す。夢の如く起り而して著者の半生に大打擊を與へた、初戀の挿話が大部分を占む。懺悔の一片また「新思出の記」の一部。從來さまぐ〜の形を以て著者を愛しくれた、四圍四周の生命に對しこれ迄の水臭い態度をよして更に露骨に而して深刻に愛を酬いたい心から著者は新しい企畫の手始めに先づ此れを書いた「著者白」

蘆花　德富健次郎著

定價壹圓◎郵税八錢

縮刷
訂正

みゝずのたはこと

五十七版

武藏の孤村に鍬をとれる著者が折に觸れ興に乘じて筆を走らせし即興のスケツチ短篇小說、瞑想、書翰、紀行等を集む。清新なる田園の小景詩化せられたる敎訓、涙を含む笑に充てる物語、有象より無象に通ふ神秘の暗示平淡の中戰慄すべき恐しき說話卷中に充滿す。

◎發行所　東京銀座大通新橋際（振替東京二〇〇番）新橋堂
同日本橋區吳服町八（同　二〇七七六番）服部書店

發賣元　東京市銀座通新橋際　電話新橋一九九一番　振替東京二〇〇番　新橋堂

家庭醫學叢書と體力養成叢書

- お產の話　吾妻醫學博士述
- 小兒病の話　唐澤醫學博士述
- 耳鼻咽喉病の話　千葉醫學博士述
- 神經衰弱の話　山田醫學博士述
- 肺結核の話　額田醫學博士述
- 皮膚病の話　岡村醫學博士述
- 婦人病の話　佐藤醫學士述
- 淋病の話　廣川醫學博士述
- 黴毒の話　佐藤病院長述
- 肛門病の話　森肛門病院長述

以上（定價各册十五錢　郵税各册二錢）
（以下順次刊行）

家庭に衞生思想、醫事思想を普及せしめんが爲め本叢書を發行す家庭の人皆衞生思想、醫事思想あらば多くの場合病を未然に防ぎ得可べし若し不幸にして病に犯さるゝ事あるも發病當時に於ける簡易の手當は克く病を大事に至らずして快復し得べく又病勢の進行する事あるも各人よく病の性質を知り醫療を受けて養生怠らざれば一定の經過を經て本復疑ひなし。

- 冷水浴と冷水摩擦　大澤醫學博士述　價二十錢稅四錢
- 腹式呼吸　二木醫學博士述　價廿五錢稅四錢
- 海水浴　栗本醫學博士述　價廿五錢稅四錢
- 滋養物の攝取　樫田醫學士述　價五十錢稅六錢
- 深呼吸　遠山醫學博士述　價廿五錢稅四錢

（以下順次刊行）

國健康を增進せよ、身體の强壯を計れ今や體力養成の絕好季

發行所　東京銀座大通新橋際　振替東京二〇〇番　新橋堂

〇大賣捌所　東京神田表神保町（振替東京二七〇番）東京堂

（中付一の一）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

清秋良夜の佳伴

■東京帝國大學法科大學教授 法學博士 吉野作造先生著 ＝地圖と索引添附

歐洲動乱史論

□菊判洋布製 定價壹圓八拾錢 □郵税金拾貳錢

リンゼ・ラッセル編… ■正岡猶一先生譯

米國より日本へ

＝最新刊＝

寫眞肖像廿六枚

（定價壹圓 郵税金八錢）

四六判洋布製

戰爭か平和か。日米の將來果して奈何。日本の有志茲に見る所あり、曩に、英文「日本より米國へ」を編して之を米國に贈る。紐育日本協會は之に酬ゆるが爲めに、有力なる米人數十名の意見を蒐めて更らに「米國より日本へ」を編む。本書は即ち是れ也。國交の基礎は相互の諒解にあり。此書の如きは、其最も必要なる秋に於て著はされたるものと謂ふべく、書中ローズヴェルト、ブライアン、エリオット、ゲーリー、ショウ、ホルト、メービー等の名は既に日本人の耳に熟す。其他數十名士は、抑〻何物を語らむとするか。

肺結核征戰策

湊病院長ドクトル 湊謙治先生著

■定價四十錢 ■郵税四錢

發兌 東京京橋尾張町 警醒社書店 振替東京五五參番

（中付一の三）

信用なき各店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

（中付　一の三）

兵器に關する刻下の諸問題

工學博士 子爵 大河内正敏

今度の戰爭に於て各國の最も痛切に學んだ事は、新式の兵器が戰場に現はれたと云ふ事よりは、兵器彈藥の供給困難と云ふ問題である。獨逸の四十二珊の大砲であるとか、或は飛行機、飛行船より落す爆彈であるとか、或は又有毒瓦斯の使用とか云ふ事は、それ程突飛な今迄世の中に知られなかつたと云ふ武器では無いのである。大砲の大いさから云つても、それより大きな大砲は三百年も前から出來て居る。有毒瓦斯を使ふと云ふ事も昔の科學者がやつて居つたし、又使はれた事もあるから、要するに我々の想像以外のものが出たと云ふ事は無い。然しながら兵器製造――即ち兵器の供給困難と云ふ事は實は各國がそれ程深く考へてゐなかつたらうと思ふ。今迄の戰爭の歷史を調べて見ると彈藥の消費量は非常な勢を以て增して居る。例へば一八七〇年の普佛戰爭の時には一番多く擊つた大砲のレコードが同年八月十六日に一日かゝつて二十六發しか擊てなかつた。それが日露戰爭の時には沙河戰で露國の大砲が一日五百二十二發を擊つたのがある。僅か三十年で以て、それ位に彈藥の消費量が增した。けれども更に次に來る戰に於てどれ程の割合で增すかは平時には豫想が餘程困難である。從つて何時も誤算がある。例へば日露戰爭の時南山の戰に費した野砲彈は殆んど戰爭の初めに想像して居つた一年間の彈藥の消費量と同額のものに達した。即ち一年間位持ち耐へることが出來ると思つたものが只一戰爭で費つて了つた。それと同じく今度の戰爭でも各國皆誤算があつた。誤算と云ふよりも寧ろ想像が出來なかつたと云つた方が適切である。と云ふのは其原因を追究すると確かに各

國の造兵家の方にも罪がある。何故かと云へば從來兵器を改良すると云ふ事について、先づ第一に考へた事は一分間に一發でも多く彈丸を撃つと云ふ事であつた。詰り兵器改良の第一目的は彈丸を多く撃てる、同じ時間で多く彈丸を撃てると云ふ事であつたが、之は確かに自分の國の工業力を顧慮しないで、只兵器其物ばかりを考に入れて居つた誤りである。此點から考ふると云ふと、歐洲各國が十數年前に自分の國の野砲を改良して所謂砲身長後座式を採用したと云ふ事は、或意味に於ては無謀の擧であつたと云はなければならぬ。何故かと云ふと、此式は從來の野砲に比ぶると殆んど五倍以上に發射速度を増して居る。それであるから折角精鋭の大砲が出來ても其大砲の發射する彈藥が自國の工業力で供給し得るや否やと云ふ事は、實は十分の調査がついて居なかつたと思ふ。故に今後兵器の改良方針は命中の精度を第一とし使用に堪へる時日を増す事を第二とし發射速度を第三位とする事が必要ではあるまいか。之はほんの一例であるが、其外すべて精鋭な武器と云ふものは、只同じ時間に多量の彈丸を發射すること〻が出來ると云ふ事が殆と主眼となつて居る。それ故に殆んど日進月歩の勢で兵器が改良さるればされる程、彈藥消費量が増して來る譯である。そこで今度の如き、殆んど前古未曾有の大戰になつては、各國皆何れも豫想以外に彈藥の不足に困んで居る。例へば佛蘭西の如きは國内の全工業力を使つても一門の野砲に對して一日の彈丸製造力が二十發から三十發の間であり、獨逸の如きも恐らく四十發から五十發以上にはなるまいと思はれる。而して其野砲が激戰となると云ふと、一分間に二十發撃てるからして到底彈丸の製造力が間に合はない。而して露西亞の如きは其供給力が最も不足して居る。若し假りに日本が聯合軍側に附かなくて、萬一浦鹽を封鎖すると云ふような事があつたならば、露國が到底獨逸と戰ふ事の出來ぬのは明かで、恐らく夙くの昔に戰爭が終結して居ると考へる。僅かに日本及米國から浦鹽を通じて軍需品を供給されて辛うじて戰爭を繼續してゐる。ダーダネルス海

峽を落す落さぬと云ふ爭ひは煎じ詰めれば露國に軍需品を供給し反對に露國の農産物を英佛に供給すると云ふ事に主眼である。佛蘭西でも英吉利でも同様で、兵器供給については非常に困難を感じて居る。英では別に軍需大臣が出來たし、佛では財力によつて、米國の兵器製造所を買收するとか、いろ／＼な手段を講じて居る。恐らく開戰後一年間の今日に至つて漸く獨逸の製造力と拮抗し得るに至つたらうと思はれる。

それで我々の考ふべきは、今後若し我日本が今度のやうな大戰でなくとも、日本の全國の師團を動員さするやうな强敵と戰つた場合に、如何なる方法で軍需品が供給されるだらうかと云ふ事は、實に非常なる大問題である。日進月歩の勢で以て改良さるゝ兵器を依然として舊式に止めて置くことは先づ出來ない。然らば今日の日本の兵器よりも今後の戰爭の時の兵器は確かに彈藥の消費量が多いものと見なければならぬ。さう云ふやうな勢であるのにどうして此問題を解決してよいかは國防上の大問題である。それでさう云ふやうな場合に、例へば政府の兵器工場の全力を注いだ丈けで供給が間に合ふと云ふ確信があれば別に大した問題は起らない。然しながら今日の戰爭の例によつて見ると云ふと、英國の例を見ても三大私立兵器製造所即ちヴイッカー、アームストロング、コヴントリーを初めとして、政府の工場も全部働いてそして到底十分の一も出來ずして、民間の大工場は勿論、苟くも兵器製造に堪へ得るものは悉く之に向けて尚不足して困んで居る。英國の如き工業國を以てして、而かも平常兵器の大工場を數多く有する英國を以てして尚然る所を以て見れば、我日本の如き、政府の工場丈けで間に合ふ譯はない。然らば戰爭の場合にはどんなにしても民間の工場によつて兵器を製造せしめなくてはならぬ。民間の工場が戰爭の時丈け兵器を製造してそして精巧な、精鋭な、且つ質のよい兵器を多量に供給することが出來るならいゝが、それは實に覺束ない話である。公平に考へれば、政府の兵器製造所の仕事よりも民間の工場の、而かも專門でない工場の製品が不良であると云

ふ事は何人も認むる所である。それであるからして若し兵器を戰時丈け民間の工場に造らすことにすれば、戰時の兵器は著しく劣等なものになる。平時政府の專門工場で作つたものは精銳である。戰時になれば民間のものを加ふるが故に劣等になると云ふ事であれば、之は餘程考へなければならぬ。戰時精巧なものを使つて其威力を發揮しなければならぬのに、戰時丈け民間で作ることになれば、其結果は反對のことになりはしないか。故に今度の戰爭の結果に見ても平素から民間の工場に少しづゝ馴らさして置くことが非常に必要である。これは經費等を云云する場合でない國防上の大問題である。若し平時民間の作つたものが使川に堪へぬものであつたなら、それは使用せずに貯蓄して置く位の決心で、平素から民間の兵器製造を保護して置かなくてはならぬ。

民間の兵器製造に對する主もなる反對は、民間の製造は不精密で、又不統一で其用に堪へぬと云ふ事である。此點は我々も至極御同感である。然しながら民間がそれ程幼稚であればある程之を保護するの必要があるのである。若し民間が其用に堪へ得る程度ならば獨逸などの例に倣つて政府の工場を置く必要がなくなる。政府の工場を置くのは民間が幼稚なるが爲めである。それ故に民間の工業の幼稚なるは今更らいはなくても分つて居る。それでは戰爭の時、民間工業の力を籍らなくても濟むと云ふなら、それでよいが、籍らなくてはならぬと云ふ前提ならば、民間が幼稚なればなる程、不精確なればなる程之を保護訓鍊して置かねばならぬ。故に民間の工業が幼稚にして其用に堪へぬと云ふ事が即ち、民間に平素から兵器を造り馴らさせよと云ふ最も大なる理由である。或は又兵器のやうなものを民間に造らせるよりは類似のものを作らせる方がよい。例へば自働車とか、飛行機の機關とかを作らせて輸入を防遏する方がよいと云ふ說もある。之も無論大急務の問題であるが、其類似物の製作工場を戰時に兵器工場に變へると云ふ事については矢張り相當の時日も亦其設備をも要する、到底急の間に合はぬと同時

に、詰り新らしい人が遣つた事のないものを造ることになるから到底精鋭なものゝ出來る譯がない。故に兵器製造の類似の工業の發達は勿論必要ではあるが、其發達を只何にもせずに待つて居ると云ふ事は確かに國防を忽かせにするものである。更に夫れ以上の方法を考へて一日も早く兵器供給困難の問題を解決しなくてはならないと思ふ。

それにはどうしても平素から費用はかゝつても、假令不要の兵器でも差支ないから、それを民間に造ることを慣らはすことが必要である。或は兵器製造業と云ふものは日本内地丈けを相手にして居つては、到底利益がないから外國に向つて發展しなければならぬと云ふ説もある。之も正しい說である。然しながら初めて出來た會社、信用もなく、又供給をした事もない會社が直ぐに外國の註文を引受けて作ることは到底不可能である。先づ自國の軍隊の要する兵器を相當に造り得る能力に達して然る後外國に向つて販路を求めなければ、已に立派な私立の兵器製造所を有つて居る外國と競爭するとは出來ない。故に生れてから獨り立ちになるまでには一通りの保護を與へなければならぬ。生れるなり直ぐに自活して行けと云ふのは非常な無理な事である。而かも此保護は、單に經濟上のみならず、國防上の大問題であるからして、之は十分に研究して今世の中に云はれて居るやうに官民合同の會社を起すか、或は政府が適當の補給利子をやるか、何等かの方法を講ずる事が必要であると思ふ。

日露同盟可否論

同盟締結の要なし

法學博士　末廣重雄

(一)

日露戰爭後、日に〳〵友情の濃やかになりつゝあつた我が國と露國との關係は、今次の戰爭が始まつて以來一層親善の度を加へ、露國に於て日露兩國間に軍事同盟を締結すべしと云ふ論が起り、サゾノフ氏の如きも亦之に賛同する一人である。我が國に於ても日露同盟の謳歌者がある。予も亦日露國交の敦厚親睦を欲する者ではあるが、現在の日露關係を進めて之を同盟關係とすることには、同意し兼ねるのである。一體日露同盟は果して必要である乎。現在の日露關係を進めて同盟關係にするは非常な重大事である。實際上充分なる必要と利益のあることを確かめた上ですべきことで、一時の感情に支配されて輕々敷く事を決定してはならぬ。

先づ露國に就て觀るに、露國としては或は同盟の利益があるであらう。第一に今次の戰爭後露國が極東に於て侵略的野心を懷くことなく、西歐に於て引續いて獨逸と對抗するものと假定すれば、此の場合に、我が國との同盟は其の後顧の憂ひを斷つことになる。尤も是は現在の日露關係の下に於ても得らるゝ利益であるが、日露同盟を締結して、今次の戰爭中我が國の出兵援助を受けることにしたならば、尠からぬ利益を得る譯である。若し數十萬の我が兵が歐露又はダーダネルスに出征するに至らば、今日迄連戰連敗せる聯合軍の士氣は頓に振興され、歐洲戰爭の形勢或は忽ち一變するであらう。露國に於ける日露同盟論者中には、將來は兎も角、此際我が兵力的援助を熱望するの餘り、此論を爲す者があるやうである。

此等の理由以外に於ても尙、露國は日露の親善を進める爲に同盟を説く必要を感じて居るのではあるまい乎。露國は開戰後極東の守備を減し、擧げて之を西部に移して戰爭に全力を集注して居る。浦港要塞の如きは殆んど明けつ放しで何の備へもない。若し我が國が侵略的野心を蔵するならば、露國を攻撃するに今日程好機會はない。露國に大打撃を加ふるは嬰兒の手を拗るほど容易である。けれども我が國が間接の同盟國にして直接の協約國たる露國の國難に乘ずるが如き卑劣なる考のないことは、武士道を持出す迄もないことである。我が國が最近全力を擧げて露國に武器彈藥軍需品を供給しつゝある事實に徴しても、我が眞意の奈邊に

あるかが明かであらう。然し露國としては最近に至つては全く打解けたにしても、開戰後或る期間は猶ほ我が國に對して一點不安の念を懷いて居た。そこで日露の接近を說き我をして彼れに近づかしむることを欲した。日露同盟論は幾分か此處にも胚胎して居るやうに思はれる。

露國人の日露同盟論の理由は略々解るが、日本人の日露同盟論に至つては不可解である。予は我が國に取り日露同盟の利益と必要が奈邊にあるやを發見するに苦しむのである。一體日本人は熱し易く醒め易い輕薄なる性質を具へて居る。思想界を觀ればオイケン、ベルグソン共にホンノ一時の流行たるに過ぎず、タゴールも亦既に忘れられやうとして居る。日英同盟に對する日本人の感情は一變して今や日露同盟熱が起つて居るが、是れ亦日露親善の昂じた一時の出來心ではあるまい乎。哲學者を相手にして浮氣をするは差支がないが、國家を玩弄物とするは危險千萬である。

(二)

日露兩國は十年前干戈の間に相見えたが、其の結果雨降つて地固まり、却つて兩國の幸福となつた。從來我が國を全く理解せず半開人視して居た露國は、此の戰爭に依て我れの侮るべからざることを知つた。我れも亦彼を解し得た。斯くして相互の了解が出來相互に尊敬すべきことを知り、兩國は舊怨を捨てゝ國交頗る融和するに至つた。其の結果として日露兩國間に二個の協約が締結された。第一は明治四十年の第一日露協約があつて、兩國は之れを以て、相互に他の一方の領土保全を尊重すること、兩國間の條約より生ずる一切の權利並に兩國と支那との間の條約より生ずる一切の權利は互に尊重するを約し、而して支那の領土保全並に同國に於ける列國の商工業上の機會均等主義を承認し、一切の平和手段に依つて現狀の存續及び前記主義の確立を擁護支持するを約したのである。次で明治四十三年に第二日露協約を締結して、滿州の現狀維持尊重の約を重ね、現狀を侵迫する事件發生する時は兩國は現狀維持に必須と認むる措置に關し相互に商議を爲すことを約した。斯くの如くにして日露兩國は支那に關して政治上協同一致の行動を約し、兩國の間に衝突の原因を除き去つたのである。今次の大戰爭開始後日露の關係は益々親善となり、或る意味に於て同盟と等しき關係にあるは日露兩國の爲、大に賀すべきことである。

戰後のことを考ふるに、支那に對して密接の關係ある日露兩國が提携を繼續することは、事情の變ぜざる限り相變らず必要である。支那問題は我が盛衰消長に重大なる關係があるが、露國も亦支那と國境を接すること數千里に亘り、而して北滿州外蒙古等を其の勢力範圍とするのであるから、列強に比して支那に對し、重大なる利害關係を有するは明らかである。此の兩國が支那に關して衝突するの相互に不利益であることは、日露戰爭が充分に教訓を與へて居る。兩國が支那に關して提携することの如何に相互の利益であるかは、彼の滿州鐵道中立に關する所謂ノックスの提議が、日露兩國の反對に遭ふて有邪無邪の裡に葬られてし

まつたのを見ても明らかである。故に今後と雖も出來得る限り支那の現狀維持の爲に相提携し、日英同盟と相倚り相待つて極東平和の維持を計るやうにしたいものである。

果して然らば、日露兩國は將來も猶今日の如く支那に關して提携することが出來るであらう乎。之れを論ずるには先づ今次の戰爭後露國の外交上の活動が如何なる方面に[illegible]るかを考察せねばならぬ。予は聯合軍が終局の勝利を占むることを信ずる者であるが、不幸にして豫期に反し露軍終に振はず、其の勢窮まつて再び起つ能はざる場合には、日露間の提携問題などは起らなくなる。之れに反し露軍幸ひに其の勢を挽回し、獨逸と五分五分の勝負で引分けとなるか、又は勝利を得て戰局を結んだ場合は如何といふに、戰後の露國は再び亞細亞の舞臺に活躍するであらう。尤も露國が再び活動を始めるは今後少くも十年を經過するであらうが、兎に角再び亞細亞に向ふとすれば、其の場處は近東乎。中亞乎、將た極東であらう乎。露國が若し相變らず支那に侵略的に進むならば、日露の現在の關係は全く破棄せられて、日露戰爭前の狀態に復歸する譯けである。若し然らずして露國は我れを敵とするを不利として中亞か近東かに向つて進み、其の結果極東に手を出さず、今日の如く支那の現狀維持尊重の政策を遂行するならば、日露兩國は相變らず提携して進むことを得るのである。支那に於て優越の地位にある日露兩國が提携すれば實に天下無敵である。支那の運命は兩國が左右することを得るから、提携は兩國に取つて必要であり且つ利益である。

日露國交の親善であることは祝すべく賀すべきことであるが、是れが我れに好結果を齎すからとて、直に現在の關係を進めて同盟とすべきや否やは別問題である。國交親善であるからとて直ちに同盟を締結しやうとするは輕卒である。此の事たる恰も親しき交際をする男女は皆夫婦になれと云ふ筆法である。如何に親密に交るからとて無暗に夫婦になれば軈て破鏡の嘆を見る虞がある。

（三）

然らば何故に日露の關係を同盟關係に進めるの必要と利益とがない乎。進んで少しく之を說明して見やう。

滿州の現狀維持は勿論我が國に取り將來も必要であるが、是には現在の日露の關係で充分である。日露兩國が提携する限り、滿州に於ける兩國の利權を侵害しやうといふ勇氣ある國は絕無であるから、此が爲に同盟を結ぶの當否は贅辭を俟たずして明である。然らば何故に同盟を結ばうとするのである乎。或は同盟を成立せしめて我が軍備殊に陸軍を輕減せんと欲する者があるけれども、思はざるの甚だしき者である。今日日露の親善であるは一つは我れに實力があるからである。敵として恐ろしく味方として賴もしいからである。若し我が國が同盟に安んじて陸軍の勢力を減少し、日露間に兵力の均衡を失することがあれば、二國の親善が破れる時が來るであらう。賴むべからざる同盟を賴み國防を閑却し得ると考ふる者があれば夫は、餘りに迂闊の沙汰である。

我が國が將來敵とする危險の最も多きは米國と獨逸である。獨逸は今次の戰爭の結果如何によつて、或ひは强國としての存在を失ふこともあらう。或は英、佛、露諸國を脚下に蹂躙して歐州否世界の覇權を握ることになるかも知れない。極端の場合は暫らく措き、再び起つを得ざる程の大打擊も蒙らず、又た大々的勝利を博するにも至らず、戰後再び極東に於て活躍し得るものと假定すれば、我が國が獨逸と衝突する時、懸念すべきは、其の陸軍にあらずして海軍である。獨逸の陸軍が如何に强大を誇るとしても、我が陸軍に對抗するだけの大軍を、約一萬海里を隔つる極東に派遣するは到底不可能事である。又將來最も衝突の危險がある米國の陸軍は貧弱にして殆んど眼中に置く價値がないが、其の海軍に至つては相等の勢力を有つて居る。然るに我が國は海國としては海軍が餘りに貧弱である。從つて同盟國を求むるには積極的に、少くとも消極的に日露戰爭當時の英國の如く、海上に於て我れを援け得る國を選ぶの必要がある。然るに現在の日英同盟條約と同樣なる軍事同盟を露國と締結したとしても、其の援助決して賴むに足らない。露國は陸軍國たるの悲しさ、其の大兵も海國たる米國若しくは獨逸に對して用ふるところがない。此場合露國が同盟の誼を忘れざる限り、我れに後顧の憂ひがないのみで、日露同盟は我れに消極的の利益があるに過ぎない。而も此の利益たる現在の日露關係の下に於ても必ずしも收め得られないことはないのである。予は此點より觀ても、協約關係を進めて同盟とするの利益と必要を認むるに苦しむのである。

日露同盟論者は、日露同盟と日英同盟の衝突することあるを考へないやうである。假りに明治三十五年の日英同盟の如く、日露の一方がその利權を防衛する爲に或る國と開戰するに至つた時は、他の一方は嚴正中立を守り、若し又他の一國又は數國が該同盟國に對して交戰に加はる時は、他の締約國は來りて援助を與へ協同戰鬪に當ることを約束したと假定して、日露及び日英の關係は如何であらう乎。今假りに露國が防禦的に英國と戰爭を始めたとすれば、我が國は右に揭げた日露同盟條約に依り嚴正中立を守らねばならぬ。日英同盟に依れば英國が防禦的に戰爭する時は、我國は出兵援助する義務がある。英露双方共に同盟國たる我が國に對する關係上、更に第三國に對する關係上、防衛的に開戰するの已むを得ざるに至つたと主張するに相違ない。其の間に在つて我れは何れかの主張を正しきものとして、之に與せねばならぬから、立場に窮することがあらう。更に日露同盟關係を一層鞏固のものとして、現在の日英同盟の如くすれば、英露兩國に對する我が國の條約上の義務の衝突は一層甚だしくなるのみである。日英同盟と日露同盟の並び立たざる場合のあることは疑ふ餘地のないことである。尤も英露の衝突は今次の戰爭後五年や十年には起るまいから、日英同盟の傍ら日露同盟を締結しても、當分は兩國の間に板挾みとなつて進退に窮することはあるまいが、理論上甚しく不都合である。

（四）

日英同盟は信頼するに足らないから、撤廢して日露同盟を以て之に代へるを利とすと論ずるものがあるならば、其れは甚だしき愚論である。アンチ日英同盟論の起つた原因を考察してみるに、其の一つは今次の戰爭に於て同盟は專ら英國に利用せられ、我が國は英國の爲に栗を火中に拾ふの有樣であつたからであらう。然し斯くなつたは決して同盟其ものゝ罪でなく遺憾ながら我が當局者の鈍腕の致すところである。英國より援助を求め來つた。當時我が國に對し、日英同盟條約第二條の出兵援助の義務が發生して居ないにも拘はらず容易に之に應じたことが抑も大失策である。結局援助するにしても英國が少しく窮するを待つたならば有利なる條件の下に我が國は開戰するを得、南洋諸島の占領を赤道以北に限られ、南洋獨逸領の利益ある部分は悉く英國に占領せられる樣な慘めな目に遭はなかつたであらう。尙ほ一つは曩に英國が日米の衝突の渦中に投ずるを脫れんが爲に、日英同盟條約を改め日米戰爭の際に關して條約適用の除外例を設けんことを要求し、我れの之れに應ぜざるを得ざるに至つたとが原因であらう。英國の此の行爲は如何にも薄情には相違ないが、一面より觀れば無理からぬこともある。此等の理由を以て直ちに日英同盟撤廢を唱ふるは思はざるの甚だしき者である。日英同盟には日露同盟より到底得られない利益がある。即ち世界第一の海軍國を味方とするよ是である。日露戰爭の際我が國英國がより得たる利益は今更喋々することを俟たないことで、英國が日英同盟を極力利用する如く、我れも亦遠慮なく之を利用する工夫をすれば良いではない乎。相手に利用されるからとて撤廢せんとするが如きは餘りに腑甲斐ないことである。更に今次の戰爭後の世界の大勢力を考へて見るに、聯合軍の勝利に終れば、將來英露の衝突は免れない。若し英國の大敗とならざる程度に於て獨逸が勝てば英獨の競爭は繼續するものと見ねばならない。英國が獨逸又は露國と相爭ふとすれば日英同盟は英國に取つて必要と利益がある。我は之を有利に改正して積極的利益あるものとすることが可能である。

要するに日英同盟の存在は我が國に必要であり利益である。然らば日英同盟の傍ら日露同盟を締結すべきかと云ふに、日露同盟の必要と利益を認むることが出來ない。從來の如く日英同盟を我が外交の基礎として、之れに配するに日露の協約關係を以てし、兩國の國交益々親善を計ることが最良最善の策である。但し以上は英國が獨逸との戰ひに勝利を占むるか又は勝敗の著しきものなく引分となる場合を前提としての論である。不幸にして豫期に反し英國が全敗し戰爭前の俤を失ふやうなことになるとすれば、更に別個の立脚地の上に論を立てねばならない。

▼日露同盟論

松井柏軒

（一）

苟くも日本の大に力を用ゆべき方面が支那及び南洋に在るとを知るも

のは、日露同盟の必要に反對するを能はざるべし。
日本の利權は、將來支那及び南洋の方面に發展するを當然とす、日本は、其の年々增加する人口を移殖し、且つ其の利益線を擴張するには、支那及び南洋方面を最便最利とす、日本人は之に由て自から利すると共にまた支那及び南洋の文化を進歩せしめ、其の利源を開拓するの天職(化育贊襄)を全ふし得べければ也。

(二)

支那は其の傳統的外交方策として、常に所謂『夷を以て夷を征す』る手段を執り、久しく日露を爭鬪せしめて自から漁夫の利を占めたりき、彼の支那近代の偉人たる李鴻章は、其の死に臨みて親近者に遺言して曰く『今や露國盛んに滿洲を侵し、封豕長蛇の勢ひ沮す可らざるも、中國は唯だ之を傍觀せよ、小國之を傍觀するも日本必らず之を坐視せざれば也、日本竟に必らず兵を出して露國と滿洲を爭はん、日露二強は實に中國の禍也、而して兩虎相爭はゞ必らず共に損す、中國宜しく虚に乘じて、歐米の援を籍りて徐ろに滿州を恢復せよ、是れ戰はずして功を收むる良全の策也、若し此の策また竟に成らずんは、寧ろ斷じて滿州を放棄せよ、國歩艱難ならば、蒙古西藏の如き外藩を割て、以て中國本部の萬全を保持せさる可らず』と、最近日支交涉に方りて、支那外交家が極力英國其の他の力を籍りて日本を掣肘せしめんとせしは、尙ほ世上の記憶に新たなるべし。

故に支那に對して、大に成すあらんとせば、支那をして夷を以て夷を征するに由なからしむるに如くはなし、今や支那と境壤相接し、用兵また最も便するもの實に日露兩國とす、此の兩國苟くも相一致せは、支那は其の傳統政策を用んとするも能はさるのみ、是れ日露同盟の必要なる一理由也。

(三)

南洋諸島は、氣候酷熱なるも、地味肥沃にして、甘蔗、護謨樹の栽培に適し、陸に堅牢にして貴重なる樹木を產し海には多くの魚介を生じ、富源の大なる殆んど測る可らず、獨逸人の如き夙に着目し、國民中の有爲なる壯年に土語を研究せしめ、之を南洋に特派するも、其の健康之に堪ゆる能はず、之に堪ゆるものは、土人の外、唯だ日本人と支那人とあるのみ。

日本若し南洋に利權を立てんとせば、獨逸は勿論、和蘭の如き深く猜忌して之を妨害すべく、我れは百難を排して邁進するの覺悟なかる可らず、此の時に方りて北顧して露國と爭ふが如きは、殆んど我れの堪ゆる所に非ず、否、最大不利益也。乃ち露國と同盟し、全く後顧の患を絕ちて然る後全力を擧げて南進すべし、日露同盟の必要なる何ぞ多言を要せんや。

(四)

日本の南進主義に對しては、佛國は其の佛領印度を侵されんを怖れ、英國は其の寶庫たる印度を窺窬せらるゝを憚かりて、自然に之を妨害することなきを保せず、然り、英國にして同盟の誼に反し、事毎に日本の膨脹を抑ゆるが如くんば、日本亦竟に印度の叛亂を慫慂して以て報復する所なきを保せず、佛國と雖も又また然るべきのみ、然れども彼等兩國は常に日本に對する好意を失はず、且つ其の領土に對して甚だしき非人道的壓迫を加へざる以上、我れは決して彼等を擾亂せしめず、寧ろ彼等のため其領土の平和を保證すべきのみ。

然れども日本のみ斯くせんといふも、彼等或は全く安心し得ざるも知るべからず、故に彼等の同盟國たり、協商國たる露國と同盟し、益々彼等との親睦を敦くせば、彼等も亦大に安んじて、敢て日本の爲すあらんとするを妨げざるべし、日英、日露の二同盟と、日佛の二重協商を以てせば、我が將來の進路は、支那方面に於ても、南洋方面に於ても極めて平坦なるべし、是れ日露同盟の必要なる理由の第三也。

（五）

米國は決して戰ひを欲する國に非ず、然れども其の所謂太平洋の覇權論なるものが、單純に商業的ならずして、政治的領土的なるが如くに看せ掛け、之に由て日米開戰論を鼓吹する者の米國人中に少からざるは、事實也、殊に支那の如きは、米國を以て日本を掣肘せしむべき最大有力の國なりと信じ做し、動もすれば米國に依らんとする傾向あり、殊に歐洲大戰終局の後、獨逸が極力米國を煽動して日本と衝突せしめんとするや明白也、大戰後の獨逸は其の國力の疲弊を回復するまで多くの年所を要すべく、随つて之を畏るゝ必要なしと雖も、米國には現に八百萬以上の獨逸種族あり、彼等は其の祖國のため、百方米人を煽動して排日氣勢を高むべく、支那の如き益々之に眩惑せらるゝや推測に難からずとす、然れども日本若し露國と同盟し、日英日露兩同盟と、日佛の二重協商とを成立せしめば、米國に於ける排日論も勢ひ終熄せざるを得ず。假令全く終熄せざるも、支那は此の大勢に視て、敢て漫りに米國に依り日本に抗するが如きことなきに至らん、是れ亦日露同盟の利とすべき一理由ならずや、

（六）

日露同盟單に日本のみに利するも、露國に益なくんば成立せず、露國は日本との同盟に由て何を得べきや。

曰く、第一に後顧の患を斷て、極力獨墺との大戰に努め且つ大戰の善後に鋭意し得べし、第二パンスラヴズムーなる民族統合の大自然主義の運行に全力を注ぎ得べく、第三にダーダネルス海峽開放の進路を開きて、通商上及び軍事上の大利益を收むべく全力を傾倒し得、第四日露同盟の實力は以て裕に露國を重からしめし此の重味に依て、對獨其他の外交上に大なる便宜を得べく、第五西伯利亞方面の開發を迅速ならしめて、其の富强の度を高むべし、況んや露佛日露の兩同盟と、露英の二重協商と

に、露國をして九鼎大呂よりも重からしめ、世界の平和に大貢献を爲し得るをや、露國が日本との同盟に由て利するの大なるや多言を俟たず、而して英佛また相俱に其の惠を享くるや明白也。

（七）

露國には宮廷派なるものあり、其の血液に獨逸系を交へ、多く獨人と婚嫁を通ずるがため、平素親獨の傾向あるのみならず、此の一派は實に日本に對し復讐戰を企畫し、露國政府者が開進主義に由て、稍々親日政策を執るを快しとせず、依然東方經營の手を寛めざりしも、歐洲戰開始以來、其の勢力著るしく衰へ來れるのみならず、彼等も亦祖國のため日本の措置を感謝せざるを得ずして、漸くに其の敵愾心を薄らげ來り、殊に開戰以來頃に勢力を得來れる露國々民の大多數は、深く親日の感を高め、今や彼我國民の交情は、殆んど同盟以上に在り。

此の露國に於ける官民の心理轉換は、實に日露同盟締結の好機會也、此の同盟に由りて、日本は支那及び南洋方面に利權を伸張すると共に、露國との通商を開發し、殊に戰時戰後共に獨逸に代りて武器其の他の工業品を供給すべき地位に立てば、其の利益や甚だ大ならん、今日日露同盟に反對するものは、愚にあらずんば狂也。

▼愼重の考慮を要す

特命全權公使　伊集院彦吉

日露兩國は、不幸にして一度び干戈を相交へてより、其交情一時疎隔を來したけれども、其後互に相接近して、今日にては昔日の怨みを忘れ、親善の度は愈々益々加はらんとしてゐる。現に我國から露國に對して盛に軍器を補給してゐるなど、今日日露兩國の關係は事實に於て同盟を締結したも同じである。即ち日露兩國の今日は同盟の名莫くして、其實有るものと言ふことが出來るのである。而して兩國の親善は、或は今後同盟の形式に於て表はれることもあらうが、然らば今日急に此同盟を締結する必要が有るか何うかといふことに至つては、少しく愼重の考慮を要することゝ思ふ。

同盟にしろ、協商にしろ、兩國間に締結せらるゝ協約といふものは、概ね實際の必要に迫られて初めて事實として現はるゝ形式である。であるから其協約の精神、内容が備つて初めて其意義を生ずるのであつて、精神内容の無い同盟は、たとひ其名は有つても、實は單なる一片の空文に過ぎないのである。之に反して其精神其内容さへ備つて居るならば、故らに同盟の名を以つてせずとも、事實に於て兩者の關係は自ら益々密接の度を加ふるを得るのである。言ひ換へれば、兩國間に於て必ずしも同盟の形式を採らなくとも、それと同樣の、若くはそれ以上の利益幸福

をも享受し得る場合が有るのである。而て今日日露兩國の關係は實に夫れである。斯くの如く日露兩國が未だ同盟の形式を取らずして、而も尙今日の親交を持續することが出來るのであるから、何を好んでか同盟締結の調印を急ぐ必要があらう。單に其必要が無いのみではなく、是れ有るが爲めに却て兩國の親善を疑ひ、終には圓滿なる國交をも阻害する樣な禍を醸すことさへ無いとは言へない。即ち兩國の利害關係が常に相一致して居る場合は可いとして、一朝利害關係の背反した場合に　同盟國であるが爲めに却て其感情を害するやうな場合も有るからである。普通ならば輕々に默過すべき些々たる感情の衝突も、同盟國にして此事あるを疑ふが如き疑念が、嵩じては却て兩國の感情を損ふやうになることがある。近い例をとつて見ても、支那に於ける一部英國人の排日運動の如きは、夫れである。吾々から觀れば、支那に對する英國の貿易の如きは、英國の全貿易に對して僅少言ふに足らざるものであつて、縱令支那に於て日英兩國の利害が衝突するやうなことがあるとしても、それが爲めに兩國の親善關係に罅隙を生ずるが如きは有り得べからざるを信じて疑はないけれども、誤つて其間疑念を挾む者がありとすれば、日英兩國が同盟國であるといふ事實が益々其疑念をして深からしむる因ともなるからである。さうでないまでも第三國の誤解や干渉を招いて、締盟兩國に必ずしも有利なる條件をのみ持來すものには限らない。であるから、日露兩國が今日の如くにして今後尙此親善なる國交を續けて行くことが出來る以上は、此等の障害を招くの虞れを排して迄も、今日急に同盟を締結するの要はないと思ふのである。即ち絶對の必要に迫られざる限りは、好んで形式に拘泥するの要はない。寧ろ此際愼重の態度を持し、世界戰亂の終局を俟つて徐に兩國永遠の利益を保障しなければならぬ。漫りに輕擧妄動して、爲めに却て兩國の親善を害するやうなことがあつてはならないと思ふのである。

▼日露同盟に就て

某博士

日露兩國の間に同盟を結ぶの是非に就ては、自分は久しき以來意見を持つて居るが、今日是を發表するのは其時機で無いと考へる。是れは自分の意見を詳細に具體的に發表すると、外交上の各方面に影響があるからである、一體外交に關する事は、輕々しく議論するものでは無い、先月の中央公論に『歐洲講和會議の際帝國の代表者とすべき人物』と云ふ題で、諸名士の意見が掲げられて居たが、自分は是れを讀んで、餘りの事に實はあきれたのである、千八百十五年の維納會議には「メッテルニッヒ」(墺國外務大臣)「タレーラン」(佛國外務大臣)「カッスルリー」(英國外務大臣)が第一全權委員として出席し、千八百五十六年の巴里會議には「ブオール」(墺國總理大臣兼外務大臣)「ワレウスキー」(佛國外務大臣)「クラレンドン」(英國外務大臣)や「カヴール」(伊國總理大臣)が第一全權

委員たり、又千八百七十八年の伯林會議には「ビスマルク」(獨逸帝國宰相)「アンドラシー」(墺國外相)「ワッヂングトン」(佛國外相)「ビーコンスフキールド」(英國首相)「ソースベリー」(英國外相)等が全權委員で在つたからとて、何も必ずしも今度の講和會議に日本から總理大臣や外務大臣の出席する必要は無いかも知れぬが、講和會議―第二十世紀に於ける最も重要なる列國會議―は決して見世物では無い、新富座や歌舞伎座の演臺に登るのとは全く別物である、若し常識のある者が、是等名士の意見を眞面目に引受けたら、如何な感じを持つであらうか、是れは恐らく座興の意味で談話したものと思ふが、夫れにしても餘りに無責任で、講和會議に對する日本の覺悟が窺はれる樣な氣がして甚だ心細い。

是れ迄外交に關する事は新聞や雜誌に甚だ多く論議されて居る、勿論外交上の諸問題は最も重大な事であるから、言論界が其視線を之れに注ぐのは當然ではあるが、何んだか譯も判らぬに之れを論評しなければ人後に落る樣な心組で、不用意の議論をするのが例の如く見受けられる、併し少し考へれば說明する迄も無く、外交に關する事柄は非常に重大である、假令其當時直ちに反影が無くとも、延て國交を阻害する樣な事が起つた例も少くない、尤も是等の事は我國許りでは無いので、近くは日支交涉に際して、支那英字新聞の記事論說を讀んだ日本人は、果して如何な感じを持つたであらうか、丁度此頃袁世凱帝說に關する日本の新聞の記事論說等を讀む支那人が時に不快の念を起すのを禁し得ないのと同一であらう。

言論は自由である、自分は何も人の言論を批評するのを欲する次第では無いが、近來往々にして或人を攻擊するが爲めに、全く是れに連鎖のない事柄に迄も論及し、果ては個々其人が永く居た關係等から日本の同盟國の惡口迄も喋々して敢て憚からぬ樣な事があるが、是れは國家の爲めに一考を願ひ度い、此風潮は獨り新聞界のみでは無いので、日本有數の政治家も國交に影響するのを承知しながら、時に意外の事を口走る樣に見受られるが、外交事件を論評するには先づ事の本末を能く考へ國家本位で意見を立てゝ貰ひ度いものである。

凡そ一國の外交には主義が無くてはならぬ、帝國の外交にも維新以來一貫した主義があるのは敢て喋々する迄も無い、帝國は是れが爲めに淸國と戰ひ、又露國と滿洲に爭ふた、帝國が英國と同盟を結んだのも是れが爲めであつて、露國と二回の協約を締結し握手するに至つたのも亦此主義の實行に外ならぬのである、日本は自ら進んで獨國を敵とした事は、未だ一回だもない、若し露國にして帝國の眞意を早く了解したならば、そして獨逸の手先きに使はれなかつたならば、日露戰爭は到底起り得なかつたのである、夫れだから今日帝國の輿論が日露同盟に向ふのは、頗る當然の事柄であつて毫も不思議は無いのであるが、世の中に日露同盟の代はりに日露獨同盟又は日獨同盟を主張し、現に此意見を發表して憚らぬ人のあるのは實に意外の至りである、獨逸は今迄日本に如何なる友誼を示したか、成程軍人や留學生等は多少の智識を獨逸から齎して來たであらう、日本の工業や商業は獨逸の御蔭を大分蒙つて居るであらう

が、是等は近世に於ける萬國共通の出來事で、互ひに智識を交換し、利益を配分するに過ぎぬのだから、特に感謝するの理由と價値は無い、若し帝國が獨逸に對して最も眞摯に感謝するものがあるとすれは、是れは獨逸が露國を手先に使つて三國干渉を爲し、又之れを敎唆して、日露戰爭を起さしめ、「カイゼル」が恒久不變の熱心を以て世界の白人種に黄禍論を鼓吹した事であらう、吾人は何が故に是に就て獨逸に感謝するのであるか、吾人は基督の如く自己の敵を愛する意味で感謝するのでは無い、是れが爲めに絶えず帝國臣民に外患の變を持たしめ、依て以て其愛國心と尙武心克己心を向上せしめたからである、併し此感謝は之れに依りて友愛の情を起す事は出來ぬ、彼も之を求めむと欲せぬ如く我も亦之を捧げんとはしなかつた、歐洲大戰爭以前の日獨兩國間の關係は實に斯の如くで在つたのに拘らず、今や此歷史的事實を無視した議論が多少でも帝國内に發表されるのを見ては、聊か同胞の非常識なのに啞然たらざるを得ない、帝國は今何國と戰爭して居るのであるが、帝國の同盟國と其與國とは如何なる目的の爲めに共同の敵と戰ひつゝあるのか、論者は恐らく帝國が獨逸と提手したなら、獨逸は極東を帝國の爲めに抛棄すると樂觀して居るのであらう、獨逸の財界は其富を舉げて日本を援助すると思ふて居るのであらう、又獨逸の商工業者は自己の利益を犧牲とするも帝國の爲めに盡すと豫期して居るのであろう、若し此理想が實現せられ得るならば至極結構であるが、帝國に一貫した外交政策の在る如く、獨逸にも亦不變の外交政策が在る、黄禍說は「カイゼル」の持論で在つて、容易に之を變更すべしとは思はれぬ、與國の友好を離間中傷するのは獨逸の特色で在つて、是亦急に改めらるものとは思へぬ、苟も「デーリー、テレグラフ」事件を記憶するものは、又「モロッコ」事件を知るものは、而して現に帝國初め英露佛等の諸國が何故に共同の敵と戰ひつゝあるかを理解するものは、日露同盟に附帶して日獨同盟等を案出する事は出來ぬ事と思ふが、曩にも云ふ如く言論は各人の自由で在るから致方無いとして、外交上の事を論議するには其影響する所を考へ、充分に研究の上で、帝國の利益を基準として意見を發表して貰ひ度ひので在る。

（九月九日談）

▼何處までも日露親善論

男爵　後藤新平

日露親善は昔から多年自分の主張するところであるが、一歩進んで同盟となると其範圍の廣狹、其内容の深淺如何が問題となる。從つて是れならば餘程研究した上でなければ容易に贊否を決する譯けに行かぬ。勿論自分は同盟は絶對に可かぬといふのではないと同時に、必ず同盟しなくてはならぬといふ考も無い。詰り自分は何處までも日露親善論で、それ以上一歩を進むる場合には其範圍内容を嚴密に詮索した上で、愼重の態度を以て決せなくてはならぬと思ふ。

日露の親善を圖る第一の理由は、日露通商の利益を得るにある。今回露國よりして我國に向つて軍需品の大註文のあつたことなどは兩國の親善上に無論功能あることには相違ないが、然し此等は或意味に於て一時の皮下注射か、温泉浴の如き功能に比すべきもので、決して永續的の親善の基礎といふことは出來ぬ。人に依つては露國との親善を圖るのは觀光團的の催しをして、或はペトログラードとかモスコーとかを觀察し、之等の大都會に於て商業をすることを考へるやうだが、此等も無論わるいことではないが、然し我輩の考では眞の日露通商を盛大ならしむるには、どうしても黒龍江沿岸より、貝加爾湖以東を以て主たる通商區域とするのが適當であると思ふ。それには宜しく彼地の言語及び風俗を觀察して、其嗜好風俗を研究すべきである。現に日本人は從來此地方に於て獨逸人などと競爭をやつたのであるが、言葉の關係や何かで、何時も獨逸人に引けを取るやうなことを免れなかつた。そこになると只製造工業の力のみではない。日本人は此點に大に意を用ゐなくてはならぬ。詰り露西亞人は普通スラヴ人と言つても實はスラヴとゼルマンとの混血人種で、此兩人種の混同生活をして居るのに、我大和人族とスラヴとの生活狀態は宛も水と油とのやうなもので、調和が困難である。此彼我兩國民生活の調和といふことが日露通商を圖る第一の要義であると思ふ。品物の善いのを賣るのは之は無論の事で言ふまでもない。

次ぎには金融機關の整備を圖ることが必要である。然し之は第一に述べたものよりは容易に出來るもので、第一の物はなかく一朝一夕には出來ない。此金融機關を改良するに就ても、矢張り第一の事情が支配する。我輩の滿鐵總裁中人を出して何等かの素地を作らんとしたことがあつたが、人は皆赫々の功を取るに急にして、斯くの如き、地味な仕事をすることを欲せぬものか、其後一向之に向つて力を盡す者の無いのは頗る遺憾である。要するに予は目下のところ何處までも日露親善論者であつて、以上述べた二つの點に意を須ゐて、其親善關係をして一層深厚ならしむることを希望するのである。

▼協商は可、同盟は不要

法學博士　吉野作造

日露同盟論の最も盛んに唱へられたのは佛蘭西に於てゞあり、次には露西亞、最近我國に於ても之を唱ふる者がある。露西亞に於て此論の唱へらるゝ所以は明白である。今度の戰爭に於て露西亞は我國の助力を要するの切なる、自ら一般政府をして日露同盟を叫ばしむるのであらう。元來日本と露西亞とは日露戰爭後段々親善の關係を恢復したけれども、而かも露國高級の政治家中には尙日本の誠心を疑いて國民を警せんとする者が少くなかつた。彼のクロパトキン將軍の滿蒙處分論の如きは其最も著しき例である。それにも拘らず最近此國の新聞などは一齊に日露同盟論を說くのは其動機の何れにあるか、之を想像するに難くない。若しそ

れ佛蘭西に於て日露同盟論の唱へらるゝ所以に至つては、彼が露西亞をして日本の助力を得て東方の戰場に强大を增さしめんと欲するのみならず、露西亞をして專ら西歐に力を注ぎ其對獨政策に全力を注がしむるには、極東に於て日本と親和せしむるを必要條件とするといふ宿論から出て居る。此等の點を考へて見れば、日露同盟論の露西亞及び佛蘭西に於て唱へらるゝ所以は極めて明白である。

然し彼國の論者の唱ふる同盟とは如何なることを意味するのか、單に日露兩國の關係を開拓して尙一層の親善を加へしめんといふことは、必ずしも同盟を待たずして出來る。何となれば同盟といふ時は、從來若し相互の間に利害の衝突があれば之を悉く解決し、其間に何等の蟠りを殘さないといふことの外に、尙其上に相互に兵力を以て援け合ふといふ積極的義務を兩者の上に課するものであるからである。三國同盟にしても日英同盟にしても皆兵力を以てする相互的援助といふことが基礎になつて居る。論者の所謂日露同盟論は日露の關係を此點まで近めやうといふにあるのだらうか。同盟の外、協商といふものがある。協商は從來の利害の衝突を解決一掃するといふ消極的の約束に過ぎない。無論協商に依つて親善の關係を回復すれば、兩者の間に自ら精神上並びに物質上互に援け合ふといふ關係は成立するけれども、然し之は條約上の義務ではない。所謂三國協商の如きは卽ち之に屬する。そこで今日露の關係を論ずるに當つても、協商關係に止めんとするのか、進んで同盟關係にまで持つて行かうとするのか。論者が日露のより親善ならんと欲するの意は明かだけれども、具體的の協約としてはどの點まで持つて行かうといふ程度が甚だ明白でない。

日露大いに親善なるべしといふ議論に對しては、吾人も固より双手を擧げて之に絕對的贊成を表する。勿論日露戰爭以來此兩國は舊怨を忘れ屢々約束を結んで相互の利害を協調した。風說によれば滿蒙方面に於ける兩國の勢力範圍に就ても、一種の密約があるといふことである。然れども此兩國は亞細亞の東方に於て相接觸して居るが故に、衝突とまでは行かなくとも少くとも利害の關係が錯綜して居る。單に我日本の方面より之を觀るに、日本人の滿蒙に於ける、更に自ら北方に發展して露西亞の勢力範圍の中に入り込んで居る。浦鹽方面に於ける日本人の發展も亦又之を無視することは出來ない。故に想像をすれば日露兩國の利害は尙兩國の隔意なき交涉に依つて此上調和すべき餘地はある。然らば日露兩國は此等の現に起り或は將來起るべき問題を解決して、尙一層親善なる關係に立つの必要がある。斯くなれば露西亞も今後安心して全力を獨逸方面に注ぐことが出來るし、日本も亦滿蒙方面に於ける警備の手を休めることが出來る。斯くて我々兩國は心を安んじて東方の平和的開發の爲めに尙一層の力を盡すことが出來るのである。

日露兩國は尙大いに親善の關係を增すことを必要とするが、更に進んで此兩國は果して同盟の關係に入るべきや否やは一つの疑問である。私の考へに依れば、日露はあくまで親善和協すべきものであるけれども、同盟をするといふことには何等正當の基礎がないと思ふ。同盟は卽ち兵

力的互援を前提とする。兵力的互援は共同の敵の存在を前提とする。而して日露兩國は東洋に於て、先づ何等共同の敵を有せないと見てよい。三國同盟も共同の敵を有するが故に出來た。日英同盟も共同の敵を有するが故に出來た。尤も日英同盟成立當時の共同の敵は今は敵ではない。露西亞は日本にも英國にも親善の關係を恢復した。けれども日英同盟は露西亞といふ共同の敵を失つた後も、尙東洋に於て共同の敵たるべき勢力が存在して居つたが故に其成立を繼續して居つた。而して今や此敵も全く消滅したのであるが、それでも日英同盟は永く東洋に於ける外交關係の中軸たりし隋勢として、今後尙暫く其存在を續け又其效用を發揮するだらう。斯くの如く同盟は共同の敵の消滅した後でも其存續を續くることはあるけれども、共同の敵存することなくして成立したといふことは殆んどない。却て三國協商の場合の如く最も恐るべき共同の敵あるに拘らず、同盟の形を避けて協商の態度で止つたことすらある。之れ兵力的援助といふことが事重大であり、且つ事柄の性質上挑戰的であるからである。斯く論ずる時は日露兩國はあくまで親善和調すべしとは雖も、決して同盟すべき何等共同の基礎がないといはなければならぬ。尤も佛蘭西に於ては同盟關係を結ぶことによつて、露西亞をして權利として日本の兵力を利用せしめやうといふやうな考もあるやうであるが、然し之は虫の好すぎる話である。成程獨逸は我々の共同の敵である。けれども獨逸は露西亞にとつては恐るべき現實の敵、日本にとつては敵といのも名ばかりの影法師に過ぎない。之を以て同盟の基礎とすることは出來ない。尤も差當り露西亞の日本と親善の關係を一層増すことによつて得るところの利益は、必ずしも兵力的援助ではなからう。兵力的援助以外の助力ならば、協商關係に依つて十分に得らるゝのである。故に此際日露兩國に於て、何等か現狀に一轉進を加へんとするならば、それは協商であるべくして同盟ではあるべからずと思ふのである。

尙終りに一言したきは、世間には日英同盟に見切りをつけ、英國はもう早や當てにならぬから、場合によつては英國は東洋に於ける我々の敵となるの恐れがあるから、そこで今より英國に代るべき味方を求めるの必要があるといふ立場から、日露同盟に贊成する人がある。甚だしきに至つては日獨露の新同盟を締結して英國に當らんと夢想する者もある。然しながら日英同盟を呪ふのは非常の誤解なるのみならず、甚だ危險な思想であると言はねばならぬ。日英兩國の利害は成程支那の一部に於ては衝突を免れない。然しながら全體に於て兩國の利害は決して衝突して居ない。のみならず兩國は今日まで此同盟に依つてどれ丈け利益幸福を得て居るか解らない。今は日英同盟の功德を數ふる場合でないから悉しくは說かないけれども、兎に角日英同盟を以て其用を終つたものと觀るのは誤りである。從つて日英同盟の代りに、日露同盟を策するといふ議論には贊成が出來ない。さればと言つて日露の同盟することが、必然に日英同盟に裏切ることになるといふ一部の議論も、亦正當とは思はれない。日英同盟は露西亞を共同の敵として、其初め成立したものだけれども、今日となつては必ずしも日露同盟と兩立しないものではない。又日

露が同盟したからと言つて、我國が日英同盟の義務に十分忠實なり得ないといふやうなこともない。日露の同盟は日本の東洋に於ける地歩を一層鞏固にするものなるが故に、却て日英同盟にとつても利益であると思ふ。日露同盟するの必要があるならば、日英同盟の存在に遠慮せねばならぬ道理はない。故に日露同盟の要不要は、日英同盟とはなれて獨立に決すべき問題であると思ふ。若し夫れ日獨露同盟論に至つては、之は英國が我々にとつても最も恐るべき共同の敵として、將しく我々を壓迫する場合に於てのみ起り得べき問題である。本來露獨の接近は日本の利益ではない。何となれば露獨相親めば、彼等は必ずや歐羅巴に於いて利害の調和を計る。露獨の歐に於ける利害の調和は、即ち露西亞の東洋に於ける跳梁を意味する。現に露西亞のラムスドルフ伯は、曾て獨墺と妥協して朝鮮及び滿洲に跋扈した。獨逸も亦歐羅巴に於ける地歩を安固ならしめんが爲に、露西亞の東方經略を唆つた。之が爲めに我國はどれ丈け困難したか解らない。而して此同盟に我國が加入するといふことは、極めて不自然である。此不自然を敢てするといふには、例へば英國の如き強大なる國が、東洋に於て我々の利益を蹂躙するといふやうな、非常な場合に限るのである。今日の場合日獨露の同盟を云々するが如きは全然荒唐無稽の說である。

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

月刊雑誌 世の中

新に生れたる萬人向の雑誌

定價拾八錢 送料一錢半

菊版百五十頁

九月廿日發行 初號目次

■世の中會議（奇想天外）……白柳秀湖

●今日本は何をなしつゝあるか？……

■立花亭の一夜（寄席の實見記）……貝塚澁六

●此頃問題になつて居る人々の噂……

■ケチンボの心理……安成貞雄

●良民を瞞す詐欺師の内幕……

■明治壯士物語……伊藤痴遊

●第二世目白御殿主人渡邊治右衛門……

■三宅雪嶺 幸田露伴 兩博士 毎號執筆■

●世の中は海の如し……鎌田榮吉

●醫者の見た世の中はこんな物……瀬脇ドクトル

■福澤先生と世の中 野依秀一

●和田垣謙三先生國寶論……青柳有美

■自働車珍物語……

●此頃の世の中

●井上侯關係女の行衛

■所得税（長編小説）……田村俊子

■獨逸探偵小説……安成貞雄

東京麹町區有樂町 實業之世界社 振替口座三四三三

（中付二〇一）

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

類書中の模範として實に天下一品

本郷醫院長前澤賢一郎先生
東北帝國大學醫學專門部醫學士池田傳三郎先生
性慾學大家澤田順次郎先生合著

生殖器の解剖と姙娠論

從來生殖に關する書は少からざれども概むね粗雜にして讀むに足らざる物殊に多し、弊堂斷然茲に見る處あり各專門の先生に乞ひ、最近の醫學上男女生殖器の構造、機能等詳細に解剖し生理、病理、姙娠、人工姙娠、避姙、遺精、早漏、過房、老衰、發育不全、手淫障害、花柳病豫防、花柳病療法、婚姻の注意及び姙娠中の攝生、分娩期日表に至るまで何人にも了解し易く加ふるに七十餘の鮮明密圖を挿入し最も興味深く著述したる良書なれば全般の智識を得て知らず有べき疾病は自から豫防するを得べく苟も自己を健康に系統を蕃殖し强健なる子孫を得んと欲する者は望みの子女を擧ぐべき快書也醫師産婆看護婦は勿論青年男女幾百萬人の必讀良書也。

實物寫眞七十餘挿入 鮮明木版

懷中持 五百廿頁新式組一頁 約菊判字詰製本堅牢
總布極美金文字入天金價貳圓
○○○壹萬部かぎり○○○
特價壹圓卅錢
○○○送料密封十二錢○○○

理學博士 石川千代松先生序
性慾學者 澤田順次郎先生著

生殖左右論

懷中持總布製金文字入
天金鮮明(密圖)十數個
正價四十五錢送料六錢

既婚及び未婚との男女一般必讀書

東京神田五軒町一八
有文堂書店
電話下谷二四五二
振替東京二三七

(中付二の二)

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

新刊

■松崎天民君著■

人間世界

■三國久畫伯装幀■

天民式の觀察と、天民式の文章に、一新生面を開けるものは、正に此の「人間世界」なり。著者の生活を背景として、樣々の「人間」を眺め、著者の生活を根柢として、現代の「世界」を觀たるもの。感想に叙情に、批評に、日記に、大膽なる告白と、忌憚なき評論と、赤裸々の叙事と、相錯綜して興味淺からず。或る時は議會に、劇場に、カフエーに、待合に、街上に、旅中に、書齋に、或る時は漂泊の男と語り、或る時は流轉の女を悲しむ。最も強き生活味と、最も激しき情熱の流露せるは「人間世界」の特色とする處なり。

中判總クロース
美装幀函入
正價金九拾錢
送料金八錢

（中付二の四）

新刊

■東京朝日新聞記者 岡本一平著並畫■

漫画と文 マッチの棒

今賣出しの漫畫家にして又奇拔なる文章家の一平君が得意の畫筆とペンをソツト内懷に秘し大阪へ行つては富田屋八千代を聘び金華山では鯨を獲り越後へ八ツ目鰻を喰ひに行つたり茂林寺の文福茶釜の毛の有る無しを調べたり等其の他ズバ拔けた奇行の數々を氏獨得の書と文で裏の裏まで描き出し奥の奥まで穿ち拔いてある面白い事は勿論先樣御承知の筈。

四六判洋装
二百六十余頁
定價金六十五錢
郵税金八錢

■發行所 東京日本橋鐵砲町六 振替東京壹五〇五六番 磯部甲陽堂■



A辯護士の取扱ひたる犯罪ロマンス（五）

松崎天民

境遇に依つて、罪と知りながら罪を犯す男もあれば、遺傳性に依つて罪と知らずに罪を犯す女もある。罪人に對する法律の眼は、一様一列に總體を處罰して、何の假借するところも無い。斯て、悲しむべき犯罪の哀話は、罰する人と罰せられる人との間に、常に事新しく繰返されて居る。A辯護士が過去八年間に取扱つた事件の中にも、境遇や遺傳に依つて、「罪の人」になつた者が、一人ならずあつた。憎むべき罪惡の蔭に、憫れむべき性の叫を見る時、誰か同情の涙を濺がぬものがあらうぞ。然もそれが妙齡の女性であつた場合には、更に戰慄すべき事實であり、戰慄すべき問題である。

彼の女の行方

一、未見の愛子さん

愛子さん——未見の愛子さん——

私はまだあなたに逢つたことはないが、今朝、番町のA辯護士を訪ねて、秋田訛の金歯の口から、あなたの身の上話を聽いてより、俄にお目にかゝり度いやうな氣持になつた。

いろ／＼承れば、實にお氣の毒な身の上で、たゞ／＼御同情申し上げる他はない。實は一應お訪ねして、しみ／＼お目にかゝり、あなたの口からあなたの過去にあつた事件や、あなたの現在の心持などを、親しく承

りたいと思つて居るが、目下は何所へ居られるやら、住所が判らないとのことに、非常に失望した。

「犯罪ローマンス」の掉尾を彩る材料として、あなたの過ぎ來し方を眺めるにつけても、私は今更の様に、いろ〳〵な事を考へた。あなたの犯した罪が、果してほんとの罪であるか何うか、私にはそれが第一の疑問である。若し又それが、刑法の第何條かに觸れる罪惡にしても、犯したあなたが惡いか、犯させた世間が惡いか、これも疑問であると思ふ。

未だ十九歳と云へば、女も蕾が開いたばかりの妙齢(としごろ)を、謂ふ所の「罪」に隱れて、暗い日蔭の月日を送つて居るあなたが、私は氣の毒で堪らない。あなたの所在が判ら無いために、檢事局でも起訴を猶豫して居るさうだが、願くば何時までも、罪人としてのあなたを見たくない。それはあなた自身のためばかりに云ふのではなく、「若い女」の長い行末の幸福のために、あなたを罪人にしたくない。

Ａ辯護士から、いろ〳〵あなたのお身の上を聽いた時、私は先づあなたの面影を想像して見た。「中肉中背のスラリとした方で、何となく男好きのする顔だ」とのみで、其の男好きのする顔に、何んな「過去」を表現して居るか、私は第一にそれが知りたかつた。十六年間の新聞記者生活に、多くの男や女に接して、人の顔を透して其の心を讀み得る様になつた私は、何を措いても先づあなたの顔を見たいと思つた。辯護士のＡさんから聽いただけでは、完全に解釋することの出來ないあなたの心持を、私はあなたの顔に依つて、底の底まで見拔かうと思つたのである。

それにＡ辯護士の話に據れば、あなたは私を知つて居ると云ふではないか。「松崎天民さんならば、お書きになつた物を拜見しましたばかりでなく、一二度お見かけしたことがあつてよ」と、あなたは話して居られたと云ふではないか。何時(いつ)、何所(とこ)で、あなたは私の黒い顔を見たのか、私には少しも心當りが付かないけれど、そんなことを聽くと、私は一層あなたに逢つて見たい心持がした。Ａさんも、

「居所さへ判れば、一度、逢つて見ると宜いのですが、今ちよつと行く方が判らないものだから……」と非常に殘念がつて居た。行く方の判らないあなたに宛た手紙風にして、あなたの「過去」を書くのは、何だかたより無い氣持がするけれど、私の當面の興味は、所在の判らないあなたと云ふ女を相手にして、あなたの日記に朱筆を加へることにのみ集注して居る。

あなたは去年の梅見時から、青葉若葉の頃まで、銀座の或るレストランで、ウエートレスを勤めて居たさうだ。あなたの居たレストランには、開業當時招待されて、たつた一度行つたのみで、今日まで未だ一度も「お客樣」に爲つたことはない。從つて其所にどんな女が居たか、何んなエプロンの女が居たか、私には少しも見當が付かない。たゞ朝日新聞に勤めて居た當時は、朝晩に必ず一度、其所の前を通つて、硝子戸に映る自分の黑い顏を、ちよい／＼横目で眺めた位に過ぎない。況んや其のレストランの二階に、あなたと云ふ女が居ることや、そのあなたが私の愛讀者であり、また私の顏を知つて居ることなどは、夢にも知つて居やう筈がなかつた。

それがA辯護士の話に依つて、未見のあなたと云ふ若い女と、三十八歲になる新聞記者の私とを、興味の上に結び付ける一種の因緣となつた。あなたは今、どんな所で、何をして暮して居るか知らないが、私は靑山南町四丁目の宅で、あなたの身の上を考へながら、大急ぎで此の手紙を書いて居る。時に大正四年八月十三日午前二時、二階の書齋兼客室兼寢室の八疊に、縫目無しの白い蚊帳を釣つて、その中に入つて、萬年筆を走らせて居る。

蚊帳の外には、三十二燭のマツダ電球をブラリと下げ、蚊帳の中には中机を入れて、背後から煽風器に煽がせながら、且つ考へ且つ書いて居ると、緣日で買つて來た鈴蟲が、秋を待つ身のつらさを鳴く音が聞える。

二、お父さんの血汐

愛子さん――未だ見ぬ愛子さん――

あなたのお身の上を聽いた時、私は先づ氣の毒な人だと思ひ、不憫な女だと思つた。あなたよりも憐れむべき女、あなたよりも悲慘なる女は、世間に幾人もあつて、あなたよりも苦勞をし、あなたよりも泣いて居る。けれどもあなたも亦、數多い女性の中では、不運な月日の下に生れた一人として、同情を受け得る女であることを、氣の毒に思つた。

あなたは今、詐欺取財犯と云ふ、忌はしい罪名の下に、僅に起訴を猶豫されて居るに過ぎない、謂ば其筋の注意人物である。居所さへ判れば、直ぐに冷たい公判廷に立つて、嚴しい審判を受けねばならぬ身の上である。たとへあなたには、何んなに正しい言分があつても「詐欺取財犯」と云ふ過去の黑い陰影は、あなた一人の力のみでは拭ひ去ることが出來ない。私は何よりも先づ、それを氣の毒に思ひ、それを可愛相に思ふ。

あなたのお父さんは、靑森縣でも有數の資産家として、一時はなか／＼羽振りを利かしたものであつた。政治上の事には表立つて、晴々しい舞臺に立つたことはないが、縣會議員の操縦とか、代議士選擧の魂膽などには、無くてならぬ一人であつた。靑森縣で横山策郎と云へば、政治上にも財界にも、一種の潜勢力を有つて居る人として、地方の人々からも畏敬されて居た。あなたは其所の四人兄弟に長女と生れて、何不自由ない月日の下に、十六歳の秋までは、可愛いお孃さんに育つたのであつた。

それから今日まで、僅に足掛四年の間に、あなたの華やかな生涯は、麗朗な春の日から、木枯し荒む冬の野へ、一足飛に轉倒してしまつた。それはあなた達の與り知らぬ怖ろしい運命の魔の手が、横山一家の生活を根柢から破壞したので、あなたは其の中でも、最も悲しい犠牲になつた一人であつた。私は其の間の詳しい經路をA辯護士から聽いて、女に生れたあなたの不幸と、美しく生れたあなたの災禍とに對して、淺からぬ同情の心が起つた。「弱き者よ、爾の名は女なり」と云ふ月並の言葉も、あなた一人の場合には、別に深い意味がある樣な心地かした。

横山策郎と云ふあなたのお父さんは、仁義を重んずる侠客の血汐と、殺害を事ともせぬ博徒の血汐とを、其の脈管に湛えて居る人であつた。二ヶ所の鑛山に奇利を占めて、一擧に四五十萬圓の金を懐中にした時が、お父さんの晩年を飾る全盛期で、又全生涯を通じての得意時代であつた。東京に出て、大石正巳など云ふ政客とも往來すれば、實業家の間にも出頭沒頭し、又或る時は亡命客と結んで、謀議の一員に加はつた事もあつた。たゞ性來、理財の途に暗いのと、侠客的氣分と博徒的氣性とが累をなして、屢々險道を歩いた爲め、時には法規に觸れる樣な言動さへあつた。檢事調べや豫審に附せられた事が、前後を通じて十一回あつたと云ふに見ても、あなたのお父さんが如何に大膽で、如何に無謀であつたかゞ判る。

それも財力が有り聲望が高い時代には、世間も總てを善意に解してくれるし、危い法網を免れる事も出來るが、一朝失敗して力ある後援を失ふことになると、善意ある行動でも、それが一身の禍因を招く樣な場合が多い。あなたのお父さんは、性來の太つ腹から、少しくらゐ法律に觸れる程度の事は、何の顧慮するところなく、無意識に遣つて來たが、終にはそれが一種の習慣性になつて、益々荒み行く一方であつた。果は四五十萬圓の金も費ひ果して、身邊のことが不如意に陷り初めた時、兎もすれば頭を擡上げたのは、險しい道を歩いても宜いから、思ふ儘に振れ舞いたいと云ふ、例の無謀な博徒的の考へであつた。

お父さんが斯うした考へを起した時には、あなたもまだ十六歳のお孃さんで、雨にも風にも涙を知らぬ穏かな月日の下に、赤いリボンを飜へして居た。縣立高等女學校へ通ふ姿を見る町の人々は「横山さんのお孃さんは美しい」と云つて、口々にあなたの前途を祝福して居た。あなたも亦、過ぎ來し方の幸福を懐ふにつけても、榮ある行く末の樂しい夢を抱いて、人知れず微笑むで居たに相違ない。

さうかうして居る間に、怖ろしい運命の潮は、先づお父さんの身の上に襲うて來た。哀れ聲望一縣に高か

つた横山一家の礎を、根柢から崩壊し去るべき日も、次第に近づいて來た。横山一家の悲劇と、あなた一人の哀史は、斯うしてお父さんの事件から發足したのであつた。——

三、未決へ入るまで

愛子さん——逢いたい愛子さん——

あなたのお父さんは、兎にも角にも地平線以上に傑出した人であつたが、其の生涯も其の最期も餘にまた非凡であつた。何かしら大きな事業を成し得る人として、多大の期待を負うて居ながら、あなたのお父さんの歩いた道は、餘に險しい山坂道ばかりであつた。

今の熊本縣知事上山滿之進が、まだ山林局長を勤めて居た頃、あなたのお父さんは國の者に頼まれて、山林拂下げの運動に着手した。それは大正二年のことで、あなたが十七歳の花にも香にも、蝶々の戯れる頃であつた。所謂「緣故特賣」と云つて、其の拂下げを受けるまでには、相應の運動と運動費とが必要であつた。あなたのお父さんは、先づ上山局長の部下の者と稱する男二名に遇うて、いろ〱奔走盡力した後、郷里の者が要求しただけの山林は、拂下げを受ける事になつて、早速其の者を郷里の者に通知した。

間もなく郷里から上京したのは、山林の拂下を受ける根田と云ふ男であつた。根田とお父さんの間には、拂下が成就したら、謝禮やら運動費やらとして、金二千圓也を根田からお父さんに渡す約束になつて居た。そこでお父さんは、內金として一千圓を根田から受取り、これを山上局長の部下二名に分配したが、爭ひは何時しか此の一千圓から起つた。上山局長の部下と稱する男二名は、一千圓の割前に就いて、あなたのお父さんの所置が氣に食はぬとて、不平と苦情を持込んだけれど、お父さんは笑つて頓着しなかつた。賄賂を取つた二人に對して、賄賂を贈つたお父さんは、頭から喧嘩相手になる男ではなかつた。

山林拂下を餌として、私服を肥さうとした一人の男は、相手にならぬ横山の態度に憤激して、直接に根田へ宛て、一通の手紙を送つた。それには、

——横山策郎は、決して信用すべき男ではない、横山が上山局長だと云つて、貴下に紹介した男も、實は上山滿之進の代へ玉である、横山如きを信用して居ては、山林拂下げの事も、何うなることやら覺束ない、就いては今後の奔走萬端は、總て自分等二人に全權を委任されたい、上山局長に取入る便宜と方法、は自分等二人が何も彼も心得て居る、殘額の運動費一千圓も、横山の方へは送らず、直接自分等の方へ送つて貰ふ方が、極めて便利である——

と云ふ樣な事を、言葉巧に書いてあつた。此の手紙を見て驚いたのは、あなたのお父さんを信じ切つて居た根田であつた。何かの間違か、それとも運動費を詐取されたのではないかと、いろ〳〵思ひ惑うた末、根田は何うして宜いやら、自分が判らなくなつた。

根田はいろ〳〵思案した末、詳細な事情を書面に認めて、上山滿之進に問合せて見た。大正第一次の政變で、山林局長から熊本縣知事に轉任して居た上山滿之進は、根田の手紙を見ても、何が何やら少しも判らなかつたけれど、山林拂下を名として、何等かの不正事が行はれて居ると云ふ事だけは、上山知事も直に看破することが出來た。根田の書面に添えて上山知事の意見を書いた親展書が、警視廳の刑事課に到著した時、暗默の間に在つた事件は、初めて其筋の探偵眼に映ずることゝなつた。上山の乾分と稱して居た二人の男の喚問に追いで、あなたのお父さんは、詐欺取財、委托金費消、横領など云ふ罪名の下に、東京監獄の未決囚へ收檻される身の上となつた。

A辯護士があなたのお父さんに逢つたのは、お父さんが未決監に入つてから間もない後であつた。さすがのお父さんも、其の當時は閉口して、

「上山の乾分だと云ふ伊藤と才木の二人が、自分を利用して二千圓を着服せんとしたので、自分には最初から惡意が有つての事ではない。就いては心臟が惡くて困つて居るし、一つには自分に有利な證據を收集したいから、保釋願の手續をして貰ひたい。保釋金の百圓は、郷里の妻女に申送つたから、日ならず

送つて來ると思ふ」

と、詳しい事情をA辯護士に話したさうである。お父さんの所爲が、果して罪になるか何うかを究める前に、A辯護士が最初に感じたのは、「お父さんの樣な、犯罪性の傾向を帶びて居る者は、一生に一度は必ず、獄裡の人になるのが、當然の事である」と云ふ、一種の强い反感であつた。

あなたの悲劇は、かうして幕が開いたのであつた。

四、百圓の借金ゆゑ

愛子さん――お氣の毒な愛子さん――

お父さんの入獄は、あなたの一家にとつて、實に寢耳に水の大事件であつた。殊にあなたの一生涯にとつては、深い悲しい創痍を負うた大事件であつた。父親一人の入獄と云ふ事實が、其の子に及ぼす影響の悲慘な實例として、あなたの身の上を眺める時、誰一人として泣かぬ者はあるまい。

さらでだに、家計不如意に陷つた居たあなたの一家は、お父さんの入獄する前から、一層左り前に傾いて居た。兄の三郎さんは中學を五番の好成績で卒業して、東京高等商業學校に入學する豫定であつたが、入學試驗には及第しても、入學するだけの學資が心許なかつた。あなたも師範學校に入學する積りで、それとなく勉强して居たが、お父さんの入獄後は、それどころの騷ぎではなかつた。

最も仕合せであつたのは、何も知らぬあなたの妹二人だけであつた。お母さんは、獄中のお父さんから申送つて來た保釋金の調達方に就いて、毎日の樣に思ひ惱んで居たが、尾羽打枯らした當時の境涯では、百圓の金は半額さへも思ふに任せなかつた。獄中の良人の上を思ひ、四人の子の上を想ひ煩ふては、殆ど狂氣せんばかりで、お母さんの壽命も人知れず縮んだであらう。たゞ差し當つての問題は、入用の百圓を何うして調達しやうかと云ふことであつたが、お母さんには宜い思案が浮かばなかつた。苦しい時の神賴みは、心に慰藉を受けるばかりで、良人を獄中から連れ出すだけの金は、神樣も持合せて居なかつた。

いろ／＼思案した揚句、お母さんが金策を賴みに行つたのは、弘前の武藏樓と云ふ女郎屋であつた。お父さんが全盛の頃には、毎夜の樣に大盡遊びをして居たので、土地の者も「武藏樓は横山の旦那のお蔭で、今日の樣に大きくなつた」と噂し合つて居た。お母さんが此の武藏樓へ行つて、退引ならぬ事情を訴へ、百圓の調達方を賴んだのは、眞に萬止むを得ない場合なのであつた。人の娘を金で購つて、其の貞操を賣つて生活して居る武藏樓も、豫て恩顧を蒙つた横山一家のためには、薄情な挨拶をする譯にも行かなかつた。

「他ならぬ横山樣の事ですから、承知しました、百圓だけは何とか工面して、必ず御用立いたしませう」

けれども武藏樓が百圓の金を貸すに就いては、一つの交換條件があつた。それは恰度、弘前の祭禮で、何かと人手が入用の場合だから、當分の間お孃さんを貸してくれと云ふ、世にも氣味の惡い挨拶であつた。お孃さんと云ふのは、當時高等女學校を三年で退學して、身の行末を案じ煩ふて居た十七歲のあなたであつた。お母さんは此の挨拶を聞いて、何んな心持がしたか、泣いたか、怒つたか、笑つたか、罵しつたか、察するだに淚の種である。更にお母さんから、以上の話を聞かされた時、あなたの思は何んなであつたらうと、私は當時の心持を察することが出來る。

「自分さへ武藏樓の意に從へば、百圓と云ふ金が出來て、獄中の父を迎へることが出來る。何も百圓で身を賣り、貞操を穢すと云ふ譯でもないから、進んで武藏樓へ行つて、お母さんにも安心させやう」

婦人觀や道德觀の根柢に、些の動搖を見ない昔であつたならば、あなたの斯うした覺悟は、健氣な孝子の龜鑑として、確に世の賞讃を博したに相違ない。たゞあなたは斯うした一種の功名心のために、百圓の身の代となつたか、又は何事も運命と諦めて、泣いて武藏樓へ行く氣になつたか。何れにしても、私はこれを悲慘なる出來事と認め、その出來事の女主人公とならねばならぬあなたの不幸に對して、深い／＼同情を表するものである。

間もなく兄の三郎さんは、東京へ行くと云つて、生れ故郷の青森市を立去つた。お母さんは又實家へ行つて來るとて、二人の妹さんを連れて、何れへか姿を隠してしました。お父さんの入獄と云ふ一事が、斯うして一家の離散を見るにつけても、あなたの心持は何んなであつたらう。淺蟲の叔母の許へ行くとて、住み馴れた町を後にしたあなたは、叔母の養女になつて、横山姓を大友姓に改めた後、弘前の武藏樓に、其の姿を現したのであつた。

百圓の借金に活きた證文として、人質同様に取られたあなたの身の上は、昔の小説を其の儘の事實ではないか。武藏樓へ行つてからのあなたの成行を思ふ時、私は百圓で購ふにしては、餘に貴い血と涙の犠牲である事を悲んだ。

五、身を沈めてから

愛子さん――不憫なる愛子さん――

弘前の武藏樓へ行つてから後、あなたは何んな月日を送つて居たか、私には明に想像することが出來る。そして何んな心持で暮して居たか、それも大抵は推察することが出來る。私は僅に百圓の金に依つて、人質同様になつたあなたの身の上が、重ね／＼氣の毒で堪らない。若いあなたの花の様な生涯を、僅かの金に依つて蹂躙つた運命の魔の手を、私は心から呪はずには居られない。

あなたが武藏樓へ行つた當時の心持は、あなたの友達の×子の兄さんに宛て、あなたから送つた手紙が、最も能く說明して居る。私は其の手紙をA辯護士から見せられた時、何とも云へぬ悲しい氣持がした。あなたはもう忘れて居るかも知れないが、其の手紙には斯う云ふことが、細々と書いてあつた。

敬慕する兄上様、私に兄様と呼ぶのを許して下さいまし、若しお前の様な賤しい女から、兄様と呼ばれるのは穢はしいとお叱り遊ばしても、決してお怨はいたしません、實際私は穢はしい身の上ですもの、然し薄命に泣く弱い女の愚痴と思召して、この手紙だけは一通りお讀み下さいませ、こればかりは一生

のお願です。

兄様、兄さんが私の兄さんと呼ぶのを許さぬとしても、私はあなた様のお名前は呼べません、矢張兄様と呼ぶ外は無いのです、情深いあなた様が、馬鹿な妹を一人もうけたと思つて、私に兄様と呼ぶことをお許し下さるならば、どんなに嬉しいでせう、私はあなた様が妹と呼で下さる一言を聞きたうございます、承りたうございます。

兄上さま、私が突然お手紙を差上げる無禮をお許し下さいませ、私はどうしても此の手紙を讀で頂かなければ、氣が濟まないのでございます、甚だ勝手がましく又御迷惑とは存じますが、皆さんが寝鎮まるのを待つて、此の手紙を書く事にいたしました。

兄上様、昨晩突然、あなた様とお逢ひ申した時は私は何んなにか驚いたでせう、どんなにか恥しかつたでせう、穴があつたら這入りたいやうに思ひました、けれども私は勤めの身のそんな我儘は出來ません、素知らぬ顔をして居ましたが、胸の動氣は早鐘のやうでした、私の頭は惑亂して居たのでございます、兄上は私を見て、定めし淺間しい女だと思召したでせう、さう思はれるのが當然です、だが私はさう思はれるのが辛うございました、出來るならば此うなつた身の事情を打明けてお話いたしたいと、思ひましたが、それさへも出來ません、斯うした境遇になるのも、前世からの惡因縁だとあきらめて、私は私の墮落の淵に沈んだ事情については、何も申さぬと覺悟して居ます、申せば家の恥、親兄弟の恥ですもの……

兄上様、世の中には身を立つるに由なく、思迫りて身を捨る人もあります、また黒染の衣に身を包んで、一生を尼となつて朽ち果る人もあります、世の人は斯る身の上の人を、哀れとも傷しいとも申して、同情しますけれども、尼ともなれず死ぬ事も叶はず、心に大きな傷を負ひながら、死に勝る苦痛を忍んで、苦しい月日を送る身にくらべては、尼になつたり死だりするのは、かへつて幸福であり、また容

易な事ではないでせうか。

兄上樣、私は尼になることはおろか、死の途をもえらむ事は出來ませんでした、そして今現に遙に死にまさる苦痛を抱きつゝ、死せる形骸を僅に生き長らへて居るに過ぎないのです、あゝ此の濁りに染まぬ潔き血汐が、やがては闇に吼ゆる猛獸の如き男の餌食となるかと思へば、前生いかなる罪を犯せしかと、既に覺悟極めし身なれども、限りなき口惜しさと悲しさとが胸に迫ります、人の寢靜つた月の夜、星のかゞやく深更など、獨り二階の窓から空を仰げば、悲しさに胸が充ちて涙が止度もなく流れます、萬感交々至つて、夜もすがら泣き明したことは、そも幾夜あつたでせう――

私はこゝまで讀で來て、何よりも先づあなたの文章が巧いのに驚いた。辿る瀬ない胸の悶えを、流れるやうに訴へて居るところに、まだ淸いあなたの涙があると思つた。あなたの樣な境涯に落た女は、大抵一度はあなたの樣な悶えと悲みと歎きとを通つて、遂には深い泥水の底に沈むでしまう經路をも考へて見た。

六、淪落の女になる

愛子さん――悲慘なる愛子さん――

私は又あなたの手紙を讀みつゞけた。高等女學校を三年まで學んだ十七歲の娘にしては、少しませ過ぎて居ると思はれる程の文章を通して、あなたの娘らしい感慨を讀む人は、必ずや同情の涙を惜まないであらう。

兄上樣、私は今更ながら過去が懷しうございます、悲哀の影、幽愁の雲とては一點もなく、スヰートソローに小さきハートを痛めては、一人淋しく微笑だ半年前が戀しうございます、噫されど〳〵一度死したる心は、いかでか懷しい昔に還ることが出來ませう、あはれ長閑なる春の心は永久に私を見捨て、唯獨り心淋しい曠野を辿らねばならぬ身となり果てました、我が住む天地は風吹き荒み、波立ち騷ぐ荒海に掉す果敢い運命になつたのでございます。

兄上樣、私には過去もありません、未來もありませ

ん、たゞ現在に生きて苦しい思をしながら、其の日其の日を過して居るのでございます、あゝ青春十七の若き血汐を、穢され踏みにじられるのを知りながら、遁れやうとして遁れることの出來ない私は、所詮こんな運命の下に朽ち果るのでせうか、それにしても心ばかりは腐り果たくないと決心して居ます。胸迫りとても此の上書けません、涙に滲み勝な筆の跡、宜しく御判讀のほど願ます、そして若し兄様とお呼び申すことをお許し下さいますならば、時々はお手紙を下さつて、濁に染められやうとする私の心を洗つて下さいまし、先は御身御大切に……

武藏樓へ人質に取られたあなたは、間もなく「濱子」と名乘つて、客席に現はれる樣になつた。藝妓や娼妓の間に交つて、いろんな浮かれ男の相手をしなければならぬのは、あなたに取つても何よりの苦勞であつたらう。それに金より他に眼のない武藏樓の主人は、十七やそこらのあなたに向つて、毎夜の樣に賣春を强るのであつた。婦人の貞操を反物の賣買ぐらゐにしか心得て居ない周圍の中に在つて、處女の純潔を保たうとするのは、並大抵の努力ではなからう。それでもあなたは、口に奈良丸くづしを唄いながらも、肌身だけは何者にも許さずに、「武藏樓の濱子」としての月日を、比較的安全に送つて居たのであつた。

あなたの身の代金に等しい百圓の金に依つて、娑婆に出る事が出來たお父さんは、人傳を以てあなたを取戻さうとしたけれど、武藏樓では百圓の金を楯にして、何うしても、あなたを手離さなかつた。それのみならず、あなたが、酒席へは出ても、男の枕席には侍らぬと云ふ一徹さに、内々持餘し氣味で居た武藏樓では、あなたを他へ住替させて、百圓の貸金を取戻さうと目論見で居た。何も知らぬあなたは、親から貰つた名の他に、「濱子」と云ふ名で生きねばならぬ境涯に落て居ながら、それでも未だ處女の純潔を保つて、憂き悲しい月日の中にも人知れぬ微笑をもらして居た。

さうかうして居る間に、あなたは八戸の玉家に百六十圓で賣られて、生れた儘の愛子と云ふ名で、再び客

の機嫌を取らねばならぬ身の上になつた。武藏樓に居た時には、我儘氣儘に振れ舞ひ得て、厭な客は取らずとも濟んで居たが、玉家ではさう我儘ばかりしては、其の日〳〵を送ることが出來なかつた。浮き流れの女を取扱ふのに、犬か猫を遇ふ以上の情愛を知らぬ玉家の主人は、あなたが横山のお孃さんであつたと云ふ、過ぎ來し方の身分などは少しも認めず、たゞ娼婦としての勤めを强要した。十七歳では法規の年齢に逹せぬため、玉家ではあなたを無鑑札の娼妓にして、客の酒間を斡旋させたり、また客の好みに依つては、强て枕席に侍らせやうとして居た。

男女關係の放縱淫逸な事を、弘前の武藏樓で見聞して來たあなたは、八戸の玉家に住み替へてから後は、次第に別人の様になり行くのみであつた。

「今度、玉家へ來た愛子は、女學生上りの可愛い女で、なか〳〵面白いところがある。それに文學思想も有るし、一寸話せる女らしいよ」

斯うした評判が、若い男の仲間に傳はり初めた頃から、あなたはもう昔の純潔な處女ではなかつた。悲しい月日も、馴れるに從つて面白くなり、苦しい境涯も、時經つに從つて愉快になつた。そして、何時しか猛然として、頭を擡上げて來たのは、あなたの内に潛む本能の力であつた。あなたは異性に弄ばれながらも、遂には異性に慰籍を求めねばならぬ様になつて居た。

七、密に逃走の覺悟

愛子さん――遂に墮落した愛子さん――

あなたが惡いのでは無く、あなたに罪が有るのではない。女學校を出たばかりの十七やそこ等のあなたを、さうした色香の巷に放り出した世間が惡いのである。最初の間は歎き悲しみ、苦しみ悶えて居ても、遂には習慣性になつて、墮落し行くのが、當然の結果である。決してあなたが惡いのではなく、決してあなたに罪が有るのではない。

けれどもあなたの墮落は、餘りに高い犧牲であつた。何も彼も運命と諦めて、あらゆる慘虐の前に服從して居ながら、あなたの心の一隅には、何うかすると、

運命に反抗する手強い叫び聲が聞えて居た。自個と云ふものを考へることを知らない多くの無智な女は、安んじて「諦め」の前に額いて、幸福らしい月日を送つて居る。あなたも一度は其の「諦め」に依つて、安心立命の地を得やうとして居たが、多少の理智が働くあなたにとつては、それは何の甲斐もない空しい努力であつた。あなたは僅百圓の金に依つて、淪落の女の群に落ちた經路を考へる毎に、自分が盲目的に服從した過去の「諦め」が、何の價値も無かつたことを發見したのであつた。

玉家に於けるあなたの生活は、勢ひ捨ばちの様に見え初めて來た。「諦め」がほんとの「捨ばち」になつた時、多くの女は、遂に救ふべからざる墮落の「どん底」に沈むのが例である。けれどもあなたの捨ばちは、心からの自暴自棄ではなかつた。運命に反抗する最初の絕叫が、捨ばちらしい調子を帶びて、人々の前に現れたのみであつた。それと明ら様には自覺せずとも、あなたは機會さへあれば、玉家を逃走して、新しい運命を開拓したいと思つて居たに違ひない。吹雪に寒い北國の空で、「カチユーシャ可愛や」を唄つたり、「大高源吾は橋の上」を唄ふ女にしては、あなたは餘に自分と云ふものを知り過ぎて居た。玉家の愛子として、寒い雪國を彩る日陰の花で一生を終るのは、あなたにとつて堪え難い苦痛であつた。これではいけない、何とかせねばいけないと思ふて居る間に、年は雪に暮れ雪に明けて、大正三年の一月となつた。

A辯護士は大に辯論に努めたけれど、あなたのお父さんは一年の懲役に處せられて、巣鴨監獄で新年を迎へねばならぬ身の上になつて居た。父は獄裡の人となつて寒さに慄ひ、母は二人の子を抱いて路頭に迷ひ、自分は淪落の群に入つて、淺間しい月日を送つて居る――と思つた時、あなたは泣くにも泣かれぬ一家一族の不運と薄命を悲んだ。そして、

「こんな所で、愚圖〱して居る時ではない」

と、人知れず覺悟を極めて居た時に、悲しむべき電報は、あなたを昏倒させんばかりに驚かした。それは巣

網監獄に苦役して居たお父さんが、獄中で重病に罹つて、全快の見込がないために、宅下げとなつて居たが、終に死去したと云ふ通知であつた。

當時、東京に貧乏暮しをして居たお母さんは、瀕死のお父さんを狹い住居に迎へて、四日間と云ふものは、夜の目も合さずに看病したけれど、終に不幸なお父さんは、不幸なお母さんや不幸なあなたを殘して、永久の旅路に就いたのであつた。「チヽシンダ」との電報を握つた刹那、あなたの悲嘆と哀傷は何んなであつたらうか、想像するだに眞に涙の種である。

お父さんの死顏を見ることは出來ずとも、せめて位牌の前に額いて、親と子一世の別れがしたいと思ふのは、子と生れた者の至情である。あなたはお父さんの死去を機會に東京へ行つて、久し振りに母や兄妹に逢ひたいとて、玉家の主人に頼んだけれど、主人は無情にも、あなたの上京を許さなかつた。一つには逃走の虞があつたし、また一つには稼ぎ人のあなたに出られては、店が困ると云ふを口實にして、一歩も外に出さぬ様に、あなたの擧動を注意したのであつた。

逃走しやうとしたあなたの決心は、此の時から一層具體的になつて、一日も早く好機會の來ることを、あなたは神かけて祈つて居た。百六十圓の身の代金以上の稼ぎをして、玉家には相當の利益を與へて居たので、あなたは無斷で逃走しても、罪にならうなどゝは、夢にも思はないのであつた。たとへそれが少しは惡い事であつても、そんな事を顧慮して居ては、一生涯浮ぶ瀬が無いと云ふのが、あなたの玉家を逃げ出す重な理由であつた。

けれども玉家を逃げて、八戸を立去り得る様な機會は、容易にあなたの前に來なかつた。

八、東京に復活する

愛子さん――同情すべき愛子さん――

玉家を逃げやうと決心したあなたの覺悟を、上帝も聖覧されたと見え、月が還つて二月に入るや否、一人の老人があなたの前に現れた。そして其の老人は、あなたの命令ならば、火水の中も厭だとは申さぬと云

ふ、世にも奇特な有難い神様の使者であつた。

神の使者は、五十の坂を越した老人の癖に、相應の金を持て居て、酒を飲めば醉拂ふし、女を見れば涎を垂らすし、他愛の無い割合に色氣の有る男であつた。其の男があなたの色香に迷うて、あなたの云ふ事ならば何でも承知すると云ふのが、天の授けた好機會であつた。あなたは生れて一度も見たことのない東京見物をしたい、それが一生の願事であると云つて、巧に神の使者を說伏した。あなたの事ならば、何でもよしよしと承知する神の使者は、喜んであなたと一所に、東京見物に行くことをも承知したのであつた。

神の使者と云ふお大盡様と一所の事ゆゑ、玉家の内でも安心して、あなたを旅に出した。祝儀も玉代も、神の使者が拂つたので、あなたは誰に遠慮もなく、のび〳〵とした氣持になつて、玉家を立出ることが出來た。そして二人連で、東京方面行の汽車に乘る筈であつたあなたは、何時の間にか一人になつて、田邊の方へ逆行して、何時しか姿を晦ました。哀れを止めたのは神の使者たる老人で、掌中の玉を奪はれた樣にポンヤリして、空しく停車場に立盡すのみであつた。玉家の男衆が馳せ付けて、「愛子のあま奴め、ドロンを極めやがつたな」と、目玉を大きく一つ剝いた時、あなたは豫定の行動を取つて居たのであつた。

八戸から逆行して、田邊附近の雪中に隠れたあなたは、殆ど三日間と云ふものは飲まず食はずで、降り積る雪の中に倒れて居た。飢寒のために半死半生になつて、苦しみ悶えて居る處に、通りかゝつたのはお誂への村人であつた。取敢ず家に連込んで、いろ〳〵介抱した甲斐あつて、三四日の後に、あなたは平生のやうな身體に復つた。そこで事情を聞けば斯くの通り、それは近頃お氣の毒な次第とあつて、親切な村人から若干の金を惠まれ、それを旅費として東京へ着いたのは、大正三年二月下旬のことであつた。汽車が上野驛へ着いた時、あなたは虎狼の窟から遁れた樣な氣持になつて、初めて心から「やれ、やれ」と安心したことであらう。

場末の路次に住で、其の日〳〵を暮して居たあなたのお母さんや、二人の妹さん達は、久し振にあなたの姿を見て、何んなに喜ばれたことであらう。位牌になられたお父さんは、それと明ら樣に物云はぬけれど、必ずあなたが歸つたことを、草葉の蔭から喜んだに違ひない。兄の三郎さんは保險會社に勤めて、不如意勝と云つても、親子兄妹が久し振りの同棲には、賑かな笑ひ聲が先に立つた。長い間を酒色の家に暮して、心も身も荒み切つて居たあなたは、其のまゝお母さんの許に同居して、靜に健康の回復を待つことになつた。

思へば夢の樣な一ヶ年、雪深い國に流轉の女となつて、樣々の悲喜劇に泣いたり笑つたりしたことが、何かにつけて思ひ出の種となつたであらう。自分で自分の淺間しかつた姿を、過ぎ來し方に眺める時、先づ第一にあなたの心を衝いたものは、お父さんの罪惡、お父さんの入獄、お父さんの死と云ふことであつた。

久し振りに平靜な生活を送つて居たあなたを、第一に驚かしたものは、八戸の玉家から來た手紙であつた。「東京へ逃げた以上は仕方がないけれど、今急いで歸りさへすれば、何事も穩和に濟む」と云ふ樣なことを、細々と書いてあつた。そして「萬一歸らない樣ならば、百六十圓の貸金を此の際返却してくれ、若し長引く樣であつたら、當方にも所存がある」と云つて來たりした。酒席で馴染になつた若い男からも、「戀しい君が歸らなくては、八戸も寂しくていけない」とか、「一日も早くお歸りを待つ」と云ふ樣な手紙が、兎もすればあなたの心を搔き亂さうとした。

けれどもあなたの心は、もう雪深い八戸や、思ひ出悲しい弘前には、少しも彷徨ふて居なかつた。「妾は東京で復活する」あなたは此れを標語として八戸を逃走し、これを標語として東京に來たのであつた。總體の舊い物から脫けて、新しい生涯に入らうと云ふのが、東京に來たあなたの最大目的であつた。

八戸へは母の名前で、「愛子は東京に來て居ません」と云ふ返事を送つたのみであつた。

九、遺傳的の犯罪性

愛子さん――弱い〳〵愛子さん――

あなたがA辯護士を訪ねて、いろんな身の上話をしたのは、八戸の玉家から大分强硬の談判があつた當時であつたらしい。あなたはA辯護士に向つて、あなた一人が信じて居る權利義務の解釋を述べて、玉家に對する債務の負擔を、否定したと云ふではないか。

要するに玉家は、あなたに向つて百六十圓の貸金があるから、それを返濟してくれと請求するのである。あなたは又その借金のために、藝娼妓や賣春婦となつて、一年足らずの間稼いだから、改めて現金を返濟する義務は無いと云ふのである。けれども法律上では、あなたが借金の代償として貞操を賣つた事實は、明に認められずして、反つてあなたに百六十圓の貸金がある事を、有功に證據立て居るのである。かうした場合に、法律は弱い憫れむべきあなたを保護することが出來ずに、反つて强い慘酷な玉家を保護して居る様な結果を見るのである。

そして百六十圓の貸金を、月賦償却させるために、あなたに向つて賣春を强いた玉家は、何の罰せらる處が無いに反して、あなたは詐欺取財と云ふ罪名の下に、告訴されたのである。あなたはA辯護士に向つて、こんな片手落の法律があるものか、と憤慨したさうであるが、百六十圓の借金と、貞操を賣つたと云ふことは、個々別々の問題である。事實の根柢には、相共通して居る點があつても、これを法律上の事件として取扱ふ場合には、個々別々になると云ふ事を、あなたは餘り考へずに居たのではないか。たとへ法律上では何うあらうとも、私は人道問題の上よりして、武藏家の如きを最も憎み、玉家の如きを大に憎む。そしてあなたは何處までも、氣の毒な女であり、不憫な女であり、同情すべき女であり、哀れむべき女である。

あなたのお父さんを辯護したA辯護士は、あなたの辯護士となつても、再び法廷に立つことになつたが、あなたの行く方が判らないために、檢事局はこれを起訴猶豫して、まだ法廷の問題になつて居ないのである。お父さんの詐欺取財に關聯した百圓のために、

あなたは貴い犧牲になつたのみならず、その百圓のために、あなたが告訴されたと云ふのは、如何にも因緣めいた事實ではないか。そしてあなたのお父さんが、危險なる犯罪性を有つて居た系統を引いて、あなたにも著しい遺傳的犯罪性があることを、A辯護士は非常に悲んで居た。玉家に對する百六十圓の如きは、これを詐欺取財として論ずべき惡事では無いが、たゞ此の事件に對するあなたの態度の上に、お父さんに似た傾向があるのを、A辯護士は非常に心配して居た。

お母さんの家に居て、健康の回復を待つて居たあなたが、何時しか所在を晦ましてしまつた頃に、八戸の玉家では、青森地方裁判所に、詐欺取財の告訴を提起したのであつた。あなたのお母さんも共謀者と目されて、逝々喚問を受けたりしたが、當のあなたが居ないために、事件は起訴猶豫のまゝ今日に及んで居る。法律上では、百六十圓借りたあなたに罪があるにしても、私はあなたの樣な氣の毒な女を、この上、法廷に立せたり、赤い囚衣を着せたりするに忍びない。十七歳にして、早く既に貞操を賣るの境涯に落ちたと云ふ、たゞ此の一慘話のみで、あなたの罪は、その總體を償はれたものと云つて宜からうと思ふ。

あなたの所在が判らなくなつた時には、あなたのお母さんは勿論、A辯護士も非常に心配して居られた。「東京で復活する」と云つて居たところから考へると、自殺などする心配はないが、それにしても何所へ行つたのであらう。自分で自分の自活の道を求めるために、市内の心當りを歩いて居るのか。それとも八戸時代の知人にでも逢つて、昔の夢を繰返して居るのか。何れにしても、無斷で家出してから、五日も十日も姿を見せないあなたの擧動は、あなたの親近者一同へ、解き難い謎を投げかけた樣なものであつた。

さうこうして居る間に、あなたを銀座で見掛けたと云ふ者や、日比谷で逢つたと云ふ者があつたけれど、何處で何をして居るのか、少しも見當が付かなかつた。あなたの所在を知りたいことに於ては、恐らく何人よりも最も適切であるらしいA辯護士も、しまひに

は餘り問題にしないで、捨て置く様になつた。
それは去年の春も四月に入つて、ボカ〳〵と浮かれ歩くに好い花見季節の初であつた。

十、清かれ正しかれ

愛子さん――未だ見ぬ愛子さん――
あなたに宛て書くべきあなたの身の上話は、もう此れで大略盡くした様である。此の上何も云ふ必要はないが、「東京で復活する」と云つたあなたの其の後に就いては、必ず一場の物語があらうと思ふ。
行く方不明になつてから、十二日目の夜、銀座のレストランに現れたのが、東京で復活した最初のあなたであつたと云ふ。短い足に太いズボンを穿いて、少し前屈みに歩く癖のある私の黒い顔を、あなたが「お見かけしてよ」と云つたのは、必ずレストランの硝子扉の中からであつたに違ひない。どんな女が中に居ることやら、少しも頓着しなかつたけれど、彼のレストランのウエートレスの中に、あなたの様な經歴の女が居たと云ふことは、確に銀座街頭の一奇蹟であつたと云つて宜からう。
A辯護士の話に據ると、あなたは彼のレストランにも、餘り長く居たのでは無かつたらしい。新しい東京に自分を置いて、精神(こゝろ)の内からも姿(すがた)の外からも、新しい自己を建設しやうとの試みは、其の第一歩に失敗したのではないか。あなたは彼のレストランで、下山京子の派手な姿を見たし、小寺謙吉畫伯と睦じさうに歩いて居る尾島菊子女史も見たと云ふではないか。吉井勇、小山内薫、正宗白鳥、徳田秋聲、上司小劍、土岐哀果の文士達にも接したし、若い洋畫家の誰彼にも、言葉を交したと云ふではないか。そしてそれ等の人達の談話の端々から、あなたは新しい何物かを得やうとて、常に努めて居たと云ふではないか。
あなたは身の落着け場所に就いて、未だ大に迷うて居たのであつた。恰度その頃、A辯護士が行き合せて、あなたに逢つた時、あなたは自分一流の露骨な人生觀やら大膽な社會觀やらを述べて、A辯護士を手古摺らしたと云ふではないか。そして、しまひには、

「先生、妾はすべての過去を捨ててしまはなければなりません。そして新らしく行くべき道を擇ばなければなりません。けれども妾の行く道は、學問でもなく、技藝でもなく、家庭でもないのです。妾はつく〴〵考へました、妾が進んで行く唯一つの道は、貞操を賣つて、名と金とを得ることです。妾はこれが何よりも最後の勝利だと思ひます‥‥‥」

などゝ云つて、A辯護士を困らせたと云ふではないか。東京で復活すべかりしあなたは、銀座のレストランに行つて、反つてあなたが今までに經て來た境涯の上に、より深い意味を發見する樣になつた。これを墮落と云ふ人もあらう、或は徹底と云ふ人もあらう。何れにしても、あなたは銀座のレストランで、白いエプロンを胸にかけて、クラブ白粉を使ふ類の女では無いのかも知れない。

何時の間にか、銀座のレストランに居なくなつたあなたは、やがて府下×××町の大きな料理屋に、女中さんとなつて現れた。そして天性の才情と美貌とをもつて、相變らず男の心を波立せて居た。料理屋で酒飮むほどの男は、何處かに浮かれ心があると見えて、大抵の男はあなたに言ひ寄つた。十七の春から苦勞して、男の心を讀むに敏くなつたあなたは、障らば落ん風情を見せながら、いざとなれば、何時も柳に風と受け流すのが例であつた。×××町の料理屋では、斯うしたあなたの姿を、今年の三月頃まで見かけたさうであるが、あなたは又何時の間にか、其の料理屋にも姿を見せぬ樣になつたと云ふ。

それから復、あなたは何處へ行つたのか、其の消息は今日まで判らずに打過ぎて居る。名も無い田舍町の小料理屋で、卑しい酌婦を勤めて居るのか、或は東京の市中に居て、好い運の玉を發見て居るのか。何れにしても、女としての正しい大道に復つて、行末長い半生を光輝ある月日の下に送つては何うか。肉を鬻いで金を得たいとなどゝ云つても、女の美貌が幾年の色香を保ち得るやら、思へば果敢ない空望ではあるまいか。

愛子さん、若しお目にかゝる機會があつたら、私はあなたに向つて、まだいろ／＼尋ねたいこともあるし、又いろ／＼と敎えてあげたいこともある。今年十九歲と云へば、女もいよ／＼これからが花であり實である大切な時季を、願くは我から無慘に散らさぬように、折角自重し自愛が宜らう。

あゝ愛子さん、あなたは今どこに居て、何を考へ、何をして暮して居るか。願くは健全(すこやか)に、淸かれ、正しかれ、美しかれ。——

天民附記、「犯罪ロマンス」長々御愛讀を蒙り候段、有難き仕合せに奉存候。まだいろ／＼好材料有之候へども、餘り長いもお息屈樣と存じ、こゝらで一先切り上げ申候。尚、竹中たづ子樣へ、詳しきこと青山南町四丁目小生宛にて御通信願上候。

双棲と寡居

岩野清

私の徑て來た道をふり返つてみると、私の結婚は私にとつて惡鬪の苦しい歷史であつた。私の双棲は、私に冷たい熱い或は辛い多種多樣な涙の味を經驗さした。私は私の結婚生活の六年間に於て、配偶者のもつ愛の解釋と、私のもつ愛の解釋との錯誤のために、彼は彼の解釋する愛を肯定させやうとし、私は私の解釋し望んでゐる愛に同化させようとして、永い戰爭を續けた。私は同棲六年間に於て、一日として此苦悶から遁れたことはなかつた。始め私が單に友人として泡鳴氏と、大久保に共同生活をした當時から、泡鳴氏は私に對して多少の戀愛を持つてゐたけれど、私は友情以上に彼に愛を持てなかつたゝめ、私は斷じて肉を許さな

かつた。彼の誠意に感應して、私の内心の靈が彼に戀愛を起すまでは、決して肉の誘惑に動されまいと決心してゐた。それがため泡鳴氏は靈の愛をもつて私の靈を誘つた。泡鳴氏は自分の肉が異性を要求する時は、同時に靈が働いてゐるのだから、肉から這入つても單に肉と見るべきでないと主張して、肉から動いた戀をもいやしむ心はなかつた。然し私は、戀愛は相互の靈が愛を感じ、其必然の結果として肉の抱合に進むのが、最も穩當な徑路だと堅く信じてゐたので、泡鳴氏の主張に服從することはしなかつた。それがため泡鳴氏は餘儀なく私の主張に從つて、私の靈が彼を愛するまで待つより外なかつたのである。

然し泡鳴氏の戀愛に對する主張は、これがために少しも私に同化したのではなかつた。只私の全愛を所有するまで、一時私の主張に從つてゐたと云ふに過ぎなかつた。私が私の全身全靈を以て彼の愛に酬いた後の彼は、彼の主張に立もどつて、肉の衝動を感ずる時にだけ、彼は配偶者らしい愛情を以て私を遇したけれど、肉の對象なしに靈だけで私を愛し、或は同情し慰藉しはしなかつた。

私は眞の結婚生活は、肉の對象者として見るよりも、靈に於て清く溫かい愛情を、日常生活の中に流露しなければならないものだと信じてゐるので、私は其點の缺陷してゐる泡鳴氏に絶えず說きもし論じもした。

然し泡鳴氏は到底私の說に同化する人ではなかつた。私は此相容れない戀愛觀の相違點のために、六年間を通じて愛のみたされない淋しさに苦しみ通した。心に慰安を得られない私は、常に頼りない孤獨の感にのみ沈欝してゐた。

私は美しい自然の風景に身心を投じて、心の寂寥を忘れようと努めてもみた。友人や群集の中に自分を卷き込まして、不斷の淋しさを遁れようともしてみた。けれどもそれは徒に自分を反省する餘裕を與へるだけで、少しも望んだ効果は得られなかつた。

私は私の配偶者を同化せしむる事に努力しないで、只忘れ或は遁れようとするのは、私の誤りだと思つた

ので、其後は私の戀愛に對する主張に近づかせるために、一心に努力した。それがために私達の內生活は絕えず爭鬪した。私の靈と彼の靈とは常に暗鬪した。永い沈默の一週間、或は十日を幾度か繰り返した。私達は每もお互の心が爭鬪をする時は必ず沈默した。さうしてお互に心と心とを忖度し理解しようとした。

私はこの爭鬪はお互の戀愛の不純から來たものではなく、お互の愛が純なればこそ眞面目なればこそ起るのであると解してゐた。かうして私は爭鬪の起るのを悲觀しはしなかつた。むしろ戀愛の生活を一層深めるための研究材料として取扱つてゐた。かう云ふ爭鬪の一回每に、私達の戀愛生活は進步し向上してゐるのだと信じてゐた。で、私は此爭鬪の起るのを、生活の眞面目から起る必然の徑路だと信じてゐた。

私はかう云ふ態度で私の戀愛生活を見てゐたので、私の生活を否定はしなかつた。戀愛から起る苦痛に對して戀愛を呪ひはしなかつた。

かうした愛のための爭鬪によつて、私は男性と云ふものゝ一部或は半分を知ることを得た。さうして私の人生觀も實際的になつて來た事を知つた。私のために私の結婚生活は無意味でなかつたことも知つた。さうして獨身生活時代に考へ思つた事が、存外空想で充實してゐなかつた事などを考へる度に、人間としては一度は結婚生活を經て來なければならないと思ふやうになつた。それでなければ眞に人生を深く知る事は不可能だと思ふやうになつた。

然し泡鳴氏は私に對する戀愛の熱がさめるに從つて、私を戀愛の相手として見るよりも、ハウスキーパーとして私を取扱ふような傾向になつて來た。私を愛する者として見るよりは、家長から見る家族として取扱ふようになつて來た。愛する者として私に對してゐる間は、彼は私に家長の權利を亂用して私を壓制することはしなかつたが、私を單に妻とし主婦として見るやうになつてからは、彼は主權をふりまわし、夫の權威を惡用して絕對に自分の意志に服從させやうとした。僕は優强者だ、僕は專制主義だ。と云ふ主義を家

庭内に宣言した。個人としては自由を認めるが妻としては從服を强ゐると公言した。

私は泡鳴氏と大久保に同棲して、まだお互が戀愛關係まで進まなかつた當時、私が氏に駄目を押して置たことがある。「もし私が今後あなたと結婚生活をするにしても、私は世間一般の妻君のやうに、理非を論ぜず服從する事はしない。世間一般の女房扱ひを受けるなら私は結婚を承諾しません。」ときつぱり云つた時に、泡鳴氏は決してさう云ふ壓迫はしないと私に誓言した。私は泡鳴氏の此一言を信じてゐた。

然し年一年と泡鳴氏の家長とし夫としての、壓迫主義、專制主義が、封建時代の男尊女卑的因習に囚はれた頑迷な舊い男性等と、少しも等差のないやうになつて來たので、私は精神的に苦惱した。戀愛の生活に於て滿たされない心の淋しさと、結婚から來る夫の專制主義とに苦しむために、私の心身は疲勞しつくした。私の肉體は此苦惱のために、再近二三年以前から際立つて瘦せて來た。私の心は見るもの聞くものに對して、素直に享樂する無邪氣さを失なつてしまつた。

けれども私はまだ泡鳴氏を見捨てはしなかつた。私はまだ泡鳴氏を全靈を以て愛しながら、自分も反省し又泡鳴氏の蒙をも啓くことが、私のなすべき務めだと思つて努力した。

泡鳴氏自身啓發したのか、或は私の微力ながら熱心に主張した結果か、婦人論に於ての泡鳴氏は、殆ど現代の男性中最も理解ある人としての見解を立てるやうになつた。私は此點に於ては泡鳴氏の婦人論には全然同感し又感謝した。

然し私生活に於ての泡鳴氏は、依然として壓迫主義、專制主義を主張して一歩も讓らなかつた。

私は泡鳴氏の婦人觀に就て、言論と私生活と一致しない點を擧げて、泡鳴氏を責めた事がある。其時泡鳴氏の答へは、個人として獨立してゐる婦人に對しては、自分の發表した通りの意見を持つてゐる。然し妻としては獨立してゐる婦人と同樣に、權利や自由を主張することは許されないと云ふのであつた。この返答は、

法律に制限されてゐる妻の權利義務を犯すべからずと云ふ程度なら、私も妻としてゐる限り勿論異論はない。然し泡鳴氏のはさう云ふ意味ではない。彼自身の獨存自我主義から割出された、絕對優强者としての權威を犯させないために、自身は如何なる場合にも讓歩或は反省の要はない。彼から見た弱者には絕對服從を强ゐるのが、正當だと云ふ見解から來てゐるのである。

私はかう云ふ泡鳴氏の見解の誤つてゐる點を屢議論した。然し生一本な又獨斷的な泡鳴氏は、私の說を容れる理性的な人ではなかつた。

私は思想の上からも、戀愛の上からも不滿や不平が多くなつた。かうして私の性質はます〳〵沈鬱に、ます〳〵寡言に傾くばかりであつた。

私は自分の私生活の缺陷を友人や周圍の人に訴へる事を避けてゐた。それがために私の精神の苦痛は、夜となく日となく私の胸に卷きついて離れなかつた。私は日夜私の心を見つめ、私の私生活を考へ暮らしてゐた。どうしたら私として生甲斐のある生活に就くことが出來るか。どうしたら私の愛の生活を、もつと活氣ある充實したものに成す事が出來るかと、常住坐臥思ひ苦しんだ。

こんな事情のために私の氣分はだん〳〵苛立しくなつて來た。私は自分を內省する度に、私がかうして神經過敏になつて行くのは私の結婚生活が私に屈從を强い、私の人としての權利を壓迫され、私の戀愛生活の缺陷から來るのだと覺つた。私は私の結婚生活を呪ひ、私の家庭の專制君主を呪ひもした。

けれどもまた私は考へ返した。私が結婚生活から必然に起る鬪爭をさけようとするのは私の卑怯である。私の前に私の道をさまたげふさぐものがある時、それを切り開き其障害物を打破して進むのが、私として執るべき道であると。

私は個性と個性との永い年月の惡戰苦鬪に疲れて、只一途に破壞を夢みるような弱い心になることもあつた。

然し人間が全然孤立して、生活することが不可能で

あり、人間と人間とが交渉し接觸して始めて共生存を全ふするものである限り、絶對の滿足も、絶對の自由もあり得べきではない。從てそこに自我にとつて、不滿足があり不自由があらうとも、其度に自分の生活を破壞し、捨て去つて行つては、恐らく日も亦足りないであらう。只それをよりよき仕方に改革し近づかせるのが、人間の最も穩當な行き方だと私は考へはげんだのであつた。

かうした私の苦しい努力は二三年間續いた。泡鳴氏はます／＼獨存自我を發揮して專制壓迫を私の上に加へた。私が非理な壓迫や我意に對して盲從しないと見るや、彼は私を他人としてつき離して顧りみないやうになつた。私を一個のハウスキーパーとしてより外に何の愛も慰藉も與へないやうになつた。

私達の生活は日にまし荒寥として來た。私達は家事の用談以外には、相對して談話するだけの親しみも與へられなかつた。

只私が當時に於て唯一の光明としたのは、泡鳴氏が假なりとも私に愛を持つてゐることと、私以外に戀愛を分たないと云ふ事實であつた。私は私達の間に戀愛の純潔が保たれてゐる間は、私は彼に對して尚努力精進の餘地があると認めてゐた。

私は、自分でない他の個人を全然自分に同化させることは望むべくして、實行し難い事だと考へた。二人の個人が共同の生活をする上には、お互に相手の個性を尊重し、自分自分の大我を破らない範圍内で讓り合つて、融和をはかるべきであると思つた。

けれども私のこの計畫も、泡鳴氏の承認する所とはならなかつた。

かうして私は私の結婚生活を活氣あらしめることに、絶望しなければならなくなつた。私の結婚生活は徒に私の心身を疲勞させるだけで、進歩も向上もする餘地がないことが明らかに見えて來た。私は私の結婚生活を否定しなければならなくなつて來た。私は自分の生活を否定しながら、尚其生活を持續して行くのは、自分にとつて最も不眞面目な仕方だと考へられて來

た。相手の愛が日にまし月を重ねるに從つて、稀薄になつて行くのを觀察する度に、私は此感をいよ／＼深くした。

私が破壞を夢みたり、執着に引もどされたりしてゐる中に、私の家庭に出產と云ふ事件が起つた。

此新らしい事件のために、私達はゆるみかけたお互の戀愛をひきしめる事が出來た。私は夫の愛を靈の働きの上に見ることが出來た。私は今迄の苦悶の生活が徒勞でなかつたことをしみ／＼と覺つた。私は二重の愛を夫に向つて持てゐることを經驗した。戀愛の對象者として、又子に對する母としての愛を經驗することを得させた夫として。

私の泡鳴氏に對する愛は、かう云ふ意味からます／＼複雜に色彩多くなつて來た。私の家庭に對する責任觀も、結婚生活に對する深い意味も發見する事が出來た。

私は境遇の變化によつて、單なる戀愛生活から複雜な結婚生活に入り、尙進んで最も人間味のある家庭生活を實驗する機會を得たのを、心から欣びもし感謝もした。かう云ふ私の感情は純な愛となつて、夫に向つて行つた。さうして私の夫に對する戀愛の熱が、深められ高められて行つた。

私には子の出生と云ふことが、かく自分の戀愛を向上さして行つたけれど、泡鳴氏にとつては大なる變化も影響もなかつたらしかつた。私の興奮した感情に引づられて、一時的にはひきしめられた樣だつたけれど、それは永續しなかつた。

私の子に對する愛が自覺的にはつきりと見定められるやうになつて來るに從つて、彼は夫に對する戀愛が薄められるものだと速斷した。「子が生れると妻の愛の半分は子に移るものだ。」と斷定してゐた。彼は女性の愛の廣さを知らないのである。私は子を愛することと、夫を戀愛するのと決して衝突するものではないと信じてゐる。否却て子の存在は、戀愛生活を一層複雜にし濃さをます事情にはなるとも、決して薄める條件にはならないと堅く信じてゐる。尤もこれは私一個の心理

から推斷した結論ではあるけれども、私にとつてはこれが僞りない感情である限り、私としては確に眞理だと思ふからである。

此の事件の觀察の上にも、泡鳴氏と私とは錯誤があつた。

泡鳴氏との此錯誤は、私の復活した戀愛の緊張を打くだくやうな傾向になつて來た。私は又冷たく淋しい生活に立もどらされた。私は戀愛の不安と、無同情な壓迫とに惱んで悶々とした月日を送り迎へた。

私の泡鳴氏に對する戀愛は、時に絶望を感知するまでになつたけれど、不可思議な力をもつて私を引きもどした。私の戀愛は泡鳴氏以外に振りむく事が出來なかつた。

然し最近の泡鳴氏の新らしい戀愛事件が、泡鳴氏自身の口から告白された時は、私の生活はもう努力する餘地のないまでに、根柢から破壞したのだと覺悟した。

私は私の心に抱持してゐる泡鳴氏に對する戀を打すてた。私が六年間戀愛生活を完成せしめようと苦悶した事が、空しい努力であつたことを一度は悲しみもし悔みもした。

彼が私との同棲生活中に、私を欺き汚した侮辱に對して彼を悄むよりも、私はさう云ふ獸性を理智の力で取り鎭めることの出來ない人を、戀ひ慕ふ自分の愚を自身に責めるより外なかつた。

私は戀愛の對象者として泡鳴氏を見る心を其時限り捨てたけれど、個人としての彼には同情と好意とを持つてゐた。私は泡鳴氏が惡意を表現しない限り、夫としての彼に尊敬をはらふことを憚らなかつた。

私のこの覺悟と、久しい靈の闘爭生活から逃れて、事實上の孤棲に立歸つたのとで、私の精神生活は、むしろ平和に統一されて來た。私は新らしく切開いて進まうとする文藝に、奮勵と努力をしようと決心した時、私の目の前に遠くはあるが一つの光明がかすかながら見えて來た。私の靈はその光明のために活氣づけられ、引立てられて潑剌として來た。私の現在は境遇に順應して、かうした途を行くのが、私の執るべき最善の方

法であると思つてゐる。
けれども人間としては、戀愛の對象者なしに生きることは、其人として最も不幸な、又人間味のかけた不自然な生活だと斷言する。孤棲は餘儀ない境遇に置かれた人にのみ許さるべき變則な生活法であつて、人間として生きる本然順境の行き方ではないと私は信じます。で私は今後變則な生活に處して、最善の方法として事業に沒頭するか、或は戀愛と事業とを平行さして、私の信じてゐる順境な生活に入るかは、運命の神の手ににぎられてゐる不可知の事だから、輕々しく豫め斷定することはしたくない。(大正四年九月十七日)

時局の人・裏面の人

鐵拳禪

▼龍土會の灰皿から自然主義の生れたのは、明治の末期のこと。大正の今日は、櫻田倶樂部の將棊盤から内閣打破の駒が飛出すやら、第三黨の蜃氣樓が現はれるやら、世人の興味は文藝界より政界に轉じて來た。二百十日や、二百二十日の難關を通過した早稻田内閣が、功名の收穫を急いで居る所を見ると、霜月頃に大暴風雨が襲來しさうに思はれる。

▼大隈内閣の根太が搖いで、今にも倒壞しさうになつた時、新聞紙は驚破とばかりに法螺の貝を吹き立て、第三黨の成立を報じた。『そら大洪水だ、堤防が決潰しては大變だ』と騒ぎ立てた實業家、元老の面々は早稻田村に驅け付けたが、『何らか斯らか改造が出來さうだし、改造すれば一先づ安心だ』と云ふので、土嚢石を二つ三つ掘替へ、細柱を二三本取換へて、早稻田内閣の旗を高く揭げた。すると、第三黨の大洪水は、稻村ケ崎の潮よりも早く引いて了つた。

▼大正の龍神は、黄金作りの太刀を献げる迄もなく退却するから妙だと、政府筋では哄笑してるが、引いたと見せ掛けて退かないのは、政界の暗潮だ。いつ何時逆押し來つて、徒渉の人々を溺れさせるかも知れぬ。夫れに抑々たちの惡い龍神が潛んで居るのだから、政界の低氣壓と呼應して、どんな戯れを演ずるか分つたものでない。現内閣の危機! さう云へば、其の危機が刻々に迫りつゝある。此頃の日和續きを見て、政界の

平和をトする者があらば、そは御大典日和と云ふことを知らぬ者であらう。

▼第三黨組織と聞けば、其の聯想の上に出現するは、先づ後藤新平男である。『あの男なら氣が多いから、夫れ位のことは遣りさうだ』と揣摩されるのだ。次に大石正己君である。『あの野心家が、いつまで狸寢入が出來るものか』と臆測されるのだ。さうして覆面の策士には、杉山茂丸などが指指される。『彼奴は後藤の兄弟分だから、寺内を擔ぐことなら、屹度奔走するよ』と買被られてゐる。と云つたやうな譯で、彼等は第三黨の中樞なるが如く思はれたが、實は其の計畫の計算中に入つて居るに過ぎなかつた。

▼然らば其の運動の中心は何人なりやと云ふに、秋山定輔、長島隆二、阪本釤彌、夫れに覆面の策士三浦逸平の徒で、所謂政界の後藤系の人々である。後藤系と云へば、桂直系を以て自任すること勿論で、將來の首相として寺内伯に囑望するのだ。既に寺内伯に囑望する以上、其の周圍に仲小路廉、稍下つては臼井哲夫、中正會の不平兒菊池武徳等のあるは、鏡に掛けて見る迄も無いことである。

▼就中、最も熱心な運動者は長島君で、彼れは早朝から夜遲くまで、家を餘所に驅け搗り廻つてゐる。其の奔走にのみ忙殺される爲めでも無からうが、時々外泊して二三日姿を見せぬ事もあるさうだ。彼れの相談對手は、仲小路、秋山の二君であるが、屢後藤男とも會見してゐる。又絶えず山縣公、井上侯等を歷訪してゐたが、一侯が薨去したので、一公だけの御機嫌を伺へば足りる事になつた。現内閣反噬運動も、案外過度するかも知れぬ。

▼長島君の現内閣攻撃の張味は、元老から秘密な材料を得て來ることにある。此の材料で以て外交失敗の攻撃をやるから、國民を感服させない迄も、役人共の度胸を抜くことが出來る。殊に加藤男のやうに秘密の城廓に立籠り、代議士の不知を嘲つて、喜んで居る者を攻めるには、屈強な方策であつた。併し彼れの鼻先、又は辯論には、始終桂公がぶら下り、元老が附き纏ひ、識見の光が、紛々たる臭味に蔽はれるのみ遺憾とする。

▼議會の新人物と稱する者は澤山あるが、眞に新人物と銘を打つに足る者は幾許もない。長島君は其の幾許もない新人物の中で、多少眞價を認められた一人である。政界の流行兒と云へば、目下彼れの右に出づる者は一人もない。が、流行兒と云ふのは、多くは輕薄な人氣に投ずるだけで、人格的潤澤を有す所以でない。德富猪一郎君や、竹越與三郎君や、尾崎行雄君も一時の流行兒となつたが、幾程もなく感情の犧に呪はれた。長島君たるもの、今日の流行で甘んずるやうでは、大なる仕事が出來なからう。

▼流行兒長島の時代が過ぎ、野心家隆二の時代が來れば、彼れは今日の稚氣と衒氣とを脱することを得よう。長島君の青年會館でやつた長講三席は、カーライル振の頗る見るべきものは有つたが、得意の財政論を除いては、ほんの場當りの演説に過ぎなかつた。夫れでも、政界に新例を開くの新しい試みをやつたことは、多とせざるを得ない。又、彼れは芝

の三菱館に關東組の壯士を養つて置くさうだが、これは別して新しい企と感服することが出來ぬ。

▼今日は廣告の時代だ。何でも巧みに廣告しなければ、群を拔くことが出來ない。賣藥に見るも、廣告力の旺盛なのは、從て賣高も多いさうだ。長島君も盛んに廣告して居る間には、政界に群を拔くに至らうと云ふものだ。豐太閤でも、草履取から太政大臣になる迄には、少からぬ廣告費を投じて來た。さうして人心を收攬して來た。破壞と、戰爭に長ずるのみでは、到底天下を掌握し得るものでない。

▼巣鴨の江戸橋の畔に、俗に十文字御殿と稱する新建の家がある。之が金門商會の、十文字大元君の住宅だ。地所は保坂某の所有で、家作だけは自分のものだが、土地に不相應の花崗石の門柱に鐵の扉など据付けたので、職工連が御殿と誇稱したに起因するさうだ。彼れは神經痛で、身體は人並でないが、口舌の達者なことは人並以上だ。夫れに創造的な頭腦を持つて居て、數年來天然瓦斯の實地研究をやつて居たが、此程草鞋から金を採取することを工夫し、現に日光山中で試驗的に採取してるさうだ。

▼十文字君が巣鴨町裏の草分格で現はれると、一知名の士が追々移住するやうになり、今日では、これも十文字君と同樣の落選代議士の香阪駒太郎君、保險博士の粟津清亮君が日新湯附近に陣取り、借家住ひではあるが牛獸主義の岩野泡鳴君までが押寄せて來た。が、巣鴨町の通りから、直ぐ自動車を乘り入れることの出來る道路がないので、地主の公共心に乏しいのを歎じて居たので、十文字君は巣鴨會を起して、土地の啓發を試みようかなど、不自由な手で膝に力瘤を入れて居た。

▼鐵道院總裁工博仙石貢君が依願免官となつて、其の後釜に法博添田壽一君が据つた。豫て引責辭職を傳へられた副總裁の古川阪次郎君が、却て首を取り止めた。仙石君の免官は、京濱電車不始末事件に連座した譯でなく、表面は加藤男等と立憲的行動を共にしたのだ。が、裏面に立ち入つて觀れば、仙石總裁に對して、院内外の評判も餘り宜しからず、本人も亦厭氣がさしたので、好い潮時を見計らつて、投げ出したものらしい。まあ捲土重來てな寸法なんだらう。

▼捲土重來と云へば、加藤男の辭職も亦、さうした氣勢が見える。彼れが辭職しながら、早稻田内閣を援助するとは、甚だ不徹底な行動だが、府縣會議員選擧に際して南船北馬、黨勢擴張に努めた所より察すれば、暫く大隈伯を援けて黨勢を扶植し、他日の立脚地を作るを勝れりとしたのであらう。だから、彼れは知らぬ顏で口を拭つては居るが、大隈伯辭職の際は屹度自分を奏薦して呉れるものと信じて居るだらうとの事だ。

▼大隈伯の可成衝突を避け、一籠絡し得るだけ籠絡し、懷柔し得るだけ懷柔しようと努めて居るのは、實業家と元老とである。自然彼等の意を迎へる爲めには、彼等に都合の好い政策を取る事となる。加藤男を閣外に立たせて、其の推薦する石井男を引き入れたのは、元老の鼻息を緩和せんが爲めである。鐵道院に政黨關係のない、財界出身の添田博士を拔擢したのは、實業家の後援を持續せんが爲めである。外相として石井男の

必ずしも前任者に優らざる如く、添田博士も亦前總裁を駕すると認むるを得ない。

▼仙石君は技師の出身で、多年鐵道經營に經驗もあり、行政の手腕も亦鈍い方ではない。然るに添田君は、大藏省の役人から銀行界に身を投じた人で、鐵道行政には全く素人である。夫れに興銀總裁で躓いたと云ふ暗い歴史を持つて居り、滿鐵總裁の候補としても兎角の非難はあつた。其の人を今日、中外商業新報社長の椅子から無理矢理引つ張つて來て、總裁の椅子に据ゑたのは、何う云ふもので有らうか。添田總裁の新任は、新聞などでは大變評判が好いやうであるが、其の實際に當つて果してどれだけの手腕を揮ひ得るであらうか。

▼其の人物を比較すれば、添田君は邊幅を飾らず、洒々落々たる所があつて、役人風の偏執は無い。公益と民間經濟と背馳させないで、鐵道行政を遂行しようとの頭腦はあり、夫れを遂行するに誠意を持つ人で、非常な勤勉家であるから、黨利と軌道を并行させるやうな無謀を敢てせぬは勿論である。仙石君は政界の策士で、動もすれば黨情に左右される。過般の大淘汰の如きも、人物の如何を問はず原・床次系を排斥し去つた爲めに、部内の不評を招いだのである。彼れが鐵道行政の手腕があつたに拘らず、失敗に終つたのは、餘りに黨派的偏頗を敢てしたからである。

▼政友會内閣以來、黨勢擴張に利用されたのは、鐵道敷設が第一で、次に港灣修築、河川改修、電信電話架設と云ふ如き、遞信内務兩省及び鐵道院に關係したものが多きを占めてゐる。同志會も亦内閣を乘取るや、其の黨勢擴張の爲めに、此の鐵道敷設や、電信電話架設を欠かしたものだ。で、之が爲めに、歴代の政府は苦んでゐた。豫約を反古にすれば、忽ち黨勢に影響するのであるから、何とか色を着けねばならぬ。色を着け過ぎれば、豫算が承知せぬと來てゐるから、其の苦心慘憺が想像に餘りある。添田君が總裁になつたからとて、鐵道行政に對して多くを望まない。唯鐵道院内より、斯かる黨弊を芟除し、纏綿せる黨情を斷ち切る事を得ば足れりとすべきだ。

▼滿十五年振に米國から歸朝した醫博野口英世君と、十二年振に西藏探險を了へて歸朝した河口慧海君とは、俗氣滿幅の社會に尠からぬ刺戟を與へた。河口君は明治三十年六月二十五日神戸埠頭を去つて印度に赴き、西藏語及び梵語を學び、幾多の苦楚辛酸を嘗めてネパールに入り、三十三年八月三日遂に西藏の國境を踏破し、醫師になり澄まして諸處を旅行せる後、三十六年一たび歸朝し、三十七年二月再び印度に赴き、一昨年十二月カルカツタより西藏に入り、志す所の經典を得て、九月三日神戸埠頭に歸着したので、西藏探險の爲めに前後十八年を費してゐる。

▼彼れが發憤の動機は、漢語の佛經典に疑問を生じ、進んで梵語の經典により研究せんとし、西藏に入るに非ざれば之を得る事が出來ないと云ふことを聞いて、遂に入藏の意を決したのだ。で、彼れは西藏語及び梵語を研究し、西藏本の藏經と梵語本の藏經とを手に入れることが目的であつた。處が、西藏は外國人に向つて門戸を開放しない、秘密國なので、其の入國に非常の苦心と困難を嘗めたのである。彼れの不屈不撓な

る、初志を貫徹して、經部五十三部、ジヤータカ八十四部、論部十八部、タントラ百六十部、文學類二十九部、ネワリ語書二部、合計三八四十六部を得ることが出來た。其の中には、云ふ迄もなく貝多羅葉に書いたラーマヤナなどもあるのだ。

▼河口君が入藏を志した當時、濱口熊嶽が精神治療で疑の眼で見られたせゐか、彼れも亦山師的に探險を標榜するでは無からうかの、彼れの西藏入りも疑しいものだの、と輕蔑されたが、ロビンドラナート・タゴール氏の來朝が立消になつた今日、突然成功の喜悅に輝いて歸つて來たのは、一種の對照である。夫れにタゴールを目八分に見てゐる、サラツトチヤンドラ・ダース氏を伴つて來たなどは更に面白い。

▼野口博士は福島縣人で、母は產婆である。彼れはペンシルバニア大學で、蛇毒研究中、毒蛇に右手の指を嚙まれ、夫れを切斷した爲めに、終生の不具となつたが、蛇毒に關する新見をなすを得て、世界的名聲を博するに至つた。過般恩賜賞を拜受したことでもあるから、今回の歸朝は日米間の理解に努力する以外、錦衣を故鄉に飾るの意味もあらう。

月見

黒頭巾

其一

●今朝、曇天。灰黒の雲、空に漲り、輕寒吾が肌に浸む。涼味を樂むの情、頓に褪せて、涼よりは寒に近し。シヤツを著け、靴を穿ち、襟を合せて、庭を眺めつゝ、卓に向ふ。蟲に喰はれて黄ばみたる櫻の枯葉輕く舞ふて落ち、朝顔の花、小さくなれり。偶、竹牆を潛ぐつて、園中を奔り過ぐる隣家の犬の脊、瘠せて見ゆ。秋は、吾輩に迫りつゝあり。

●昨夜、ポプラ倶樂部の會合を回憶するに樂しかりしかな。此の頃本山松陰、大阪より上京せるをば、倶樂部に迎へて語る。瀧谷、中川、小杉、藤井、茨木、佐久間、吉田等の壽伯多く集まり、ローマ字に熱心なる博士田丸の來れるも珍らし。

◉倶樂部は、田端の高臺に在り。竹牆に沿ひて、遍ねくポプラを栽えて、倶樂部の名とす。北方一帶は、隣家の庭の森自ら國境を爲す。

◉椽に踞して、南庭を眺めつゝあれば、六百坪のロオン、宵暗の空に、ひろがりて見へ、屋瓦の眼中に入るもの無く、都塵を脱却して、仙寰に入るが如く、野趣の氣分、人を漂はしつゝあり。

◉此のロオンの眞中にテニス、コートを設す。頃日來コートは秋風に蘇し、新に畫せるチョークの白線のみ暗の空にも鮮かに知らる。月を見ず、墨のにじみたるようの空を眺め入りつゝ、人をして自から秋興三昧に耽らしむるもの無くんばあらず。

◉宵は未だ蟲語も繁からず。主客、雲を見つゝある時、にじめる墨の濃き雲の片、破れて、微に缺月を露はし來る。此の刹那、主客、覺えず「月が」「月が」と呼ぶ。

◉此の秋、月の淸かりし夜、無かりしには非ず。然れども吾輩、未だ月見をなしたりとも思はず。而して此の刹那、始めて今秋の月を見たるの思ひを爲せり。

◉月見といふは即興的ならずんばあらず。須臾にして雲、合して復た缺月を隱くす。雲間の缺月を見るを得ること、眞に、僅少時なりしとはいへ、眼中の印象、尚ほ見るが如きものつり。

其二

◉一天明月といふは、譬へば花畑の花の滿開を見るが如し。雲間の月は、萬綠叢中の一點を見るが如くなるべし。

◉花は必ずしも滿開を賞するに非ず。月を賞するは晴夜に限らず、暗雲斷續の間に、時々出沒するの月を見ることぞ情あるものなれ。

◉雲間の月といへども景象一樣ならず、變化千態、刹那の感興容易に言盡さず。天明らかなれども、浮雲、其の一半を蔽ひ、恰も月を隱くす時あり。或は、薄雲、月を掠めて走過する事もあり。

◉大空、澄明、而して雲、低く生じて初月を遮り、或は殘月を呑む。此の時、雲崩れて月を現はす時、月華一時に煥發す。

◉黑雲斷續、天は一面に雲、漲り、人は皆、月を忘るゝ時、計らず雲、破れて月を見することあり。此の時黑雲、必ずしも一層ならず。黑雲の下層に灰白の雲あり。月の微光に照映して、層々の雲、悉く數ふべし。

◉雲間の月は、光彩の煥發すること、黑衣に、明珠を

鏤めるにも似たる時あり。雲、層々たる時、月は、下層の海雲を透して見ゆるが爲に、光華ドンヨリとして其の膜に包まれたる眞珠の光、鋭からざるが如し。

◉一天に雲滿ちて、雲間に、微月を出沒せしむる時、樹下の土鼠も亦た地を出で、月見を爲すならずんばあらず。

◉月といへば、一天明月に、空行く雁を書くは常套事なり。宜しく雲間の微月に、土鼠の月見を書く可きなり。

其三

◉吾輩、信州の風景に憧憬すること久し。信州といへば、世人、直ちに姨捨山の月をいふ。然れども信州は月の國なり、啻に秋月のみならず、寒月、實に不可言の深趣あり。姨捨山といふは、信州に在つては、既に常套に屬す。四月の末より五月に至る、百花一時に開き、艶冶煥發する時、霞に朧ろなる、日本アルプスの月も亦情あり。

◉吾輩、近ごろ、筆を裁せて小諸に往き、淺間山下に明窓淨几を求めんとして未だ果さず。莽蒼たる淺間の煙、空しく見るが如し。

◉日本の火山の中にても、豪宕、崇嚴、粗野、實に尤も多く原始的の興趣と威儀とを具有するものは、淺間山なるべし。富士山も、海門岳も、鳥海山も、悉く明媚秀麗の氣あり。阿蘇山は剛健にして男性的なり。然れども阿蘇よりも更に原始的なるは淺間山なり。

◉晴れて澄みたる夜を、淺間山の噴烟、眞黒に大なる烟の柱、濛々として、渦卷きつゝ、明月を抱いて九天の上に騰り行く光景の、如何に雄偉なるよ。

◉吾輩、嘗て、南佐久原の平原より、縱に千曲川に沿ひ、日夕、淺間山を眺望せし事あり。其の原始的、男性的の山容、大噴烟、霧のこぼるる川影、悉く千曲川の清流に照映す。今に至つて快心の矚目を忘れ得ず。

◉淺間山といへば世人、直ちに烟をいふ。「淺間の山に立つ烟」或は「小諸チヨイト立りや淺間の山よ、今朝も烟が三すぢ立つ」の歌、人口に膾炙す。然れども烟を言つて、月を言はざるは、未だ淺間を盡さゞるのみならず、併せて未だ月の大觀を得ず。

◉淺間の山の輪廓、皮膚の極めて原始的なるは、日中に見れば、唯だ其の剛健粗樸なるを見るのみ。一たび之を月明の下に置けば、其の原始的なるもの皆、美化せらる。譬へば衣、骭に到り、袖、腕に到る薩摩健兒

の姿、月下に照らされて、忽ち一段の詩趣、畫趣を生ずるが如くならずんばあらず。

◉澄空の明月、雲間の缺月、尚ほ必ずしも奇境を盡さず。大噴烟の月こそ偉觀を極むるものなる可く、若しそれ大爆發の前後、噴烟の、殊に、獰猛を極むる時。烟中の明月、崇高、神祕の感果して如何ぞや。而して這般の絶景は、火山國の特有する魁偉の風景ならずんばあらず。

◉淺間山をして、願くば「月の名所」たらしめよ。月と火山と烟との三者が、調和して組成する月下の美感は、日本の特有する天惠の一なるべし。活火山は、此の天然を象徴するものなり。

其四

◉吾輩、未だ多く信州を識らず。近ごろ吉江孤雁の「旅路」一卷を讀み、奇景、數へ盡さゞるものあるを思ふ彼の名、孤雁といふは月に適さはし。彼は信州を說いて、多く月を點綴せず。吾輩を以て見れば、月を點綴せしめなばと思ふ所少からず。此の一卷、信州に關するものを讀む時、吾輩の眼中、つねに月明あり。

◉孤雁の描ける信州風景の中、吾輩をして神往に堪へざらしむるものは山清路の絶景なり。吾輩は、一たび山清路の急流に棹して、月を見んことを思ふ。

◉山清路の奇景、未だ世に著れず。山清路は、南信第一の絶景と稱す。犀川の水、萬山の間を潜行し、安曇野の平原を横流して、善光寺平に出んとする前十四五里の間岩に狹められ、山に壓せられ、河幅收縮して僅に二三十間の谿谷を爲す。其の間を山清路といふ。

◉山清路の奇觀は、滿谿の杜鵑花に在り。杜鵑花は岩を纒り、山を繞り、五月、花開く時、十月樹々紅葉する時、ともに谿水、爲に深紅を染め、流れを下るの小舟は、宛として紅雲の中に在り。水流、急にして、紅雲、飄蕩しつゝあり。

◉舟、山清路の幽谷に流れ入る。幾多の奇景、變幻、出沒して、行く〳〵、眼前に展開し來る。兩岸の危峯は迫つて相接せんとし、絶壁の間より、僅に天色を仰ぎ見る。日光は青白色を爲して、落ちて岩を照らし、水を照らす。あらゆる岩は悉く白く、絶壁も、峻峯も、水中の奇岩も、河底も、悉く一大岩石より成り、畢竟犀川は、白色の岩に、一大洞穴を穿ちて走りつゝあり

◉白壁、白峯、白巖、すべて深紅の杜鵑花を著けざるは無く、譬へば極めて白皙の美人、燃ゆるばかりの紅

衣を著けて、清流の中に立つが如く水、溌々として玉の肌に注ぎ、紅衣、濡れて肌に纏著しつゝ、清泉の珠玉、飛散しつゝあるにも似たらずんばあらず。

◉此の幽谷を下る時、左岸の中腹に、岩蔭に、杜鵑花の藪に埋没せんばかりの一軒家ありて立てり。此の一軒家は、必らず旅客の目を引く。

◉此の奇しき一軒家には、老翁と若き娘とあり、花に埋もれ、雪に埋もれつゝ、寂しく幾春秋を渉りつゝあり。此の家は、年々「つゝじ舟」を艤装するの家、而して此の娘と、舟夫の若き男と、戀に落ちて、年々「つゝじ舟」の季節を待ち暮らしゝが、若き男は、或年、急流に、危岩に觸れて、覆没せしより、此の娘、嫁せず、ひとり堅貞を守つて、杜鵑花と急流とを眺め暮らす。杜鵑花、咲き、杜鵑、血に啼く時、娘は、まさに幽谷の青き月色に對して、獨り泣くならん。

◉吾輩は、山清路の奇景、詩趣を憶へば、絶壁の底に急流の舟中より、遠く、月を望むの奇游を想像せざる能はず。月、見へざるも、月の夜に、月光を溶かせる空を、僅に見上るも、興趣、萬斛ならん。一軒家の娘は、此の時の空に向つて、幽魂の髣髴として來り降るを思ふなる乎。

◉山清路の深谷は、啻に、月見の奇景たるのみならず既に、此の哀詩あり。絶壁の底より見上る、月の空、月色の空、月ある時も、月無き時も、空は、「戀の詩」「月の詩」を以て書かれたり。月、來る時、「戀の女神」の、人間に見ゆるならずんばあらず。

其五

◉吾輩は、杜子美の殘夜水明樓の句を愛す。殘夜の月人定まり天籟も亦た死し、吾身と月とあるのみ。幽寂の情、尤も可し。然れども殘夜には月既に沒し、月の情のみ殘りて、空の明らかなるを愛すべし。

◉月見は、宵こそ、情緒濃やかにして興趣爛熳たる可けれ。宵の月は譬へば初開の花の如し。

◉主觀的には、興趣の深淺、固より時と場處を定め難し客觀的には、月の盈盛は、宵の月ならずんばあらず。

◉未だ暮れざるに、早く既に、初月の、殘陽に、薄く映出するは、ませたる少女の如し。殘夜に、月の皓々として、ひとり明らかなるは、嫁期を逸したる女の、艶やかなるが如し。

◉月見を爲す者は、薄暮、輕風を携へて、飄然として微風に吹かれつゝ、月を迎ふるも可し。或は水邊の樓

の姿、月下に照らされて、忽ち一段の詩趣、畫趣を生ずるが如くならずんばあらず。

◉澄空の明月、雲間の缺月、尙ほ必ずしも奇境を盡さず。大噴烟の月こそ偉觀を極むるものなる可く、若しそれ大爆發の前後、噴烟の、殊に、獰猛を極むる時。烟中の明月、崇高、神祕の感果して如何ぞや。而して這般の絶景は、火山國の特有する魁偉の風景ならずんばあらず。

◉淺間山をして、願くば「月の名所」たらしめよ。月と火山と烟との三者が、調和して組成する月下の美感は、日本の特有する天惠の一なるべし。活火山は、此の天然を象徴するものなり。

其四

◉吾輩、未だ多く信州を識らず。近ごろ吉江孤雁の「旅路」一巻を讀み、奇景、數へ盡さゞるものあるを思ふ彼の名、孤雁といふは月に適さはし。彼は信州を說いて、多く月を點綴せず。吾輩を以て見れば、月を點綴せしめなばと思ふ所少からず。此の一巻、信州に關するものを讀む時、吾輩の眼中、つねに月明あり。

◉孤雁の描ける信州風景の中、吾輩をして神往に堪へざらしむるものは山淸路(サンセイロ)の絶景なり。吾輩は、一たび山淸路の急流に棹して、月を見んことを思ふ。

◉山淸路の奇景、未だ世に著れず。山淸路は、南信弟一の絶景と稱す。犀川の水、篤山の間を潛行し、安曇野の平原を橫流して、善光寺平に出んとする前十四五里の間岩に狹められ、山に壓せられ、河幅收縮して僅に二三十間の谿谷を爲す。其の間を山淸路といふ。

◉山淸路の奇觀は、滿谿の杜鵑花に在り。杜鵑花は岩を綴り、山を繞り、五月、花開く時、十月樹々紅葉する時、ともに谿水、爲に深紅を染め、流れを下るの小舟は、宛として紅雲の中に在り。水流、急にして、紅雲、飄蕩しつゝあり。

◉舟、山淸路の幽谷に流れ入る。幾多の奇景、變幻、出沒して、行く〳〵、眼前に展開し來る。兩岸の危峯は迫つて相接せんとし、絶壁の間より、僅に天色を仰ぎ見る。日光は靑白色を爲して、落ちて岩を照らし、水を照らす。あらゆる岩は悉く白く、絶壁も、峻峯も、水中の奇岩も、河底も、悉く一大岩石より成り、畢竟犀川は、白色の岩に、一大洞穴を穿ちて走りつゝあり

◉白壁、白峯、白巖、すべて深紅の杜鵑花を著けざるは無く、譬へば極めて白皙の美人、燃ゆるばかりの紅

衣を著けて、清流の中に立つが如く水、濺々として玉の肌に注ぎ、紅衣、濡れて肌に纏著しつゝ、清泉の珠玉、飛散しつゝあるにも似たらずんばあらず。

◉此の幽谷を下る時、左岸の中腹に、岩陰に、杜鵑花の數に埋沒せんばかりの一軒家ありて立てり。此の一軒家は、必らず旅客の目を引く。

◉此の奇しき一軒家には、老翁と若き娘とあり、花に埋もれ、雪に埋もれつゝ、寂しく幾春秋を渉りつゝあり。此の家は、年々「つゝじ舟」を艤裝するの家、而して此の娘と、舟夫の若き男と、戀に落ちて、年々「つゝじ舟」の季節を待ち暮らしゝが、若き男は、或年、急流に、危岩に觸れて、覆沒せしより、此の娘、嫁せず、ひとり堅貞を守つて、杜鵑花と急流とを眺め暮らす。杜鵑花、咲き、杜鵑、血に啼く時、娘は、まさに幽谷の青き月色に對して、獨り泣くならん。

◉吾輩は、山清路の奇景、詩趣を憶へば、絕壁の底に急流の舟中より、遠く、月を望むの奇游を想像せざる能はず。月、見へざるも、月の夜に、月光を溶かせる空を、僅に見上るも、興趣、萬倆ならん。一軒家の娘は、此の時の空に向つて、幽魂の髣髴として來り降るを思ふなる乎。

◉山清路の深谷は、啻に、月見の奇景たるのみならず旣に、此の哀詩あり。絕壁の底より見上る、月の空、月色の空、月ある時も、月無き時も、空は、「戀の詩」「月の詩」を以て書かれたり。月、來る時、「戀の女神」の、人間に見ゆるならずんばあらず。

其五

◉吾輩は、杜子美の殘夜水明」樓の句を愛す。殘夜の月人定まり天籟も亦た死し、吾身と月とあるのみ。幽寂の情、尤も可し。然れども殘夜には月旣に沒し、月の情のみ殘りて、空の明らかなるを愛すべし。

◉月見は、宵こそ、情緒濃やかにして興趣爛熳たる可けれ。宵の月は譬へば初開の花の如し。

◉主觀的には、興趣の深淺、固より時と場處を定め難し客觀的には、月の全盛は、宵の月ならずんばあらず。

◉未だ暮れざるに、早く旣に、初月の、殘陽に、薄く映出するは、ませたる少女の如し。殘夜に、月の皓々として、ひとり明らかなるは、嫁期を逸したる女の、艶やかなるが如し。

◉月見を爲す者は、薄暮、輕風を携へて、飄然として微風に吹かれつゝ、月を迎ふるも可し。或は水邊の樓

に登り月を待つも可なり。

●森を出るの月は、深窓を出で來る處女の如し。高山より登る月は、高人の孤行するが如く、大海原を出で來る大月は、一代の人氣者が、手を揮つて堂々として濶步し來るの氣合無くんばあらず。

●戸を閉ぢ、帷を下して寢に就く。時に殘夜に窓を排して、中天に、月ひとり明らかなるを見れば、彼は眠らずして、吾を待ちつゝありしならずんばあらず。

●曉月に旅行を始むれば、月落ち日出で甚だ疲る。月落つるの後、興味、索然たり。旅行に、日落ち、月出れば、神氣爽涼たり。月を迎ふるは希望あり、月を送るは餘哀あり。

其六

●町の月見も惡しからず。月を見る湖海、山野に於てするを要せず、町の物干臺、凉臺皆宜しからざるは無し。蔦の纒ひ、綠葉の半ば蔽ひかゝれる窓際に、椅子に腰掛けつゝ、靜かに月を見る時の氣分、限り無く嬉し。

●屋上庭園といふ事、近時、稍、流行す。然れども東都には、未だ屋上庭園の壯大なるものを見ず。三越の六階は、此の頃の、芙蓉、紅、白花、咲き滿てる頃月を待つに、尤も情趣あるべし。

●淺草の十二階の最高層の窓より、月を見たらんにも尙ほ頭上に天井あり。天井の下に月を見るは、屋上庭園に見るに若かず。

●屋上庭園を經營せん者、珍花異草を蒐集せんよりも須らく野草を植ゑて、野趣を磅礴せしめん事を要す。若し趣味の一大富豪、屋上庭園を經營するありて、半畝の地積を割き、竹牆を建て、南瓜を栽培せしめよ。其の巨葉と茫大なる南瓜とは、天空に、野趣を湧かしむべし。此の時、月光微茫として、南瓜を照らすを望む。情味盡きず。

●屋上庭園に、魚を養ひ、盆池を湛へて、月影を映ぜしめば、如何。盆池は湖海の情を誘ひ難し。半畝の南瓜は、能く天半に、郊野の趣を移すを得べし。

●吾輩、昨日、竹堂山人と共に、三越の六階に登り、記念寫眞を撮影す。屋上庭園の音樂堂に、恰も、少年音樂隊の演奏するあり。頗る吾輩の感興を引く。吾輩は、之に依つて、忽焉として、六階の月に想到す。

●此の時、秋草、穗に出で、芙蓉花盛なり。少年音樂隊の排裂せるが、畫趣多し。若し、此の樂をして、一

天の明月に、屋上庭園に演奏せしめなば、人をして、仙樂に醉ひながら月を語らしめずんばあらず。

其七

◉巨船の甲板に、盆栽を列ねて、其の間に月見するは屋上庭園の月見と、理に於て相似たり、氣分に於て、全く相同じからず。

◉甲板は、船の屋上なり。然れども遠波、茫々、天際に連り、波影、人に迫る。氣海は、江海の碧光、濃やかなるに似ざるを以て、屋上庭園に於ては、人孤立して天半に在り。

◉陸上の空氣は、海上の如くに濕潤ならず。屋上庭園に見る月は小さくして人に遠ざかる。海上の甲板に見る月は、大きくして人に近し。

◉甲板には、成る可く、多くの草木を盆栽するを要す人は海上の翠光に包まれつゝ、尙ほ草木の翠葉に憧憬す。翠葉を友として、月を見るに非れば。人は、月光に親しみ易からず。

◉大將乃木、東郷と共に、歐行するの時、彼の郷人、彼に餞するに、種々の盆栽花を以てす。船新嘉坡に著するの前、花悉く滿開す。彼、東郷と共に、甲板に、盆栽花を環らせて、其の中に立ち、記念撮影を爲す。

◉彼は、海を愛するの深きを以てして、定めて、花邊に、月見したる事もあるやらん。滿開の花、甲板に、此二大人物を環ぐつて、大海原の明月、照臨し來たる時、感興、果して如何ぞや。

其八

◉月を歌へる詩は多し。月の大さを言へるものは多からず。月見せる者に向つて、試みに、月は如何ばかりの大きさに見ゆるかを問へ。其の答は、必らず千差萬別たらん。人々の眼中に印象する月の大きさは、概ね同じからざるなり。

◉眼中に映ずる月の大きさを思ふ時は、主觀的の想像を交ゆると多し。月の印象は、主觀的なるを見るべし。

◉盆大の月といふ事を口にする者は多し。明月は、盆の大きさに見ゆるらし。一茶に、「明月を取つて呉れろと啼く兒かな」此の句、月の大きさを言はず。然れども、月は必ずしも非常に大きく見へざるを意味するものたるを失はず。

◉「明月に、柄をつけたらば善き團扇かな」といふは月が、略ぼ團扇ぐらゐに見ゆるの意味あり。子規は俳

人たるの初め、上野公園に散策し、明月、大空に充つるように感ぜし事あり。

◉實に、滿天の明月の時、月、空に滿つるの思無くんばあらず。月の光は、月の情をして、天を滿たしむるなるべし。

◉凉台に、月見する時、人に向つて、一定の距離に於て、何程の大きさの盆を以て、全く、月を遮るを得可きやを問へ。事實に實驗せば、各人、相似たるべし。暗問、暗答せば、答案の盆大、必らず樣々の相違を見るべし。則ち、人々、つねに心頭に記憶しつゝある、滿月の大さ、個人的に、印象されつゝあるなり。

◉月は、自から天に懸れる詩ならずんばあらず。詩は各人の印象、詠嘆、同じからず。月は、散文的に解釋す可らず。詩的に詠嘆せざる可らず。

其九

◉吾輩は、月に名所無しと思ふ。月來る時、名所ならざるところあること無し。月下に見るの風景は、悉く好風景なり。月は世界を美化す。蕪村の「月、天心、貧しき町を通りけり」の句を聞けば、月下の貧しき町の美しさ、想ひやらるゝなり。

◉月を月世界といふ。然れども天文學上に見る月は、眞に、美しき世界なるや。人間の世界は、兎も角も、月に依つて美化せらる。月世界といふは、月に非ずして、人間世界ならずんばあらず。

◉月光の下に惡事無し。月下に見るもの、皆、美しくして善なり。月は、人をして冥想せしむ。月下に、冥想に耽るの時、眞、善、美も亦たすべて忘却せらるべし。

◉理想的世界無しといふは、日中の事なり。理想的世界は、必ずしも彌勒菩薩の出現を待つを要せず。月は夜々、理想的世界を、人間に將來しつゝあり。

◉月の外、人世を美化するものは、雪あり。天、雪を飛ばす時、一面、銀世界を現出す。雪の時、もの皆な清くして美くし。然れども雪は、唯だ其の外皮を覆ふのみ。譬へば純白の風呂敷を以て、地上を蔽ふに異ならず。

◉雪の色は人世を覆ふのみ、塗るのみ。然れども月の光は能く人世に浸み透る。覆ふは外觀ばかりにして、浸むは根本的なり。

◉人間の力、能く、根本的に、人世を美化し得るものは愛なり。人間は、唯だ宇宙に於ける愛の力を享けて

これを發揮するのみ。愛の力は、宇宙を美化しつゝあるもの
り。而して宇宙に於ける愛の力を象徴しつゝあるもの
は則ち月ならずんばあらず。

◉人間の眼中に映じつゝある月には、若し個性ありとすれば、愛を本とせずんばあらず。見よ、月に顔に輝きつゝあるものは、愛の光に非ずや。

◉太陽の赫々たる時、人、偏へに、其の面に無限の力の表現を感ず。星の光は愛すべし。何となく智の閃めきなるを覺ゆ。月の上には愛の表現あり。

◉雲間の月は、愁ふるにも似たり。然れども明月皓々たる時にも、人は、其の光彩に、力を覺えず、無限の愛を感ず。月は、宇宙に於ける愛の象徴なり。月に對すれば唯だ慕つかしき事、限無きは、人間が、宇宙の大なる愛に魅せられつゝあるなり。

◉嚴父の前に義理を論ずべし。慈母の前には情緒を語るべし。父よりも母の前こそ打ち解けて語り易すかる可けれ。是を以て、太陽の前には、奮發あり、研究あり、而して月の前には、人、皆、詠嘆あり、談笑あり畫あり、詩あるならずんばあらず。

其十

◉今夜、友人の北國に歸るを送つて、上野に至る。駒籠を發し、山手線に搭じて行く。夜は澄みて、月色妍々、吾が車窓を照らして、郊外を過ぐ。

◉駒籠驛は、山ノ手線にては、尤も風致に富めるなるべし。線路は斷崖の間を通じ、崖上にカナメの垣の家、立ち續き、崖は、すべて萩に埋めらる。此の頃、萩花燎亂して開き、枝態搖曳す。南崖の萩の下を、東西に遠く、清き小溝、チヨロ〳〵と、流れて、底の小石に水の激するにや、流水、紋を爲し、風情あり。月明に萩の下の水、小やかなる潺湲の響を聞くが如し。

◉吾儕は、明月に對し、車窓より烟草の烟を送りつゝ、日暮里、道灌山の麓を過ぐ。道灌山は、昔、秋蟲の名所今も亦た然るべし。電車、急速にして、閑に蟲語を聞くを得ざるも、月明に、崖上の秋草、畫くが如くなるを見れば、昔、趣味の江戸人が一瓢を携へて、此に來つて、幽に、蟲聲に、耳を傾けつゝ、微笑、自得せし面影の、吾が眼中に、あり〳〵と浮びて見ゆるぞや。

◉聽蟲は、離々たる秋草の間に逍遙するを要す。すゝきなんどの、人よりも高く、蟲聲の、何處とも無く湧くこと、夜の江上に、涼味の、吾が肌に迫るを覺ゆるが如くにして、處々、草を隔てゝ、燈火の窓など幽かに

見ゆるも面白かるべし。

◉蟲は月明に啼くべし。明月の時、蟲語は、草露と共に繋し。蟲は露に咽ぶに非ず、月に語りつゝ、歌ひつゝあるならずんばあらず。

◉秋蟲は、暗夜に啼くは、錦衣を著て夜行するが如し蟲聲の妙なるは、須らく月に聞かしむべし。月明に人は秋蟲を見ざるも、秋蟲は、月に見られつゝあるなるべし。實は、月無くんば、秋蟲は啼くを要せず。詩を解せざる者に、詩を説く可らず。知音、無き時、何んぞ天籟の蟲聲を聽かしむ可けんや。

◉明月、一天に、纎雲を留めざるも爽涼極まり無し。然れども多少の美しき薄雲、月を環ぐつて搖曳するも亦可し。多くの場合に於ては、月は纎雲を纒ひつゝあり。

◉美人の、玉顔を露はしたるは晴々し。袖を以て蔽ひ或はヴェールを著け、玉顔の見へつ、見へざるは頗る情あり。月が、薄雲を著けて九天を行けるは、天人が羽衣、翩翩として、靜かに舞へるにも似たるべし。

◉吾輩は、此の明月の夜に、却つて無月の中秋を憶起せずんばあらず。古來、中秋、無月多し。無月は、時に、明月よりも情あり。「望美人兮天一方」美人ありと知られて見へず、中秋、詩人の情懷如何。

其十一

◉吾輩、先年、中秋の游を試み、大洗に明月を見、次年、銚子にも明月を見たる事あり。大洗も銚子も、大洋の濤勢、澎湃として、月を推し動かす可く見ゆ。然れども未だ天荒れ、百丈怒濤、洶湧するの時に、月を望みし事無し。

◉吉江孤雁は、大風濤の日に、銚子に游び、犬吠岬の燈臺に登り、飛沫の間より大洋を望み、其の游を記する事、頗る詳なり。吾輩、之に依つて、犬吠岬の月を想像す。

◉吾輩も亦た嘗て、犬吠岬の燈臺に登る。燈臺は巖角に立ち、崖、高く、波濤つねに洶湧して崖を蹴りつゝあり。燈臺の高さ十數丈、二十丈に近し。而して燈臺守は曰ふ、大風濤の日、大濤、海底を掠めて捲き起り、其の高く飛ぶ時、全く燈臺の窓を蔽ひて、燈光を沒し去ると。此の如き大風濤の日、雲破るゝ時、靜かに、天に輝ける月光を望まば、感興如何にぞや。

◉孤雁は記して曰く、旅館を出で、風雨を衝き、林麓に沿ふて犬吠岬に登る。回看すれば、天地、唯だ一面の怒濤、此の如き日に、戸外に往く者、唯だ我一人な

るべしと思ふ。然れども大風濤も、全力を盡しつゝ、此の渺たる一人を如何ともすること能はざるを思ふ時は、ひとり嬉しと。

◉吾輩、彼が此の時の心境を想像し、併せて、此の時をして夜ならしめ、時に、雲奔り、雲缺けて、月光、怒濤を照らすを見せしめば如何と想ふ。眇たる一人は大風濤に如何とも爲されずとも、大風濤の勢に對抗して、其の心、極力、緊張しつゝあり。月は則ち、靜かに嫣然として、愛の微笑を湛へつゝ、ひとり心豐かに照りつゝあるには非ずや。

◉怒れるものを和ぐるは愛の力なり。怒れる海の上にも、月は和らぎつゝあり。鋭く尖れる人の心をまろくするものは月ならずんばあらず。

其十二

◉自働車の上に見る月は、モーターボートに見る月と境遇相似て、詩趣同じからず。陸地を疾驅するは、海原を急航するには若かず、然れどもモーターボートの月は、篷窓に臥して飽くまで月と語るに若かず。

◉妙齢、相並んで、ゴンドラの歌を歌ひつゝ、孤舟を遣るも書趣あるべし。此の時、迢々たる宇宙、唯だ二人と月とあるのみ。戀の神は戀を照らすらん。

◉月に對する者は、須らく胸憶を開き、滿腔の愛を以て、月と語るべし。肝膽相照らすといふは、心、殘るところ無く、渾身の精神、緊張したる情態に在らざる可らず。人、月に對す、融會あり、緊張無くんばあらず。

◉這般の意味に於て、小舟に於てする者は、水雷艇に明月を見るを感激ありとなす。軍艦の甲板に於てするは、客船に於てすると同日の論に非ず。

◉邊塞に、戟を枕にして見る月は、無二の友なり。長安一片月、萬戸擣衣聲といふは、戰士の妻、砧に寄せて月に訴ふるには非ず。砧の音に籠もれる女の心を、月の、情を傾けて、聽きつゝあるならずんばあらず。

◉月見の清游を爲さんとする者は、海に行くべし。回航して瀬戸内の月を見るも壯游たるを失はず。更に南下すれば興趣ます／＼加はるべし。

◉吾輩、嘗て、甲州に入る。然れども未だ秋風紅葉の時を見ず。葡萄の實の累々として熟するの頃、葡萄棚に沿ひて、明月を望まん事を思ふ。葡萄の實には、「月の雫」の情趣あり。一昨年、南游して見し琉球の月は白露滿天、眞に、明月より雫の垂れて海に至ると思ひ

し。

其十二

◉月の詩は數へ盡されず。詩を作らざる人も、月前に詩語、詩情無きはあらず。吾輩は、源氏物語を讀んで紫式部が、月に憧憬しつゝありし、美しき、優さしかりし人なるを想ふ。

◉紫式部といへば、石山寺の秋月を言はざるは無し。吾輩、嘗て石山寺に登臨す。彼女が源語を書きしと傳ふる書窓あり。吾輩も亦た此の地、湖山の月を見るに宜しきを思ふ。

◉彼女が、月に對するの情は、寄せて源語に在り。源語一部、月下に書かれしを疑はず。此の書に對すれば月影、紙上に在り。月前に、彼女と語るの想を爲さしむべし。

其十四

◉吾輩、つねに南船北馬して、到處に月を見る。心事境遇ともに異なる時、月、悉く美ならざるは無し。吾輩をして月を語らしむれば、客游を語らしむるなり、風景を語らしむるなり。

◉吾輩は憶ふ、月に名所無し。人事に名所あり、月に名所ある事無し。地上、人間の舞臺とするところ、悉く月の名所たらざるは無し。今、海陸ともに、飛行機の發達しゆくに隨ひ、天上も亦た月の名所となるべし。

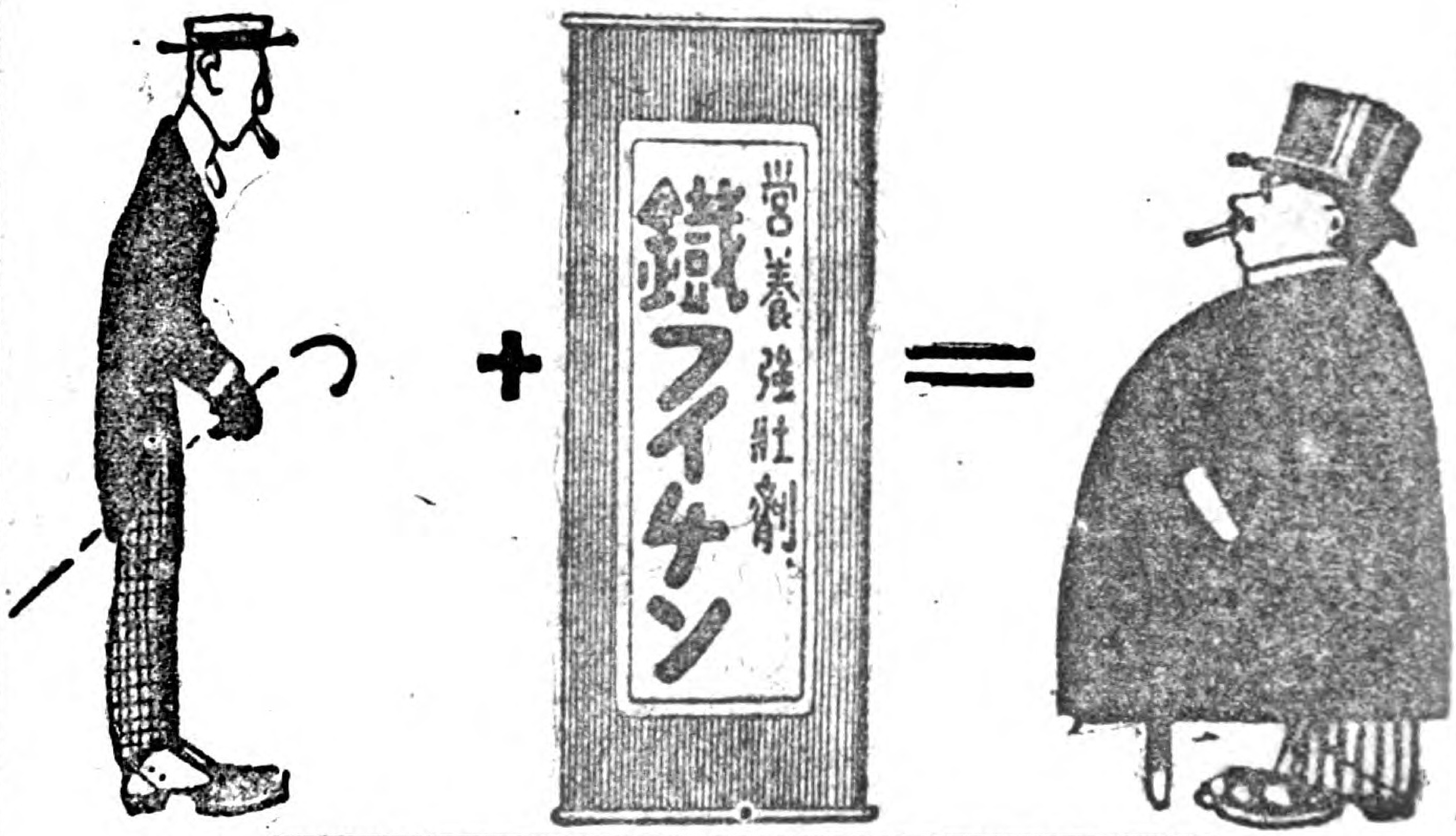
◉客游の中、嬉しきは、寢臺車に寢て、深く帷を下し臥して、ひとり窓に來る月を眺めつゝ行く時に在り。

◉寢臺車の中、一杯の酒無く、一箇の下物無きも、窓間の月と語れば、些の寂寥を覺えず。此の心、樂しき事限り無し。尤も客中の清興と爲す。人生、願くば身健にして、寢臺車の月を見度し。

◉航海して、寢臺に、大海原の月を見るこそ、更に樂しけれ。吾輩は、汽車よりも汽船を喜ぶ。海上の寢臺に見る月は、心境の靜寂、沈著、言辭に盡し難し。須らく默會して、自から樂む可きなり。

◉吾輩は、此の意味に於て、新に家を造るもの、南窓に、寢臺を接し、臥して月を見るの清樂事を縦ましにせん事を望む。樂しきは、心の靜寂、沈著に過ぐるは無し。我一人、ひとり月に向つて靜寂なるの時、まさに足、人間、無上の樂境たらずんばあらず。

◉吾輩は、古の詩人を回想して、芭蕉を以て、俳に聖なるのみならず、月にも聖なるものとす。彼の時、世



腦力及體力を增加せんと欲せば鐵フイチンを服すべし

神經衰弱
身體衰弱
生殖器衰弱
特効新藥

鐵フイチン

鐵フイチンは食欲を進め身體の榮養を佳良となし體重を增加し殊に神經系の疾患及生殖器衰弱を治癒し服用後短時日にして著しく身體全般の健康を增加す

定價一罐（百五十瓦入）十七日乃至廿五日分
金貳圓四拾錢

說明書は神戸市江戸町百四番地瑞西バーゼル化學工業會社日本學術部より無代進呈す

發賣元
東京日本橋區岩附町 友田商店
大阪市東區道修町 武田長兵衛

全國の有名藥店に販賣す萬一品切の節は直接發賣元宛御注文を乞ふ

（中付三の一）

大正初世の一大出版物

空前の國語大辭典出づ
苦心十有五年
廿二萬語を包容す

東京帝國大學文科大學長 文學博士 上田萬年
東京高等師範學校教授 松井簡治
兩先生共著

大日本國語辭典

四六倍判背革 全四冊 **第一卷發行** 千二百五十頁 挿畫三百五十 壹萬部限り **特價金五圓** 正價六圓五拾錢 送料内地廿四錢

國語界の權威たる著者兩先生、明治卅四年を以て本書の編纂に着手するや、其蘊蓄を傾けて**沒頭十五年**、改稿幾回、**原稿の高さ**は積んで**百四十餘尺**に及び、**古語新語二十二萬**を包容し、今や始めて整備充實せる前古無比の國語辭典となりて江湖に見えんとす。時恰も**大正の新世**に際し、**大典擧行の秋**に當り、其第一卷を公刊するを得たるは國家の爲に慶賀すべく、出版者の光榮之に如くなし。

本書編纂法の周到なる、和漢古今の典籍は勿論、現代に於ける新聞雜誌の中より有らゆる語句を摘出して五十音索引を調製し、一々語句の出處を探り、悉く其出典を載し、之に向つて解釋を施したるものなるを以て、**片言雙句も孫引と稱するものなし**。故に語々其出典を掲出し、**卷數若くは篇名、部名等を掲げ**、直ちに原本に就いて捜索するに便ならしむ。尙普通語の外、傳說に基きたる神佛の名、禁中宮殿、官位官署の名稱其他成句、格言、俚諺を採りて解釋を與へ、**成句辭書、諺語辭書兼用**の便に供せる、又法律語には**一々條項を掲げ**、**外來語**には原語を附し漢文より來るものには**原文を掲げて**出典を示したる、**挿畫**は說明上言辭の悉し難きを精選したる、終末に索引を附したる等、理想的**國語辭典としての要素一も備はらざるものなし**。要するに本書は**著者兩先生**が、神聖なる國語に向ひ、虔敬的獻身的熱誠を以て編纂せられ、**出版書肆**が眞摯なる學者の事業に對して**同情的犧牲的努力**を以て、既往拾萬圓の資を捧げて成業したる空前の二大國語辭典にして、印刷の鮮明、裝釘の善美、特價の破格的低廉、凡ての點に於て大正初世の一大出版物として世界に誇り後世に記念せしむるに足る。**學者學生、教育家**は固より、**家庭、學校、官公吏、實業家、銀行會社、諸官衙、社寺、諸團體**、其他苟も國語を愛重し著用せんとする者は必ず一本を備へざるべからざる寳典なり。

先づ見本を請求せられよ

往復申込葉書次第 **五千部限り優先券添附**

發行所
東京神田 **富山房**（振替五〇一一）
東京日本橋 **金港堂**（振替八一五八）
賣捌 全國書林

（中付三の三）

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

刮目して看よ愛國の士

●英國フラックフオックス原著日本今西嘉藏譯

最新刊

將來の大問題 太平洋の爭霸戰

本書は先年英京にて出版せらるゝや英米讀書界の注目を惹き多くの新聞雜誌は盛にこれを論評せり内容は近世最も世界の注目する太平洋の問題を說き殊に我日本に關する所多しされば本書を熟讀し自ら醒め自ら覺醒するを以て愛國者の義務なりと信ず今や世界の强國は數百の艨艟と數百萬の精兵を動かし有史以來の大事變起る戰雲全歐の天を蔽ひ東洋亦多事なり是人類歷史の一大轉機に非ずや舞臺一轉せば實に太平洋は世界の爭覇戰場なるべし其の意義を知らんには本書に依らざるべからず本書の價値は愛讀者の再讀三考によりて初めて明かなるべし。

内容目次

第壹章　將來最囑目すべき太洋
第貳章　太平洋に於ける露西亞
第參章　日本之興起
第四章　支那と無數の亞細亞人
第五章　北米合衆國
第六章　英國と太平洋
第七章　太平洋に於ける濠洲
第八章　新西蘭及其他の英領
第九章　太平洋上の土民
第十章　南米即ち拉丁亞米利加
第十一章　加奈陀と太平洋
第十二章　太平洋上の海軍力
第十三章　太平洋諸國の陸軍
第十四章　太平洋諸國の條約
第十五章　パナマ運河
第十六章　太平洋の工業上關係
第十七章　太平洋軍略上の問題
第十八章　結論

菊判上製本　正價金八拾錢
特價五拾錢　郵稅八錢

（中付の三の四）

第一高等學校教授 三並良譯

賣行激甚　忽二版

オイケン氏 人生の意義と價値

舊世界觀は倒れたりと雖も新世界觀は未だ確立せず思想界は紛亂し人間は其歸趣に迷はんとす是れ實に現代の煩悶にして精神界一切の病源なりオイケン博士が其獨特の見地より此大問題の解決を試みたるものを本書とす由來博士の所說は難解なりとの評ありと雖も本書の如きは決して然らずオイケンを知り人生問題を解かんとする者は之れを繙かざるを得ず

菊判上製美本　全壹圓五拾錢　郵稅金八錢

東京神田區表神保町七　大同館發行　振替貯金口座東京八七弍番

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

に未だ寝臺車無し。彼は馬背を以て、汽車に換へて、天下を周遊したり。

●芭蕉が月の東海道を旅して、駿河路を過ぎ「馬に寝イ残夢、月遠し、茶の烟」の一句あり。此句を冥想すれば、月前、人生の至境、恍として、吾が心頭に浮ぶ。

●若し夫れ、南窓に沿へるの寝臺に、明月、残夢を照らすの時、夢乎、眞乎、斯生、一睡、直ちに理想郷に到れるを覺ゆべし。

●「月の玉川」「月百姿」など、錦絵に、月の詩趣を描けるもの少からず。然れども未だ馬背の残夢を描けるの一枚無し。明月に鞭を擧げ、月前に笛を吹くの情を歌へるも少からず。悉く、芭蕉が、馬背残夢の一句、雋永、幽深なるに及ばず。

其十五

●今、歐洲は、空前の大戰亂に際し、紅花の咲き満つる文明の野の月も、大砲の烟に蔽れるなるべし。日々顔を剃り、頭に香水を注きて戰ひつゝある碧眼の軍人は、如何に、戰場の月を見つゝありや。

●彼等の中には、月前に向つて、月の爲に笛を吹くもあらん。故郷の愛人を思ひつゝ、歌ふもあるならん。彼等は、明日、吹きて沙場の灰と消ゆる前の夜に、月に對して、戀を訴へつゝあるが少からざるべし。

●歐洲の月、瑞西の月は、吾が日本アルプスの月に似たるべし。就中、吾輩は、和蘭の月を想望す。月光美の、人世に煥發しつゝあるは、水郷の水に在り。

●吾が國にては、霞浦より、潮来(イタコ)、新島(シンジマ)に至るの水郷の月、別趣の詩景を爲すべし。水は地を環ぐり、地に錯綜して水あり。水は家を環ぐり、葦荻の中、人聲あり、人影あり。家あるところ、森あり、花あり。水を以て路と爲して、路は蛛網の如くに經緯せられて、蛛網の上、悉く橋あり。水は、天地、人間を滋へつゝあり。

●吾輩は、此の頃の、此の水郷を想像す。満目紅樹、枯蘆茫々、明月の照らし來る時、水にも、地にも、樹にも月あり、月、天に満ち、人に満つ、往くとして、踏むとして月ならざるは無く、千萬の珠玉を碎きて、満地に散ずるが如く、一沙一石、一草、一葉、月光ならざるは無し。人、残夢に醒むるの時、微に、水禽の羽音を聴くこともあらん。

吾輩、此の頃、齒を病みて、此の稿を草するに、斷えて又た續く。遂に三四日を費す。夜々、明月皎然、書窓に臨んで、我を慰むるに似たり。九月二十日

黒頭巾再記

人物評論（六十四）

一木内相論

▲政治家か學者か

鵜崎鷺城



改造前の大隈内閣は大浦、加藤、若槻等が中堅であつたが、改造後は今まで伴食若くは准伴食であつた一木喜德郎、武富時敏が三役の位置に進んだ。官幣小社から官幣中社に昇格した。内務省が　浦の手を離れて一木の手に移つたのは、内務省と官僚的勢力の關係に於て變りなく、同じ官僚でも大浦の同志

會員たりしに反して、一木は何の政黨とも沒交渉であるから、寧ろ官僚の色彩が一層濃厚なる譯であるが、彼の人物からいへば大浦時代の如き危險がない。少くも内相としての品位を保つことが出來やうと思ふ。最初から内相になつたのと違つて、大浦の後に直つたのだから何程か世間の感じが好い。それ故に大浦といふ對照物のあることは一木の爲めに勿怪の幸である。

一木の家は遠州掛川の大地主で、先考は岡田良一郎といつて舊自由黨に屬し、初議會に代議士になつたと思ふ。此春の總選擧の時、一木が學校視察を名として與黨候補者の應援に出懸け、政友會を攻擊したといふので、政友會の連中は、一木が政友會を惡口するは恰も死んだ親爺の惡口を言ふのと同じで、親不孝の文部大臣だなどと妙な理窟を附けたさうである。兎に角一木の家は門閥家にして財產家であるから、學資の心配なしに大學で學問し、大學卒業後も順調に役人生活をして來た。大學の政治學科を出たのは明治二十年で、内田康哉、早川千吉郎、林權助、鈴木馬左也、林田龜太郎等と級（クラス）を一にし、在學中も卒業の時も成績に一番であつた。早川と鈴木はズツト前に役人を罷めて商賣人に鞍換へし、内田は一番早く大臣になつたけれども、今では好い芽を吹きさうな模樣がない。林は大使にまで昇つたけれども、日露戰爭後今日に至るまで伊太利住ひをして無聊に苦しみ、林田は不詳な事件にひつかゝつて可惜一生を棒に振つて了つた。兎に角現在に於ては一木が一等得意の境涯に居る。

彼は最初から山縣系に屬し、長系官僚の錚々たる一人である。第一桂内閣の時法制局長官に擧げられ、第二桂内閣の時、平田東助の下に内務次官に任ぜられ、貴族院議員としては三十三年以來、山縣系の巢窟たる幸俱樂部に籍を置いて居る。彼が貴族院議員として認められたのは、第一次西園寺内閣の郡制廢止案を法制の上より立論して反對演說を試みた時からである。其時は貴族院の官僚系より小松原英太郎や馬屋原彰等を陣頭に立たせたが、何といつても一木の演說が一番理義徹底して敵味方の間に重んぜられた。此處女演說以來、彼は大臣格を以て扱はれ、第二桂内閣の時も最初大臣に擬せられた。平田の懇望で次官になつたけれども、普通の次官と違つて平田は殆んど省務一切を任した。蓋し此兩人は系統思想、感情を一にし、初めから兄弟分の關係があるから、双方相信じ相安んじ、大臣及び次官として恰もフアミリー的であつた。

山縣の信用と官僚系の寵兒たる點が、自然に彼を大臣の地位に推し進めたけれども、一木を以て政治家の器局材幹あるものと爲すことを得ぬ。彼の天分は何處までも學者たることにある。今日は若手の憲法學者が續々輩出したが、而も彼は今猶ほ憲法學者として造詣深きを認識され、特に行政法に於てオーソリテーの位置を保つて居る。山縣系の間に重んぜられる所以のものも、政治的能力にあらずして學者たる點にある。學者としての彼は學者に適應せる諸種の資格を有して居るが、政治家としては餘りに世間氣と精彩氣魄に乏しい。阿兄の岡田良平は俗氣滿腹の人間で、時として妙な權略を弄し、弟とはまるで人物の型が違つて居る。

一木は毀もなければ上手もない。目に立つ仕事をせぬ代りに何をしても危なげがない。仕事振りまでが人物の如く地味である。言ひ換へれば以處までも學究的の無味乾燥で、頭が論理的(ロヂカル)に固まり、寧ろ餘りに論理的に過ぎ、事々物々理窟を以て律するといふ風がある。一言にして評すれば法律の權化の如き人で、それ丈け人間に少しも情味雅味の分子がない。

それ故に頭腦は非常に明晰で、對ひ合つての座談でも議會での答辯でもキチンと條理が立つて、些かの模糊曖昧なる點がなくして必ず結論に入る。從來も今日も法制局では他の省から廻附して來る法律命令案に對して、多少なりとも修正を加へる習はしであるが、一木が內務省參事官時代に立案したものは一字一句の修正を加へず、又た修正を加へる餘地がなかつた。二十七年獨逸から歸つて大學敎授を兼任した時、其講義振りは學生の間に評判が好かつた。今まで學者にして法制局長官になつたものは故梅謙二郎、岡野敬次郎、奧田義人、富井政章、高橋作衛であるが、其中一木が一番適任であつたかも知らぬ。官僚系の學者としては今の處彼の右に出づるものは無からう。

昨年彼が大隈內閣に入つて文部大臣になつたのは、表面貴族院の幸倶樂部を代表したことになつて居るが、實際は山縣の勢力が內閣に及んだものと看るべく、大隈の意も亦長系官僚の機嫌取りにあつたこと言ふまでもない。加藤、大浦、若槻に加ふるに一木を以てしたことは、餘りに大隈內閣の官僚的色彩を濃厚ならしめた。が、居直り後は軍閥大臣を除くの外、殆んど政黨出身のものを以て固め、既に一木が純官僚の最後の一人として殘つて居るのみである。而して彼を內務に昇格させたのもやはり山縣と相談の結果らしく察せられる。併し一木は其系統及び思想が官僚的といふ丈けで人格の上に於て少しも缺點がない。大浦の如く惡い意味の執着心、功名心及び黨派根性がないから、自分の位置を利用して政略的手段を運らすやうな心配はない。今度の府縣會議員選擧に於ても、若し大浦が依然として內相の職にあるならば、無論裏面に於て與黨に偏する振舞をしたかも知れぬが、一木は大浦の如く無學でない丈け、思ひ切つたことをする度胸もなければ又た與黨と直接の利害關係がない。殊に彼は大學卒業後直ちに內務省に入り、書記官參事官及び次官を長く勤めて省內の事情に通じて居るから、たとひ國務大臣としての經綸に乏しいにせよ、文部よりも却て內務に適して居るかも知れぬ。大浦のやうに政弊を助長せぬ丈けでも遙かに勝つて居るかも知れぬ。

併し政治家としては未成品で、學者としては既成品である。唯だ彼が政府の責任支出を是認して議會に辯疏大に務め、殊に聯帶責任論を無視して大隈內閣の留任を可なりとするの解釋を與へたるが如きは、憲法學者として甚だ腑に落ちぬことである。若し憲法上非違なりと承知しつゝ自分の入閣せる大隈內閣を擁護する爲め、學者的良心を殺して斯くの如き意見を唱へたとせば、彼も亦曲學阿世の亞流で學者として尊敬すべき所以を認めることが出來ぬ。

一木君

文部大臣
法學博士　高田早苗

一木君の大學に居た頃と、私共の時代とは少し違つて居るから、其時分には別に私と一木君との間に交りはなかつた。私が一木君の名を聞いたのは、丁度、あの人が帝國大學で國法學の講座を受持つてからである。憲法、國法學の學課は、私共と同時代の穗積博士が最も先輩であるが、次に一木君が西洋から歸つて來て後、穗積一木と相並んで、其學說を異にしながらも兩々相下らず、國法行政學の講座に立つて其名聲を博して居られた。穗積の憲法論は一種の特長有るには相違ないが、同時に極めて偏狹な學說であるを免れなかつたが爲めに、廣い世間は寧ろ一木の說に傾いて、より多く歡迎したのは世人の知る通りである。そのうち行政部に入つて、一方大學に教鞭を執らるゝと同時に、他方には重要な政府の官職に就き、或時は內務次官に、或時は法制局長官に皆其令名を馳せられたが、大隈內閣の成るに及んで、入つて閣僚の中に其重きを加へたといふのが其歷史である。

我輩は一木君の一門とは交際した人が多い。第一嚴父の良一郎君は二宮門下の俊足で、第一議會の時に衆議員議員に當選せられたが、私も丁度其時議員となつて居つたから、君は大成會即ち政府黨の領袖の一人であり、我輩は民黨たる改進黨の一人で、其意見は違つてゐたが、私交に於ては議場の內外ともに親密な交際をした間柄である。又兄さんの良平君は同窓の一人で、甞て我輩は文部省に參與官となり、又專門學務局長の職を奉じたことがあつて、君も其當時參與官をして居られたから、それからといふものは今日まで親しく交際を續けてゐる。

一體靜岡縣でも遠州は學問の盛な處で、殊に名族の中から學者が餘計に出る處である。掛川附近に於て名族と言へば、人は大概山崎一家と岡田一家とを指す。其山崎家からは今の帝國大學の教授山崎覺次郎君を出してゐるし、岡田一家からは、即ち良平君と一木內相とを出してゐる。其他濱松からは金井延博士のやうな人をも出してゐる。

一木君の人となりに就いては、世已に定評ありで、今更我輩が彼れ此れ批評する要を見ない。極めて明晰な頭腦と、公平な資質とを有つ學者であつた、加ふるに深い薀蓄がある。而して其性質が偏固でなく、模範的紳士ともいふべき總ての資格を備へた人である。

一體今日では中央の政治は政黨內閣に傾いて來て居るが、之は已むを得ない現象であるのみならず、自然の傾向であらうと思ふ。即ち今後の中央の政治といふものは、政黨の首領をして代る〲其局に當らしめ、善政の競爭をなさしむる外にないと思ふけれど、地方の政治は之を黨爭の外に置くのは最も必要なことであらうと思ふ。大隈內閣の主義とするところも要するに其點に在らうと思ふから、此時に際して一木君の如き黨派以外の人、而も公平なる資質を有ち、同時に行政法の學術と實際とに通じたる人が內政の局に當るといふことは獨り大隈內閣の幸のみなら

ず、國家の幸福なりと深く信ずる次第である。

▲眞面目なる內相

警視總監　西久保弘道

一木內相を一言にして評すれば眞面目の人であるといふ以外に何も云ふ必要も無ければ、また言ふことも出來ない。從つて其部下である者よりすれば、かういふ眞面目な長官を頂いてゐると仕事が仕易い。といふのは役人計りではなく何人でも變則な事を遣るのは非常に困難な事であるが、上に立つ者が眞面目であれば、此變則な仕事といふ物を爲る必要がないからである。そこで吾々の立場からいつて、安心して事務が執れるといふことになる。

凡そ眞面目といふことは、何れの時代にも必要なものであるに相違ないが、わけても今日の如き不眞面目な時代には、此眞面目といふことの必要が一層甚だしくなつて來る。私は今の時代に一木氏の如き眞面目な人をして內相の任に膺らしめたといふことは、寔にいゝことだと思つてゐる。

又私は常に眞面目に敵する者はないと信じてゐる。然るに世間には能く策を弄する人があつて、其等の人が眞面目な人を目して、策も何も無いアレだけの人だ、といふことをよく言ふが、其言葉が其人を褒める意味に使ふならば、私に異存はないが、それだから馬鹿だといふ意味に使ふならば、それは以ての外の事だと思ふ。人は正直で眞面目でありさへすればよいので、策を弄したり何かしなければ、世の中が渡れぬといふやうな事では洵に困つた次第である。

▲同窓生の觀たる一木君

早川千吉郎

一木君と私とは豫備門以來の同窓で、ずウつと大學まで一緒に卒業して、今日も尙親密な交際を續けてゐる。吾々の同級は極めて人數が尠かつた。そして其時分は御承知の通り行政、經濟、外交の三部に分れて居つて有名な前外務大臣、子爵內田康哉君や、今の伊太利公使林權助子などは外交の方で、財政經濟の方には私一人だつたが、政治の方には即ち一木君を初め鈴木馬左也君、林田龜太郎君、淺田知定君、それから大庭寬一君などいふ人達が居つた。で、總勢僅か八九人の小人數だつたが、隨分毛色の變つた人間の寄合で、外から觀ると隨分變な級(クラス)のやうにも見えたらしい。が、孰れも若い元氣者のことで、討論を遣る、演說を遣る。社會改良論なども其頃盛に唱へたものだ。今日の制服の規定なども吾々の級の發案で、端艇競漕(ボートレース)の前身なる遠足會も吾々の級が始めたのだつた。

斯らいふ風に種類の違つた人間の寄合ではあつたが、不思議と一人が

唱へると、他の者がみんな一致して、之に和するといふ風で、能くいろんなことを此方から註文して遣つたものだ。又吾々は吾々の同窓會を組織して、之に偶于會といふ名を付けた。之は莊子に何でも風が偶と呼べば于と應ずるといふことのあるのから思付いたのであるが、實に吾々の級は此偶于といふ字で表はされて居つたやうに思ふ。内田の豪毅、鈴木の寛仁大度、それに熱心で機敏な林田などの夫れ〴〵特長ん有つた、總じて快活な磊落な、も一言へば粗暴な中に在つて、獨り極めて謹嚴、苟くもせざるところのあつたのは一木君であつた。今日でも君は到るところ此謹嚴の風を遺憾なく發揮して居るが、學生時分から君は人一倍眞面目な質實な人であつた。吾々の時代は多くは寄宿舍生活をしたものであるが、君は通學をして居つたから、吾々が能く演說會や討論會を遣つて教師や舍監に突き當つたりした時にも、君は餘りさういふことには加はらなかつたやうである。一體吾々の同窓は皆概して老成の風があつた。一木君なども矢張り此の老成人の類に洩れなかつた。吾々や鈴木君や林田君は實際に年齒も取つて居つたが、一木君と内田君とは其の頃最も若かつたやうに覺えてゐる。確か一木君が一番下だつたかと思ふ。が其割には老成の人で、今云ふ通ふ極めて謹嚴であつた。其頃では外山正一さんが最も有力な教授で、吾々は先生に頼んでスペンサーの社會學を講義して貰つたものだが、其講義を眞面目に筆記などする者は殆ど無かつた。先生が頻りと英語で講義するのを、たゞ其顏を眺めて聞いてゐるといふだけであつたが、其中に在つて一木君は、獨り眞面目に筆記をしてゐた――のか何うだかはつきり知らぬが――先づ眞面目に筆を執つてゐたやうに思はれる。兎に角吾々はどつちかと云へば話を聞いて自ら會得するといふ方であつたが、君は何處までも眞面目に先生の講義を聽くといふ風であつた。

が然し、眞面目一方の人といふものは、往々にして自分の事ばかりを考へたがるものだが、一木君は決してさうではなかつた。寧ろ極めて情誼に厚い人であつた。單に理屈一片に流れるやうなことはなく、世の中の世態人情をも能く嚙み分けることが出來た。であるから磊落の豪傑肌の人間の仲間に在つて、一人謹嚴を持してゐたけれど、それと同時に腹は同じ人情の紆餘曲折を能く理解してゐたから、決して我々の仲間を外れるといふやうな事はなかつた。品行も極めて方正、學生としては模範的な學生であつたのは申すまでもない。特に頭腦の明晰な事に立つては恐らく珍らしい人といつてよからう。君は學校を出ると直ぐ行政官になつたが、矢張り學問に力を入れ歐羅巴に行つて、博士になり、内務の行政官をやつてゐても、傍ら大學教授として學問を怠らなかつた。今日でも法學博士であり、内務大臣である。君は實に内田康哉君と共に我同窓中の双璧といふべきである。

▲部下を同僚視する人

内務參政官　藤澤幾之輔

内務大臣と我輩とは交際が日尚淺く、其人を知る機會も少ない。で、其長所短所といふやうなこともまだよく解らない。從つて我輩には君を論評する資格はない。然しながら私が氏に接してから只一つ敬服して措かないのは、省の事務を扱ふに當つて、局課長を集めて吟味するといふやうな場合にも、氏はそれ等の局課長を殆ど我が同僚であるかの如き立場に於て、些の隔意なく、自らも胸襟を開き、局課長をしても自由に討究せしめるといふことである。この氏の局課長に對する關係は、私は甚だ面白いと思つてゐる。

尤も氏は曾ても内務省に居つたことがあるそうだし、官吏をしてからも相當の年數を積んだ人であるから、此等の行政事務に通じ易いのは勿論であるが、今までに我輩が立合つた問題等について觀ても、君は澁もなく意見を呈出し、適當な質問を出して相互に打解けて討究することの出來るやうにしてゐる。これは從來の官僚式の人には到底出來ないことである。例へば監察官をして其報告をさせながらも、隨所に適當な質問を發して不明を糺すのみでなく、監察官をして其意見を自由に關係せしむるに都合好き機會を與へる。

私は今言つたやうに、君とは交際が淺いから、立ち入つたことは能く知らないけれども、此點は確に敬服に價するものと思うて居る。兎にも角にもよく解る人である。其意見も正鵠に當るものが多い。

▲意外な人

笑　生

一

▲大隈内閣が出來る時に、貴族院の山縣系から一人取る積りで、彼れか此れかと物色して見たが、此方で望む人は彼方が應ぜず、彼方で望む者は此方が感心せず、結局當り障りの少ない一木君をと云ふことになり、彼れは意外の拾ひ物をした。

▲そして山縣公は、政黨の關係なき彼れを内務大臣にしたいと云ふ希望であつたが、狡猾なる大浦子が、政友會を打破して勤王黨を作ると言つて巧みに政友會嫌ひの彼れを動かし、一木君を文部の方に持つて行つたのである。

▲所が大浦子の内務には尾崎君の反對があつて、大隈伯は内務を定むる能はず、内閣は月足らずで生れて了つたのであつたが、時機を見て結局大浦子を内務に据えると云ふことは、チヤンと方針が立つて居たのである。是れが抑も無理の始めで、とう〱大浦子はあの始末となり、勤王黨は出來なくて大隈黨が出來て了つたので、山縣公もサゾ殘念であらう。

▲話が側道に這入つたが、兎も角、一木君は唯一の山縣系代表者として入閣したわけで、世間では必ず或時機に於て文部の一角から内閣が崩れ出すだらうと覗測して居るものもあつた。山縣系の諸人も亦た彼れに期待する所が多かつたであらう。

▲そこで少しく彼れと山縣との關係を述べて置く必要がある。彼れは明治二十年に大學を卒業して直ちに内務省に仕出し、廿三年に内務書記官となつたが、此の時の總理大臣は山縣公で内務大臣を兼ねて居た。此の時より彼れが才能と小廉曲謹な態度とが、頗る山縣の御目に止まつたのである。

▲尤も彼れが山縣公に接近すべき道は其の以前から開かれて居た。山縣公は十八年から廿三年まで足かけ六年間（洋行中松方侯が兼任した）内務大臣をした人で、此の間、地方行政のことで一木君の實父良一郎翁と相知るに至つた。

▲良一郎翁は例の報德宗の熱心家で、德望静岡縣に普ねく、内務省が此の人を利用したことは少くない。而して子煩惱の翁は、良平、喜德郎の二子の爲めに、大官の間を駈け廻はつては、其の將來を頼んだのであつた。されば一木君は書生時代からして山縣公の門をくゞつたこともあつたのである。

▲廿六年獨逸から歸つて、内閣書記官となつた。其の時の書記官長は伊東巳代治子であつたが、矢張り山縣公の口添へで這入つたのである。其れから三十一年には矢張り山縣系統の内務大臣芳川顯正伯の下に書記官となり、同年十一月に山縣内閣の組織せらるゝや、高等官五等か四等より一躍して勅任官となり、内務省參與官に任ぜられたのである。當時は勅任官は恐く特別任用であつたから、此んな破天荒の事が出來たのであるが、三十三年には例の文官任用令が發布せられたので、危い處で一木君は大儲けをしたのである。

▲彼れの兄岡田良平君も此の手で文部省の勅任參與官となり、岡野敬次郎君は農商務に、平山成信君は大藏省に同じく參與官となつた。それから三十二年に法學博士となり、三十三年山縣内閣が辭職するに際し、貴族院議員に勅選された。

▲第一次桂内閣の時、法制局長官に任じ、第二次桂内閣の時には、平田内相の下に次官となり、兄の良平は小松原文相の下に其の次官となつた。彼れは世間から平田子の乾兒であるかのやうに思はれて居るが、是迄は常に職務が懸け離れて居て、直接の關係はなく、唯だ山縣公を通じて握手するに止まつたのである。

▲併し山縣公周圍の諸人の中では彼れと平田子とは最も近き趣味性格を有し、彼れが貴族院にありて、西園寺内閣の郡制廢止案に大反對をやつた時の如き、彼れと平田子とは全く同心一體で、此の時よりして平田子の彼れに對する信用は俄かに數倍したのであつた。

▲且つ彼れと平田子との關係は例の報德宗を通して一層深くなつた。報德宗は品川彌二郎子の内相時代より大に政府に認められ、井上毅子なども大に二宮翁を尊崇して靜岡の報德會を賞賛したものであるが、平田子が農相となるに及び、又た大に報德宗に傾倒し、産業組合なども其の趣旨に依りて起されたのである。

▲所が産業組合を段々研究するに從つて、其の根本主義に於て報德宗と衝突することが發見せられたのである。即ち産業組合は積極的であるけ

れども報徳宗は消極的である。そこで平田子は報徳宗は駄目だと言ひ出した。

▲平田子が內相となり彼れが其の次官となつた頃が、恰度此の意見の衝突の初めで、段々兩方の懸隔は遠くなつた。省內の局長などは大臣と次官との衝突を緩和すべく、種々の苦心をしたものである。それで唯今では彼れと平田子とは山縣公を通して僅かに結合を保つて居ると云ふ有様となつた。

▲彼れと山縣との關係は右の通りである。されば改造前の大隈內閣は彼れを山縣の人質と云ふ積りで取扱つて居たが、此の人質が何時逃げ出すか知れぬと云ふ恐れを抱いて居たので、恰かも主家の若殿を遇するやうに、甘やかして居たのである。

▲餘り甘やかし過ぎたので、傳染病研究所や水產講習の移管などを企てゝ危く內閣に累を及ぼさうとしたが、これは何うにか切拔けたものゝ、之れに對しては山縣系の兄弟分なども大に反對し、彼れの一木の心事を疑ひ始めたのである。それは彼れは見かけ程に正直な男では無いと云ふのであつた。

二

▲大浦事件が爆發した時には、山縣公は非常な不平であつた。政府が其の政策を實行するために、機密費を使用して議員を買收したが何うして罪となるか、又た陛下の內閣の政策を妨ぐるやうな事を、其の下に隷屬する檢事がすると云ふのは一向わけが解からん、何故平沼を免職させぬかと云ふ意見であつたと聞いて居る。

▲斯んな考へで、山縣公は一木君に對しても不平であつた。一木が居ながら何故斯う云ふ事をさせたのだ、意氣地のない男である、賴み甲斐の無い男であると思つたのである。おまけに辭表提出の形式を三段に分けて理窟を付けたのは一木君の仕事であると云ふに至つては、山縣公も甚だ彼れを意外としたらしい。

▲其三段の形式と云ふのは即ち(一)大浦は病氣と稱して辭職し、大隈伯が其の後任を兼攝すること(二)然る後大隈伯は監督不行屆と云ふ理由で辭表を捧呈すること(三)然る後閣員は大隈伯に殉ずるの理由の下に辭表を提出することである。此の如くにして大浦事件と首相及び閣員とを全然切り放さうとしたのである。

▲斯くて彼れは小田原に山縣公を訪ふて經過を報告に及んだ。所が山縣公はチャンと彼れ及び大隈首相の心中を讀んで居たのである。それで空とぼけて『那んな事ならば(即ち大浦事件に無關係ならば)何も辭職するに及ばぬでは無いか』と言つたさうである。

▲是に於て彼れは鬼の首でも取つた積りで走せ歸り、山縣公は辭職の必要なしと言つて居ると大隈首相に復命したので、首相の得意滿足は大なるもので、シミ〴〵彼れの三段形式の立案の巧妙であつたのを感謝せすには居られなかつたのである。

▲山縣公は八月卅一日召によりて上京し、其の東京驛に着するや、其し處には山崎首相秘書官が待受けて居て、參內前一寸大隈首相が御目にか

ゝりたいと云ふ旨を申入れた。然るに山縣公は御召によりて參內するのであるから、其の前に於ては何人にも面會は叶はぬと答へ。樞密院に立寄つて軍服に着替へた上、直ちに參內した。

▲すると宮中に大隈首相が待受けて居て、山縣公を捉へ、今回の事件の經過を簡短に述べて、實に心外千萬であると言つたので、山縣公はホンの御座なりに『左んな事なら辭職にも及ぶまい、併し只今拜謁する所であるから、萬事は其の後の話にしやう』と答へたのであつたが、實は山縣公は小田原を出發する時から、事實に於て結局總辭職の外はあるまいと高を括つて居たのである。

▲山縣公は大隈伯に分かれて拜謁して見ると、陛下は『斯々の事情で大隈が辭表を差出したけれども、其の儀に及ぶまいと申して置いた』と云ふ意味の畏れ多き御言葉があつたやうに漏れ承はつて居る。是に於て山縣公上京の問題は解決であつて、優詔を畏こみて大隈首相に留任を勸告するより外の事はなかつたのである。

▲而して一木君は既に陛下の御優詔があつた以上は、大隈首相の全責任は爰に解除せられたわけで、留任するも何等不都合の事はないと云ふ解釋を取り、始終留任論者であつた。此の事に關しても山縣系の諸人とは全然意見が反對で、山縣系の諸人は、留任問題は敢て問題ではなく、政治的の問題で、斯の如き場合に優詔を云々するは、皇室を政治の渦中に投ずるの恐れあり、輔弼の責任を盡したものとは言はれぬと論じて居る。

▲そこで九月三日に山縣公と大山公とが相携へて大隈首相を訪問し、留任を勸告したのである。併し此の留任勸告なるものは寧ろ詰問的意味を帶び、大隈首相は一旦特に兼職の大浦內相の後任を兼ねながら、其後に至りて監督不行屆の理由で辭表を出すと云ふのは其の理義が明瞭でない、若し更に監督不行屆の責任を引かんとならば、何故に大浦內相の辭表と同時に自らの辭表を捧呈しなかつたかと云ふのであつた。

▲之れに對する大隈首相の答へは毫も要領を得ないので、結局留任を勸告して引取らうとすると、大隈伯が山縣公に對し『閣下に特に面談したい事があるが、明日訪問して差支ないか』と云ふことを問ふた。山縣公は之れは大變だと思つて、大山公と顔を見合はせたが『閣下は唯今喪中の身であるから、自分の方から訪問しやう』と答へて別れた。

▲翌四日山縣公が大隈伯を訪問すると、伯は開口一番、直ちに『自分は斷乎として留任する決心である、否な留任しなければ陛下に對し奉りて相濟まぬ、世間から如何なる批評を受けやうとも、自分は一身を犧牲として陛下の御優詔に應へ奉る積りである』と言つて、夫れから孔明の出師の表などを引いて留任の理由を述べ、加藤はモ少し物の解かる男と思つて居たが、實に愚物である、怪しからん奴であるなどゝ凡そ二時間に渉つて演說したさうである。

▲出師の表には山縣公も餘程面喰つたらしい。兎も角一々御尤千萬と答へると大隈伯から、海相と外相の後任を推薦して貰はれまいかと云ふ相談があつた。山縣公は之に對し『海相は八代に外相は加藤に相談するのが順當であらう』と答へると、今度は『一木を內務に轉じさせたいから

口添へを乞ふ』と云ふことであつた。

▲山縣公は『イヤ一木の事ならば自分が口添へするまでもなく、閣下から御話しあつて充分だらう』と拒絕したので、大隈伯の方では、是れ山縣公が一木の留任を妨害せんとするものではあるまいかと疑つたが、直話一木君に話して見ると、一も二もなく喜んで承諾したので、ホット胸を撫で卸ろした次第であつた。

▲其の後、一木君は山縣公に內相轉任を承諾すべきや否やの相談に行つたが、山縣公は『其れは君の自由に決したが宜しからう』と答へたと云ふことを聞いた。今や大浦子なくして、彼れは內閣に於て全く孤立の立場に居る。前臨時議會で貴族院を通過し得たのは、背後に山縣、平田ありて、大浦子が奮鬪した結果である。今後の彼れは眞に一件食に過ぎなからう。

三

▲若いと思つた一木君も今年は四十九歲だ、彼れは明治二十年、兄良平と同時に大學を卒業した。其の年の政治科卒業者は總員八名で、彼れを首席とし、內田康哉子爵が二番、早川千吉郞氏が三番、林權助子爵が四番、林田龜太郞、鈴木馬左也なども其の中に居た。

▲彼れが明治二十三年自費で獨逸に留學した頃は、秀才の名頗る高く、留學中に豫算論を著はし、廿六年歸朝、三十二年に三十三歲で法學博士となり、三十四歲で勅選議員となつた時には、此の分で行けば四十にして大臣となるだらうと思はれたが、同朝生の內田、林の二人が子爵となり、後輩の若槻君や柴田家門君が大臣となつた頃は、早や世間から忘れられやうとして居たが、天運と云ふものは不思議なもので、山縣公の多年の政敵であつた所の大隈伯の內閣に這入つた。

▲彼れの兄岡田良平君は至る所不評判の人である、小松原文相の下に次官として學制改革を企てた時などは、有らゆる方面から攻擊を受けたものだ。一寸正直一圖の木强漢のやうに見へて、其の實甚だ野心に富み權謀術數に長じた男である。殊に事大主義で、自分の出世の爲めならば常人の出來ない屈從にも甘んずると言はれて居る。

▲一木君は兄よりも學問が出來る程あつて、曾て內務省に居た頃にも多くの功績を殘して居る。內務省參與官時代に臺灣を視察した報告書などは、實に感服すべきものであつた。世間一般も亦た彼れの人格に就ては信じて之れを疑はず、兄の良平とは全く種違ひだと評せられて居た。

▲然るに近頃に至つて評判は全く違つて來た、矢張り良平君と同型の人物だと云ふことに一致するやうである。彼れの山縣公に寵愛せられたのは、一に其の朴直謹嚴な態度にあつた、惡るく見るに小廉曲謹な男とより外には見へなかつたのであるが、實は是れ大なる猫冠りで、榮達の爲めには何事をも敢てすると云ふ質の男であるとは、彼れに最も近く交際た人々の間に於ける批評である。

▲傳染病研究所、水產講習所移管も彼れの野心の爲めであると言はれて居る。現在の地位を保ちさへすれば義理も恩も搆はぬ人であると言ふ者もある。而かも彼れは局量小に、又神經家で、兄良平ほどの度胸はない。

▲政治家としては第一其の點に缺けて居る上に、健康が頗る宜しくない

若し大問題に出會つて、二日三日と激務をつゞけたならば、忽ち病臥すると云ふ有樣で、到底盤根錯節を切り開く政治家の柄では無いのである。

▲然らば學者としては如何と云ふに、彼れは學者たるべく餘りに功名心虚名心が多く、甚だ學者たる操守に缺けて居る。彼れは政略に依りて説を二三にする人で、學と共に倒れるの誠意がないのである。差し當り責任支任問題に就ても。彼れが其の學者たる立場を捨てゝ顧みないと云ふことを知るべしである。

▲彼れは政治家としては餘りに學者らしく學者としては餘りに政治家らしく、全く中途半端な人物である。而して彼れが天から得たるものは何かと云ふと其の頭腦であると言はなければならぬ。實に彼れの頭腦は明晰である。

▲併し彼れの頭腦は三段論法的の推理に長じて居ると云ふのみで、創作的の能力は殆んどない。理屈を組み立つる事は巧妙であるが、其の理屈の前提を作ることは出來ないのである。是れ獨り彼れのみに止まらず、一體我が邦の學者は三段論法的學者が多い。

▲政治家に尊ぶ所は創見であらねばならぬ。實に政治は理論ではない創作である。彼れは到底書記官長か或は法制局長官の器であらう。其の代り地方長官などは安心である、彼れの識見と膽力とでは、地方長官などを自由にコキ使ふことは出來ないのだ。大いに善いことをすることも出來ない代りに、大いに惡いことをすることも出來ない男で、事大主義を以て榮達を圖るより外に大なる抱負もないのである。(完)

▲學者としての一木博士

舊門下生

◎我輩は一木法學博士の門人である。帝國大學に於て博士より國法學及び行政法の講義を拜聽した。當時我輩は最も博士の學風に心醉し、一夜博士の門を叩て、大いに尊敬の言葉を述べたこともある。博士今之を記憶するや否や。

◎當時博士は故穗積八束博士と相並んで公法學の双璧であつた。博士講壇に下るや、其態度甚だ謹嚴であつた。此點頗る穗積博士と似て居る。双方共多くは和服に靴を履いて講壇に上られた。壇上の椅子に腰を掛けたら時間の終りまで動かない。西洋の六かしい名前があらはれても、決して黑板へ書いて見せない點までがよく似て居る。只違ふところは穗積博士は色白の面長に長髯を蓄へて居るのと、一木博士が色黑く圓顏で鼻下に八字髭を蓄へて居るのみである。而して穗積博士は明晰透徹なる聲色を以て公法法理を講ずること、滔々として大河の流るゝが如くなるに比して、一木博士の講釋振りは少し不明瞭な鼻聲であつたけれども、其論鋒の鋭いことは博士の隼の如き烱々たる眼光其儘であつた。

◎今より當初を振り返つて思ふに、博士の學風の特徴は、一に鋭いといふことに期する。論斷微を穿ち細に入り、而かも理路井然として一糸亂れざるものがあつた。莊嚴は博士の得意とするところではない、けれど

も分析に長する點に至つては、當時恐らく博士の右に出づる者はなかつたらう。只博士は分析を之れ事としたからして、其學問は相手の穗積博士程に大成したものではなかつた。されば博士は思索の綿密にして頭腦の明晰なる、接する者をして他日の大成を思はしめたけれども、只當時の學殖に至つてはそれ程深遠なものではなかつたと思ふ。此點に於て博士は殘念ながら穗積博士に一籌を輸して居つた。

◎博士の國法學は非常に學生間に評判がよかつた。けれども今から考へて見ると、ゲオルグマイヤーの教科書の祖述に過ぎなかつた。博士の行政法は尚一層評判がよかつた。けれども之れ亦ラバンドやそこらの教科書以上に擢んで〻居る者ではない。要するに當時の博士の講釋は獨逸にありふれた公法學の受賣りで、獨創の見に富むといふことは出來ない。只博士に取るべきは。此等の外國教科書を非常によく讀んで、非常に正確に理解した、一言にして言へば非常によく咀嚼したといふ點である。そんじよそこらに多くある博士教授連の如く、一知半解で原書の意を誤傳する者とは、全然其選を異にする。之れ博士の態度の眞摯なると、頭腦の明晰なるの致すところである。此點は今日の美濃部博士に似て居る。

◎然るに博士は講壇に立つて間もなく學界を去られた。尤も全然學者商賣をやめる迄は、十年餘りも講壇に立つて居つた。けれども博士は永く大學教授として或は法制局長官、或は内務次官を兼ね、其志は已に官界にあり、早くより己に書齋の人ではながつた。故に教授としては十年以上も務めたけれども、學者としての抱負は早くから之を捨て〻了つたのである。從つて博士の學問は其後更に進歩しなかつた。却て博士は官吏として、令名を馳せた。官吏としてエラクなればなる丈け色々の方面に用ひられ、それ丈け學問に親む暇もなかつたのであらう。無論博士の頭腦の明敏なるは今も昔も變らない。政府委員として又次官大臣として、議會に於ける答辯などを聞いても、いかにも此人の頭腦のよいといふことを思はしむる。けれども博士は學者としては、最早や今日は少壯學界の士と競爭することの出來ないことは事實疑ひはない。

◎之れまで學界を退いて實務に就いた人は少くない。中には初めより學者としても餘り物になりさうにないのもあつた。之は暫く論外として、學者として令名のあつた人が學界を離れるといふことは、學問の爲めに甚だ惜むべきことである。けれども中には滿鐵に入つた岡松博士の如く多年俗務に鞅掌して、而かも學者としての生命と實力とを失はない人もある。我が一木博士の如きは學者としての素質に於て、敢て岡松博士に劣るところあるまいと思ふが、餘りに官界に用ゐられた爲めか、又は學問に執着しなかつた爲めか、今日全く學界と絶縁されたのは甚だ惜むべきことである。只それ博士が學者としての素質に富んで居ることは、博士を知る者の等しく認むるところである。之れ今日の學界が尚博士多年の才學を稱へて止まらざる所以である。然し博士の學界に於ける復活は到底之を望めない。

◎要するに博士は學者としては、役人病の犯すところとなつて夭折したる惜むべき天才である。

皇族畫報

恭しく惟みるに允文允武なる
天皇陛下には、今秋十一月を以て御卽位の大典を擧げさせ給はんとす。弊社は此千載一遇の御盛事を永久に記念し奉らんが爲、兩陛下の御眞影を奉載し且各宮殿下、妃殿下、王子殿下、王女殿下、御七十二方の最近御眞影御貸下げの光榮を擔ひ、尊嚴なる御英姿、高貴なる御面影を一に集めまゐらせ、且、兩陛下御日常の御模樣を始め奉り、皇太子、皇子、幷に各宮家の御事どもを謹記し奉り、特に附錄として

◎天皇陛下御宸筆

◎皇室及び皇族御略系譜

を添へ、以て普く一般國民に頒たんとす。印刷の精巧寫眞の鮮麗、こゝに多くを贅せず、あはれ至誠至忠なる六千萬國民諸君よ、冀くは、この好機を逸せず速かに一部を藏して、日夕尊き御面影を拜し、聖壽の無疆と、皇室及び皇族の御繁榮とを禱り奉り、併せて聖代の絶好記念として、この不朽の寶典を子々孫々に傳へ給はんことを。

（印刷部數に限りあり、即刻御求めあらんことを乞ふ）

定價參拾八錢
郵稅八錢

東京京橋鍛冶橋外（振替壹壹八壹八）
婦人畫報
少女畫報
日本幼年
發行所 東京社

賣捌所 全國各書店

（中付四の一）

（中付四の二）

此廣告に依り御申込の方は**中央公論**に依る旨御附記を乞ふ

第一期 **百冊完成紀念**

臨時 **特價提供!!!**

益々好評僅々貳百組を餘すのみ（締切後は正價に復す）

◎割引絶大最も安價なるは一時拂込に限る◎

◎最も便利にして御樂しみあるは月賦御申込に限る◎

◎所要の編のみ御入用の御方にも特に割引の設けあり◎

內容解説 **總目錄進呈**（各編百冊を以て一組とす）

■既刊編數百有余種■増刷出來 第一編より既刊全部缺本なし■

書架無代進呈

アカギ叢書

定價 各冊 拾錢 郵税各冊貳錢

東京麹町三番町 發行 **赤城書店**

■頒布部數九拾餘萬■振替東京一〇四三二番 電話番町二一二八〇番■

文部省 通俗圖書 **認定書**

9 オイケンの哲學	21 支那の美術	34 東方見聞錄	46 日本淨瑠璃史	72 バルカンの風雲	76 ウヰルヘルム、テル	94 日本の浮世繪
16 奈良の美術	24 ハムレット	40 神話と傳説	61 新文明の源流	73 飛行機講話	82 ヴエニスとフロレンス	105 膠州灣
19 日本建築史要	31 歐洲禮節	44 西洋演劇史	62 日本の彫刻	75 最近の歐洲	87 シルレン	108 最近獨逸の發展

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

見よ!!豐富なる十月號の內容を

早稻田文學

■凡人淨土……相馬御風

■人としてのタゴール……花園綠人

■力か死か……稻毛詛風

■習作と製作……木村莊八

小說戲曲

■籾がら（小說）……田山花袋

■書齋の人より（小說）……正宗白鳥

■地に頬つけて（小說）……谷崎精二

■春を待ちて（小說）……村山勇三

■漂ふがまゝに（小說）……荒川義英

■異鄕の花（小說）……コンラッド

■三等船室（戲曲）……坪內士行

■琉球屋源五兵衛（戲曲）……島村民藏

■試（戲曲）……海春一

■ボサンケ氏の美學……本間久雄

■孤獨の詩人ブローク……播磨楢吉

■蟬の脫皮の觀察……西村醉夢

■行誠上人の事ども……堀江朔

最近思潮欄

ルウヴン圖書館再興（中付の四の四）

科學の勝利

米國藝術家の美學

青年の自殺問題

バレースの新脚本

愛隣園

最近思潮欄

米國彫刻界の新記錄

諸家の貞操觀

塞國のロダン

觀劇壇時事

獨逸の兒童は斯く敎へらる

九月の小說界

—附錄—

我等が生活の日

□□アンドフーエフ□□

□□昇曙夢譯□□

秋季倍號

本號五十錢 郵稅三錢

■東京神田神保町 ■振替東京二七〇番

合資會社 東京堂

信用なき店舖及び卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

評論

內外時事評論

古川學人

兩大政黨首領の舌戰

段々府縣會議員の選擧の近づける爲めにや、各政黨の領袖は、近頃頻りに南船北馬遊說に力めて居る。之も政戰に言論の重ぜられて來る現象の一つとして誠に喜ぶべき事ではあるが、さて其言論の內容を見るときは、吾人は其の輕薄にして貧弱なるに一驚を喫せざるを得ない。未派の言論は暫く之を度外に措く。今近く行はれたる政友同志兩政黨總裁の論戰を見んか、吾人は心から彼等に立憲國大政黨の主腦者たるの資格ありやを疑はざるを得ない。

加藤高明男の同志會兵庫支部發會式に於ける八月廿八日の演說の大要は、同二十九日の報知新聞に載つて居る。之に對する原敬氏の八月三十日水戶に於ける政友會關東大會の演說は、卅一日の國民新聞に載つて居る。其要領は管々しければ玆に之を述べぬが、我々の之に付いて甚だ遺憾に思ふ所は、第一に兩者共に反對黨の立場を適當に理解して而して後攻擊を加へて居らぬことである。言葉尻を捉へて揚足を取ることは、陣笠政客に於ても厭ふべきことである。苟も大政黨の首領たるものは、敵黨の立場を善意に解釋し、其上にて堂々と攻擊を加ふるの態度に出でゝ欲しい。然るを何ぞや、例へば加藤男は原氏の日支外交批難を『私憤より割出したる攻擊』なりと誣ゐ、原氏はまた『一も國政上貢獻せる所なきに拘らず、是れが成功を放言をして憚らず、其厚顏無恥驚くに堪へたり』などと罵倒して

居るが如さ、其措辭の卑陋なる、車夫馬丁と何の擇ぶ所が無い。斯の如きは、大政黨の首領として行く〳〵は一國宰相の位にも登るべき紳士の言として、其の品格に拘はることなきや否や。併し之れ丈けなら未だいゝ。更に遺憾に堪へないのは、第二に彼等の演説の中身が只敵の攻撃のみにして、何等積極的に自家の大經綸を彷彿せしめぬことである。苟くも大政黨首領の堂々と論陣を張るに際して、其千萬言を費す所、一に敵黨の惡罵に止まりて、何等自家の積極的意見を明かにせずとは、何と淺猿しき限りではないか。予は右の新聞記事を讀み、圖らず去年英國に於ける朝野兩黨領袖の論戰を想起し、彼我政治家の風格斯くも懸絶せるかに驚いたのである。

去年三月下旬、愛蘭自治問題の事に關して陸相シーリー大佐の辭職するや、一時首相のアスキス其後を兼任し、慣例に從ひ、暫く議員を辭し、選擧區ファイフに歸りて再選を求めたことがある。四月上旬の某日、彼は選擧區に於て選擧演説を爲せるが、此日反對黨は亦同じ時刻をはかり、倫敦ハイドパークに於て幾多の演壇を急造し、多數の領袖を集めて大示威的演説會を開いた。首相アスキスは、田舍の一小都會にて爲す演説なるも、彼は此機會を利用して自己の政見を天下に發表せんとの意氣込を以て、堂々たる大演舌をやるといふことであつた。そこで保守黨も之に對抗して大演説會を催したのである。故に倫敦とファイフと山河數百里を隔つるも、同日同刻なれば正に好個の立合演説たるの觀があつた。而して後に其演説の筆記を讀みたるに、敵の政見を攻撃すること實に痛激を極めては居るけれども、而かも互に禮讓を失はず、且攻撃の中に自ら自家の經綸を頗る明白ならしむるものがあつた。凡そ政談演説は斯の如きものでなければならぬ。

殊に苟くも大政黨の首領たるものは、常に如何なる機會にても自家の經綸を發表するを忘れてはならぬ。如何なる場合にても、苟くも機會ありて壇上に立つ以上、自家の經綸を民衆に捺し付けるの熱心が無くてはならぬ。吾人が常に喜んで且力めて政黨首領の言論に

注意する所以のものは、之に依りて彼等の積極的意見を知ることを得るからである。然るに我國の政黨政治家は、徒らに皮肉と漫罵に長じて最も大事な經綸の說得を怠るものである。予は敢て玆に儼然として加藤、原の二君に告ぐ。二君が徒らに低級なる國民の趣味に迎合して輕薄なる小ぜり合を能事とせば、天下有識の同情は遠からず君等の上を離るゝだらうと。

海軍補充問題の解決

海軍補充問題は大隈留任内閣の一大難關であつた。先きに大隈伯が大命に籍口して留任に決するや、政界の情誼に通ずる一部の者は、戰爭の結果として租稅收入の大減少を見たる今日、海軍補充の資源を發見するに苦んで、新内閣の壽命は永くも此年の暮までであらうと觀て居つた。否、海軍問題の難關を見越して、何人も後繼内閣組織の任に當らうといふ者の無かつた事が大隈伯の留任を餘儀なくした主たる原因だといふ說さへあつた。要するに、大隈内閣は海軍問題で倒れるに決つて居る、御大禮を濟ます丈の内閣に過ぎないとは、多くの人の一致する所であつた。

然るに大隈内閣は此難關を見事に切り拔けた。九月九日の豫算閣議に於て、海軍省側の要求に修正を加へ、十三日の防務會議に於て、略ぼ所謂大藏省査定案なるものを認容せしめ、十四日最後の閣議に於て、結局の解決を見た。即ち戰艦一艘、輕巡洋艦二艘、驅逐艦約十二艘を四年計劃にて五千百五十萬圓の支出にて建造するといふ事にきめたのである。先きに所謂海軍省側の宿論なるものを固執して淸浦内閣を流産せしめた加藤新海相が、今度は容易に大藏省の査定に同意したのも不思議であるが、何れにせよ、この解決はともかくも大隈内閣の手柄に歸せねばならぬ。

斯くして新内閣の一大難關は無事に通過した。然らば新内閣の壽命は、必ずしも本年を以て終るものと觀ることが出來ぬ。大浦事件で大なる手傷を負ふたに拘らず、相手の政友會が兼々不人氣なりし餘德として、大した民間の反感を買はずに濟み、今また海軍補充の

大難關も切り拔け得たとは、返す〱も幸運の內閣といはねばならぬ。

只此問題に關連して輕薄なる政論の流行するのは看過することを得ぬ。一部の在野黨政客は曰く、海軍當局者は先きに一定の案を立てゝ國防上絕對に必要なりと唱へ乍ら、今乃ち大藏省の査定に屈す。大藏省の査定に屈して國防上差支なしといふなら、先きの宣明は即ち國民を欺けるものなりと、盛に海軍當局者の無責任を高調するのである。抑も海軍當局者として十分なる國防計劃を主持し、敢て一歩も屈せざらんとするは、責任を重する者の當然の行爲にして、而かも財政其他の都合上、內閣の同僚と和協して、忍ふべからざるを忍んで多少の讓歩を爲すは、亦已むを得ざる所である。反對論者にして眞に當局者の此問題に對する責任を糺さんとせば、積極的に、或は大藏省査定案に依りては國防上極めて危險なる所以を論證すべく、或は先きの海軍當局の計劃の杜選過大なりし所以を示摘すべきである。只形式的に前後の行き違ひを楯に取り、言葉尻を捉へて無責任呼はゝりを爲すは、是れぞ却つて無責任なる政論といふべきである。予は必しも當局者の措置を辯護するの意はない。只輕薄なる難詰を咎めて、積極的なる實のある政論の流行せんことを欲するが故に、一言之を附け加へるのである。

乃木伯爵家の再興

近頃奇怪に堪へざる現象は、故乃木大將家が毛利元智氏によりて襲がれたことである。九月十三日、乃木伯爵家の一旦廢絕したことが公にせられ、直に毛利元智氏は宮內大臣より、『天皇陛下には故乃木大將の功勳を御追念あらせられて特に毛利元智に伯爵を授けらる』との趣意の御文書と共に、「特授伯爵」の恩命に接したとの事である。一旦廢絕した家は親族にもあらぬ赤の他人が之を再興するに由なしとか、新伯爵は故乃木大將の家とは法律上全く別個の家であるとかの形式論は暫く措き、國民の常識の上からは、毛利氏が横合から出て來て、故乃木大將家を襲いだことになる。

毛利氏の授爵は事聖旨に出づ。聖旨は固より議すべき限りでないが、併し之を奏請したものゝ道徳的責任は、固より之れを論難するを妨げない。此點に於て、此問題は近頃、最も八釜しく世上批難の的となつた。十五日東京朝日新聞に出て居る澤柳政太郎氏の説の如きは頗る痛快を極めて居る。平素は官邊の都合のよい樣な議論をさるゝ井上博士すら、此問題に對しては十七日の同紙に於ていたく奏請者の態度を難詰して居らるる。

世間の非難は尤もだ。第一に斯んな事をしたのでは乃木大將追念の目的は達せらるゝものではない。乃木家の後を立つると立てぬとは、勳功を表彰する上に何の加ふる所なきのみならず、若し伯の勳功を追彰する意味で爲す事なら、其の血縁の者を立つべきである。赤の他人を持つて來たのでは全く無意味なるのみならず却て死者を馬鹿にした話である。加之第二には毛利氏の授爵其事は、乃木大將と關係せしむる以上甚だ不都合だと思ふ。世間では、折角後を立てもゝ將來馬鹿者が出ては大將の德を傷くると心配する者があるが、血縁の者の間から出るなら致し方が無いと諦めやうもあるが、赤の他人に乃木姓を冒され、其他人に乃木家の面目に泥を塗らるゝ樣な事があつては堪つたものでない。況んや乃木家をして其後なからしむるは大將生前の宿志たるをや。關係者の中には、石黒男の如き大將の親友も居りながら、此議に與りて大將の遺志を無視し、而かも發表の瞬間まで親族血縁の者に一言の相談もなく決行せしに至つては、亂暴とも何とも云ひ樣がない。石黒男の如きは、東京日日新聞紙上に於て、現に九日の日の晩に此事あるべきを仄めかして居る。豫め之を知つて居りながら、親族等に秘密にせしとは怪しからぬ次第であると思ふ。

此問題は事柄自身は極めて下らない問題である。偶々乃木大將の盛名と關連せるが爲めに世間の耳目を聳動したのである。敢てこゝに論難する程の大問題でないとは思ふけれ共、予は平素一派の頭領株が何事も秘密々々で押し通し、イザといふ間際に袞龍の袖に隱れ

て責任を逃れんとする卑陋なる態度を憎むが故に、世間の議論に雷同して一言する所以である。

支那の帝制は實現の見込ありや

揚度・孫毓鈞の徒が籌安會を提げて帝制論を唱へてより、袁世凱氏を戴いて皇帝と仰ぐべきや否やの議論は、急に彼國政界の具體的問題となつた。知らず袁氏皇帝説は近き將來に於て果して實現すべきや否や。

帝制論が表向き米人顧問グッドノー氏の所説に萌ざしたことは人の知る所である。道途傳ふる如く、グッドノー氏は果して支那に利用せられたのか、又彼の眞意は實は支那新聞の傳ふる如きものでなかつたのか如何は暫く之を措いて問はず、少くとも支那の現状に鑑みて帝制主義を以て共和主義に勝れりと觀るの論は、亦一説たるを失はぬ。予輩も或る意味に於ては、帝制を以て支那に適すと思惟するものであるが、併し支那に帝制を布くべしといふ論は、必ずしも直に袁氏を擧げて皇帝と爲すべしといふ事を意味するものではない、帝制の可否得失の論と、何人を擧げて其地位に置くかの論とは、自ら別問題であるべき筈である。けれども支那に於て現に起つて居る帝制論は、表面上の辨解は如何樣にあれ、袁氏ありて始めて起つた問題であることは疑を容れぬ。即ち袁氏を擧げて皇帝と爲すか否かの問題である。我々も此着眼點より此問題を觀察せねばならぬ。

袁氏は近き將來に於て乾度帝號を稱するだらうと思ふ。斯く斷ずるに少くとも三つの理由がある。第一は袁氏は今日既に皇帝の實力を有することである。彼は就任の始めは少からず議會の制肘を受けた。けれども夫の十月クーデターに依りて國民黨員を壓迫し、參議院を亡してよりは、段々と專制君主の實權を收めた。近くは黎元洪を參謀部以外に置き、段祺瑞を陸軍より逐ふなど、門下生と雖も骨のありさうなものは遠けて居る。斯くて今日彼の羽翼は内外に張り、其命令一として行はれざるは無い。名は大總統といふも、其實に於て專制君主である。故に彼が今日帝號を稱するは、

實に一擧手一投足の勢といはねばならぬ。第二に袁氏は元來思慮周密の人なれども、又一方に於ては極めて目前の功名利達に熱心なる人である。傳ふる所に依れば、彼は子孫の幸福の爲めに寧ろ退いて田園に休まんと欲すと述懷したとの事であるが、是れ恐らく彼の夙に氣付き居る所だらう。然れども彼は、眼の先にチヲつく帝冠の甘夢に對する執着を振り切つて、閑雲野鶴を友とする程淡泊なるを得るだらうか。彼の燃ゆるが如き野心は、到底彼に子孫百代の幸福の爲めに目前一身の榮達を斷念せしむるだけの餘裕を與へまいと思ふ。第三に袁氏の周圍の人々は、其利害の打算上、假令袁氏の意に反しても、彼を皇帝たらしめずんば已まぬだらうと思ふ。袁氏の親族故舊が、彼の帝號を稱するに依りて均霑し得る榮達に眩惑して、帝制運動に狂奔すべきは之を想像するに難くないが、其他袁氏の引立により又は少くとも袁氏の郎等として今日中央の政界に時めく大小の官人は、其地位の安全の爲めに、必死となりて袁氏皇帝說の實現に運動して居ることゝ察せらる。何となれば、袁氏百年の後、後任大總統が全然公選に依りて擧げられ、從つて何人が之に當るやの明ならざれば、彼等は其時今日の地位を維持することが出來ないからである。支那の官界は、大小を論せず、今も昔も廣義の親族政治なることは言ふを待たない。上は中央の官省より、下は地方の小役所に至るまで、役人はすべて長官の親族故舊乃至郎等を以て組織せられ、其間に異分子を容れない。從つて例へば袁氏大總統となれば、袁の一門天下にはびこり、袁に對抗すべき幾多の政治家は袂を連ねて野に下るのである。支那に於て、有爲の政治家同じく廟堂に立つて協戮するといふ美風のないのは、一大憂患である。左れば今日袁政府の下に於て時めく幾百千の官人は、袁氏に縁りて始めて其地位を有するものにして、若し袁氏去れば忽ち其地位を失ふこと、宛かも封建時代に於て國土を取り上げられた藩主の家來のやうなものである。斯かる國狀なるが故に、今日の官人は、永く其地位を維持せんとせば、袁氏百年の後、同じく袁家の人を戴いて其

制に服するといふことにせねばならぬ。即ち天下の政權を永へに自家の門内に壟斷せんと欲せば、國家最高の地位をば、袁家をして世襲せしめねばならぬ。是れ彼等の地位を永久に維持する唯一の方法である。斯くして彼等は熱心に帝制論を主張し、帝制運動に加擔することゝなるのである。彼等に袁に對する忠誠の志ありや否やは之を疑ふも、彼等が利害の打算上、帝制論の實現以外に自家を擁護するの途なき所以を悟つたことだけは疑を容れぬ。去れば帝制論の最近内外の反對を受くるや、早くも既に一部の者は、共和立君論とか、大總統世襲説とかいふ變挺な説を唱へて居る。蓋し彼等は、袁家が世々相襲いで中華民國元首の地位に居ればよいので、其の帝たると大統領たるとは深く問ふ所でない。只袁家世襲の實は帝制論の實現に於て最も强固なるを得るが故に、帝制論を唱ふるのである。已むを得ずんば共和でも大總統でも差支がない、只世襲なればよいといふのであらう。

斯く考ふる時は、袁氏皇帝説は必ずや近き將來に於て實現するだらう。最近の報導に依れば、籌安會の運動は大體に於て各地に於て歡迎せられ、參政院に向けて民間の請願引きも切らず、爲に來春開くべかりし國民議會も期を早めて今年十二月初旬を以て召集すべしとの事である。國民議會は即ち新に國體を決し憲法を制定すべき任務を有するものであるが、帝制の可否を決するの要一日も忽るべからずとして其速開を見ることゝなつたのである。而して此國民議會に於て、君主制説の勝を占むべきは今より明白である。何となれば籌安會の運動も、參政院の宣言も、民間の請願も其出所は一に皆北京の中央政府であるからである。過般北京政府が、五國借款團に向つて借款殘額の拂渡を請求するや、財團が拂渡の條件として、籌安會の運動に之を流用せざらんことを求めたるが如きは、何といふ皮肉であらう。而して之等の運動は、袁氏も蓋し與り知らぬことはあるまい。九月六日彼が共和維持の宣言を發したるが如きは、畢竟八百長に過ぎぬ。

支那帝政實現の結果如何

支那帝政の實現すべきことは上述の如しとして、扨て如何にして實現するやといふに、用意周密なる袁世凱は、人の想像するが如く、輕々しく之を斷行することはあるまい。予輩の觀測する所に依れば、現に實行して居る如く先づ籌安會等をして民間の輿論を興起し多數の請願を提出せしめ、次いで國民議會に於ける憲法制定會議に於て、民間の輿論に促されて帝制主義を採るべしとの論を唱へしめ斯くして新憲法は立憲君主々義をとることになるだらう。扨て其上で誰を皇帝に仰ぐべきやといふ問題を起して、彼は兎も角も其任に非ずとして最初は切に固辭する態度に出づるであらう。前清朝の宣統皇帝や其他へ持廻ち廻り、誰も無いといふ段になつて、已むを得ずして位に即くといふ形式をとるであらう。斯く觀れば、帝政の實現を見るのは、早くも來年の春であらうか。

袁氏帝號を稱しても、我國の對支政策の上には大した影響はあるまいと思ふ。袁氏皇帝說の實現は卽ち現政府の將來に存續することにして、從つて支那政府の方針にも大體異變なきものと觀てよいからである。又支那自身は之によりて如何なる利益不利益を蒙るやといふに。之も大したことはあるまいと思ふ。成る程袁氏に反感を抱いて居る者は所在に少くない。けれども彼の帝號を稱した爲めに反亂が起る程の事は無からうと思ふ。少くとも袁氏在世中は先づ無事であらう。而して彼の百年の後如何といへば、之は彼の帝たると否とに拘らず彼の崩去の代り目に多少の擾亂あるは之を豫期せねばなるまい。故に彼が帝號を稱したるが故に特に支那に紛亂の種を増したとは觀られない。又支那の受くる利益の方から云つても大した事はあるまい。元來支那の如き積弊の多い國に在りては、國民の自覺によりて自發的に之を改革するに非る限り、不世出の大英雄出現して一大改革を斷行することが、國家百年の進歩の爲めに望ましい。此意味に於て予輩は、主義として支那に帝制の布かれんとするを厭はない。何と

なれば、一大英雄に君主の專權を與へて大改革を斷行せしむるの望あるからである。然るに袁氏は近代稀に見る偉人ではあらうけれども、彼には決して斷行の勇がない。彼は本來小心翼々左顧右眄、云はゞ極めて臆病な人である。加ふるに彼の聰明は、彼をして餘りに利害の打算に鋭敏ならしめる。假令彼は專制君主の地位に立つても、中華民國百年の大計の爲めに、大改革を斷行するの勇氣を發揮することはあるまいと思ふ。左すれば彼が皇帝の位に即いても、支那の本當の開發を何れだけ進めるかは、疑問とせねばならぬ。

露西亞の敗戰

戰爭勃發以來、久しく協商側の有力なる恃みと目せられし露軍は、今年五月以來、獨墺軍の猛撃に遇ひ、一溜りもなく潰走して見苦しき失敗を重ね、世の協商側に同情ある者をして著しく失望せしめた。而して此露西亞敗戰の原因は、主として軍器の供給の足らざるに在ることは、萬人の觀る所を一にして居る點である。

單に兵數から云つて今日最も優勢の地位を占むるものは露西亞である。何となれば、露西亞の人口は其歐羅巴に在る者のみを算へて一億二千五百萬を超え、約獨逸の二倍、墺匈國の二倍半に當る。今日各交戰國は何れ丈けの兵數を出して居るか精密の事は分らないが、軍事專門家の言ふ所に依ると、敵味方合して千萬人を超ゆるだらうとの事である。果して然らば、獨墺側の兵數を大略其の半分と見るときは、此方は今や漸く兵力の供給は盡きんとしつゝあると見ることが出來る。何となれば、統計學上滿二十歲以上五十歲以下の男子數は、全人口の約二割に當るを普通とするが故に、獨墺に於て此種の戰務に堪へ得る人數は凡そ二千四百萬人なるに、實戰に當る五百萬人に加ふるに、約之と同數なるべき後方勤務員と、軍需品の製作其他に從事せる者とを加ふる時は、略々此數に達すべきを以てゞある。兵力の供給の盡きて居る點は、佛國も同樣であるが、英國と露國とは此點に於てまだ〳〵餘裕がある。殊に露國に於て其餘裕が最も著しい。尤も人によりて

は、兵力の多寡は人口の大小に依りては決まらない、訓練せられたる壯丁の多少に依らねばならぬといふ者もあるけれども、成程十萬二十萬といふ小規模の戰爭なら、之も理窟はあるが、今日の如く千萬も對峙する戰爭では、訓練を受けた壯丁のみではトテモ足りない。甚しきは未丁年の少年をすら驅り集めて、之に三ヶ月とか半年とかの速成的訓練を施して戰場に送り出す際である。正規の訓練を受けた受けぬは、殆んど問題とならないのである。

さて露國は兵力に於て斯くも優勢であるのに、何が故に斯くも敗衂を重ねて振はざるやといふに、之れ一に軍需品の供給が行屆かない爲めである。之は固より今日に至つて始めて明になつたのではない。戰爭の始めから明白であつた。只何故に早くより之に應ずるの策を講ぜなかつたかゞ不思議である。要するに、露國は此頃益々此方面の必要を感じ、之れ迄とても盛に我國に一部の供給を仰いで居つたが、今度愈英佛兩國の協議を得て、大規模に我國の製造力に恃ることゝなつた。斯くて軍需品の供給が潤澤になつたなら、露軍は必ずや其頽勢を挽回するであらう。

併し露軍の頽勢を挽回するは近き將來に在りと思ふならば大なる間違である。露國の出征兵數は驚くべき多數であり、而かも我國の供給力には限りがある。固より我國以外よりも供給を仰くべしとするも、全軍に亘りて一通りの供給を爲す事すら、決して容易の談ではない。今例を取りて之を明にせんに、我國の小銃製造能力を一日二千挺と假定する。然らば一ヶ月六萬挺一ヶ年七十二萬挺である。最近の電報に依れば、露政府は新に八百萬を召集せりとの事であるが、之は其數に多大の懸直ありと思ふけれども、暫く之を事實とすれば、之に供給する小銃を皆我國で引受くるとすれば、十一年の星霜を要する。若し夫れ火藥の供給に至つては更に甚しい。一人の携帶彈丸を假りに百二十發とすれば、百萬人分の彈丸を作るには、火藥約二百七十噸を要する。而して我國一日の火藥製造能力を五噸とすれば、約二ヶ月を要する。八百萬人分ならば一年四ヶ

月となる。斯く考ふる時は、露軍の軍用物資充實するのは、何時の事やら一寸見當が付かぬと云つてもよい。

幸にして軍用物資供給難は今日敵の獨墺側にもある。最近我國の某新聞は、獨逸の小銃彈丸製造力は一日二十五萬發に達すとて驚嘆して居つたが、併し一日二十五萬發では大した役には立たぬのである。二十五萬發の彈丸は、一人一回の携帶量を百二十發とすれば約二千人分に過ぎない。然らば獨逸は毎日二千人分、即ち一ヶ月六萬人分、一年七十二萬人分しか作れない。假りに三百萬人の兵士を戰場に出して居るとすれば、一回の携帶量だけを充實するに四年あまり掛る譯である。獨り彈丸のみでない。萬事が此調子だらう。只獨逸は比較的に敵方よりも供給力が豐富なるが故に、戰爭に於て勝利を得つゝあるのであらう。

近頃露軍は南方に於て多少勢を盛り返したと報ぜらるゝも、事實果して頽勢の本當の挽回なるや否や疑はしい。事によつたら獨逸側が後方より物資の供給を待つ間攻擊の手がやすまつて居るといふだけの話かも知れない。協商側殊に露軍の供給能力が、一轉して獨逸のそれを凌駕するに至るまでは、露軍の敗績を重ぬるは、已むを得まいと思ふ。

只問題は露軍の軍器供給能力が、將來果して獨墺側のそれを凌駕することあるべきや否やに在る。日本よりする供給は、如何に奮發しても大勢を動かす程のものではあるまい。夫れでも來年の春頃までには大に露軍に重きを加へるだらう。只結局に於て恃む所は英國に於ける製造能力の完成である。之もあまり永い問題ではあるまい。

露國の敗戰に牽連して、近頃我國に於て二つの問題が唱へられて居る。一は日露同盟論であつて、一は增師否認論である。前者は先づ佛國に起りて東洋に波及し、最近我國の論壇を賑はし、現に本誌本號に於ても朝野識者の之に關する意見を集めて居る。後者は我國の非軍備擴張論者の間に唱へらるゝので、露國があんなに弱いのなら、何も朝鮮に二個師團を增設するの必要がなかつたとて、今更當局者の不明を詰らんとする

のである。予は元と増師賛成論者では無い。併し乍ら、今日前記難者のいふ如き論點より増師の計を難ずるのは當らぬと思ふ。何となれば、露の敗軍は必しも露の弱きに非ず、數百萬の大軍を動すの準備に缺くる所ありしが故に、獨逸には負けたが、東洋にて五十萬や六十萬の兵で日本と戰ふといふやうな場合ならば、或はモットト強いのかも分らない。加之朝鮮に二師團を置くといふことは、單に露西亞に對抗する意味ばかりではない、一般東洋に於ける帝國の地位を强固ならしむる意味もあるからである。故に増師の計企を難せんと欲せば、東亞に於ける帝國今日の地位を維持するに、朝鮮に於ける二個師團の増設は必しも必要に非りし所以を、別の方面より論明すべきである。露西亞の敗戰は直に増師否認の理由とはならない。必しも増師論を辯護せんと欲するの意あるに非ざるも、不徹底なる政論の流行を喜ばざるが故に玆に敢て之を一言する。

米獨關係の緊張

米國の輿論は、戰爭の開始以來、兎角獨逸側に同情が無かつた。歐羅巴本土に於て、土耳其と瑞典とを除きては、多少でも力と恃むべき者を見出さなかつた獨逸は、特に米國の同情を我に向けしむるの必要を認めたるのと見へ、開戰匆々の始より、前殖相デルンブルグを派遣して、米國に運動せしむる所があつたのであるが、斯くても米國の民心は、日を追うて獨逸を離るゝばかりであつた。而して斯の米獨の關係は、夫のルシタニア號擊沈事件に依つて、更に急轉直下非常に險惡なものとなつた。

ルシタニア號事件の以前から、實は、各交戰國に對する米國の貿易關係に付き、米と獨との間には多少の爭議があつたのである。併しルシタニア號事件の起る迄は、米人の感情は未だ穩なものでなつた。然るに獨國海軍が、商船ルシタニアを何等の警告なしに擊沈し多數無辜の人民を海底の藻屑と爲すに及んで、米國人

民の對獨反感は其高潮に達した。其後政府と政府との間には、商船の無警告砲擊の問題に關し、互に折衝交渉する所があつた。此際に於ける獨逸政府の執拗なる態度は、益々米人の反感をそゝつた傾があるが、併し九月初旬、彼が遂に米國の要求に屈し、無警告砲擊を爲さゞるの主義を承認するに及んで、兩者の關係は幾分緩和せられんとするの傾向を呈した。然るに其後間もなく、獨潜航艇が又もやアラビック、ヘスピリアンの二商船に無警告砲擊を加へて先きの宣言を反古にせりとの報あり、搗てゝ加へて之と同時に、墺大使が米國工場に使役せらるゝ國人に同盟罷工を使嗾せるの陰謀暴露するあり、之には獨國大使館附武官の明白に加擔し、獨國大使亦全然潔白に非るやの疑ありといふに至つて、米人の對獨反感は再び沸騰して殆んど白熱的高度に達せんとして居る。現に米國政府は、月の十日を以て墺國政府に對ひ、大使の召還を請求し、爲めに彼は二十二日を以て米國を退去せんとして居る。之に關連して獨國大使の地位も亦危しとの事である。

米獨の關係は、斯くして緊張に緊張を加へて行く。けれども之が爲めに其行き詰りは兩者の開戰を見るに至るとは思はれない。何となれば、米と獨とは開戰を宣言したとて、決して實戰を交ふることが出來ないからである。詳しく云へば、米には大陸に派遣して協商側の勢を助くべき陸軍がない。假令あつても、隣邦メキシコのあの樣に擾亂して居る間は、手を拔くことが出來ない。海軍の方なら助勢に出掛くる餘力はあらんも、世界の各方面に於て獨逸の軍艦が滅されて仕舞つた今日、英國は最早別に他國の助援を必要としない。尤も米國は、此上獨逸の反省を求むる爲めに、國交の斷絕を宣言して獨逸を苦しめることは出來る。假令實際戰端を聞かなくとも、米より國交斷絕の宣言をさるゝのは、獨に取つて何れ丈け苦痛なるか分らない。併し思慮深き大統領ウキルソンは、眞逆斯んな氣短かな態度は採るまいと思ふ。蓋し米國は今次大亂の渦中に巻き込まれざる唯一の强大國として、他日機運の熟するを待ちて平和克復の爲めに盡力するの道德的責任を

感じて居る。米國の政治家は、恐らく皆此高尙なる使命を自覺して、其責任の重大なるを感じて居るであらう。然らば今一時の怒に激して自ら戰亂の渦中に投じ、他日仲裁者たり得る地位を放擲するが如きは、彼等の思ひ及ばざる所であると觀ねばならぬ。故に予は、米獨の關係如何に緊張しても、兩國の間に國交の破裂するやうな事は斷じてあるまいと思ふ。

併し國交の斷絶を見る憂はないからと云うて、獨逸の斯くして益々米國の同情を失ふは甚だ得策でない。米國の同情の有無は、戰時に於ては勿論、平和克復の際に於ても、何れ丈け獨逸の利害に影響するか分らない。漫りに米國の感情を害するは、決して獨逸の爲めに取らざる所である。戰時に於ては出來る丈け各中立國の同情を繫くとは必要であるが、中にも將來平和的仲介の勞を取るの地位に在る米國の同情を繫ぐことは、最も必要である。然るに獨逸の近來事每に米國の反感を挑發し行くのは、極めて拙劣危險なる策略と云はねばならぬ。

獨逸は何が故に對米政策に於て斯くも愼重の思慮を欠くか。之を例の獨逸の傍若無人主義にのみ歸するのは如何なものであらうか。獨逸從來の遣り方が、比較的に、自己の目的の爲めには手段を擇ばない傾きのあつたことは之を否認しない。併し如何に他人の思惑を尊重しない國柄とはいへ、今日此際、獨國政治家中、米國の反感を買ふ可からざるの理を辨へ居るものが無いとは思へない。而かも尙彼等が米國の意向を尊重し其要請に從ふ能はざる所以のものは、一面に於て獨逸の窮迫を語るものではあるまいか。即ち獨逸は、米國よりする敵國への軍器其他の物資の輸入をば、如何なる對價を拂つても、之を防壓するの必要を感じて居るのではあるまいか。蓋し予輩の觀測する所に依れば、獨逸今日の强盛の唯一の要素は、軍需供給力の敵に勝る事である。兵として獨逸人は左まで强いとは思はれぬ。平素訓練が行屆いて居るの、統帥が宜いのといつても、斯かる大軍となつては餘り物をいはぬ。然らば獨逸の恃む所は‖殊に兵力の供給に於て限りある所の

＝一に軍需供給力の優勢を維持するといふことに存せねばならぬ。今や英國の軍器製造の設備は、時に勞働者の思はしく集め得ざるの報あるに拘らず、着々進行じつゝあるを疑はない。露國はまた大に日本の製造供給に賴らんとしつゝある。獨逸たるもの今や決して枕を高うして眠れぬのである。彼れが奮躍一番、起つて露軍を東に追ひ捲くり、又最近墺をして塞を一蹴せしめんとあせるのも、敵の軍器供給の充實せざるに先ちて、協商側に致命傷を與へんと欲するのではあるまいか。彼が德義上の非難を顧るに及ばずして、米國軍器工場に紛擾を起さんとし、又國際法違反の咎と中立諸國の反感とを辭せずして、商船に無警告の砲撃を加へ、以て敵國に對する武器の輸入を威脅せんとするもの、是れ共に偶々獨逸が今や如何に窮迫焦慮しつゝあるかを語るものであると思ふ。

學制改革問題

所謂菊地案なるものが教育調査會に現れてより、頓と八釜しい論題となつた學制改革問題は、今度高田新文相の下に更に新しい衣裳を着けて世間に現れんとしつゝある。九月十日、文部省高等官會議で決定せる大綱とやらに依れば、(一)中學卒業後四年以上の教育を施す學校は一定の條件を充すものに限り大學と爲し、(二)大學には豫備科を置かず、(三)大學校長には博士學士の稱號を授與するの權能を與ふといふ事にするのださうだ。いづれ其中細目の決定發表を見ねば、兎角の批評は出來ないが、單に之れ丈けでは、何等前案に加ふる所なく、一時的姑息の案たるに於て、從來現れた幾多の提議と異る所がない。

抑も學制改革の必要を唱へしめた實際上の理由は、官立大學の特權廢止、并に大學教育の年限短縮を要求するの聲に在つた事は、今日何人も疑はざる所である。然れども、苟くも現在の制度に一大斧鉞を加へんとする以上は、淺薄なる世上の實際的要求に應ずる外、更に學制の根本に關して何等か改善の實を擧ぐるものでなければならぬ。其爲めには先づ審に現在學制の長短

を研究し、其如何なる點を改め、其如何なる點を保存すべきかを明にせねばならぬ。而して從來世の學制改革を策するもの、多くは此根本問題には觸れないで、只枝葉の點に於てのみ技巧を弄せんとして居る。就中文政當局者の從來の態度は、宛も心中現制を以て滿足して居るも、外部の要求に促されて已むを得ず姑息の改正で御茶を濁さんとするものゝ如くであつた。此間一點の誠意を認むることが出來ない。

學制改革の根本問題に就ては、他日稿を改めて積極的意見を發表するの機あるであらう。今暫らく問題を改革を誘促した二個の動機に限局して之を觀察するも今度の高田案は、果して能く其目的に協ふものであらうか。

大學の特權を廢止し、官私大學を同等公平に待遇すべしとの要求の根柢には、官私兩種大學の相並んで發達し、社會の尊敬と期待とが兩者に向つて全く不偏公正たらんことの要求がある。此目的は、單にすべての大學校長に一樣に所謂學位授與の權能を認めたのみで達せらるゝであらうか。假令私立大學の卒業だけで容易に學士となり博士となるの希望と機會とありとしても、之れ迄の樣に大學出身者が比較的容易に官吏となり重役となるといふ有樣では、天下の青年は依然として無理をしても官立大學に集るといふ事になるまいか。而して高等教育の一部を政府の官營に委して置く間は制度の上では如何樣にあつても、事實の上に於て官立大學の特遇は免れない。何故に高田文相は、多年の理想に照して、一刀兩斷、高等教育の機關を全然公監督の外に自由ならしむるの英斷に出でないのであらうか。聞く所に依れば、全然官權の監督を離れて獨立の一體たらんことは、帝國大學側に於ても希望する所であるといふ事である。學問の本當の發達から云つても、大學は實は斯くあらねばならぬのである。

年限短縮の問題に就ては、不思議に社會の要求と大學總長との間に意見の相違がある。併し能く考へると之は何も不思議はない。凡そ人間には大體何歳位を以て教育を受くる終期とすべきかは決つて居る。少くと

も我國の如く、二十七八歳に至つてヤット大學を卒業するやうでは駄目だといふことは、一點の異議を容さない。故に大學までの修業年限を、此上二三年短縮すべしとの要求は、極めて當然である。けれども他の一面に於て、今日の大學制度に於けるが如く、卒業してすぐ裁判官となり辯護士となり又醫者となり技師となりて間に合ふ様な人間を作るを要すとせば、此上年限を短縮することの出來ないのは無論のこと、慾をいへば却つて今よりも更に一二年の増加を必要とする位のものである。左れば大學総長が堅く現制に年限短縮の改正を加ふるに反對するのも無理はない。そこで問題は自ら明白になつて來る。大學に對し、所謂「間に合ふ人間」の養成を要求する以上、年限の短縮は求め難い。年限の短縮を必要とせば、勢、大學に對する從來の要求を改めなければならぬ。大學と中學校との間に豫備科を置くの要なきや否やは、是亦自ら一の大問題たるを得ると思ふが、中學卒業後四年以上の敎育を授くる所を大學とするといふのみにては、未だ適當に年限短縮の問題を解決せるものといふことが出來ぬ。

猶九月二十日の新聞の報ずる所に依れば、高田新文相は、早稲田大學校友會の祝賀會に於て、自家の學制案に言及し、之を以て「專門敎育を施すの外、模範的國民の養成を實現し得べし」と爲せりとの事であるが如何なる細目の成案あるのであるか。何れ其細目の發表を俟つて詳論することにする。（以上九月二十日記す）

思潮評論

科學者の宇宙觀を難ず

（富士川博士の親鸞聖人論を讀む）

中澤臨川

一

前號の本紙に富士川博士の「親鸞聖人」論が載つた。博士が世に稀な篤學の士であることは、平生から聞き及んでゐるところで、その人と爲りに就いては窃かに敬慕の念を禁じ得ないのである。從てかの文をも私は多大の注意を以て閲讀した。然し、不幸にして、博士の所論の殆んど全部が私を失望に終らせたのは、全く

意外の結果である。各人の說の相違は何うすることも能きないのであるが、私の最も慊らなく思ふのは、廣い宇宙觀や人生觀を取扱ふ場合に一般科學者の陷り易い弱點――その固陋な獨斷、安價な樂天的態度、それから來る無理解、無反省――を、博士が遺憾なく曝露された點にある。博士の所說に對する私の感懷を更に赤裸々に告白するならば、一種の反感であるともいへる。それは博士一個を對敵とするのでなくて、在來の科學者の上述の如き態度に就てである。富士川博士の崇敬して已まざるヘッケルに對して、パウルゼンが斯う言つて憤慨した、『私は此書(「宇宙の謎」)を讀みながら、自國民の一般的及哲學的素養の狀態につき燃ゆるが如き恥辱を覺えた』と。卒直に言へば、ちやうどそれと同じ程度の感奮が、今この稿を草しつゝある私の胸中である。玆に私が博士の所論に對して忌憚なき批評を加へるのは、決して禮を辨へないわけではない。

博士のこの論文は、先づ法然に依て起され、親鸞に依て大成された淨土眞宗の由來と敎義とを明かにし、次にそれをヘッケルやオストワルドの科學的一元論と結び附け、それ等の汎神論的宗敎が現代に適つた宗敎であるといふ事を結論したものである。で、その標題は『親鸞聖人』としてあるものゝ、博士が玆に力を盡して論述された要項は寧ろ『一元論』的宇宙觀及宗敎の提唱にある。從て、私の批評もその點を、土台として始めなければならない。

二

博士は先づ近時に於ける自然科學の非常の發達が、精神科學にも著明な影響を及ぼしたことを述べ、廣い意味から言へば、精神科學と名けらるゝ科學も亦自然の顯象の研究であつて、その系統は自然科學の一種に屬するものであるとしてゐる。これだけの說明は一見無難であるが、要は『自然』の語義を如何に解釋するかにある。博士に從へば、自然的とは直ちに機械的であることを意味する。即ち、あらゆる宇宙間の顯象――自然――は理智の約束に從て、物的因果律の支配を受

けるとするのである。廣い知識論の考察を缺いて、獨斷的に、いかにも易々(やすく)と實證論的ドグマに陷るのは、近世科學者の弊であるが、博士も矢張その常套を脱することが能きずにゐる。從て、かやうな盲目的獨斷論から「余の考では、所謂精神科學が自然科學の影響を受けるといふよりは、寧ろ所謂精神科學も自然科學と同一の法則に從ひ、その成果に就て說を立つべきものである」といふやうな斷定が、殆んど些の反省をも煩さずに下されるのである。

　科學者が實證的方法にのみ沒頭して、廣い知識論の考察を忘れ、機械的、物的または知覺的にのみ宇宙を觀ようとした偏見は、ひと昔の夢である。現代の科學者の見解はもつと廣い天地に向つてゐる。私は富士川博士にポアンカレイやロッヂの著書をすゝめしたい。

　それよりも猶ほ私は、博士に現代の精神科學が採りつゝある根本の態度を知悉されんことを望むのであるそれにはウイリアム、ジエームスやヴント（ヘッケルの敵であるところの）心理學が何よりの典據である。

私は嘗て或る所で次のやうな意味のことを書いた。

　つい一昔までのあらゆる科學は、殆んど數理科學であつた。數學と物理學とが凡ての基礎科學となつて、一切の知識を律してゐたのである。機械的因果律とニユートンの力學とがあらゆる自然現象を支配する鍵であると思はれてゐた。然るに生命に關する科學が發達するに從て、我等の知識の前には新しい別天地が開けた。從來の科學者が用ゐ馴れた機械的法則を應用することの能きない廣い經驗界のあることを我等は知り始めた。

　生物學者は生物の行爲と外界の刺戟との間に、一定した自働的機械的の反動の存することを知ると同時に、彼はまた、或る程度以上にはこの法則の行はれないことを承認せねばならぬ。中樞神經を取り去つた蛙は、一つの機械のやうに外部からの刺戟に對し反動するがしかしさうでないものは、一種自發的の反動に出る。かやうな自發性(スポンタナイティ)、偶然性(コンチンゼンシイ)はあらゆる生物の特徵であつて、機械的因果律とは別物である。それは個性的のものである。生物には一々に個性がある。生命現象が物的現象と異る最も重大な且つ普遍な理由は、いかなる生物體にも斯うした獨立の個性の存在するといふことである自然科學上の分類は全然同一な單位の上に立ち、その單位はまた任意な單位に分つことが能きるが、生物の單位なる個性は銘々特殊で且つ不可分である。生物を機械的に取扱はうとすることは、取も直さずその最も重要な個性を沒却することであらねばならぬ。一つの

生物體には幾千の複雜を統ぶる單純がある。多にして同時に一である。そしてその複雜の度が增せば增すほど、即ち高等な生物になるほど益々統一が堅くなり、顯著な個性が現はれる。

と。要するに、生命殊に精神の經驗界が數學と機械的因果律との適用を許さない、物質界とは系統(オーダー)の違つた世界であるといふことを承認するのが、今日の精神科學の根本的態度である。ある有名な心理學者が述懷した詞には、『生長といふ事實は根本的に非論理的である』とある。然るに富士川博士が、かうした最近の傾向を無視して、全く安易に、樂天的に、全然獨斷的に、『精神科學と名けらるゝ學科も、その實は自然界の現象を研究するもので、その系統は自然科學の一種に屬するものである』などと呑氣なことと言つてゐられるのは、私の所謂『意外』である。

要するに、舊式の科學思想に沒頭して他を見る明のないといふと、換言すれば知識論の素養の缺けてゐるといふことが、多くの科學的哲學者の弊であつて、ヘツケル及その崇拜者たる富士川博士の如きはその適例である。彼等は理智の假面を被つて、最も無謀な獨斷說を敢てしてゐるのである。

三

かやうな實證論的獨斷說が當然に導き出した宇宙觀が科學的一元論であるで、博士は上述の如く、精神科學を易々(やすく)と自然科學に隷屬せしめたあとで、理學の方則に從てその宇宙觀を立つべく試みた。先づ近代の自然科學が勢力恒存及び物質不滅の二大法則を發見した功蹟を述べ、『此の如く理學上から立てられたる勢力恒存の方則と、化學上から立てられたる物質不滅の法則との二大方則を據として、吾人は哲學の上にも實體恒存の原則を立つるのである。斯の如くにして成立する自然哲學の見解によれば、宇宙は物質と勢力とより成るもので云々』。更に、『吾人の今日の知識から言へば、物質と勢力とは、宇宙の統一的實體であつて、吾人の周圍に於ける有機體及び無機體、すべての不可思議なる現象も、畢竟、同一の勢力、同一の物質の、形狀と結合とが變化したるに過ぎないといふに歸著する。輓

近自然科學者が唱道する所の一元論は即ちこの意義に外ならぬのである』といつてゐる。

然かしこれでは一種の二元論ではないか。宇宙の實體とせられる物質と勢力とが何う調和されて一に歸するかといふことを博士は些しも說いてゐない。この兩者の關係を結び附ける $E=\frac{1}{2}Mv^2$ なる公式に於てEを主要なる實體と見るか、Mを主要なる實體と見るか、果たEとMとの並存を承認するかゞ、昔から自然哲學者の間の爭點であつた。オストワルドなどはこの點に關しては、Eの存在のみを認むる、至極徹底した一元論者であるが、富士川博士のはかうした一元論に達するまでの徑路が詳らかでない。從て博士の所謂宇宙の統一的實體その物の眞相すら不明である。

博士の一元的宇宙觀はヘッケルのそれの粗末な模倣である。ヘッケルが『一元論の三十信條』の中で言つてゐる次のやうな『實體の法則』の一節以外には、博士の說は出ないのである。曰く、

『古い物質不滅の化學的法則と、新しい勢力恒存の物理的法則とは、その後我等の一元論に依て一の大きな宇宙的法則に統一された。なぜなら我等に物質と勢力（肉體と精神）とを實體(サブスタンス)（スピノザの）の不可離な屬性として認むるが故に』

と。即ちヘッケルの說では、物質と勢力とを屬性とする一種のスピノザ流の實體を假定して、强て一元論を求めようとするところの、哲學史上によくある安價な折衷說であるがそれでも富士川博士が『物質と勢力とは宇宙の統一的實體であつて』といふだけの曖昧の說明には勝(まさ)つてゐる。

要するに、ヘッケルや富士川博士の提唱する一元論は、必然の結果から來たものでなくて、强て相反する勢力と物質（惰性）との間に妥協を求め樣とする科學者一流の安價な統一慾に導かれて、架空の『實體』なるものを案出したに過ぎないと言へる。それよりもオストワルドの勢力即實體論の方が、餘程徹底的である。

四

自然的一元論の獨斷的に陷りつゝある最も大きな缺點は、盲目的に自然科學を信じて唯物的見解に傾き、

「物質と勢力、換言すれば肉體と精神」といふ風に、勢力と精神との觀念を、殆んど無批判、無反省に混用し同一視することである。從て博士は、「輓近の自然科學は人類を始め、他の有機物及び無機物の進化と同樣に精神の進化をも認めてゐる。吾人の身體が吾人の祖先たる有脊椎動物から漸次に進化し來りたると同樣に、吾人の精神も、腦髓の一種の機能として、下等動物から漸次に發達し來つたものであると認められる」といふ理由からして、勢力即精神の歸納を下してゐる。そこでこの派の說に由れば、精神とは腦髓の一種の機能即ちヘッケルの所謂「靈細胞」の作用とするのであるがこの說をいかに獨斷的で、獨りよがりで、最近の心理學を無視してゐるかといふことは、玆に說くまでもない。

物心兩界は親密な交涉があり、我等の意識が外界からの刺激を受けて反應することは事實である。そこで實驗心理學が物心平行論のやうな假定を置いて硏究することは科學としては正當な手段である。然し、科學萬能の妄想を以て、直ちにかやうな說を哲學にまで移し、物的運動がこの世界に於ける唯一の實在で、意識はたゞ腦髓の働きに伴つて起る同一の運動であると斷定したり、或は意識は腦髓中に起るもの以外の何物でもないと即斷したりすることは、甚だしき無反省と言はねばならない。要するに、今日までの硏究に由れば、一の心的事實が之を相伴する神經狀態を規定するといふことは事實であるが、その逆命題即ち腦髓の働きは心的事實の一切であるといふことは必然的に眞なりとは證明しえないのであつて、かやうな點から言へば、自然的一元論よりも寧ろ精神的一元論の方がうなづかれるのである。

それからヘッケルの「靈細胞」の說によれば、精神作用とは腦髓と稱する特殊の機能の働きであるとするのであるが、もしさうとすれば、精神即ち「勢力」を全然有さない細胞のあるといふことをおのづから承認するのであつて、物質と勢力とは離れて存在せずといふ此の派の根本主張と矛盾しはせまいか。なぜならヘッケ

ルの宣明によれば、明かに勢力即ち精神で、この二つは同一のものであるから。

最後にいま一つの疑問が起る。若し我等の精神が勢力であるならば、それはいかなる形の勢力であるか。電氣的勢力であるか、或は化學的勢力であるか。何れにしても不斷に變化する我等の心的狀態に伴つて、勢力恒存の法則から、肉體内の他のエネルギイに顯著な損失を來すべき筈であるが、それは事實であらうか。我等が一生中に貯藏する記憶を勢力に換算しただけでも餘程大きな量となるべき筈であるのに、そのエネルギーは死の一刹那を劃して、どういふ他の形に變化するのであらうか。一切の是等の疑問は到底今日では勢力恒存の方則を以ては解き得ない所であるに拘らず、かうして大きなギャップを蹈み越えて、勢力即精神の說を立てる一元論を無謀な獨斷と嘲ることが不條理であらうか。

次に博士は唯物論と一元論との相違に說き及び、『唯物論といふものがあるが、これは勢力と物質、精神と身體とを別個のものと解釋するもので、一元論とは反對の說を立つるものである』と言つてゐるが、甚だしい誤解である。唯物論とは名の示す如く、物質を宇宙の唯一の實體と認める說で、同じく一種の一元論である。たゞそれがヘッケル流の一元論と違ふ點は、前者が物質を實體と認めるに對し、後者が勢力と物質との『總和』を實體と認めるだけの相違である。詮じつめれば兩者の間には殆んど詞の上の相違しかない。なぜなら、唯物論者といへども物質に附屬する勢力を認めてゐるが、之を唯だ單純に物質なる詞で現はしてゐるだけであるから。換言すれば、一元論は一種の唯物論にほかならない。

一元論が唯物論である理由は、(一)物界に行はれる機械的因果律を全能視する點からでも、(二)勢力即精神なることを主張する點からでも明らかで、今日の哲學史家はみな唯物論の一分派として一元論を說いてゐるのを見てもわかる。それを富士川博士はヘッケルの口眞似をして、『世に物知り顏の人で、往々、一元論と

唯物論とを混同するものがあるやうであるから、こゝに唯物論と一元論とは全く別說であるといふことを一言して置く』などゝ、自分がとんだ物知顔をして居らるゝのがおかしい。唯物論が精神と物質とを別個のものに解釋する二元論であるやうに思つてゐるやうでは博士の哲學論ぬ至極あやしいものである。

五

親鸞聖人に就ては私の知識が乏しいから、深く口を狹む資格がない。たゞ博士に依て紹介された彼の教義だけに就ても、博士の推定には餘程怪しいところがある。

親鸞の說いた淨土眞宗ばかりでなく、佛教全體が汎神論的宗教に近いことを誰しも認めるところである。しかし親鸞の見た佛身即ち阿彌陀如來は一如無差別で、一切の群生海に充つる汎神であるにしても、それが必ずしも科學的一元論の實體と合致するとは言はれない。第一にこの阿彌陀如來に近づくには、ひたすら『唯識』を棄て、『信』に由て到達すべきものであるとすれば、理智の力のみに賴る科學的一元論とは正反對で寧ろ唯心的一元論の境地に近いものではあるまいか。從て親鸞の信仰は他力的であるが、科學的一元論の信仰は何うしても自力的または意識的でなければ達しえらるゝものでない。これが第二の相違である。第三に親鸞の說くところの法身は無量壽で無碍であるが、一元論の說く勢力と物質との總和は無限でなくて定限量である。なぜならそれでなければ Conservation の方則は成立しないのであるから。

次に一元論に就て最も疑問とするところは、實際汎神的宗教、即ち博士の所謂無神的宗教が、成立しうるや否やである。私はかやうな教義が理智の戯れであることを信ずる者のひとりである。博士も言はれてゐるとほり、『宗教的情操は、個人乃至社會の思想が。知識或は道德的氣質によつて附加せられたる信仰で』あり、『卓越した個人の人格に現はれたる宇宙觀と人生觀』である以上、そこに現はるゝ神ははや『抽象的象徵』でなくて、各個人の個性を以て色どられ若くは變へられた

人格的、具體的の或物でなければならない筈である。實體は一如であつても、信仰によつて、即ち佛佗の人格を通じて現はれる如來は一個の人格神である。法性法身に達するためには、我等は是非とも法便法身即ち具體的の或物を必要とするのである。

六

之を要するに、博士のこの一文は、唯物論的または實證論的偏見に囚はれた自然科學者の獨斷的、固陋的な常習を遺憾なく曝露したものであつて、最も目立つて見えるのは

一、自然科學とその方法とを迷信して、廣い知識論の考察を缺いてゐること

二、心理的考證を無視してゐること。

三、知識の歴史に盲目であること。

四、辨證の能力の乏しいこと。

などである。その結果は、牽强附會の推定が多く、悉く獨斷論に流れつゝあるのである。

文藝時評

九月の小説など

正宗 白鳥

畫家は年一度の文展出品に骨を折つて置けば、平生の作品は個人の手に渡るのだから、一つ〳〵の作品について世間から毀譽褒貶の刺戟を受ける氣遣ひがない俳優は同じことを毎日演じてゐられる。落語家や音曲家も同じ事を繰返して只熟練を積めばよいのである。しかし、小説家や脚本家や詩人は一つ〳〵異つた者を造り出して、批評の市に曝さなければならない。藝術の中どれが手易いか六ヶ敷かしいかは決して斷定は出來ないが、少くも月々新しい作物を彼方此方の雜誌に出さなければならぬ樣な境涯にある日本の現在の小説家は、他の日本の藝術家よりも一層みじめだと思はれる。心に餘裕がなさゝうである。氣苦勞が絶えないらしく見える。千篇一律だとか燒直しだとか蒸返しだとか云はれても、兎に角一つ〳〵異つた文字を排列して

ゐるのである。落語家や役者が毎日同じ事を繰返してゐるのとは譯が違ふ。これで一人の作家が月々異つた作物を發表し得るとしたら奇怪である。奇蹟である。

から云つても、私は現在の作家の態度を是認してゐるのではない。知名の作家の名前を賣物にするためにいろんな雜誌が片々たるものを月々書かせやうとする風習は決して喜ぶべきことではないし、それに甘んじて慌しく筆を執つて、腦漿を絞り盡してゐる作家も、あまりに自分を粗末にしてゐると云つてい丶。批評家が往々今の作家は眞劍でないとか安逸を貪つてゐるとか云つてゐるが、私はさう思ひません。皆んな一生懸命根の盡きる限り書いてゐるではありませんか。勤勉に過ぎるくらゐではないか。

私はむしろ日本の作家がもつと懶怠になつて、二月や三月は筆など手にしないでゐたらと思ふ。冥想するのもよし空想に耽るのもよし、世間へ出て浮れて遊ぶのもい丶し、あるひは只無意味にごろ／＼して暮すのもい丶と思ふ。讀者や批評家のさま／＼な注文は兎に角、作家自身に年中苛責の鞭に會つてゐるやうな有様で、落着いて樂んで筆を執ることなど望んでも得られないのは幸福な身分とは云はれない。で、私は現在の作家は今更止むを得ないとしても、將來文藝に志す人々は原稿料生活をせずとも濟むやうにしたいと思ふ。富んだ人からは傑れた作品が得られないとか、貧乏してゐては碌な作品が得られないとか、この頃まち／＼議論があるが、理窟は兎に角、日本現在の多くの作家はその月暮しの暇なき製作のために疲れ果て丶ゐるではないか。幾ら書續けても詞藻の泉の渾々と盡きない作家もあるだらうが、それは非凡な例外の人だ。たとへ多數の製作が容易であるにしても、いろんな意味で雜誌の日雇人足見たいな生活をしてゐるのは不愉快ではないか。私は小さい作品でも自から作り自から樂む境涯に先づなりたいと夢見てゐます。

今月は例の如く多數の新作が雜誌を賑はしてゐる。私はその中で太陽新小說中央公論文章世界などに現はれた作品の幾つかを讀んだ。多くは既に熟知してゐる

作家のであるため、さして清新な感じは得られなかつたが、その代り讀むに堪へぬほどの拙劣は感じなかつた。どれにも作家相應の持味は出てゐて、それ〳〵の頭に宿つてゐる人世の影が讀みながら察しることが出來た。

私は平生小説などを讀んでも、我々の世の手頼りなさを、何よりも先づ深く感銘さゝれる。生甲斐のないと思はれるほどの手頼なさである。他の職業に從事してゐる人達よりも比較的鋭敏である作家の目や耳を通して、頭の中に映り筆で現はされた人間は皆稀薄な生命を持つて蠢動してゐるとしか思はれない。人間の本體はつまりこんなものであらうか。我々の魂も五官もこれきりの所で、お互ひに光明淨土の一瞥もしないで腐蝕してしまうのだらうか。

徳田秋聲氏の「女」は氏の多くの作物がさうである如く、初めの一二回は讀みづらく、ごた〳〵してゐて印象がはつきりしないが、讀み續けて行くと、何時かある世間が明かに現はれて來る。何の文飾も施さずに人と人との關係が自在に描かれてゐる。一篇の中心とも山とも云ふべきものがあつても、それを特に念頭に置かないで、事もなげに、知らず〳〵書流してゐるのは他の作者にはあまり例のないことである。「女」の女主人公に取つての大事件もこの作者にはさも他の雜多紛々の日常生活と同じやうに取扱はれてゐる。凡庸な作家がこんな書振りを眞似たなら、筋書にしかならないのを、秋聲氏のにはそれで場景が描かれ人々の心理も微見かされてゐる。西洋にも氏のやうな筆法で綴られた小説はないやうに思はれる。

今の日本の、無教育な中層か下層のある一部の社會生活は氏の幾つもの長短篇に於て最も巧みに描かれてゐるが、私は氏の作を讀んでも矢張手頼りない感じがする。作者と共に作中の男や女に對して一滴の涙を落すぐらゐの手頼りなさである。

「戰話」はちよつとした短篇に過ぎないが、しかし、「女」よりは文章は引締まつてゐる。その軍人の動作が

私の目の先にちらつく。及び難し。

その後で武者小路氏の「三和尚」を讀んだ。世界ががらりと變つて來た。私は白樺といふ雜誌を殆んど手にしたことがないから、氏の作はあまり讀んでゐない。で、珍らしいのと輕快な筆致とに惹かれて面白く讀終つた。三人のちよつとした逸話から思付いた氣の利いたものである。氏の他の作物をも讀んで見たくなつた。この作は傳說上の名僧に普通人と同じ臭ひを加味した以外に、何か深い意味を含んでゐるのか知らぬが、それは私には解らなかつた。

上司小劍氏の「東下り」は調子づいた文章からして、一種の落語を連想させた。「三和尚」と似てゐると云つたら、何方の作者も不同意であらうが、私は何處か類似してゐるやうに感じた。「東下り」の僧侶は世離れしたやうでありながら時々人間臭い臭ひをさせてゐる。一二年來の小劍氏の作中では傑れた者とは云へないがこれによつても氏の作柄を明かに伺ふことが出來る。氏の目には愚かしくか滑稽かに見える社會や人事に對する短評と、興がつた描寫とが錯綜してゐる。作者自から興に乘つて筆を採つたと思はれるやうな描寫は近年の文壇には珍らしかつたので、小劍氏の異彩を放つてゐるのはその點かも知れない。この作の汽車中の敍述の如きその一例である。一氣に讀流させる。私は數多き氏の作物を悉くは讀んでゐないが、今ぼんやり頭に殘つてゐる數種の作物を思浮べて見ると、氏はさも面白さうに周圍を見てゐる。馬鹿々々しい人事を作中に指摘しながら、これもまた一興かと思つてゐるらしい趣きがある。で、氏の作は明るい風流な世界とも云ふべきものだが、私はかう云つた世界に腰を据ゑるのは不安でならない。

有島生馬氏のも私には珍らしい。氏の「死ぬほど」は西洋種なので一層珍らしい。相手の女は少しあやふやで外形的にも心理的にも特異な印象が少しも與へられないが、男の熱烈なる戀心の一端が出てゐないことはない。材料の關係か、敍事も敍景も重苦しい。武者小路氏のとは反對である。

小川未明氏のは「三日間」を讀んだ。何時ものやうに端的に人生觀を吐露してゐる。周圍の雜多紛々の人事をてんで眼中に置かないで疑ひ惑ひ恐れてゐる氏の作風も一概に排斥出來ない。私など氏の疑ひ惑ひ恐れには常に共鳴を感じてゐる方で、さういふ者に累はされないで生きてゐられる人を不思議なぐらゐに思つてゐる。氏は他の貧しき者狂へる者などに對して强い同情を持つて書いてゐるが、しかし、それは書齋に於てあるひは散歩しながら抽象的に考へてゐる場合で、現實の貧者狂者が目前に現はれると、氏の同情は急に稀薄になるのである。「三日間」の中の子守についてもその氣分が表れてゐる。作中主人公が子守の實家を想像して感想に耽けるところは讀者の心に觸れるが、子守と主人公と相對すると、理解も描寫もない讀みづらい者となつてしまう。かう云ふ點がドストエフスキーとは大に違つてゐる。しかし、森田草平氏飜案の「愛」を讀むと、この露西亞の作家に小川氏の作風と多少の共通點のあることが私には感ぜられる。そして、氏の融通の利かぬ一本調子に、大いなる作家たる素質が潜んでゐるのぢやないかと思ふ。

中村星湖氏の「もり菊の最後」は、寺男の事よりも、むしろ初めの方の夫婦して空家を搜してゐるあたりが面白い。氏の目を凝らし耳を澄まして周圍に注意してゐるらしい態度は小川氏とは反對であるが、時としては味も卒氣もないことを書集めてゐることもある。痒い所へ手の屆かぬやうな牴牾しさを感じながら、私は僧侶と寺男の敍述を讀んだ。しかし、氏は今の作家中最も將來に大きな望みを寄せらるべき人だと私は思つてゐる。

森林太郎氏の歷史物は、私は常に愛讀してゐる。歷史小說といふにはあまりに飽氣ないが、面白く書かれた考證物としても一特色を持つてゐるではないか。浮つ調子で空想を捏廻したやうな小說よりも、枯淡な筆で無駄事なしに敍せられた氏の所謂「高等講談」を喜ぶやうな氣持に私はなつてゐる。「ぢいさんばあさん」も面白い。私は今月の雜誌小說をあれかこれかと索り

讀みした後で、この翁媼二人に最も多くの懐かし味を寄せてゐる。四十年も離れてゐて、互ひに浮世の辛酸を嘗めた後で再會して、幾干もない餘生を穩かに送つてゐる二人の氣持を私は想像した。森氏の他の歷史物の如く、この作にもさう云つた氣持は細叙されてゐないが、それでも最初の一二枚の簡粗な叙事の間に手際よく微めかしてゐる。青年や中年の戀を描いたものは鼻につくほどあるが、老人を材料としたものは今の文壇には珍らしい。

田山花袋氏の「歸京」はすら〳〵と凝滯なく讀まれた一人旅の女主人公の旅行記である。繪のやうな、場面がいくつもあつていゝ作である。しかし氏の作をよく讀んでゐる私にはこんなのは珍らしくない。私は每月の文章世界に出てゐる氏の隨筆を小說以上に愛讀してゐる。近年直接間接に最も强い影響を文壇に及ぼした氏については論議すべき點が多い。氏の作物や意見を罵倒する人にも、氏の感化を知らず〳〵善惡とも受けてゐる人が尠くない。この頃は氏の影響を文壇から拭去らうとしてゐる傾向が明かに見えるが、しかし、まだ氏に代つて新しい世界を見せて呉れる大立者は現はれない。眞劍だか附け元氣だか盲騷ぎが盛んだ。薄暗い文壇である。西洋の思想家を取替え紹介してかぶれて見たり、机上の議論を立てたり崩したりしてゐたつて。仕方がない。少くも花袋氏の以前の態度には深く自己の心に根差した根强いところがあつた。

今月の最長篇である谷崎潤一郎氏の「お才と巳之助」には、例の如く豐富な文才が縱橫自在に發揮されてゐる。材料が昔で筋立てがあまりに造り事染みてゐるので、文章の旨い講談を讀んでゐるやうな氣のするところもあるが、巳之助がこの女に對する態度や心持の動搖又は案外眞實の感じに打たれる所が多い。多少作者の彩筆が濫用されて面白づくめの噓らしい所があつても、よく考へたなら、巳之助に於て自己の心を見得る人も尠くないだらうと思ふ。私は氏の近來の作物中で實際らしい人間の心理の書けてゐるといふ點から見れば、この主人公ほどなのはなかつたと思ふ。卯三郎と

かお才とか、それ以外の人物は舊劇中の人物や講談中の人物と大差なく、只主人公を働かせるための道具に過ぎない。結末近くなつてからはどの點から見ても甚だ拙くて全體を害すること甚しい。お才追放後の數回はない方がいゝのぢやないかと思ふ。北村淸六氏といふ新作家の作や、田村女史の作などはこれから讀むつもりである。

生方敏郎氏の「敏郎集」は意外に實質に富んだ書である。樂屋落ちの駄辯や個人的憎惡の念の目立つた文章は大抵除かれて、いゝ者ばかり撰集めてあるので、いゝ方面での敏郎氏の技倆が遺憾なく此處に發揮されてゐる。「足あと」とか「小哲學」とかの見出しの中に收めてゐる警句や散文詩見たいなものが殊に面白い。散文詩といふ定義から見れば少し俗つぽいが、其處に却つて人間臭を帶びてゐるのが面白い。氣の利いた警句に於ては文埔氏に及ぶものなし。

今月は出てゐなかつたが、私は中谷徳太郎氏の近作を捨てがたいものと思つてゐる。太陽に出た「貞操」とかその他二三の作を見ると、いづれも男を弄ぶやうな女を書いてあつたやうに思ふが、女の肌や心に輕く觸つて見ては無氣味に感じたりしてゐるやうな所に、一種の若い男心が出てゐて面白かつた。厭味にはならないほどに艶のある筆だと思つた。

新刊批評と紹介

△井上英和大辭典

井上十吉著　至誠堂發行

井上氏の英學界に於ける造詣は已に定評あり、曩きに公刊したる和英辭典の世に歡迎せられたるも人の知る處たり。爾來十年、著者親らの心血を濺ぎあらゆる勞苦を惜まず、其ベストを盡して得たるを本書也と言へり。其譯語の選擇、配列、新語の蒐集等、一見いかにも著者の苦心と親切とを見るに足るものあり。書生の内職に無責任なる名を貸したるに過ぎざる此種の辭書とは自ら其別あるべきは勿論也。(定價金貳圓五十錢)

△栗山大膳

福本日南著　實業之日本社發行

著者が史的蘊蓄と其想をやるに椽大の筆とを以てして此書栗山大膳を得たり。藩府文教の端を啓きし栗山利章の一代は、氏の靈筆と相俟つて其死を飾るべく、また以て徳川初政の歴史に通曉せしむ。(定價金壹圓六十錢)

△世界の大勢と大正教育の方針
佐々木吉三郎著　目黒書店發行

著者は東京高等師範學校の教授として令聞あり。夙に深く我國教育の缺陥を意識し、痛く憂ひて之が矯正改革の熱望を有せり。今や歐州大戰亂に會ひて、今後の我國教育方針にも亦自ら變化なかるべからず。即ち世界の形勢に基く我國民の具體的進路を示し、堅實なる人生觀と眞摯と熱誠とを以て今後の世界に雄飛する國民を作らざるべからずとなすにあり。論議堂々六百餘頁、現今世界の大勢を論じ來りて、我國民の道德的經濟的發展を期す。聽くべきもの多し。(定價金壹圓九拾錢)

△中華民國大事件と袁世凱
奈良一雄著　中東石印局發行

本書は袁世凱の爲したる事件の眞相を窺ひ、其人と爲りを知らんとするものにして、猥りに今に於て其人物を論評せんとにはあらず。革命以來彼の事業は益々大を加へ今や再び帝政を布かんとす。此時に當りて公平なる見識を以てせる此書は袁世凱を知るに最も好し。(定價金壹圓八十錢)

△青い酒と赤い酒
松崎天民著　磯部甲陽堂發行

「醉さめの悲哀」「女優に拾られ」等十篇、例に依つてさら〳〵として一氣に讀ませる。どれもこれも著者の才筆が流れてゐて面白い。(定價金九十錢)

△ゴーリキイ
相馬御風著　實業之日本社發行

近代露西亞の偉大なる詩人、ゴーリキイの意味深い生活と藝術とを究めて、之を我文壇に紹介せんとしたものである。而して著者は近代文學近代思想に對して最も深い理解と同情とを有つ人である。この偉大なる詩人の面目を知らんとする者は此書に依るを最も便とするのは言ふまでもあるまい。(定價金壹圓)

△メリメエ傑作集
厨川白村・一宮榮 合譯　大日本圖書株式會社發行

「カルメン」「タマンゴ」等有名なメリメエの傑作を飜譯したもので、メリメエの濃艶絢爛な文章は能く譯者の筆に依つて傳へられてゐる。(定價金七拾五錢)

△あきらめ
田村俊子著　植竹書院發行

あきらめは或意味に於ては著者の處女作といつてもよい。兎に角著者にとつて最も意味深い又價値ある作品である。此集は之に「炮烙の刑」「木乃伊の口紅」等氏の代表的作品數篇を加へて一冊にしたもので、過去に於ける氏の悲惨な執着と努力との結晶であるそうな。それだけ我文壇にとつても亦意味深い作集である。(定價金壹圓)

△印度六派哲學
木村泰賢著　丙午出版社發行

印度思想の精髓ともいふべき學派時代の哲學は、從來我國に於て餘り顧みられざりしが、今其研究の最初の發表として此書を得たるは學界の爲め共に慶賀するところ。殊に著者が熱心なる研究により、原典を根據として成れる唯一の書なれば、著者獨自の見解は必ず此種の外國書に劣るものあるを信ず。(定價金二圓三十錢)

△炭燒の娘
長塚節著　春陽堂發行

田園文學ともいふべき或一派の特色を以て、我文壇の一角を賑してゐた故長塚節氏の作集也。氏の殆ど全短篇を網羅せるものにして、「炭燒の娘」外二十幾篇を輯む。(定價金壹圓)

△短歌新講
尾上柴舟著　大日本雄辯會發行

著者が特に一家の歌學を創述せんとして、譬喩、緣語、懸語等の諸術に別つて、古歌を解説例證するところ、至つて懇切適當也。（定價金壹圓）

△現代女の解剖　吉野鐵拳禪著　東華堂發行

現代女流を拉し來つて、辛辣なる解剖のメスを揮ふ。見渡すところ政治家あり、藝術家あり、新聞記者あり、女優あり。艶姸ありと雖も、努めて淫靡に墮するを避けたれば、何人をして讀ましむるも可く、女子の社會的政治的心眼を開くに最も良しと信ず。（定價金壹圓十錢）

△現代作家論　中村孤月著　磯部甲陽堂發行

著者獨自の人生觀藝術觀を以て殆ど現代あらゆる作家と作品とを論評せり。其言稍奇警に走るものありと雖も、率直にして、無遠慮なるの致すところ、寧ろ著者の藝術乃至人生に對する眞劍なる態度の見えて面白し。（定價金六拾錢）

△國語百談　日下部重太郎著　丁未出版社發行

我國民にして國語に關する智識の缺如せるは事實也。本書は其缺陷を補はんとして、讀むうちに國語と常識とを知らしめんとせる書也。（定價金七拾錢）

△新社會劇　中村吉藏著　南北社發行

「飯」「剃刀」「嘲笑」其他二篇を收む。現代日本に於ける社會劇作者第一人の中村氏の作だけありて、いづれも現在我國に於ける社會劇中の上乘なるものである。いづれも藝術座に依りて上場、多きは六十何回に及べる物あり、以て其作の價値と同時に舞臺上の功果とを知るに足るべし。（定價金九十錢）

△醉翰長の粹行脚　無名氏著　文洋社發行

今はふとした事より世に躓きしも、その頃世に時めきし粹翰長の、時にとつての遊び振り也。其面目を覗ふを得べきか。（定價金壹圓三十錢）

△ニコ〳〵式處世法　牧野元次郎著　中山蒼秋堂發行

個人としては圓滿幸福なる、社會としても平等平和なる、福德圓滿の幸福を享受せしめんとして、主義として樂天的なる處世法を教ふ。手近から出發したる修養書と見るべき也。（定價金壹圓）

△桂月先生從遊記　田中貢太郎著　二松堂發行

著者近時漸く世に認めらる。此著師桂月氏と共に隨所に遊行して、所謂超俗的旅趣を發揮したるもの也。（定價金九拾五錢）

△雄辯の修練　村井知至編　大日本雄辯會發行

本書は歐米の雄辯術に關する著書より抄錄したるもの也。思想發表の形式として辯論の力が大に認めらるゝ今日にては當然此書の必要はあるべき也。（定價金壹圓）

△小兒病手當法　瀬川昌耆著　至誠堂發行

殆ど總ての小兒病に對する手當の法を懇篤叮嚀に説明してある。家庭に備へて、親たる者の心得べきもの也。（定價金六拾五錢）

△應用群集心理　安達元之助著　實業之世界社發行

本書は著者が佛國のルボン氏、米國のロッス氏等の群集心理に關する諸書から纂譯されたるものにして、或意味に於て群集の時代たる今日此心理を研究し之を應用するの要あるを認むれば也。（定價金六拾錢）

△立志小說故鄉（定價九拾五錢） 堀内新泉著 成功雜誌社發行

△一日一言心の糧（定價五拾錢） 關天園著 東亞堂書房發行

△銀杏の葉陰（定價五拾五錢） 茅原華山著 實業之日本社發行

△日蓮主義研究叢書日蓮聖人と耶蘇（定價四拾錢） 山川智應著 新潮社發行

△修養史傳第一編日蓮大士言行錄（定價參拾錢） 足立栗園著 東亞堂書房發行

△戀愛の話（定價九十五錢） 青柳有美著 實業之世界社發行

△詩集凝視（定價六拾五錢） 水野盈太郎著 婦人文藝社發行

△歌集生靈（定價六拾錢） 小川水明著 岡村書店發行

△近代思潮叢書第七編ロマン・ロオランの思想と藝術（定價五拾錢） 内藤濯著 天弦堂發行

△同上八篇オイケンと現代思潮（定價同上） 稻毛詛風著

△同上九篇トルストイ人道主義（同上） 加藤一夫著

△考古研究白人の世界か黄人の世界か（定價八拾錢） 中村久四郎著 晉文館發行

△俳句と自分（定價四十錢） 高濱虛子著 實業之日本社發行

△時事叢書第二拾六編蒙古及滿州（定價貳拾錢） 鳥居龍藏著 富山房發行

△同上第二拾七編巴奈馬運河見物（定價同上） 島谷亮輔著 富山房發行

△現代名作集第九編父親と三人娘（定價拾五錢） 野上八重子著 東京堂發行

△同上第十二編密會（同上） 德田秋聲著

△同上第十六編穀倉（同上） 木下杢太郎作

△同上第十七編獸人（同上） 有島生馬作

△同上第十九編美女の死骸（同上） 上司小劍作

△同上第二十編澪（同上） 長田幹彦作

△鍊膽術（定價五拾五錢） 日置默仙作 實業之日本社發行

△第二通俗教育道話（定價四拾錢） 安藝愛山著 大日本雄辯會發行

△金澤政戰史（定價五拾錢） 堺忠七著 洛陽社發行

△公民同盟叢書第四政治道德論（定價拾錢） 村田保翁述 公民同盟發行

△同上第六日支民族性論（同上） 大隈伯述

△同上第八日本植民論（同上） 後藤新平述

△同上第九日支親善論（同上） 上島長久述

△學生之大病（五拾錢） 河合三郎著 東亞堂書房發行

△傷痕（參拾錢） 多田惠一著 伊吹書房發行

△肺結核征戰策（四拾錢） 湊謙治著 警醒社發行

△修養史傳第二編 大西郷言行錄（參拾錢） 鈴木郁翁著 東亞堂發行

△新演講談文庫第一 花川戸助六 東亞城發行

△同上第二 鼠小僧次郎吉 同上

△問題詳解 幾何ノート（卅八錢） 竹貫登代多編 博文館發行

△公民同盟叢書第一 最近外交論（定價拾錢） 大隈重信述 公民同盟出版部發行

△同上第二 帝國々防論（定價拾錢） 同上

△同上第三 帝國財政論（定價拾錢） 同上

△縮刷 田舍教師（定價六拾錢） 田山花袋著 左久良書房發行

△講演資料 逸話集（定價五拾錢） 大日本雄辯會

△大正三年度諸官立學校入學試驗問題詳解（定價六拾錢） 前田元敏 阿部新作 共編 博文館發行

△小說 地上生活 第一卷（非賣品） 田代倫著

△代表的名作選集 高野聖（定價參拾錢） 泉鏡花著 新潮社發行

△初產婦の心得（定價七十五錢） 高橋政秀著 東亞堂發行

△諸國俚謠傑作集（定價五十錢） 竹山人選 辰文館發行

△時事叢書第十二篇 土耳古及土耳古人（定價貳拾錢） 長瀬鳳輔著 富山房發行

△教科雜問 東洋歷史解說（定價參拾五錢） 坂本哲朗 杉浦隆次 共編 博文館發行

△教科雜問 漢文解說（定價參拾五錢） 石崎篁園編 博文館發行

△教科雜問 日本歷史解說（定價參拾五錢） 山川直五郎編 博文館發行

△教科雜問 西洋歷史解說（定價參拾五錢） 佐藤秀男編 博文館發行

△宗教心理學（定價七拾錢） 小倉清三郎著 警醒社發行

△現代和歌選集叢書第三編 萬物の世界（定價六拾錢） 土岐哀果著 植竹書院發行

△情話新集 小さん金五郎（定價參拾五錢） 田村俊子著 新潮社發行

△新潮文庫 フォールドの娘（定價貳拾五錢） ビエルンソン作 野尻抱影譯 新潮社發行

△縮刷 賴朝（定價七拾錢） 幸田露伴著 東亞堂發行

△新潮文庫 アナトオル情話集（定價貳拾五錢） シュニッツレル作 奈豐吉譯 新潮社發行

△公式英文解釋（定價五拾錢） 語學研究會作 四方堂發行

△心身修養 田岡式靜坐法（定價六拾錢） 實業之日本社

△立志立功（定價九拾錢） 幸田露伴著 東亞堂發行

△禪の妙味（定價壹圓） 忽滑谷快天著 東亞堂發行

△出たらめの記（定價壹圓） 矢野龍溪著 東亞堂發行

△六合叢書第三編 英文『我が斷片』（定價[illegible]五錢） 岡田哲藏著 六合雜誌社發行

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

小杉天外先生新著

最新刊

銀笛

前編

寫實主義の大家として、我が文壇の第一人者たる天外先生が、特に本社の乞ひに應じて新に執筆せられたるが本書也。誤つて殺人の罪を犯したる父を持つ美少年梅之助が吹く銀笛の、その靈妙の音に涙を絞りたる人や誰れ。艶麗花の如き多美子の胸に燃ゆる戀や如何に。事件は事件を生み、人物は人物を生み、構想雄大、波瀾重疊、血あり涙ある『銀笛』一篇は、蓋し先生が思想と麗筆の結晶たり。

四六版總布金文字入
裝幀優美函入美本

實價 一圓卅錢
郵税 八錢

東京京橋區南紺屋町（振替東京三二六）

實業之日本社出版部發行

（中付五の一）

信用ある店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

前の名著

本書は此 三大騷動を評述す

黒田騷動（黒田忠之の叛逆事件にして家臣大膳主君を訴ふ）

駿河騷動（徳川三代將軍竹千代と國松との繼嗣爭ひなり）

肥後騷動（加藤肥後守の叛逆事件にして將軍家の內情暴露）

に本書を備へざるはなし

著者は史壇の泰斗、史實正確にして細密、文章華麗にして雄揮、百の材料、千の典據により世上の妄說を排し其眞骨頭を捉へ之に新たまる血を注ぎ新たなる肉を添ふ好評嘖々たる亦故ある哉

■栗山大膳は芝居に於て講談に於て最も有名なる黒田騷動の中心にして其生涯は黒田騷動其他の二大騷動に關連し起伏縱橫極めて波瀾に富む

■徳川初期の歷史は幕吏、藩吏殊更その跡を晦まし史家の常に疑問とする所、著者之を研究する多年、今其眞相を明かにし當時の紛糾錯綜せる歷史を述べ徳川大奥の秘密を赤裸々に暴露す小說を讀むに幾層倍の興味あり

栗山大膳

□史壇の巨擘 福本日南先生新著

定價壹圓六拾錢 郵稅十二錢 菊判特製總布

（中付五の三）

出版部 振替口座三二六番

賣捌 各國各書店

縮刷

ラ・ミゼラブル

黒岩涙香

噫無情

（中付五の四）

愈出づ

本篇は舊臘以來東京帝國劇場を始め全國各所に映出せられたれば内容は再び茲に贅せざるも、**フヰルムは眞の無情を語るに足らず**。一度本書に接せば、**必ずフヰルムに聴けざる。フヰルム以上の或物を**、随所に發見さる事を確信す、篇中一人の惡人なく、而も人類の造りし社會法律道德文明生活難等は彼等を驅つて或は獄裡に投じ或は其の生齒生毛を市場に賣らしめ、或は醜女をして失戀の極路上に吐血して斃れしめて熄まぬ。「**存らへて天國の惡魔たらんか**、**死して地獄の天人たらんか**」とは、生もならず又死もならず、愛も失ひ涙も涸れ、只終生を追迫と痛哭と失望と迷亂の中に**ムゴ**たらしう送つた、主人公ジャン、ヷルジャンの生命の語である。這般江湖の深甚なる勸告に基き茲に縮刷合本版を提供す、時や萬葉傷む秋、速に一本を得て世界の大文豪**ユーゴー**氏の代表作を我が**涙香先生**の絶妙なる譯筆に俟ち、此の無慘なる人々の爲めに新らしき秋を泣かれずや。

町田歌三氏装幀

紺羽二重表紙木版天金入函ポイント六百四十頁

定價壹圓廿錢（郵税拾錢）

黒岩涙香先生好評譯書

新刊

好評三版（竹久夢二氏装畫）

ひと夜のなさけ

定價金八拾錢（郵税金十錢）

菊版表紙函共總木版刷夢二氏口繪入

縮刷

好評七版

巖窟王（四冊合本）

定價金壹圓六十錢

特賣金壹圓卅錢（郵税十錢）

總クロース金文字美麗函入六號組三五版千二百十餘頁

發行元 **扶桑堂** 東京京橋北槇町 振替一五四七七

發賣元 **東京堂** 同神田表神保町 振替二七〇番